資料１

献血推進調査会　設置要綱

１．目的

安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和 31 年法律第 160 号）において、血液製剤の安定供給が求められている。

そのためには、将来にわたって安定的に献血者を確保することが必要不可欠であることから、献血推進方策に係る諸事項を調査・審議することを目的として、薬事分科会規程第４条に基づき、血液事業部会の下に「献血推進調査会」を設置する。

２．調査会の審議事項

（１）献血推進に関する中長期目標の設定及びその達成状況の評価
（２）普及啓発活動に関する検討及び効果の検証
（３）「献血推進計画」案の策定
（４）その他、献血推進に関する事項

３．調査会の組織

（１）調査会の委員は、部会の委員、臨時委員及び専門委員の中から分科会長が指名する１５名程度の委員をもって構成し、互選により座長を１名選出する。
（２）調査審議にあたっては、議題の内容等に応じて、部会長の判断により他の委員または参考人に出席を求めることができる。
（３）調査会における審議結果については、必要に応じ血液事業部会へ報告することとする。

４．調査会のスケジュール

年２回程度の開催とする。

５．事務局

調査会の事務は、医薬食品局血液対策課が行う。

６．その他

この要綱に定めるもののほか、調査会の運営に関して重要な事項は座長が定める。

資料2－1

献血推進のあり方に関する検討会

報 告 書

平成２１年３月１０日

厚生労働省医薬食品局血液対策課

献血推進のあり方に関する検討会（平成20年度予算事業）

【検討会開催実績】

●第1回検討会（平成20年9月3日）
- 献血をとりまく課題について自由討議
- 若年層献血意識調査の実施を議決

● 第2回検討会（平成20年10月29日）
- 若年層献血意識調査の結果を報告
- 採血基準のあり方に係る研究事業の報告（河原委員）
- 海外の採血基準及び献血の状況について（参考人説明）　他

● 第3回検討会（平成20年11月20日）
- 論点整理
- 採血基準見直しの検討に係るワーキンググループの設置を議決　他

● 第4回検討会（平成20年12月4日）
- 社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策について自由討議
- 検討会中間報告とりまとめ

○ 第1回採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ（平成21年1月9日）
- 個別見直し案に係る論文等について自由討議

○ 第2回採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ（平成21年2月2日）
- 追加提示された論文等について自由討議
- ワーキンググループ報告書とりまとめ

● 第5回検討会（平成21年2月17日）
- 採血基準見直しの検討に係るワーキンググループからの報告
- 検討会報告書とりまとめ

【検討会委員（敬称略、50音順）】

		氏　　名	所　　属
	1	飯沼　雅朗	社団法人日本医師会　常任理事
	2	宇都木　伸	東海大学法科大学院実務法学研究科　教授
	3	衞藤　　隆	東京大学大学院教育学研究科　教授
	4	大平　勝美	社会福祉法人はばたき福祉事業団　理事長
	5	掛川　裕通	日本赤十字社血液事業本部　副本部長
	6	川内　敦文	高知県健康福祉部　医療薬務課長
	7	河原　和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科　教授
◎	8	清水　　勝	医療法人西城病院　理事
	9	住友眞佐美	東京都福祉保健局　保健政策部長
	10	田辺　善仁	株式会社エフエム大阪　専務取締役
	11	中島　一格	東京都赤十字血液センター　所長
	12	羽田真由香	全国学生献血推進協議会　委員長
	13	花井　十伍	ネットワーク〈医療と人権〉　理事
	14	堀田美枝子	埼玉県立浦和西高等学校　養護教諭
	15	山本 シュウ	株式会社アミューズ所属　ラジオDJ

◎：座長

【採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ委員（敬称略、50音順）】

		氏　　名	所　　属
	1	宇都木　伸	東海大学法科大学院実務法学研究科　教授
	2	衞藤　　隆	東京大学大学院教育学研究科　教授
	3	河原　和夫	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科　教授
	4	中島　一格	東京都赤十字血液センター　所長
◎	5	髙本　　滋	愛知医科大学医学部 輸血部 教授
	6	半田　　誠	慶應義塾大学医学部 輸血・細胞療法部 教授
	7	柴田　玲子	日本赤十字社血液事業本部 参事 製造管理課 採血係長

◎:座長

献血推進のあり方に関する検討会 報告書《概要》

社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策

（1） 高校生献血のあり方

● 献血体験と有効な啓発手段等について

・ 高校時代の献血体験がその後の献血行動の動機付けに（若年層対象の献血意識調査（平成 20 年 9 月実施）結果） → この年齢層への意識付けが重要

・ 集団献血が難しくなっている現状 →「献血出前講座」や体験学習等の啓発手段を早急に考えるべき

・ 現行の採血基準の再検討も必要

（2） 学校教育における啓発

● 学校の授業で「献血」を取り上げてもらうための戦略

・ 授業で献血の重要性を取り上げてもらう

・ 各年代に応じた啓発教材を開発する

● より幼少期の子どもを対象とした取組

・ 幼少期の子どもとその親に献血の意義を伝えるための取組を進める

（3）献血環境のあり方

● 献血者の年齢層に応じて今後とるべき献血推進方策

・（18～23 歳）献血者の実数が多く、複数回献血者となってもらうための重点的な啓発・施策が必要

・（23～29 歳）献血者の実数が少なく、この年代から減少する女性に配慮した工夫が必要

・（30 歳代）多くの地域で献血者の実数が多く、年間献血回数を増やしてもらう方策が必要

・（40～59 歳）献血者率が低い傾向にあり、献血に取り込むための方策を検討すべき

・（60 歳以上）健康な献血経験者に引き続き協力してもらえるよう情報伝達等に工夫が必要

● 地域における献血推進体制のあり方

・ 市町村合併や高齢化等で地域の世話役が不在に → 欧米を参考にボランティア育成や地域組織との連携を検討

・ より多くの企業の協力を得る工夫、官公署の率先した取組

● 献血バス及び献血ルームの充実など

・ 日本赤十字社が都市部では献血ルーム、地方では巡回献血バスと、献血受入の役割分担を進めている → 地方では献血バスの一層の効率的運用や地域ボランティアの積極的受入により効率を上げることが重要

・ 献血ルーム及び献血バスは、機能面の充実を含め一層のイメージアップを図る

・ 託児体制の確保等、子育て中の方も献血しやすくなる工夫も積極的に検討

・ 献血バスについては、交通規制への対応に係る関係機関からのサポートも積極的に検討

● 献血時のインフォームド・コンセントと献血情報の提供のあり方

・ 現行の日本赤十字社の「お願い」は、献血時のリスクと対応策及び献血者健康被害救済制度に関する記載が不十分 → この点を充実すべき

・ 献血は定型的行為で隠れたリスクはほとんどなく、その性格・危険性の理解に高い能力が要求されないことから必ずしも親権者の承諾を必要としない

・ ただし、身体的に益をもたらす行為ではないため慎重に取り扱うべき → 平時からリスク等に係る情報提供を広く行うことが必要

・ 献血者がより一層安心して献血に臨めるような工夫（献血現場でのよりわかりやすい案内・表示、問診・説明時における担当スタッフのコミュニケーションスキルのさらなる向上など）を行い、今後の啓発につながる情報を積極的に提供すべき

（4）メディア等を活用した広報戦略のあり方

● 若年層個人にアピールするなど年齢層・地域の特性に対応した広報戦略

・ 対象の各年代層に即した広報媒体の選択

・ 献血血液の特性（有効期間が短い） → 継続的な啓発活動が必要

● 献血血液の使用状況の情報提供のあり方

・ 献血血液が医療現場でどのように使用されているのか、情報を効果的にフィードバックすべき

・ 今後、受血者側の意見を献血の推進に反映していくための検討が必要

（5）低比重者などへの対応

・ 献血ルームでの栄養指導等、再度献血への協力を促す方策が必要

（6）200mL 献血の今後のあり方

・ 400mL 献血の一層の推進が予測されるものの、200mL 献血者数はなお全体の 11%を占めており、400mL 献血のみでは需要を満たせない事態も

・ 採血基準の見直しを含め、学校教育における啓発の浸透状況や献血環境の整備状況を踏まえて今後の対応を検討すべき

採血基準の見直し

（1）400mL 全血献血採血基準の下限年齢の見直しについて

・ 400mL 献血の下限年齢 → 17 歳男性への拡大は可能

・ ただし、献血者の安全確保の観点から、献血副作用の防止策（採血前後のリスク管理を徹底するなど）を万全にすることが必要

・ 初回献血者は複数回献血者と比べ献血副作用の発生率が高いとのデータもあり、初回献血時のリスク管理を徹底すべき

・ 16 歳男女及び 17 歳女性は、今回評価・検証したエビデンスから安全に施行できるとの判断ができず、今後引き続き検討

（2）血小板成分献血採血基準の上限年齢の見直しについて

・ 男性は 69 歳までの拡大が可能（65～69 歳の献血者に関しては 60 歳に達した日から 65 歳に達した日の前日までの間に採血が行われた者に限る）

・ 女性については、国内の年齢別献血副作用発生率に血漿成分採血とやや乖離があり、今後引き続き検討

（3）採血基準項目における「血液比重又は血色素量」について

・ 医学的には「血色素量」に統一すべき

・ ただし、現状で使用できる検査機器が海外1社のみのため、当分の間、「血液比重」で代替も可

（4）「年間総採血量、採血回数、採血間隔」及び「男性の血色素量最低値」について

・「年間総採血量、採血回数、採血間隔」については、現時点では 400mL 献血を年 4 回安全に施行できることを担保するエビデンスは得られなかった

・「男性の血色素量最低値」は、献血者の安全性を考慮し、現状の採血基準から 0.5g/dL 引き上げることが妥当（血液比重についても同様）

今後の課題

・ 本報告書の提言を受け、今後、国、地方公共団体及び日本赤十字社がどのように事業を進めていくかについて、個別事項ごとに実施主体と達成目標を定めた行動計画を作成

・ 行動計画の実施状況を関係審議会等に適宜報告し、その達成状況を検証

（その他参考）

＊「採血基準の見直し」は、今後、薬事・食品衛生審議会血液事業部会において審議

＊ 仮に提言の内容で採血基準の改正を行う場合には、採血前後の献血者の安全確保に係る体制整備に相当な準備が必要

献血推進のあり方に関する検討会 報告書

第１　はじめに

わが国では、売血による弊害が社会問題化し、昭和39年に国民相互の無償の博愛に基づく献血の推進が閣議決定され、以後、昭和４０～５０年代にかけて献血者数が順調に増加し続けたことにより、より安全な血液製剤が確保されたことによって医療が支えられ、多くの患者の方々が日々救われるようになった。

さらに、平成１５年７月には「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」が施行され、すべての血液製剤を献血により確保し、安定的に供給することを基本理念とし、国、地方公共団体、採血事業者及び医療関係者などが必要な措置を講ずることによって、この基本理念にのっとった責務を果たすことが規定された。

しかしながら、近年、わが国では献血者数の減少傾向が続いており、特に若年層では、この世代の人口減少を上回る速度で献血者数が減少してきている。とりわけ、学校や医療現場をとりまく環境の変化により、高校生献血が大きく減少しており、この時期における実体験としての献血の機会が失われつつあることが大きな問題ではないかと憂慮されている。

一方、高齢社会の進展により、今後、血液製剤（輸血用血液製剤や血漿分画製剤）を必要とする患者は大幅に増加することが予測され、近い将来血液製剤の安定供給に支障を来すことが懸念されることから、献血推進へのなお一層の積極的な取組が求められている。

こうした状況を踏まえて、本検討会では今後の献血の推進方策についてさまざまな角度から検討を行ってきたが、今般、以下の提言を報告書としてとりまとめることとした。

献血はかけがえのない「いのち」を救うために相互に支え合う「愛に根ざしたもの」である。このことが広く国民に理解されるよう努めることが極めて重要であることを検討会として強くアピールするとともに、この報告書に掲げた内容が今後の献血推進に十二分に活かされることを期待するものである。

第２　社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策

（1）高校生献血のあり方

（献血体験と有効な啓発手段等について）

- かつて200 mL 献血が主流であった時代に、高校における集団献血は安定的な献血源として積極的に推進されてきた。また、高校における集団献血は、実体験による「献血の入り口」として初回献血者の誘導に大きな役割を果たしてきたと考えられる。
- しかしながら、学校週５日制の施行により時間の確保が難しくなるなどの環境変化により、以前のような集団献血を高校で実施することは難しくなってきている。
- 一方、高校時代における献血体験が献血者確保に効果的であるとともに、その後の献血行動の動機付けともなることが、本年９月に実施され当検討会に報告された若年層献血意識調査の結果からもうかがえ、この年齢層に対する意識づけが重要であることを示唆している。
- 今後、この世代への献血推進を効果的に進めるためには、集団献血を通じて高校時代の献血体験をもつことが難しくなっている現状を踏まえ、献血体験に加え、高校生への意識づけを行うための有効な啓発手段を早急に考えるべきである。
- 具体的には、血液事業関係者や輸血の専門家などが学校に赴き、献血の意義や仕組みをわかりやすく説明する「献血出前講座」や、体験学習などを積極的に行うことが有効であると考えられる。
- さらに、現状では、医療機関の血液需要が４００ mL 献血由来製剤に移行しているにもかかわらず、ほとんどの高校生が200 mL 全血採血を主とする献血しかできないことから、今回、「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」において、現行の採血基準について再検討を行った。（後述：「第３ 採血基準の見直し」）。

（2）学校教育における啓発

（学校の授業で「献血」を取り上げてもらうための戦略）

- かつての集団献血に代わり、献血の意義と重要性を若年層に正しく伝えていくためには、学校の授業で「献血」について積極的に取り上げてもらうことが極めて重要である。

  具体的には、高校・中学校の教科書などで「献血」を課題として取り上げてもらうための国及び地方公共団体における積極的な取組が早急に必要である。

  さらに、小学生を対象とした取組についても、年代にあった啓発教材の制作と活用などに、一層力を注ぐべきである。

（より幼少期の子どもを対象とした取組）

- 絵本などのわかりやすい啓発のための媒体を用いて、幼少期の子どもとともにその親たちにも「けんけつ」の意義をメッセージとして伝えるための取組を進めるべきである。

（3）献血環境のあり方

（献血者の年齢層に応じて今後とるべき献血推進方策）

・　18～22歳

多くの地域（特に都市部）において献血者の実数が最も多く、年齢別人口に占める献血者の率も高いと考えられる。今後は、この年齢層に献血を繰り返す複数回献血者となってもらうための重点的な啓発・施策を実施すべきである。特に、初回献血時には、献血の意義及び献血時におけるリスクとその対応策に係る情報を提供することが必要である。さらに、実際に輸血が行われる医療現場の実情など献血者の意識を高める効果が期待できる情報も併せて適切に提供するなど、今後の献血活動を促すための対応が重要である。

・　23～29歳

多くの地域で献血者の実数が前後の世代に比べて少ない。都市部、地方ともにこの年代への効果的な啓発を重点的に行う必要がある。

なお、16～18歳で男性とほぼ同数を占めていた女性が19～22歳で漸減し、この年代からさらに減少する要因として、低比重者（※）の増加や出産、あるいは子育てに忙しいなどの理由も考えられる。（このことは30～40歳代にも共通する。）したがって、これらの方に献血に戻ってきてもらうための取組みも検討すべきである（後述：「（献血バス及び献血ルームの充実など）中の託児体制の確保」及び「（5）低比重者などへの対応」）。　（※ 低比重者 ： 血液比重又は血色素量が基準に満たない者）

・　30歳代

多くの地域で献血者の実数が多い。この年齢層の献血者に年間採血回数を増やしてもらうことが、血液量の安定的な確保につながると考えられる。

また、都市部において、20歳代後半と同様に、30歳代前半の献血者の実数が少なく、年齢別人口に占める献血者の率も低い地域があるが、このような地域においては、この年齢層を改めて献血に取り込むための方策を積極的に検討すべきである。

・　40歳～59歳

都市部を中心にどの地域でも献血者の実数が少なく、年齢別人口に占める献血者の率も低い傾向にある。健康な40～59歳を改めて献血に取り込むための方策も検討すべきである。

・　60歳以上

どの地域でも60歳を超えたところで献血者数が急激に減少している。

減少の理由については、例えば定年退職することにより献血実施に関する情報に触れる機会が減ってしまうことや健康上の問題などが考えられるが、健康な献血経験者については、定年退職後も引き続き積極的に献血に協力してもらえるよう、情報伝達の方法を工夫するなどの検討が必要である。

また、この年代の人口そのものはどの地域でも多く、3～4年後にはいわゆる「団塊の世代」がこの年代に到達することからも、今後はこの年代についても相互扶助の精神といった観点からの啓発が必要であると考える。

（地域における献血推進体制のあり方）

- 市町村合併の影響や地域コミュニティの変化、高齢化などにより、かつて地域に存在した「世話役」が不在となっている場合があり、以前よりも地域での献血が活発でなくなっている。
- 地域での献血において自主的に一定の役割を担うボランティア団体の育成や活発に活動できる地域組織との連携が重要である（欧米では地域の献血は実質、献血者側が組織したボランティアが担っている）。
- ボランティアの育成や地域組織との連携については、欧米での実情なども参考とし、今後、国、地方公共団体及び日本赤十字社が果たすべき役割や具体的な取組について引き続き検討を行う必要がある。
- また、地方公共団体における献血推進協議会については、設置されていない市町村も多くあることから、市町村における献血推進協議会の設置が進むよう努める必要がある。
- 献血への協力企業は着実に増加しているが、献血者に配慮した採血時間帯とするなどの欧米の事例も参考に、より多くの企業の協力を得るための努力や工夫が必要である。
- 都市部、地方ともに官公署が率先して献血に参加すべきであり、その際には地域住民へも広まるように情報を発信するなど、他の事業所に率先した取組が求められる。
- なお、地域における献血の推進にあたっては、地方公共団体及び日本赤十字社が密接に連携し、より効率的に献血の推進が行えるような体制の構築を含めて検討し、取り組むべきである。

（献血バス及び献血ルームの充実など）

- 日本赤十字社では、献血血液の需給管理を複数県単位で広域的に実施しつつあり、人口が集中する都市部では献血ルームによる献血受入れ、人口が分散している地方では地域を巡回する献血バスでの献血受入れといった役割分担をより明確化していく方針である。
- 地方においては、固定施設が少ないことから、献血バスをより一層効率的に運用することによって、効果を上げることをめざすべきである。

  例えば、欧州では、移動採血車が１日に数カ所を効率よく移動し、その地域のボランティアの協力を積極的に受け入れる方法が一般的であるが、わが国でもさらに効率よく移動しつつ、地域のボランティアの協力を積極的に受け入れるなど、効率を上げる方策を検討すべきである。
- 献血ルーム及び献血バスについては、機能面の充実を含め、なお一層のイメージアップを図るとともに、例えば、地域の特性に応じて託児体制を確保するなど、子育て中の方も献血しやすくなる工夫についても積極的に検討すべきである。
- なお、献血バスについて、主に都市部では、採血時の駐車スペースの確保に苦慮している実情もあるため、交通規制への対応に係る関係機関からのサポートについても地方公共団体等が積極的に検討すべきである。

（献血時のインフォームド・コンセントと献血情報の提供のあり方）

① 現行の献血におけるインフォームド・コンセントのあり方について

・ 献血者には、献血時におけるリスクを十分に説明してインフォームド・コンセントを受けることが重要であるが、現行の日本赤十字社の「お願い」は、献血時におけるリスクとその対応策及び献血者健康被害救済制度に関する記載が不十分であるので、この点を充実させる必要がある。

・ その他献血時のインフォームド・コンセントの具体的方法については、今後、法律学等の専門家とも相談しつつ、国及び日本赤十字社において検討することとする。

② 保護者の同意の必要性について

・ 未成年であっても、一般的に、提案されている医療行為の性格と危険性について十分に理解する力があると認められる場合には、その行為を受けるに当たっては、親権者の承諾を必要としないと考えられる。

・ 献血は定型的行為であり、数十年間にわたる極めて多数の経験を通して、いまや隠れたリスクはほとんどなく、また、その性格・危険性の理解にさほど高い能力を要求されるものではない。したがって、未成年者の献血についても、特に洞察力のある親権者によって保護される必要性は乏しく、上記の一般論に照らすと、必ずしも親権者の承諾を必要としないと考える。

・ ただし、献血は、身体的には本人に益をもたらす行為ではないため、慎重に取り扱われるべきものであることは言うまでもない。

特に未成年の場合、疾患等の情報が本人に知らされていないこともあり得るので、献血者の献血時におけるリスク等に係る情報提供を平時から広く行われていることが必要であり、もしも親の積極的拒否のある場合には採血をしてはならないと考える。

③ 献血情報の提供のあり方

・ 献血現場では、よりわかりやすい案内・表示や、問診・説明時における担当スタッフのコミュニケーションスキルのさらなる向上など、受付時から採血後の休憩の段階まで献血者がより一層安心して献血に臨めるような工夫を行うとともに、今後の献血への啓発につながる情報を積極的に提供すべきである。

（4）メディア等を活用した広報戦略のあり方

（若年層個人にアピールするなど年齢層・地域の特性に対応した広報戦略）

・ 対象となる各年代層に即した広報媒体の選択が重要である。

・ 時代の背景を勘案し、インターネット、携帯サイト、ラジオ放送などの繰り返し啓発することが可能な媒体を用いた広報を積極的に行うべきである。また、音楽イベントなどのインパクトのある啓発を行うことは、特に献血未経験者の若年層に協力を呼びかける手段として有効と考えられる。

・ 一方、献血血液は有効期間が短いという性質上、年間を通じて絶えず必要となることから、複数回献血への協力の呼びかけや、各地域において継続して献血に協力してもらえるようなキャンペーンを実施するなどの地道な啓発活動の継続も重要である。

・　全国ネットなどのテレビCMによる広報は、影響力もあり、一時的には大きな効果が見込めるものの、多額の経費を要するなどの問題点がある。
献血の地域性を考慮すれば、むしろ各地域のケーブルテレビ局やコミュニティ放送局など、その地域における有効な広報媒体を選択し、効果的な広報活動を行うことが重要である。

（献血血液の使用状況の情報提供のあり方）

・　献血された血液が医療現場でどのように使用されているかがわかるような情報を提供することが、献血者の献血をしようという意識を高めるとの研究成果が報告されている。献血推進の広報にあたっては、患者が輸血を受けている現場の映像などを含む情報を効果的に取り入れて献血者に提示すれば、献血の意義をより具体的に感じとることができ、非常に有効であると考えられる。このような仕組みを積極的に検討していくべきである。
・　一方、自らの体験から輸血や献血の重要性を強く感じている受血者（患者）も存在し、こうした方々の声を献血推進に活かす方策を検討する必要がある。現在、受血者（患者）の横断的な組織は存在しないが、今後、受血者側の意見を具体的に把握し、献血の推進に反映していくための検討が必要である。

（5）低比重者などへの対応

・　献血する意欲を持ちながら低比重のため献血できなかった方は、平成19年に55万人を超える。こうした方々に対し、献血ルームで栄養指導などのサービスを行うことにより、再度献血への協力を促し、より多くの献血者の確保につなげる取組も重要である。
・　その他の理由により献血意欲はあるものの献血できなかった方のうち、今後献血の可能性が見込める方への積極的な対応を検討していく必要がある。

（6）200 mL 献血の今後のあり方

・　200 mL 献血については、近年、医療機関側の需要が大幅に減少したことにより、幼小児への輸血治療などに一定の需要はあるものの、その使い道は限定されている状況にある。今後、400 mL 献血の小分けでの対応などの技術的課題が解決されると、方向性としては200 mL 献血はさらに漸減し、400 mL 献血がなお一層推進されるものと予測される。
・　しかしながら、漸減しているとはいえ、200 mL 献血の献血者数（延べ人数）は、平成19年の時点においてもなお全体の11．8%を占めており、さらに400 mL 献血のみでは需要を満たせない事態も予測されることから、200 mL 献血も必要とされている。
　今後、200 mL 献血にどのように対処するかについては、若年者における採血基準の見直しを含めて、学校教育における啓発の浸透状況や、献血環境の整備状況を踏まえて検討していくべきである。

第３　採血基準の見直し

・　採血基準のあり方については、医学的な合理性が前提であり、さらに社会的な合意形成が不可欠である。

・　近年、わが国では、１０～２０歳代の若年層の献血率が人口減以上に低下している。この献血率低下の一因として、１６・１７歳では200 mL 全血献血しかできないことが挙げられていることから、この問題にどのように対処するかが極めて重要であると言える。

・　今後の献血者確保対策としては、現在の採血基準に該当する献血対象者に広く協力を求めるとともに、献血対象者の減少を防ぐために現行の採血基準を見直すことも検討するべきである。

・　その他、採血間隔、年間総採血量、貧血検査値の妥当性など、大幅な見直しから20年以上を経過した現在の採血基準を、その後の経験の蓄積や医学的・社会的な観点から見直す必要もあると考える。

・　これらを踏まえ、本検討会では、「採血基準見直しの検討に係るワーキンググループ」を設置し、現在課題となっている各項目について、見直し案が妥当かつ安全に施行可能であるか否か、主に医学的な見地からの検証を行い、以下の報告をとりまとめたところである。

※ 下線部は、今回、採血基準の改正を提言する部分

（1）400 mL 全血献血採血基準の下限年齢の見直しについて

・　日本赤十字社による年齢別の献血副作用発生率データ等から判断すると、<u>400 mL 全血献血について、17歳男性への年齢下限拡大は可能であると考えられる。</u>

・　<u>ただし、献血者の安全を確保する観点から、採血前後のリスク管理を徹底するなど、献血副作用の防止策を万全にすることが必要である。</u>

<u>特に初回献血者は、複数回献血者と比較して献血副作用の発生率が高いとのデータも得られていることから、初回献血時のリスク管理を徹底すべきである。</u>

・　その他の年齢層（16歳男女及び17歳女性）については、引き続き検討を要する。

（2）血小板成分献血採血基準の上限年齢の見直しについて

・　国内で得られた年齢別の献血副作用発生率データ等から判断すると、<u>血小板成分献血の上限年齢については、男性に限り、69歳までの拡大が可能であると考えられる（ただし、65～69歳の者については、60歳に達した日から65歳に達した日の前日までの間に採血が行われた者に限る。）。</u>

・　女性については、引き続き検討を要する。

（3）採血基準項目における「血液比重又は血色素量」について

・　医学的には「血色素量」に統一すべきである。

・　ただし、現状で使用できる検査機器が海外１社の製品のみであるため、<u>当分の間、採血基準は原則として「血色素量」とするが、危機管理上「血液比重」で代替することも可とする。</u>

（4）「年間総採血量、採血回数、採血間隔」及び「男性の血色素量最低値」について

・ 「年間総採血量、採血回数、採血間隔」について、現時点では、国内の複数回献血者の血色素量推移データから、400 mL 全血献血を年4回安全に施行できることを担保するエビデンスは得られなかった。

・ 「男性の血色素量最低値」については、献血者の安全性を考慮すると、現状の採血基準から 0.5g/dL 引き上げることが妥当である（血液比重についても同様に引き上げる）

・ 以上のワーキンググループからの報告を受け、当検討会として討議した結果、ワーキンググループにおける検討内容・検討結果は妥当なものであると考える。

なお、採血基準の見直しについては、今回成案が得られなかった課題等について、今後も種々のデータを収集し、エビデンスの適切な評価を行うなど、引き続き検討すべきである。

第4 今後の課題

・ 本報告書に掲げた提言を受け、今後、国、地方公共団体及び日本赤十字社が具体的にどのように事業を進めていくかについて、短期的に実施可能なもの、中長期的に対応することが必要なものに分類・整理し、明確な目標を定めた行動計画を速やかに作成し、対応していく必要がある。

・ これらの計画の実施状況については、関係審議会等に適宜報告し、その達成状況を検証していく必要がある。

・ 短期的に実施可能な事項については、現在も取組が行われている「献血構造改革」の終期（平成22年）に合わせ、一方、中長期的に対応すべき事項については、「基本方針」（「血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針」）の次回改正時期（平成25年）を目途に達成状況を検証することが望ましい。

・ なお、国、地方公共団体及び日本赤十字社は、上記行動計画の策定や実施段階における協議や情報交換を行うにあたり、既存の「血液関係ブロック会議」等の場を最大限有効に活用すべきである。また、必要に応じて関係審議会等の意見も聴取し現行事業の改善を図るなど、実効性のある事業推進に努め、献血に対する国民の理解を得るよう努力するべきである。

・ さらに、「はじめに」で述べたように、医療関係者をはじめ、献血者、受血者及び教育関係者などすべての関係者が、それぞれの立場から献血に関する理解を深め、国民相互の無償の博愛に基づくわが国の「愛の献血」を将来にわたり継続していくため努力することを求めるものである。

献血推進のあり方に関する検討会　最終報告（案）
－資料編－

● 献血者数の推移【年代別】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

● 人口変動と献血率の推移【年代別】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

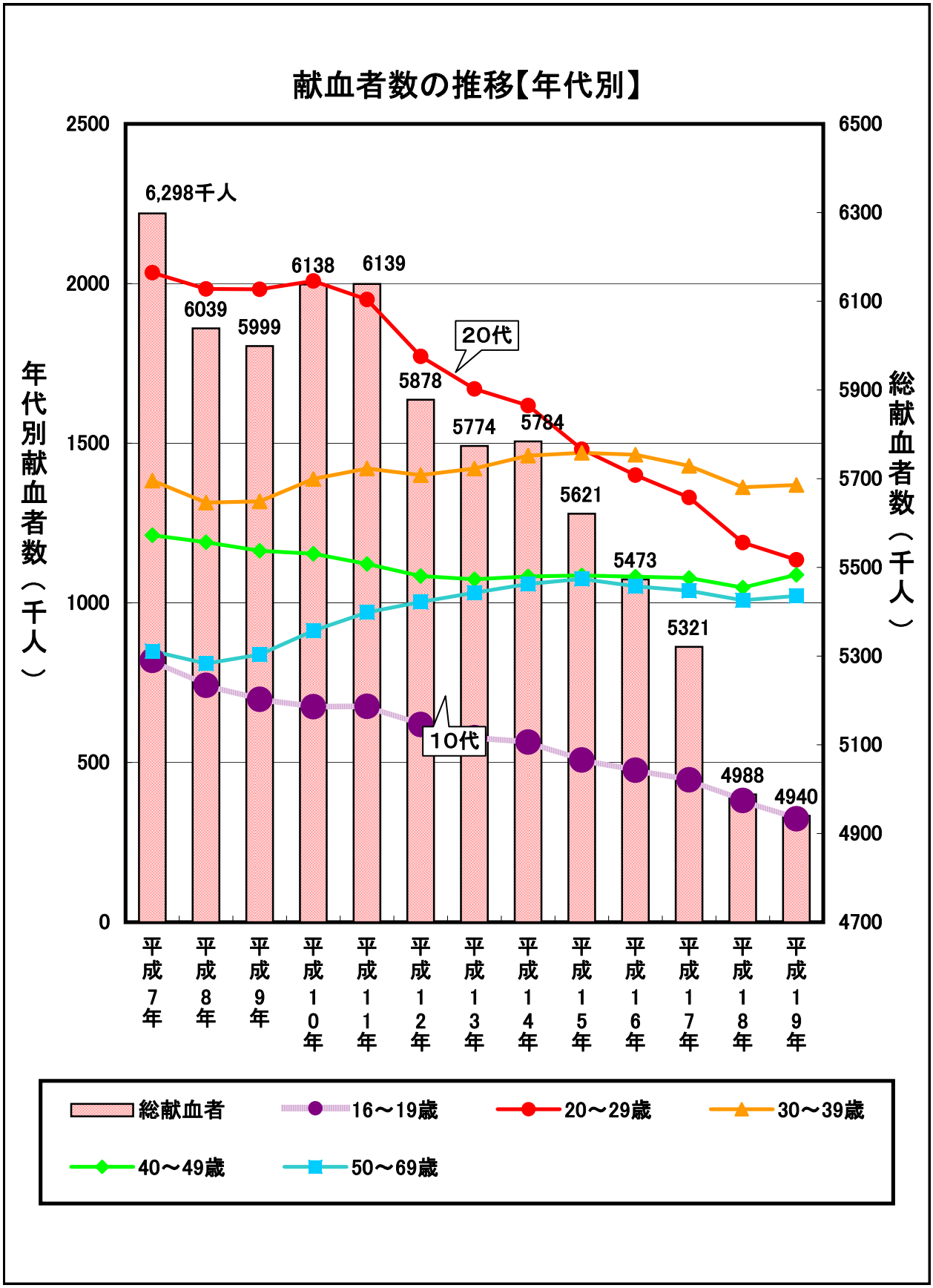
● 高校生献血者数・献血率の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

● 献血受入施設別の献血者数・血液確保量・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

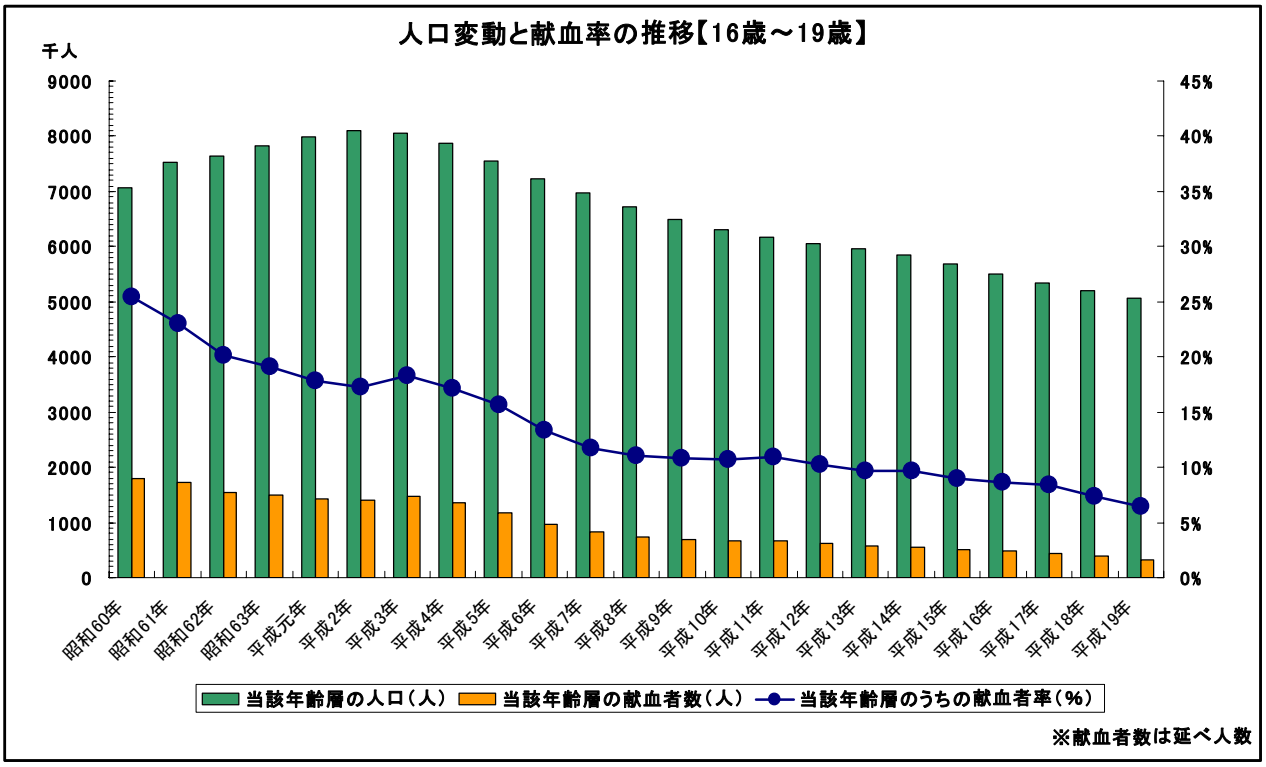
● 献血種類別の献血者数・血液確保量の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（以上、第１回検討会提出資料）

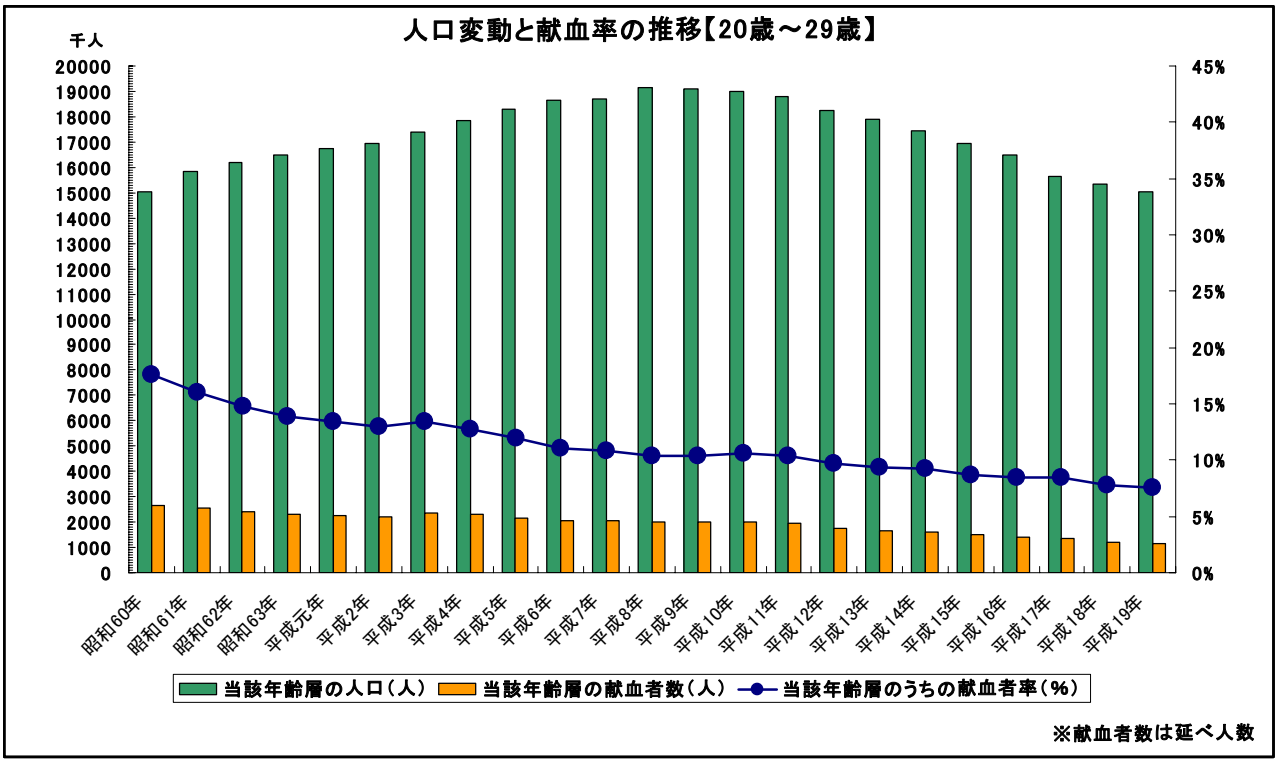
● 若年層献血意識調査結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（第2回検討会提出資料）

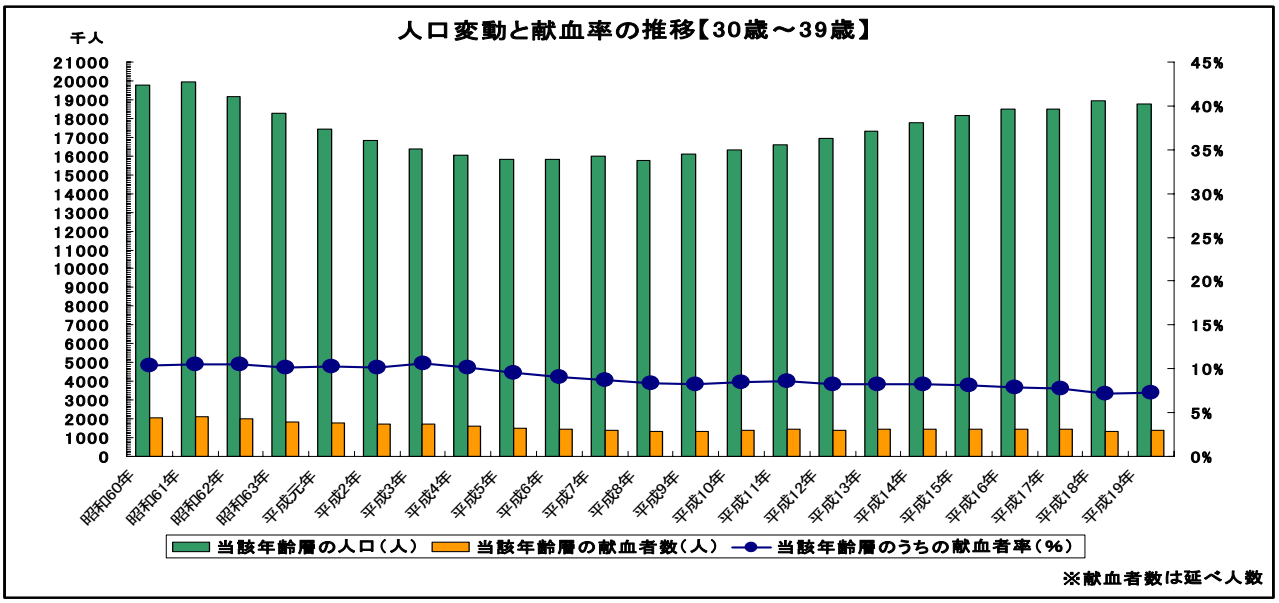
● 年齢別実献血者・人口分布グラフ及び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
年齢・施設別延べ献血者グラフ
【6都道府県抜粋】（第3回・4回検討会提出資料）

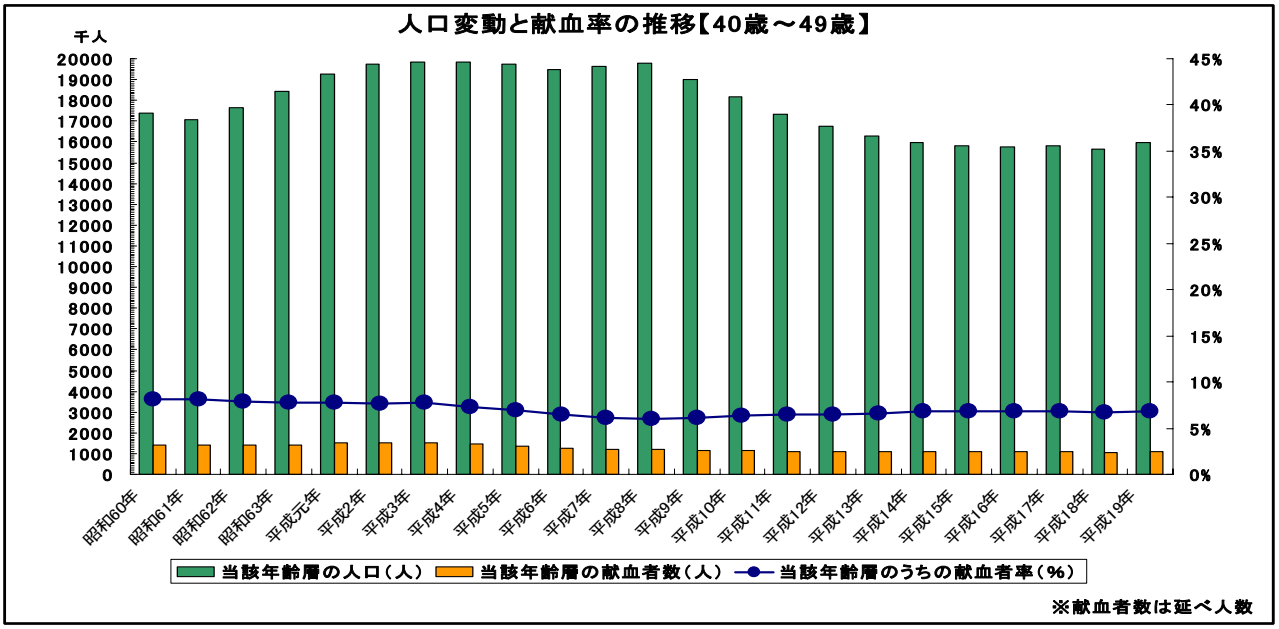

献血者数の推移【年代別】
年代別献血者数（千人）
総献血者数（千人）
2500
2000
1500
1000
500
0
6500
6300
6100
5900
5700
5500
5300
5100
4900
4700
6,298千人
6039
5999
6138
6139
5878
5774
5784
5621
5473
5321
4988
4940
20代
10代
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
総献血者
16～19歳
20～29歳
30～39歳
40～49歳
50～69歳

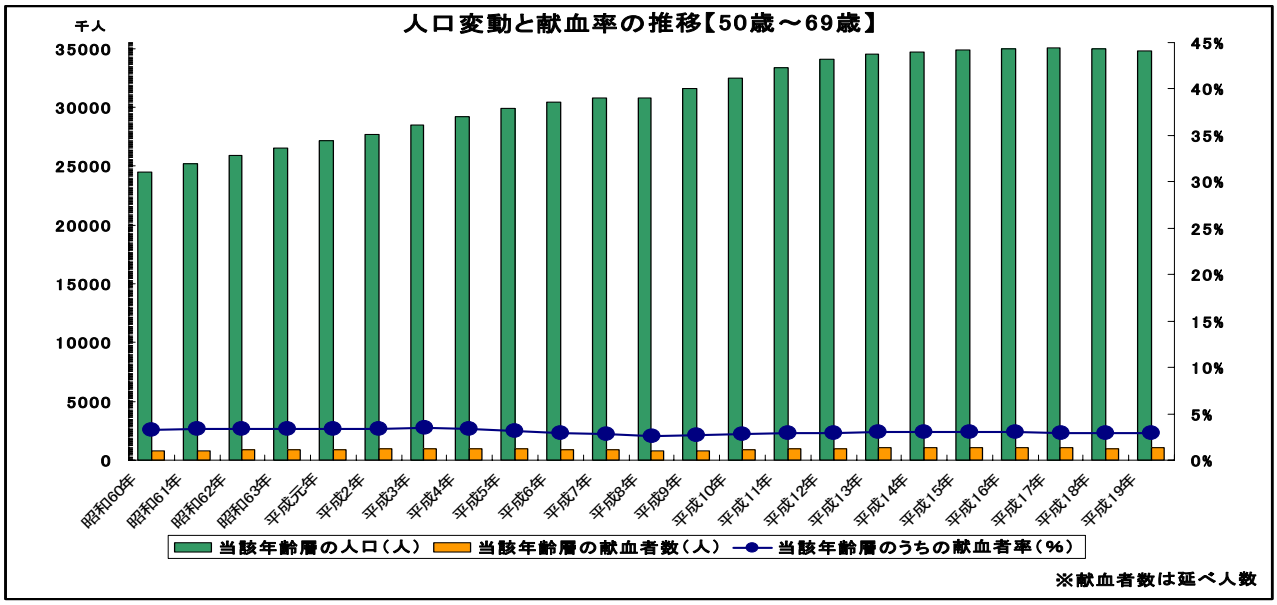
人口変動と献血率の推移【年代別】

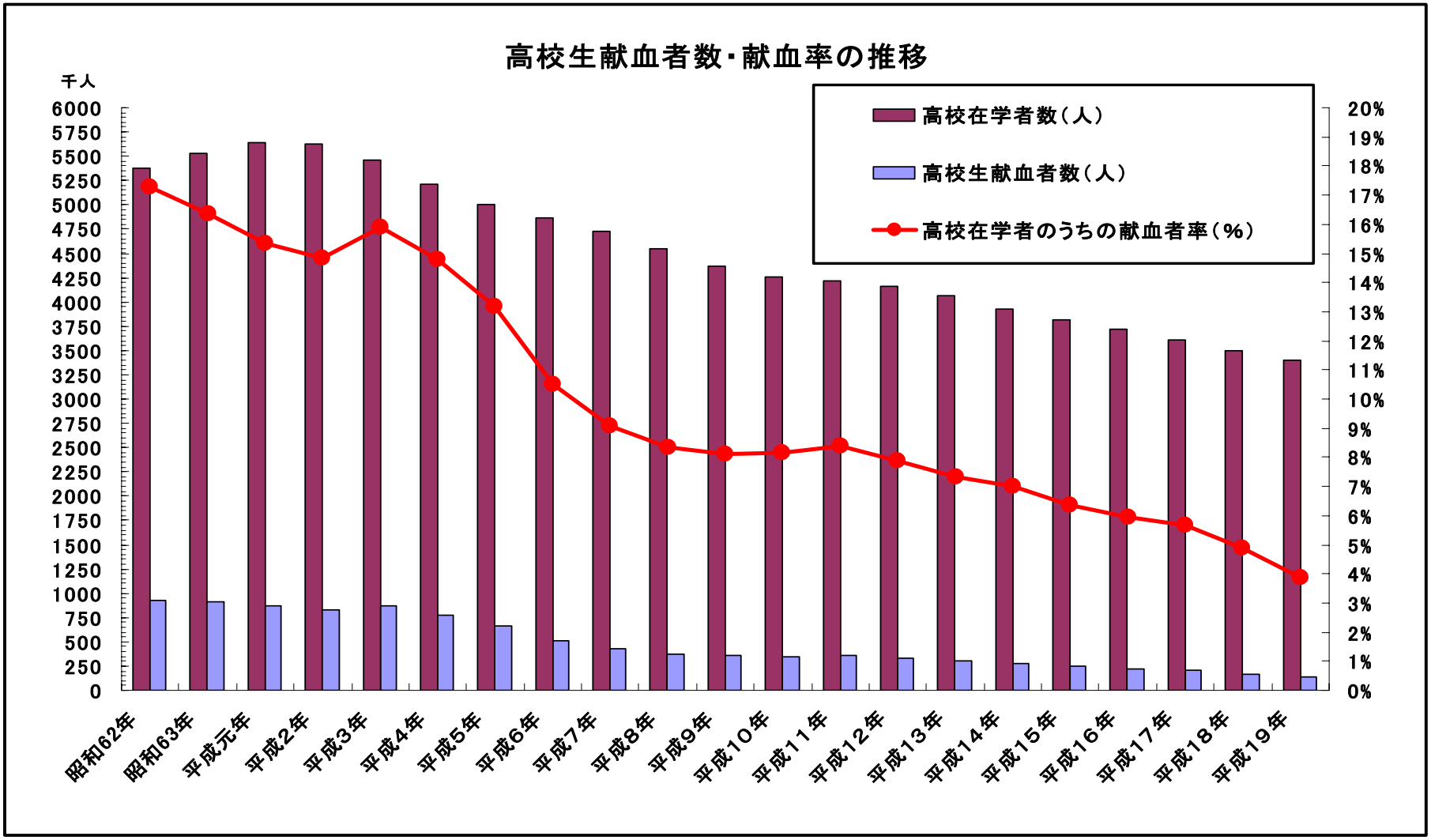




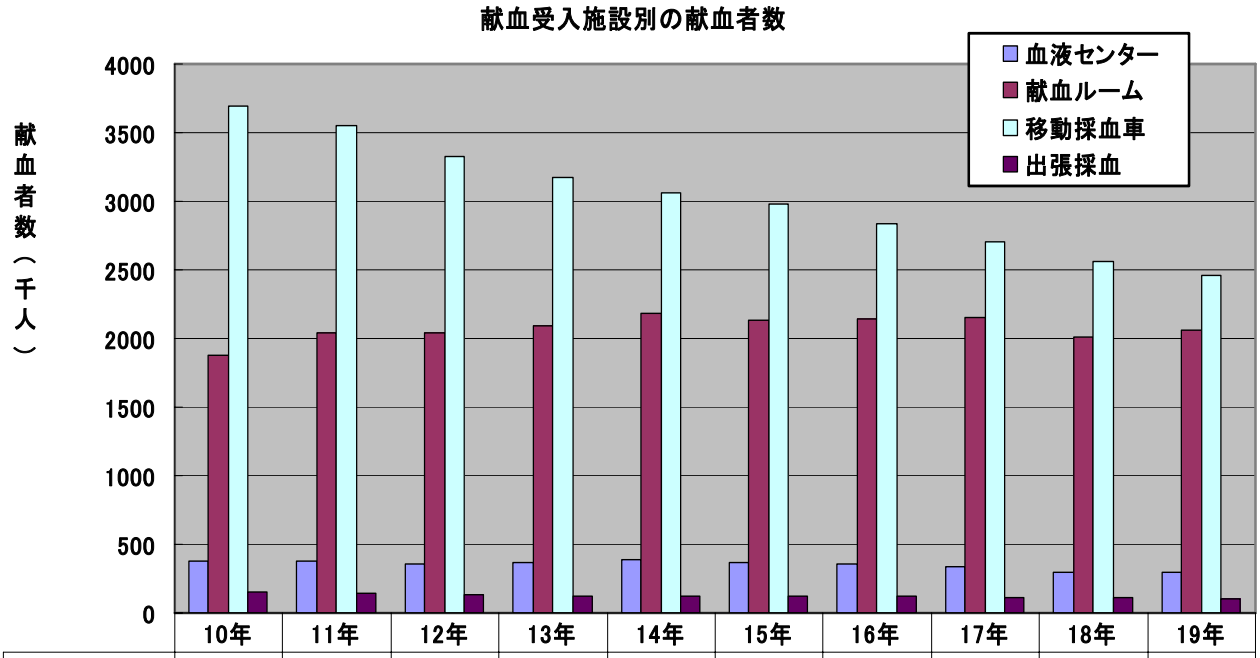

人口変動と献血率の推移【30歳～39歳】
千人
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）
※献血者数は延べ人数


人口変動と献血率の推移【40歳～49歳】
千人
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）
※献血者数は延べ人数


人口変動と献血率の推移【50歳～69歳】
千人
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）
※献血者数は延べ人数

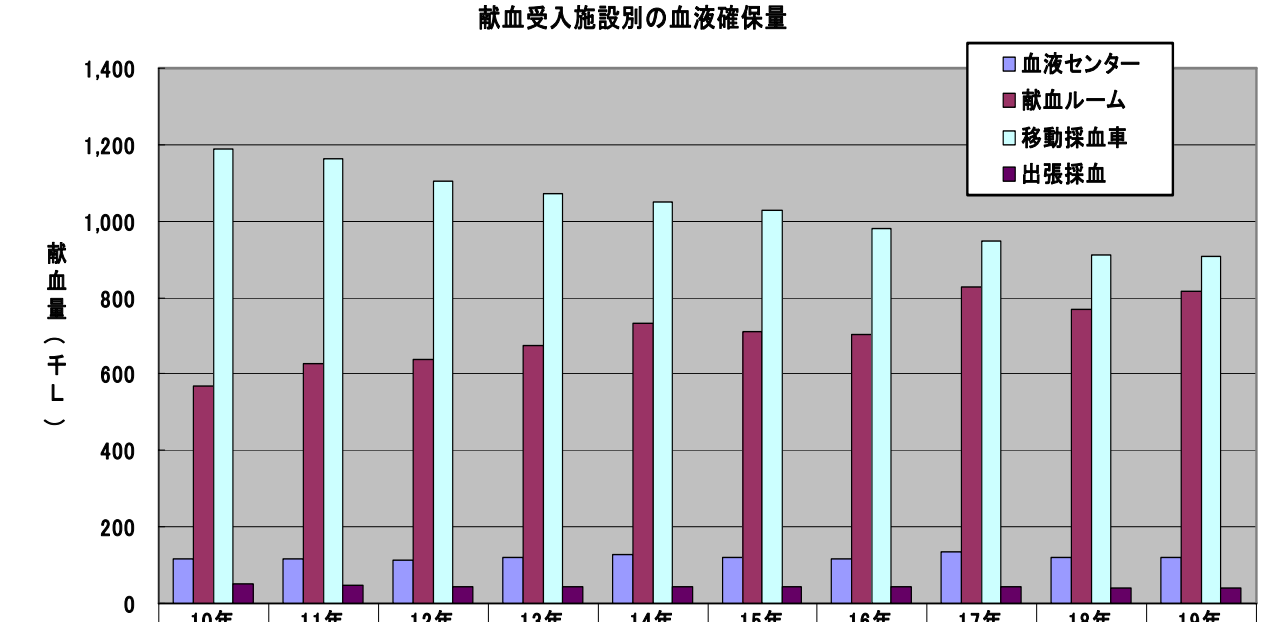

高校生献血者数・献血率の推移
千人
6000
5750
5500
5250
5000
4750
4500
4250
4000
3750
3500
3250
3000
2750
2500
2250
2000
1750
1500
1250
1000
750
500
250
0
20%
19%
18%
17%
16%
15%
14%
13%
12%
11%
10%
9%
8%
7%
6%
5%
4%
3%
2%
1%
0%
高校在学者数（人）
高校生献血者数（人）
高校在学者のうちの献血者率（%）
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年

※献血者数は延べ人数

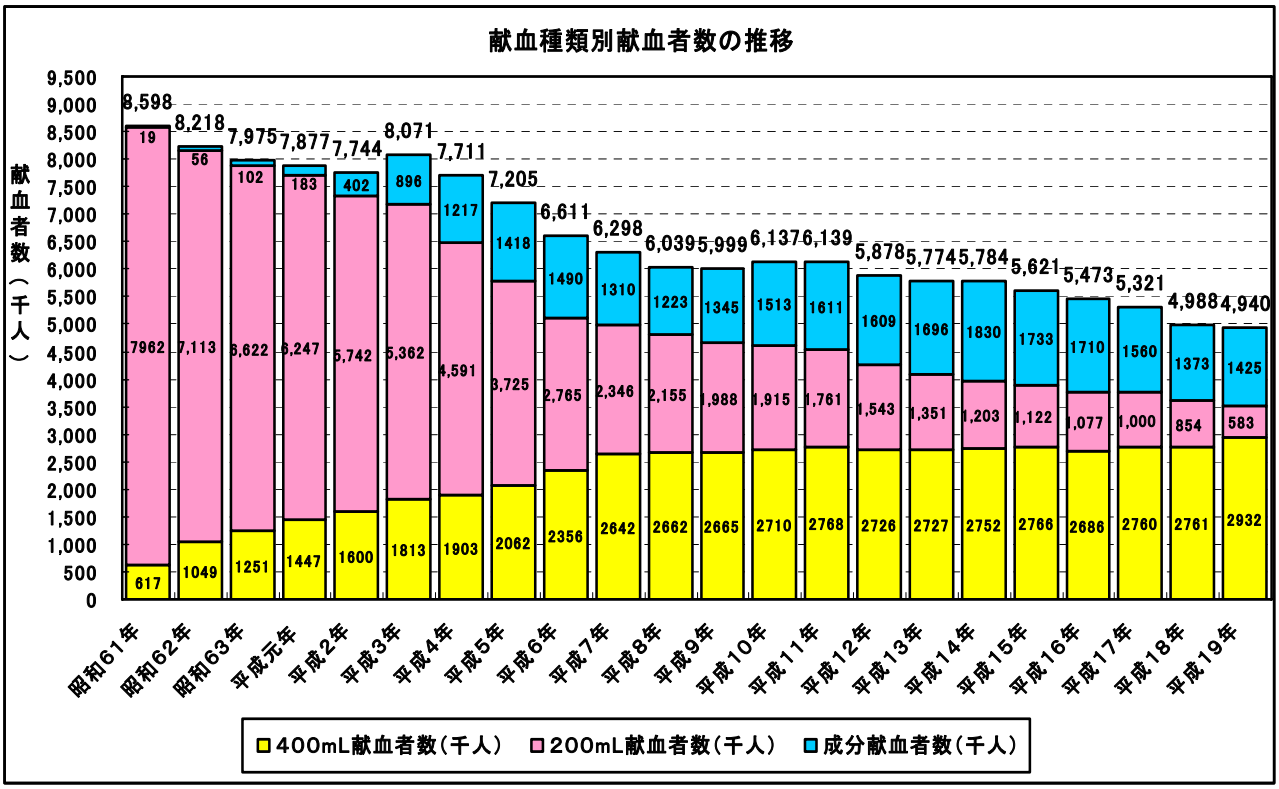


	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年
血液センター	378	373	359.2	368.9	389.9	363.7	354.8	337.6	301	295.2
献血ルーム	1878.2	2037	2038.7	2087	2188.6	2129.6	2145.6	2151.2	2007.6	2065
移動採血車	3692.9	3552.5	3323.1	3169.1	3056.3	2974.8	2834.1	2705.3	2562.6	2462
出張採血	149.1	139.4	127.8	122.3	119.1	123.4	121.2	116.9	107.4	106.6

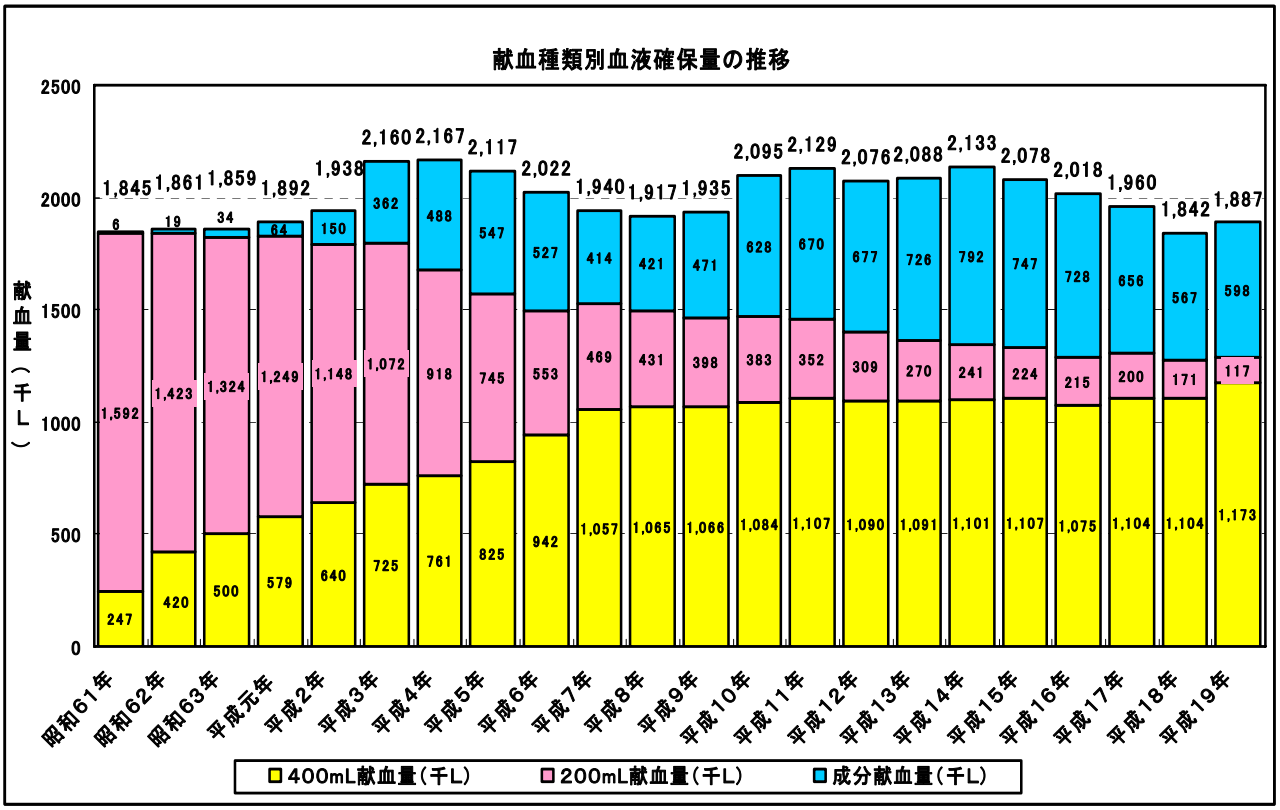
※　献血者数は延べ人数



	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年
血液センター	115.8	115.9	113.3	119.2	128.6	119.2	115.4	135.8	118.8	119
献血ルーム	568.9	628.6	636.8	675.9	733.5	709.8	701.9	829.3	767.9	816.2
移動採血車	1188.2	1161.4	1103.1	1070.3	1049.8	1029	981.9	949.5	913	908.3
出張採血	49.9	47.2	44.3	43.5	42.6	44.1	42.8	42	38.8	39.5


献血種類別献血者数の推移
献血者数（千人）
9,500
9,000
8,500
8,000
7,500
7,000
6,500
6,000
5,500
5,000
4,500
4,000
3,500
3,000
2,500
2,000
1,500
1,000
500
0
8,598 8,218 7,975 7,877 7,744 8,071 7,711 7,205 6,611 6,298 6,039 5,999 6,137 6,139 5,878 5,774 5,784 5,621 5,473 5,321 4,988 4,940
19 56 102 183 402 896 1217 1418 1490 1310 1223 1345 1513 1611 1609 1696 1830 1733 1710 1560 1373 1425
7,962 7,113 6,622 6,247 5,742 5,362 4,591 3,725 2,765 2,346 2,155 1,988 1,915 1,761 1,543 1,351 1,203 1,122 1,077 1,000 854 583
617 1049 1251 1447 1600 1813 1903 2062 2356 2642 2662 2665 2710 2768 2726 2727 2752 2766 2686 2760 2761 2932
昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成元年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年
400mL献血者数（千人）
200mL献血者数（千人）
成分献血者数（千人）

※　献血者数は延べ人数


献血種類別血液確保量の推移
献血量（千L）
2500
2000
1500
1000
500
0
1,845 1,861 1,859 1,892 1,938 2,160 2,167 2,117 2,022 1,940 1,917 1,935 2,095 2,129 2,076 2,088 2,133 2,078 2,018 1,960 1,842 1,887
6 19 34 64 150 362 488 547 527 414 421 471 628 670 677 726 792 747 728 656 567 598
1,592 1,423 1,324 1,249 1,148 1,072 918 745 553 469 431 398 383 352 309 270 241 224 215 200 171 117
247 420 500 579 640 725 761 825 942 1,057 1,065 1,066 1,084 1,107 1,090 1,091 1,101 1,107 1,075 1,104 1,104 1,173
昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成元年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年
400mL献血量（千L）
200mL献血量（千L）
成分献血量（千L）

若年層献血意識調査結果の概要

Ⅰ　調査の概況

１　調査の目的

近年、献血者数は減少傾向にあり、特に若年層の献血離れは深刻なものとなっていることから、献血推進の枠組みについての見直しが求められているところである。

そのため、若年層の献血に対する意識調査を実施し、平成17年度に行った同様の調査の結果との比較を行うことにより、若年層の献血に対する意識等に変化があるかどうかを検証し、検証結果を今後の若年層に対する献血推進のあり方の検討に資する。

２　調査の内容

（1）若年層の献血への関心度や献血へのイメージを把握する。
（2）若年層の献血に関する認知度を把握する。
（3）若年層が献血を行った時期やきっかけを把握する。
（4）（1）～（3）について平成17年度の調査結果との比較を行う。

３　調査の概要

（1）調査方法　：　委託先調査会社が保有している一般消費者パネルに対して、インターネットを通じて質問（調査票）を送付し、回答を収集する。

（2）調査対象　：　全国の16～29歳の献血経験者及び献血未経験者
※献血経験者　　：　過去に1度でも献血の経験がある者
※献血未経験者　：　今まで1度も献血の経験がない者（採血前の検査で基準を満たさないため献血できなかった者を含む）

（3）対象者数　：　回収数　10，000名（地域別内訳は下表のとおり）

	合　計	経験者	未経験者
合　計	10，000	5，000	5，000
北海道	420	210	210
東北	710	355	355
関東甲信越	3，650	1，825	1，825
東海北陸	1，560	780	780
近畿	1，632	816	816
中国・四国	862	431	431
九州・沖縄	1，166	583	583

（4）調査期間　：　平成20年9月5日（金）～9月7日（日）

調査結果のうち特に目立った回答など

献血未経験者	献血経験者
● 献血に関しての認知程度　未経験者のQ1（P10）	
☆17年度調査に比べて全体での認知率は73．8%→92．9%へ大幅に上昇	
● 献血の種類の認知 （新規）　未経験者のQ2（P12）	
☆6割以上の人は未だ認知していない	
● 献血への関心度　未経験者のQ4（P18）	
☆関心なし層が54．2%と、無関心派がやや上回る ☆17年度調査と比べると、関心あり層が52．2%→45．8%に低下	
● 献血に関する広報接触媒体　未経験者のQ7（P24）　経験者のQ3（P66）	
☆最も多いのは「街頭での呼びかけ」（60．6%） ☆高校生は総じて接触率が低い ☆高校生・自営業では「接触したことがない」が1割弱まで増加	☆「街頭での呼びかけ」「献血ルーム前の看板・表示」がともに2／3を占める ☆街頭・献血現場での接触は専業主婦で高く、高校生で低い
● 献血キャンペーンに効果的だと思う媒体　未経験者のQ8（P26）　経験者のQ4（P68）	
☆テレビが圧倒的に高い（84．7%）	☆テレビが圧倒的に高い（83．6%）
● 献血したことがない理由　未経験者のQ15（P38）	
☆「針を刺すのが痛くていやだから」が最も多い。	
● 献血するきっかけとなり得る要因　未経験者のQ16（P42）	
☆「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された」が最も多い	
● 初めての献血の種類　経験者のQ14（P92）	
	☆200mL献血が51．6%と過半数を占めている ☆高校生の69．6%が200mL献血 ☆17年度調査と比較すると、200mL献血は11ポイント減少（62．3%→51．6%）し、400mL献血は10ポイント増加（18．9%→28．9%）
● 初めての献血で400mL献血することへの不安意識 （新規）　経験者のQ15（P94）	
	☆6割弱の人は「特に不安は感じない」としている。一方、「不安」と回答した人は26．4% ☆高校生でも56．4%は「特に不安は感じない」としているが、他層に比べると「わからない」が多い（全体16．4%、高校生23．8%） ☆女性の方が不安意識が高い （男性19．9%、女性33．2%）
● 今までの合計献血回数　経験者のQ17（P102）	
	☆66．3%の人が複数回献血者 ☆全体では「2回以下」と「3回以上」がほぼ半数ずつ
● クロス集計（「初めて献血した場所」と「今までの合計献血回数」　P101	

献血未経験者	献血経験者
	☆大学や職場に比べて「高校で初めて献血した」層ほど通算献血回数が多い傾向がみられる ☆より若いうちに献血を経験すると、その後の献血回数が増える傾向が強いとも考えられる
● クロス集計（「家族が献血している姿を見たことがあるか」と「今までの合計献血回数」 P101	
	☆「見たことがある」と回答した層ほど通算献血回数が多いことが明らか ☆「家族の献血現場を見たことがあるかどうか」とその後の献血行動との相関は高いことがうかがえる
● 初めての献血のきっかけ 経験者のQ18（P104）	
	☆「自分の血液が役に立ってほしいから」が圧倒的に多い（特に高校生、自営業、専業主婦で顕著） ☆新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」（15回答肢中11位：累計）は高校生、自営業で目立って高かった。
● 現在献血するきっかけ 経験者のQ19（P108）	
	☆初めての献血のきっかけと同様「自分の血液が役に立ってほしいから」が圧倒的に多い ☆新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」（11回答肢中8位：累計）は高校生、自営業で目立って高かった。
● 高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか 経験者のQ22（P112）	
	☆「非常に有効」が36．4%、「どちらかといえば有効」（48．2%）と合わせたポジティブ評価は84．6%にのぼる ☆17年度調査との比較ではポジティブ評価が65．9%→84．6%と大幅に上昇（「非常に有効」は20．4%→36．4%） ☆高校での献血は、その後の献血への動機付けになるとの意識は高くなっていることがうかがえる
● クロス集計（「高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか」と「初めて献血した場所」 P111	
	☆高校や大学などで初めて献血したという層ほど“より有効”とする傾向がみられた ☆特に高校で初めて献血した層で「非常に有効」が高い割合
● 家族が献血している姿を見たことがあるか （新規） 未経験者のQ17（P46） 経験者のQ20（P114）	
☆「見たことがある」は10．6%	☆「見たことがある」は21．8% → 献血未経験者の約2倍
● 友人に献血をしている人がいるか （新規） 未経験者のQ18（P48） 経験者のQ21（P116）	

献血未経験者	献血経験者
☆「いる」「いない」「わからない」がほぼ同程度で3分された	☆6割が「いる」と回答 → 献血未経験者の約2倍（高校生では未経験者12．1%、経験者56．9%と差が大きい）
● （資料閲読後）今後実際に献血に行くか	未経験者のQ19－3（P54）
☆「はい」（6．1%）、「どちらかというとはい」（41．3%）と前向きな意向がほぼ半数 ☆前向きな意向が最も高いのは高校生（52．2%、うち「はい」は8．8%）	
● （資料閲読後）献血回数を増やすか	経験者のQ23－3（P122）
	☆「はい」（28．5%）、「どちらかというとはい」（54．4%）と前向きな意向が83．0% ☆資料閲読後にかなりの人が回数の増加を喚起されている。 ☆「はい」に限ると高校生が35．4%と最も高い
● 献血についての要望・知りたいこと	経験者のQ11（P124）
	☆専業主婦の「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」が他層に比べ目立って高い（専業主婦42．0%、全体29．2%）

Ⅱ　調査結果の概要

1　献血未経験者

■ 対象者特性　（回答者5，000人）

①【居住地】は、「関東甲信越」が36．5%を占めており、以下、「近畿」（16．3%）「東海北陸」（15．6%）、「九州・沖縄」（11．7%）、「中国・四国」（8．6%）、「東北」（7．1%）、「北海道」（4．2%）の順。全体構成は17年度調査と概ね変わらない。

②【性別】は、「男性」51．1%、「女性」48．9%とほぼ半々。17年度調査に比べて男性回答者が大幅に増えている（33．8%→51．1%）。

③【年齢】については、16～17歳（9．7%）、18～19歳（15．4%）、20～24歳（35．5%）、25～29歳（39．4%）であった。17年度調査に比べて10代の回答者が増加している（「16～17歳」（5．5%→9．7%）、「18～19歳」（6．1%→15．4%）。

④【職業】では、最も多かったのは「会社員」（30．9%）で、以下、「大学生・専門学校生」（29．7%）、「その他」（14．1%）、「高校生」（12．5%）、「専業主婦」（8．5%）、「自営業」（2．7%）、「公務員」（1．7%）の順。17年度調査と比べると、特に「大学生・専門学校生」（18．6%→29．7%）の増加、「専業主婦」（17．1%→8．5%）の減少が目立つ。

⑤【医療関係への関与有無】については、「携わっている」と回答した人は6．4%で、17年度調査（6．0%）とほぼ同様だった。

■ 献血に関する認知・関心度

Q1　献血に関しての認知程度

- 「よく知っている」は12．6%。「ある程度知っている」（80．3%）まで含めると、認知率は92．9%にのぼる。
- 高校生の認知率（計87．9%）が他層に比べてやや低い。
- 性別・地域別による認知率の違いはそれほどみられない。
- 17年度調査に比べて全体での認知率は73．8%→92．9%へ大幅に上昇。

Q2　献血の種類の認知　（新規質問）

- 献血には全血献血と成分献血といった種類があるということを「知っている」人は38．6%。残りの6割以上の人は未だ認知していない。
- 職業別では、公務員の認知率が半数を超えており他層に比べて高い。一方、高校生の7割強が「知らない」としており最も認知率が低い。
- 性別では、男性（34．3%）に比べて女性の認知率（43．0%）が高い。
- 地域別では、東北の認知率（49．0%）が最も高い。

Q3　献血できる場所の認知　（新規質問）

- 献血できる場所の認知状況について、「よく知っている」は24．5%。「ある程度知っている」（63．2%）まで含めると、認知率は87．7%にのぼる。
- 職業別では、専業主婦の認知率（93．6%）が最も高い。一方で、高校生（82．1%）、自営業（81．3%）は他層よりもやや低い。
- 性別では、女性の認知率（91．8%、うち「よく知っている」28．0%）が男性（83．8%、うち「よく知っている」21．1%）よりも高い。
- 東北のほぼ3人に1人（32．4%）が「よく知っている」と回答し、他地域より高い。

Q14　献血ルームのイメージ

・　全体の半数弱（47．4%）が「ふつう」の印象を持ち、「暗い」イメージ（15．4%）が「明るい」イメージ（12．7%）を上回っている。一方で、ほぼ4人に1人（25．4%）が「わからない」としている。
・　性別では、男性（9．1%）に比べて女性（16．5%）の方が「明るい」イメージを持つ割合がやや高い。
・　地域別では、「明るい」イメージは北海道で最も高い（18．1%）
・　17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がないため、一概には比較できないが、全体では「明るい」「ふつう」「暗い」のいずれも減少し、特に「ふつう」の落ち込み（61．2%→47．4%）が顕著。

Q4　献血への関心度

・　全体では、関心あり層の45．8%（うち非常に関心がある：5．2%）に対して、関心なし層が54．2%（うち全く関心がない：8．6%）と、“無関心派”がやや上回る。
・　職業別では、他層に比べて専業主婦で関心あり層の割合が高い（53．4%）。
・　性別では、男性よりも女性の関心度が高く、関心あり層の割合は女性54．6%、男性37．5%。
・　地域別では、九州・沖縄の関心度が他地域よりやや高い（関心あり層53．5%、うち非常に関心がある7．9%）。
・　17年度調査との比較でみると、全体で関心あり層が52．2%→45．8%に低下。

Q5　献血が病気の治療に役立っていることの認知　（新規質問）

・　献血がさまざまな病気の治療に役立っていることは、ほぼ半数の48．0%が認知している。
・　認知率は、職業別・性別・地域別のいずれでみても、各層でそれほど違いはみられない。

Q6　若年層の献血協力者の減少傾向認知　（新規質問）

・　近年、献血に協力してくれる10代・20代の若年層が大幅に減少していることを「知っている」という人は全体で37．3%。
・　職業別にみると、公務員の認知率（52．9%）が他層に比べて高い。なお、大学・専門学校生の認知率は40．2%、高校生の認知率は33．7%にとどまる。
・　認知率は男女間で差はなく、地域別でも大きな違いはみられない。

■　献血の広報・キャンペーンへの認知接触状況

Q7　献血に関する広報接触媒体

・　接触したことのある広報媒体で最も多いのは「街頭での呼びかけ」（60．6%）。以下、「テレビ」（50．4%）、「献血バス」（49．8%）、「献血ルーム前の看板・表示」（48．5%）と続き、ここまでが主要な媒体。
・　職業別にみると、「街頭での呼びかけ」は大学生・専門学校生と専業主婦でやや高い。また、専業主婦は「献血バス」「献血ルーム前の看板・表示」も高く、現場での接触が目立つ。一方、高校生は総じて接触率が低い（「街頭での呼びかけ」42．0%、「献血バス」36．3%、「献血ルーム前の看板・表示」（36．6%）等）。
・　地域別では、「テレビ」は東北で高く、関東甲信越で低い。また、「街頭での呼びかけ」「献血ルーム前の看板・表示」は、献血ルームが多い関東甲信越、近畿で高い。
・　17年度調査と比較すると、総じて広報媒体への接触率が低下している（主要な媒体で10ポイント程度減少）。
・　高校生・自営業では「見たこと（聞いたこと）がない」が1割弱まで増加している。

Q8　献血キャンペーンに効果的だと思う媒体

- 「テレビ」が圧倒的に高い（84．7％）。次いで「インターネット」（46．8％）が続き、以下、「新聞」（23．7％）、「ポスター」（22．7％）、「雑誌」（22．7％）、「携帯電話」（22．2％）。
- 職業別にみると、高校生では他層より「インターネット」（40．9％）がやや低く、「携帯電話」（28．0％）がやや高い。専業主婦・公務員で、「自治体の広報誌」を挙げる割合が他層よりも8～10ポイント高い。専業主婦は「新聞」（30．0％）「雑誌」（29．8％）も他層よりやや高い。
- 性別では「雑誌」を挙げる人が男性（17．6％）よりも女性（27．9％）に多い。
- 17年度調査と比較すると、「インターネット」「携帯電話」を効果的とする割合が高くなっている（インターネット41．9％→46．8％、携帯電話13．4％→22．2％）。

Q9　献血キャラクター「けんけつちゃん」認知

- 未経験者全体での認知率は7．2％。
- 属性別でみると、高校生、大学生・専門学校生の認知率が1割強と他層よりもやや高い。また男性（4．8％）よりも女性（9．7％）の認知率が上回っている。地域別では東北で他地域に比べやや高い（12．7％）。
- 17年度調査と比較すると、認知率は3．0％→7．2％へと4ポイントアップした。
- 属性別では、今回比較的認知率が高かった高校生、大学生・専門学校生、専業主婦において6～7ポイントの認知率アップがみられた。

Q10　献血キャンペーン認知

- 献血キャンペーンを「知っている」と回答した人は14．7％。
- 職業別では他層に比べて公務員の認知率（20．0％）がやや高い。性別では男性（11．6％）より女性（17．8％）が高く、地域別では東北（20．3％）がやや高い。
- 17年度調査と比較すると、認知率は25．9％→14．7％へと相当低下している。
- 属性別にみても、各層ともおしなべて認知率が相当低下している。

Q11　「HOP STEP JUMP」を配布された記憶

- 高校3年生を対象に、「HOP STEP JUMP」という普及啓発資材が配布されていることを認知している人は9．6％。授業で使用した記憶がある人は2．2％にとどまっている。
- 職業別にみると、高校生（15．0％）や大学生・専門学校生（10．30％）といった、より若い世代の認知率がやや高い。それでも認知率は10％台にとどまる。
- 17年度調査と比較すると、認知率は7．1％→9．6％へと若干上昇している。

■ 感染症・血液製剤について

Q12　献血では感染症に感染しないことの認知

- 献血でエイズ、肝炎といった感染症に感染しないことを認知している人は59．1％
- 属性別による違いはさほどみられない。
- 17年度調査と比較すると、認知率はほぼ横ばい（60．9％→59．1％）。
- 職業別では、公務員の認知率が目立って低下している。

Q13　血液製剤の海外血液依存の認知

- 血液製剤は未だ海外の血液に依存しているということを認知している人は14．5％
- 職業別にみると、公務員の認知率が他層に比べてやや高い（21．2％）。性別・地域別による差はあまりみられない。
- 17年度調査と比較すると、認知率は22．6％→14．5％へ、8ポイント低下。

■ 献血をしたことがない理由

Q15　献血したことがない理由（大きい順に3つ選択）

○ 1位に挙がった理由

・ 最も多かったのは「針を刺すのが痛くて嫌だから」（15．3%）。以下、「健康上出来ないと思ったから」（8．5%）、「なんとなく不安だから」（8．2%）、「近くに献血する場所や機会がなかったから」（7．8%）、「献血を申し込んだが、基準に適合せずに断られた」（7．7%）が上位5。

・ 職業別にみると、専業主婦で「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」が他層よりもやや高い（全体7．7%、専業主婦15．4%）。一方、高校生は「健康上出来ないと思ったから」がやや低い（全体8．5%、高校生2．4%）。

・ 17年度調査と比較すると、全体では「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」（11．6%→7．7%）と「健康上出来ないと思ったから」（11．9%→8．5%）がやや減少している。

・ 地域別では、北海道で「針を刺すのが痛くて嫌だから」（10．5%→18．6%）と「献血する意志がない」（5．0%→10．5%）が前回よりも増加している。

○ 1位～3位累計

・ 1位～3位の累計でみると、「針を刺すのが痛くていやだから」（31．2%）と「なんとなく不安だから」（30．8%）が拮抗し、主な理由となっている。以下、「時間がかかりそうだから」（21．6%）、「恐怖心」（21．1%）、「近くに献血する場所や機会がなかったから」（19．9%）と続く。

・ 職業別にみると、高校生で「近くに献血する場所や機会がなかったから」がやや高い（全体19．9%、高校生25．9%）。公務員は他層に比べて「時間がかかりそうだから」（全体21．6%、公務員27．1%）と「忙しくて献血する時間がなかった」（全体14．7%、公務員21．2%）がやや高い。また、専業主婦では、1位の理由と同様に「献血を申し込んだが基準に適合せず断られた」（全体9．7%、専業主婦16．8%）が他層よりやや高い。

・ 17年度調査と比較すると、全体では大きな変化はみられない。その中で「健康上出来ないと思ったから」が5ポイント低下した（22．8%→17．7%）。

・ 職業別では、公務員で「時間がかかりそうだから」（13．5%→27．1%）「忙しくて献血する時間がなかった」（14．4%→21．2%）が上昇している。

・ 高校生では、「どこで献血ができるかわからない」（15．1%→9．7%）は前回高かったが今回は他層並に低下し、「献血を申し込んだが、基準に適合せず断られた」（10．1%→4．8%）は前回他層並だったが、今回半減した。

■ 献血するきっかけとなり得る要因

Q16　献血するきっかけとなり得る要因（大きい順に3つ選択）

○ 1位に挙がった要因

・ 最も多かったのは「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された」（12．1%）であった。献血をしたことがない理由でも「針を刺すのが痛くて嫌だから」が1位であったことから、“針を刺すときの痛さ”が献血への大きなネックとなっていることがうかがえる。

・ 以下、「家族や友人などから勧められた」（11．4%）、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」（8．6%）、「近くに献血する場所ができた（献血ルーム）」（7．1%）の順で続く。

・ 17年度調査と比較すると、全体では「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」を挙げる割合が約9ポイント減少したのが目立つ。一方、「献血は絶対しない」を挙げる割合が増加している（12．5%→18．0%）。これは属性別にみても、各層共通である。

○ 1位～3位累計

・ 1位～3位累計でみると、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」が最も高く27．4％。「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された」が25．7％で差のない2位。以下、「献血の重要性が明確になった」「家族や友人などから進められた」（各20．8％）、「献血が自分の健康管理に役に立つようになった」（20．1％）、「近くに献血する場所ができた（献血ルーム）」（18．7％）の順で続く。

・ 17年度調査と比較すると、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」「献血が自分の健康管理に役に立つようになった」が6ポイント減少しているが、それ以外はそれほど違いはみられない。

■ 家族・友人の献血状況

Q17　家族が献血している姿を見たことがあるか　（新規質問）

・ 家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は10．6％。

・ 職業別では、「ある」の割合は高校生（15．5％）、専業主婦（15．4％）でやや高く、性別では男性（7．4％）よりも女性（13．9％）の方が高い。

Q18　友人に献血している人がいるか　（新規質問）

・ 「友達に献血をしている人はいますか」と質問したところ、「いる」は33．4％、「いない」が34．1％、「わからない」が32．5％と大きく3分された。

・ 「いる」の割合が高いのは公務員（48．2％）、大学生・専門学校生（40．3％）。

・ 高校生のほぼ半数（48．4％）が「いない」としており、他層と比べ目立って高い。

・ 性別では、女性の「いる」（38．7％）が男性を10ポイント上回っている。

・ 地域別では、北海道（41．4％）、東北（39．7％）が他地域よりもやや高い。

■ 献血に関する資料評価

（献血に関する資料の閲読後に、献血に関する意識の変化を質問。）

Q19－1　献血の必要性への理解が良くなったか

・ 「はい」は34．0％で、「どちらかというとはい」（57．8％）まで含めると91．7％にのぼる。否定的な意見は8．3％にとどまった。

・ 職業別では、肯定的な評価は特に専業主婦で高い（95．3％）。「はい」（43．7％）で他層との差が大きい。一方、自営業で好意的な評価はやや低い（86．6％）。

・ 17年度調査と比較すると、全体では肯定的な意見が87．7％→91．7％へと高くなっている。

Q19－2　献血に協力する意識の有無

・ 閲読後に「今は献血に協力する気持ち」が「ある」と回答した人は16．4％、「どちらかというとある」（48．8％）まで含めると65．2％。ほぼ3人に2人が協力の意向を示している。

・ 17年度調査と比較すると、全体のポジティブ評価に変化はみられない（65．0％→65．2％）。

Q19－3　今後実際に献血に行くか

・ 「はい」は6．1％。「どちらかというとはい」（41．3％）まで含めた前向きな意向はほぼ半数の47．4％。

・ 前向きな意向が最も高いのは高校生（52．2％、うち「はい」は8．8％）。自営業は41．8％（うち「はい」は2．2％）とやや低い。

・ 平成17年度調査との比較では、全体の前向きな意向は49．5％→47．4％。（自営業で13ポイントの低下）

2　献血経験者

■ 対象者特性　（回答者5，000人）

①【居住地】は、「関東甲信越」が36．5%を占めており、以下、「近畿」（16．3%）「東海北陸」（15．6%）、「九州・沖縄」（11．7%）、「中国・四国」（8．6%）、「東北」（7．1%）、「北海道」（4．2%）の順。全体構成は17年度調査と概ね変わらない。

②【性別】は、「男性」51．1%、「女性」48．9%とほぼ半々。17年度調査との比較では、男性回答者が大幅に増えている（34．1%→51．1%）。

③【年齢】は、16～17歳（2．5%）、18～19歳（8．7%）、20～24歳（48．7%）、25～29歳（40．0%）であった。20代が88．7%を占めるが、17年度調査に比べて10代の回答者が増加している（「16～17歳」（0．9%→2．5%）、「18～19歳」（2．9%→8．7%）。

④【職業】では、最も多かったのは「会社員」（43．0%）で、以下、「大学生・専門学校生」（29．1%）、「その他」（9．1%）、「専業主婦」（9．0%）、「公務員」（4．1%）、「高校生」（3．6%）、「自営業」（2．1%）の順。17年度調査と比較すると、「大学生・専門学校生」（13．0%→29．1%）が大幅増、「専業主婦」（21．3%→9．0%）の減少が目立つ。

⑤【医療関係への関与有無】については、「携わっている」と回答した人は11．0%で、17年度調査（10．0%）とほぼ同様だった。

■ 献血に関する認知状況

Q1　献血が病気の治療に役立っていることの認知　（新規質問）

- 献血がさまざまな病気の治療に役立っていることは、献血経験者のほぼ3人に2人（65．9%）が認知している。
- 職業別にみると、公務員の認知率（75．8%）が高く、専業主婦（58．7%）がやや低い。また、男女間で認知率に差はみられない。

Q2　若年層の献血協力者の減少傾向認知　（新規質問）

- 近年、献血に協力してくれる10代・20代の若年層が大幅に減少していることを「知っている」という人は全体で55．3%。
- 職業別にみると、公務員の認知率（60．4%）が他層に比べてやや高いが他はあまり変わらない。
- 認知率は男女間で差はなく、地域別では、東北（62．8%）と中国・四国（61．5%）の認知率がやや高い。

■ 献血の広報・キャンペーンへの認知接触状況

Q3　献血に関する広報接触媒体

- 接触したことのある広報媒体をみると、「街頭での呼びかけ」（68．0%）、「献血ルーム前の看板・表示」（65．5%）がともに2／3程度を占めており双璧。
  以下、「献血バス」（57．6%）、「テレビ」（55．4%）で、以上が主要な媒体。
- 職業別にみると、「街頭での呼びかけ」「献血ルーム前の看板・表示」「献血バス」といった現場での接触は専業主婦で高い（順に74．3%、71．0%、63．4%）。
  逆に、高校生（順に49．2%、51．4%、39．8%）ではこうした現場での接触率が低い。

・　地域別では、「街頭での呼びかけ」は北海道（56．2%）、中国・四国（59．6%）でやや低い。一方、関東甲信越は他地域に比べて「テレビ」（46．6%）がやや低い。
・　17年度調査と比較すると、新規回答肢を除くと、各媒体との接触率は総じて低下している。特に「ポスターの掲示」が20ポイント近く下がったのが目立つ。

Q4　献血キャンペーンに効果的だと思う媒体

・　「テレビ」が圧倒的に高い（83．6%）。次いで「インターネット」（48．3%）が続き、以下、「ポスター」（26．7%）、「雑誌」（26．3%）、「新聞」（25．8%）、「携帯電話」（25．6%）、「自治体の広報誌」（13．4%）、「FM放送」（11．9%）、「その他のラジオ放送」（7．6%）と続く。
・　職業別にみると、各層とも「テレビ」「インターネット」中心は変わらない。その中で高校生では他層より「インターネット」（37．0%）がやや低い。また、「ポスター」は自営業（32．1%）と専業主婦（31．9%）でやや高く、他に、自営業で「FM放送」（17．9%）、専業主婦で「雑誌」（31．5%）、公務員で「自治体の広報誌」がやや高い。
・　性別では、「雑誌」を挙げる人は男性（20．1%）よりも女性（32．8%）に多い。
・　地域別では、他地域に比べて東北で「自治体の広報誌」（20．6%）がやや高い。
・　17年度調査と比較すると、「テレビ」（△3．9%）「新聞」（△4．6%）がやや減少。一方で「インターネット」と「携帯電話」を挙げる割合が高くなっている（インターネット43．9%→48．3%、携帯電話14．9%→25．6%）。

Q5　献血キャラクター「けんけつちゃん」認知

・　経験者全体での認知率は23．8%。ほぼ4人に1人が認知。
・　職業別でみると、高校生の認知率（34．8%）が特に高く、大学生・専門学校生（31．8%）、公務員（29．5%）がこれに続く。一方、専業主婦の認知率が12．7%と他層よりも低い。
・　性別では女性の認知率（28．8%）が男性（18．9%）よりも高く、地域別では東北（31．0%）が最も高い。
・　17年度調査と比較すると、認知率は7．0%→23．8%へと大幅に上昇した。
・　属性別でみても、各層共通して認知率が上昇。特に大学生・専門学校生（8．1%→31．8%）と女性（7．2%→28．8%）で上昇が顕著。

Q6　献血キャンペーン認知

・　献血キャンペーンを「知っている」と回答した人は36．5%。
・　職業別では他層に比べて公務員の認知率（44．9%）がやや高い。性別では男性（30．9%）より女性（42．3%）が高く、地域別では東北（43．7%）でやや高く、北海道（27．1%）で最も低い。
・　17年度調査と比較すると、認知率は46．4%→36．5%へと相当低下している。
・　属性別にみても、各層ともおしなべて認知率が相当低下している。

Q7　「HOP STEP JUMP」を配布された記憶

・　高校3年生を対象に、「HOP STEP JUMP」という普及啓発資材が配布されていることを認知している人は14．7%。授業で使用した記憶がある人は5．7%にとどまっている。
・　職業別にみると、高校生の認知率は31．5%で、大学生・専門学校生は20．9%と、より若い世代の認知率が他層より高い。
・　17年度調査と比較すると、認知率は10．6%→14．7%へと若干上昇している。

■ 感染症・血液製剤について

Q8　献血では感染症に感染しないことの認知

- 献血でエイズ、肝炎といった感染症に感染しないことは、献血経験者のほぼ8割（78．4%）が認知している。
- 17年度調査と比較すると、認知率はほぼ横ばい（79．9%→78．4%）。
- 職業別では、公務員（88．2%→81．6%）、自営業（83．9%→74．5%）の認知率がやや低下している。地域別では、北海道でやや低下（84．5%→79．0%）。

Q9　血液製剤の海外血液依存の認知

- 血液製剤は未だ海外の血液に依存しているということを認知している人は25．3%と、献血経験者の4人に1人の割合。
- 職業別にみると、高校生の認知率（32．0%）が最も高く、唯一30%超。性別・地域別による差はあまりみられない。
- 17年度調査と比較すると、認知率は30．8%→25．3%へ、約6ポイント低下。

■ 献血ルームのイメージ

（献血ルームに対するイメージについて、4つの項目で質問）

Q10－1　ルームの雰囲気について

- 「明るい」が34．7%を占め、「暗い」の7．7%を大きく上回っている。ただし、全体的には「ふつう」の評価が51．7%を占める。
- 職業別でみると、「明るい」と評価するのは公務員（42．0%）で最も高く、高校生（29．3%）は他層よりも低い。
- 性別では、「明るい」と評価する割合は男性（29．9%）よりも女性（39．7%）が高い。
- 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概に比較できないが、「明るい」と評価する割合は42．1%→34．7%と低下している。低下が顕著なのは大学生・専門学校生（51．1%→37．8%）及び高校生（39．1%→29．3%）。

Q10－2　ルームの広さについて

- 「広い」の20．4%に対して、「狭い」が24．5%と、狭いイメージの方が若干上回っている。ただし、全体的には「ふつう」と評価する人が48．1%を占めている。
- 職業別でみると、「広い」と評価するのは公務員（26．6%）で最も高い。一方、自営業で「狭い」とする割合（32．1%）が他層より高く、「広い」（21．7%）を10ポイント上回っている。
- 性別では、男性で「狭い」のスコア（27．7%）が「広い」（17．6%）を10ポイント上回り、女性に比べて「狭い」が高い（女性は「広い」23．3%、「狭い」21．1%）。
- 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「広い」「狭い」とも概ね変動はない。

Q10－3　職員の対応について

- 「良い」がほぼ半数の47．2%を占めている。また、「ふつう」も44．0%で、職員に対する評価は概ね良好。「悪い」とする人は少ない（3．3%）。
- 職業別では、特に高校生で「良い」と評価する割合が最も高い（53．0%）。
- 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「良い」が37．8%→47．2%に上昇。「ふつう」が57．5%→44．0%に低下している。

Q10－4　記念品や軽い飲食物について

- 「良い」40．9%に対し、「悪い」は9．9%となっており、好意的な評価が大きく上回る。「ふつう」は44．4%。
- 性別では、女性の「良い」（44．3%）が男性の「良い」（37．6%）を上回る。
- 地域別では北海道で「良い」とする割合（49．0%）目立って高い。
- 17年度調査と比較すると、前回「わからない」の回答肢がなかったため、一概には比較できないが、全体では「良い」が36．7%→40．9%と若干上昇。一方で「ふつう」が51．5%→44．3%に減少。「悪い」は11．8%→9．9%と若干減少した。
- 地域別では、北海道、中国・四国で「良い」が10ポイント近く上昇。

■ 初めての献血について

Q12　初めて献血した年齢

- 「18～19歳」（33．4%）と「20～24歳」（32．3%）が拮抗。次いで「16～17歳」（28．6%）。10代での初回献血経験者が全体の6割強を占めている。
- 職業別では、当然のことながら高校生では「16～17歳」が87．3%を占め主流。大学生・専門学校生では「18～19歳」が40．4%で最も多い。一方、会社員、公務員では「16～17歳」が他層よりも低く（会社員23．0%、公務員22．2%）、「20～24歳」が最も多くなる（会社員37．2%、公務員38．6%）。
- 女性の初献血年齢が男性に比べて総じて若い。特に「16～17歳」では女性32．2%、男性25．2%と7ポイント上回っている。
- 地域別では、東北の「16～17歳」の割合（38．0%）が他地域よりやや高い。
- 17年度調査と比較すると、「16～17歳」が34．6%→28．6%と6ポイント減少している。一方で「18～19歳」（30．6%→33．4%）及び「20～24歳」（27．9%→32．3%）は若干の増加傾向。

Q13　初めて献血した場所

- 初めて献血した場所は、「献血ルーム」（32．8%）が最も多い。以下、「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」（21．2%）、「（学校・職場以外の）献血バス」（21．0%）が同程度、「高校」（18．0%）の順で続く。
- 職業別で見ると、高校生は「高校（での集団献血）」が38．1%と最も多い。それ以外は「献血ルーム」中心となっている。また、自営業、専業主婦は他層に比べ「（学校・職場以外の）献血バス」も比較的多い（自営業26．4%、専業主婦26．1%）。
一方、大学生・専門学校生は「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」（30．0%）と「献血ルーム」（32．4%）がほぼ同程度。
- 性別では、女性の「献血ルーム」利用率（40．9%）が男性（25．1%）を大きく上回っている。
- 地域別では、近畿で「（学校・職場以外の）献血バス」（29．0%）が他地域に比べてやや高くなっている。
- 17年度調査との比較では、「献血バス」の割合が大きく減少しているが、前回、「大学キャンパス又は専門学校・各種学校」（多くは献血バスによると思われる）の回答肢がなかったため、一概には比較できない。
- 高校生では、17年度調査と比べ、「高校（での集団献血）」を挙げる割合が16．1%→38．1%と大幅に増加し、「献血ルーム」を挙げる割合が48．3%→31．5%に減少している。ただ、17年度調査では、この年代の客体数が非常に少なかった（高校生は1．7%）ため、一概に比較できない。また、今回においても高校生は3．6%と構成要素として少ないことから、献血経験者全体では「高校（での集団献血）」は22．6%→18．0%に減少している（「高校」から「献血ルーム」へのシフトは、特に専業主婦と女性で顕著）。

Q14　初めての献血の種類

- 「200 mL 献血」が51．6%と過半数を占めている。「400 mL 献血」は28．9%、「成分献血」は5．7%、「覚えていない」が13．8%。
- 職業別でみると、高校生の69．6%が「200 mL 献血」。専業主婦も67．0%が「200 ml 献血」で中心となっている。一方、「400 mL 献血」は公務員で43．5%と最も高い。
- 性別では、男性は「200 ml 献血」（39．5%）と「400 mL 献血」（39．6%）が同程度。女性では「200 ml 献血」の割合（64．2%）が「400 mL 献血」（17．8%）を圧倒している。
- 17年度調査と比較すると、「200 ml 献血」が62．3%→51．6%と11ポイントの減少。「400 mL 献血」が18．9%→28．9%と10ポイントの増加。
- 高校生を除く各層で「200 ml 献血」が減少し、「400 mL 献血」が増加した。高校生はほぼ前回並みの結果。

Q15　初めての献血で400 mL 献血することへの不安意識　（新規質問）

- 6割弱（57．2%）の人は「特に不安は感じない」としている。一方で、「不安」と回答した人は26．4%だった。
- 職業別でみると、「特に不安は感じない」は公務員で多い（67．6%）。一方、専業主婦では、「特に不安は感じない」（43．3%）と「不安」（39．1%）が拮抗している。
  なお、高校生でも56．4%は「特に不安は感じない」としているが、他層に比べ「わからない」が多い（全体16．4%、高校生23．8%）。
- 性別では、女性の方が「不安」意識が高い（男性19．9%、女性33．2%）。

■ 献血回数について

Q16－1　過去1年間の200 ml 献血回数

- 献血経験者のうち、過去1年間で200 ml 献血をした経験のある人は46．1%。
- 献血した回数では、「1回」が27．4%で最も多く、「2回」が10．8%、「3回」が3．7%、「4回以上」が4．3%で続く。
- 2回以上の複数回献血者は全体の2割弱（18．8%）となっている。
- 職業別でみると、過去1年間の200 ml 献血経験者の割合が最も高いのは高校生で82．3%と圧倒的。その大半（75%）は「1回」である。大学生・専門学校生がこれに続き（50．2%）、そのうち63%は「1回」である。一方、公務員の200 ml 献血経験者は33．8%で他層に比べ低い。
- 性別では、女性の200 ml 献血経験者（52．2%）が男性（40．3%）を上回る。
- 地域別では、九州・沖縄の200 ml 献血経験者（35．7%）が他地域より低い。
- 17年度調査と比較すると、全体では200 ml 献血経験率が40．5%→46．1%とやや増加している。ただ、高校生については前回に比べて約9ポイントの減となっている（90．8%→82．3%）。

Q16－2　過去1年間の400 mL 献血回数

- 献血経験者のうち、過去1年間で400 mL 献血をした経験のある人は37．7%。
- 献血した回数では、「1回」が22．1%で最も多く、「2回」が8．3%、「3回以上」が7．4%で続く。
- 2回以上の複数回献血者は全体の15．7%であり、200 ml 献血（18．8%）に比べ若干低い。
- 職業別でみると、200 ml 献血が圧倒的に多い高校生では400 mL 献血経験者の割合は14．9%と低く、専業主婦も17．4%と他層に比べ低い。一方、大学生・専門学校生（44．1%）と公務員（45．9%）は高く、特に公務員では2回以上の複数回献血者が25．2%（2回：9．7%、3回以上：15．5%）と高い。

・　性別では、男性の400 mL 献血経験者（47．9%）が女性（27．0%）を上回る。
・　地域別では、九州・沖縄の400 mL 献血経験者（43．7%）が他地域より高い。
・　17年度調査と比較すると、全体では400 mL 献血経験率が26．4%→37．7%へと11ポイント増加。「3回以上」も3．4%→7．4%に増加している。
・　職業別では、特に会社員と公務員で「3回以上」が増えているのが目立つ（会社員:3．7%→9．0%、公務員:5．9%→15．5%）。

Q16－3　過去1年間の成分献血回数

・　献血経験者のうち、過去1年間で成分献血をした経験のある人は22．1%。
・　献血した回数では、「1回」が11．0%で最も多い。
・　2回以上の複数回献血者は全体の11．1%であり、「1回」と同程度。
・　職業別でみると、採血基準（18歳～）によりそもそも対象者が少ない高校生の成分献血経験率が6．1%と極端に少なく、専業主婦も16．3%と他層に比べ低い。
一方、公務員の成分献血経験率は29．0%と他層に比べて高く、4回以上の複数回献血者も10．6%と高い。
・　性別による差はほとんどみられない。
・　地域別では、他地域に比べ北海道の成分献血経験率が13．8%と特に低い。
・　17年度調査と比較すると、全体では成分献血経験率が18．8%→22．1%へと若干の増加。回数では「1回」が前回に比べ増加（7．7%→11．1%）している。
・　職業別では、特に会社員と公務員で「3回以上」が増えているのが目立つ（会社員:3．7%→9．0%、公務員:5．9%→15．5%）。

Q17　今までの合計献血回数

・　今までの通算献血回数をみると、「1回」が最も多く、33．7%と3人に1人の割合。残りの66．3%の人が複数回献血者であり、この中では「3～5回」（26．2%）が最も多く、次いで「2回」（18．7%）、「6～10回」（10．8%）、「11～20回」（6．2%）、「21～30回」（2．0%）、「それ以上」（2．4%）と続く。
全体では“2回以下”と“3回以上”がほぼ半数ずつとなっている。
・　職業別にみると、高校生は（当然のことながら）献血回数が他層に比べて低く、「1回」が63．0%を占める。一方、会社員、公務員及び自営業で“3回以上”の割合がやや高い（会社員:54．0%、公務員:59．4%、自営業:55．7%、全体47．6%）
・　17年度調査と比較すると、全体では複数回献血者が71．8%→66．3%へと減少している（各層共通）。

★関連質問とのクロス集計　①「初めて献血した場所」（Q13）

初めて献血した場所	今までの合計献血回数						
	1回	2回	3-5 回	6-10 回	11-20 回	21-30 回	それ以上
高　校	30.6%	21.5%	27.6%	10.4%	6.8%	1.6%	1.6%
大学ｷｬﾝﾊﾟｽ又は専門学校･各種学校	36.1%	20.9%	28.6%	7.9%	3.9%	1.4%	1.2%
職　場	36.7%	22.5%	27.9%	9.2%	1.4%	0.4%	1.3%

・　「初めて献血した場所」ごとに通算献血回数をみると、大学や職場に比べて「高校で初めて献血した」層ほど、通算献血回数が多い傾向がみられる（6回以上で大きな差が現れる）。
・　より若いうちに献血を経験すると、その後の献血回数が増える傾向が強いとも考えられる。

★関連質問とのクロス集計 ②「家族の献血の有無」（Q20：後述）

家族が献血している姿を見たことがあるか	今までの合計献血回数						
	1回	2回	3-5 回	6-10 回	11-20 回	21-30 回	それ以上
ある	24.2%	16.0%	28.4%	13.7%	10.3%	3.5%	4.0%
ない	35.9%	19.1%	25.8%	10.3%	5.3%	1.7%	1.9%
覚えていない	40.2%	22.8%	23.6%	7.1%	2.6%	1.3%	2.4%

・ 「家族が献血している姿を見たことがあるかどうか」と通算献血回数との関係をみると、「見たことがある」と回答した層ほど、通算献血回数が多いことが明らか（3回以上で差が現れ、献血回数が多いほど差が拡がる傾向）。
・ 「家族の献血現場を見たことがあるかどうか」とその後の献血行動との相関は高いことがうかがえる。

■ 献血するきっかけ

Q18　初めての献血のきっかけ（大きい順に3つ選択）

○ 1位に挙がったきっかけ

・ 最も多かったのは「自分の血液が役に立って欲しいから」が37．5%で突出傾向。以下、「なんとなく」（10．7%）、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」（9．1%）、「家族や友人などに勧められたから」（7．2%）、「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」（6．6%）などが続く。
・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、高校生（44．8%）、自営業（42．5%）、専業主婦（42．9%）でその意識が高い。
・ 平成17年度調査と比較すると、回答肢が多少入れ替わったため一概には比較できないが、「自分の血液が役に立って欲しいから」が最も大きなきっかけであることに変わりはなく、そのスコアは33．7%→37．5%と増加している。また、「なんとなく」は14．4%→10．7%に減少しており、特に高校生（23．0%→11．6%）、自営業（13．3%→7．5%）、専業主婦（12．7%→7．5%）で顕著に減少。

○ 1位～3位累計

・ 1位～3位の累計でみても、「自分の血液が役に立って欲しいから」が圧倒的に高く、61．0%となっている。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」（39．1%）、「お菓子やジュースがもらえるから」（31．2%）、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」（29．5%）、「なんとなく」（29．1%）の順。
・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、高校生（62．4%）、自営業（65．1%）、専業主婦（69．4%）で顕著。
・ 新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」（15回答肢中11位：全体7．7%）は高校生（14．4%）、自営業（15．1%）で目立って高かった。
・ 17年度調査と比較すると、回答肢が多少入れ替わったため一概には比較できないが、「自分の血液が役に立って欲しいから」が最も大きなきっかけであることに変わりはなく、そのスコアは58．3%→61．0%と増加している。
・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、高校生（49．4%→62．4%）、自営業（55．2%→65．1%）、専業主婦（61．3%→69．4%）が目立って増加。
・ 他に、「将来自分や家族等が輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」（10．8%→16．4%）、「覚えていない」（4．4%→12．1%）が増加し、「なんとなく」（34．5%→29．1%）が減少した（高校生の減少が顕著：43．7%→27．6%）。

Q19　現在献血するきっかけ（大きい順に3つ選択）

○ 1位に挙がったきっかけ

・ 初めての献血のきっかけと同様、「自分の血液が役に立って欲しいから」が45．3%と圧倒的に高い。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」（11．7%）、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」（10．7%）と続く。

・ 17年度調査と比較すると、全体ではあまり変化はなく、「自分の血液が役に立って欲しいから」（前回43．9%→今回45．3%）が他を大きくリードしているという傾向も変わらない。

・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、初めての献血のきっかけと同様に、高校生（37．9%→48．6%）、自営業（46．9%→53．8%）、専業主婦（46．6%→54．7%）の増加が目立つ。

なお、高校生で「なんとなく」の減少が目立つ（23．0%→13．8%）。

・ 地域別では、北海道で「自分の血液が役に立って欲しいから」の減少が特に顕著（50．0%→37．1%）。

○ 1位～3位累計

・ 1位～3位の累計でみると、「自分の血液が役に立って欲しいから」が70．4%と圧倒的に高く、最大要因となっている。以下、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」（53．2%）、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」（40．3%）、「お菓子やジュースがもらえるから」（36．8%）、「なんとなく」（32．5%）の順で続く。

・ 職業別にみると、各層とも「自分の血液が役に立って欲しいから」が主要なきっかけとなっているが、特に、自営業（75．5%）、専業主婦（76．1%）で高い。

また、高校生では「お菓子やジュースがもらえるから」（44．8%）が他層に比べてやや高い。

・ 新規回答肢の「献血は愛に根ざしたものだから」（11回答肢中8位：全体9．6%）は高校生（16．6%）、自営業（17．0%）で目立って高かった。

・ 17年度調査と比較すると、全体では「輸血用の血液が不足していると聞いたから」（47．6%→53．2%）「将来自分や家族等が輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」（15．9%→27．3%）がやや増加した（各層共通）。

・ 職業別では、「自分の血液が役に立って欲しいから」は、高校生（54．0%→71．8%）、自営業（65．7%→75．5%）で目立って増加。一方、会社員、公務員では「なんとなく」がやや増加している（会社員28．5%→34．2%、公務員22．2%→29．0%）。

Q22　高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか

・ 高校での集団献血がその後の献血の動機付けに有効かどうかについて、「非常に有効」と評価した人が36．4%を占める。また、「どちらかといえば有効」（48．2%）と合わせたポジティブ評価は84．6%にのぼる。

・ 職業別にみると、ポジティブ評価（有効計）は専業主婦が92．6%と最も高い。
一方、自営業は78．3%と他層に比べやや低いが、「非常に有効」に限ると専業主婦とともに最も高い（ともに41．5%）。

・ 17年度調査と比較すると、全体ではポジティブ評価（有効計）が65．9%→84．6%と大幅に上昇した（「非常に有効」：20．4%→36．4%）。また、各層ともにポジティブ評価が上昇している。

・ 高校での献血は、その後の献血への動機付けになるとの意識は高くなっていることがうかがえる。

★関連質問とのクロス集計「初めて献血した場所」（Q13）

（初めて献血した場所）	非常に有効	どちらかといえば有効	あまり関係ない	全く関係ない	有効（計）	関係ない（計）
高　校	44.9%	43.7%	8.9%	2.5%	88.6%	11.4%
大学ｷｬﾝﾊﾟｽ又は専門学校等	35.8%	49.8%	11.2%	3.2%	85.6%	14.4%
職　場	41.7%	42.5%	12.9%	2.9%	84.2%	15.8%
献血バス（上記以外）	32.4%	52.4%	11.5%	3.7%	84.8%	15.2%
献血ルーム（血液センター）	35.0%	47.5%	13.7%	3.8%	82.6%	17.4%
覚えていない	20.6%	50.5%	12.1%	16.8%	71.0%	29.0%
計	36.4%	48.2%	11.7%	3.7%	84.6%	15.4%

・「高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか」について、「初めて献血した場所」ごとに関連づけて集計をしたところ、高校や大学などで初めて献血したという層ほど、“より有効”とする傾向がみられた。
・特に、高校で初めて献血した層で「非常に有効」が高い割合。

■ 家族・友人の献血状況

Q20　家族が献血している姿を見たことがあるか　（新規質問）

・家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は21．8%。
　→ 献血未経験者（10．6%）と比べると約2倍（各層ほぼ共通）。
・職業別にみると、専業主婦で「ある」が32．4%と他層に比べ高い。
・性別では、「ある」は男性（16．8%）に比べ女性（27．0%）が10ポイント上回る。

Q21　友人に献血をしている人がいるか　（新規質問）

・献血経験者の6割（59．7%）が、友達に献血をしている人が「いる。」と回答。
　→ 献血未経験者（33．4%）と比べると、ほぼ2倍。特に高校生で大きな差が生じている（高校生・献血未経験者：12．1%、同・献血経験者：56．9%）。
・職業別にみると、「いる」の割合が特に高いのは大学生・専門学校生（66．3%）と公務員（69．6%）。一方、自営業（47．2%）、専業主婦（54．5%）ではやや低い。
・性別では、「いる」の割合は男性（56．0%）に比べて女性（63．5%）が約8ポイント上回っている。
・地域別では、東北で「いる」が69．9%と他地域よりも多い。

■ 献血に関する資料評価
（献血に関する資料の閲読後に、献血に関する意識の変化を質問。）

Q23－1　献血の必要性への理解が良くなったか

・「はい」は32．7%で、「どちらかというとはい」（59．4%）まで含めると92．1%にのぼる。否定的な意見は7．9%にとどまった。
・職業別では、肯定的な評価は特に専業主婦で高い（95．3%）。「はい」（38．2%）で他層との差がやや大きい。
・17年度調査と比較すると、全体では肯定的な意見が87．9%→92．1%へと高くなっている。

Q23－2　献血に協力する意識の高まり

・閲読後に「献血に協力する気持ちは高まりましたか」との問いに「はい」と回答した人は31．3%。「どちらかというとはい」（56．6%）を含めたポジティブ評価ではほぼ

9割（87．9%）の人に協力意識の高まりがみられた。

・　職業別にみると、専業主婦でポジティブ評価が特に高い（93．8%）。なお、「はい」に限ると高校生（36．5%）も専業主婦（37．1%）と遜色なく他層より高い。

・　17年度調査と比較すると、全体のポジティブ評価は85．3%→87．9%と微増。「はい」については、各層共通で相当に増加（全体：19．3%→31．3%）。

Q23－3　献血回数を増やすか

・　「はい」は28．5%。「どちらかというとはい」（54．4%）を含めたポジティブな意向は83．0%。資料閲読後にかなりの人が回数の増加を喚起されている。

・　職業別でポジティブ評価が最も高いのは専業主婦（90．2%）。なお、「はい」に限ると、高校生（35．4%）は専業主婦をも凌いでおり、両層が他層よりも高い。

・　平成17年度調査との比較では、全体のポジティブ評価は82．5%→83．0%とほぼ変わらず。

■　献血についての要望・知りたいこと

Q11　献血について何か要望又は知りたいことがあるか

・　最も多かったのは、「献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい」で40．5%。以下、「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」（38．5%）、「献血する場所、日時などについて十分知らせてほしい」（37．5%）、「献血したときの処遇品（記念品）をもっと良くしてほしい」（35．4%）などが僅差で続いており、突出したものはないものの要望は多岐にわたっている。

・　職業別では、専業主婦の「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」（専業主婦：42．0%、全体：29．2%）が他層に比べて目立って高い。

・　性別では、総じて男性より女性の要望が目立つ。特に「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」（男性33．8%、女性43．4%）、「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」（男性25．4%、女性33．1%）でその差が大きい。

・　17年度調査と比較すると、全体的に大きな動きはみられないが、「献血したときの処遇品（記念品）をもっと良くしてほしい」がやや減少（42．0%→35．4%）。

　「献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい」は高校生で増加（28．7%→35．4%）、「職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい」は自営業（21．7%→30．2%）、専業主婦（31．0%→38．2%）で増加、「学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい」は会社員（22．3%→28．1%）及び専業主婦（30．6%→42．0）で増加した。

●自由記載欄の主な回答

【献血未経験者】

Q16－1　献血するきっかけとなり得る要因

（「献血したときの処遇品（記念品）がよくなった」の具体例）

- 図書券、商品券、クオカードなどの金券
- お金
- 食べ物、飲み物　　他

Q16－2　献血するきっかけとなり得る要因

（「献血ルームのサービスが良くなった」の具体例）

- 待ち時間のフリードリンク
- 待ち時間の短縮
- リラックスできる環境
- マッサージ　　他

Q16－3　「献血は絶対しない」を選んだ理由

- 貧血（または貧血気味）
- 血をとられるのがいやだ
- 血を見るのがいやだ
- 痛い、針を刺すのがいやだ、注射が苦手
- 薬を飲んでいる
- 時間がない、面倒　　他

Q20　若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいか

- タレント、アイドルをキャンペーンに起用する
- テレビCM
- インターネットや携帯電話で広告
- 処遇品、記念品の充実や報酬
- 献血できる場所を増やす
- 献血の重要性をわかりやすく伝える
- 学校での献血、献血バスを増やす
- 学校での教育
- 痛くない針などがあれば　　他

【献血経験者】

Q15　初めての献血で400 mL 献血をすることが不安な理由

- 貧血が心配、
- 倒れそう
- 量が多いと感じる
- 最初は少ない方がよい
- 以前に体調が悪くなった
- 不安　　他

Q24　若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいか

- 献血できる機会を増やす
- 学校での献血を増やす
- 高校での集団献血が効果的
- 献血をする場所・時間を教える
- インターネットでの広告
- 芸能人や若者に影響力のある人を起用したキャンペーン
- 処遇品、記念品の充実
- もっと献血の重要性をアピールする
- 若者の集まる場所でのPR活動
- 学校での教育　　他

年齢別実献血者・人口分布グラフ及び年齢・施設別延べ献血者グラフ
【６都道府県抜粋】

１．　対象データ

● 抽出都道府県

大都市として「東京都」、「大阪府」。政令指定都市を有する「北海道」。大都市を有しない地方として「山形県」、「高知県」、「宮崎県」を抽出。

● 人口分布データ

平成１７年国勢調査の結果を用い、２年分スライドして反映。

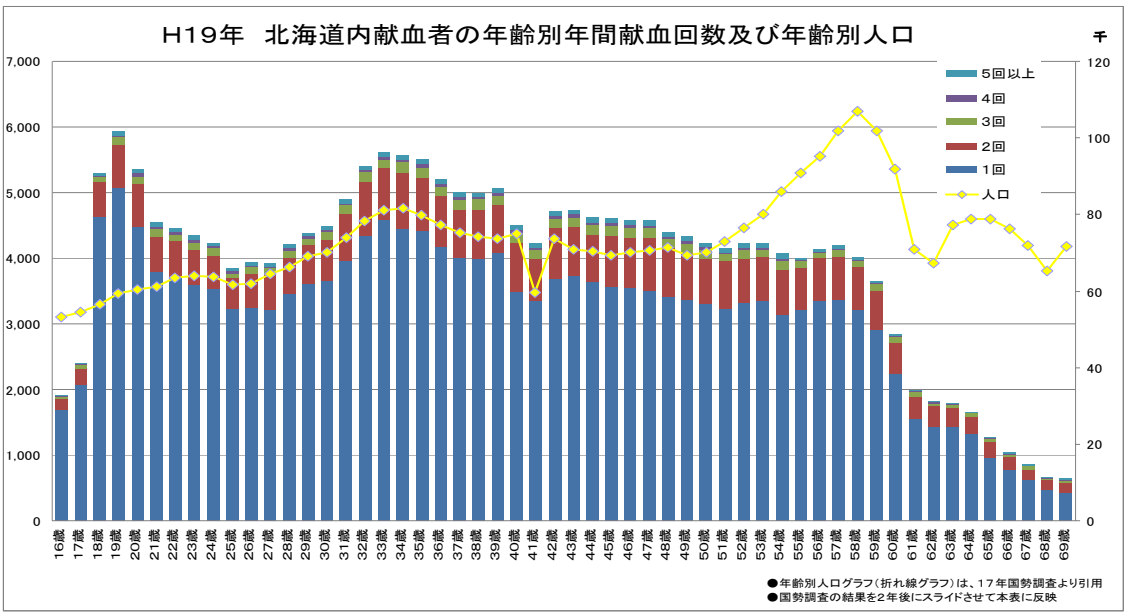
● 献血者数

平成１９年の献血者実数を献血回数別に集計。ただし、年齢・施設別の献血者数は延べ人数で集計。

２．　全体としての傾向

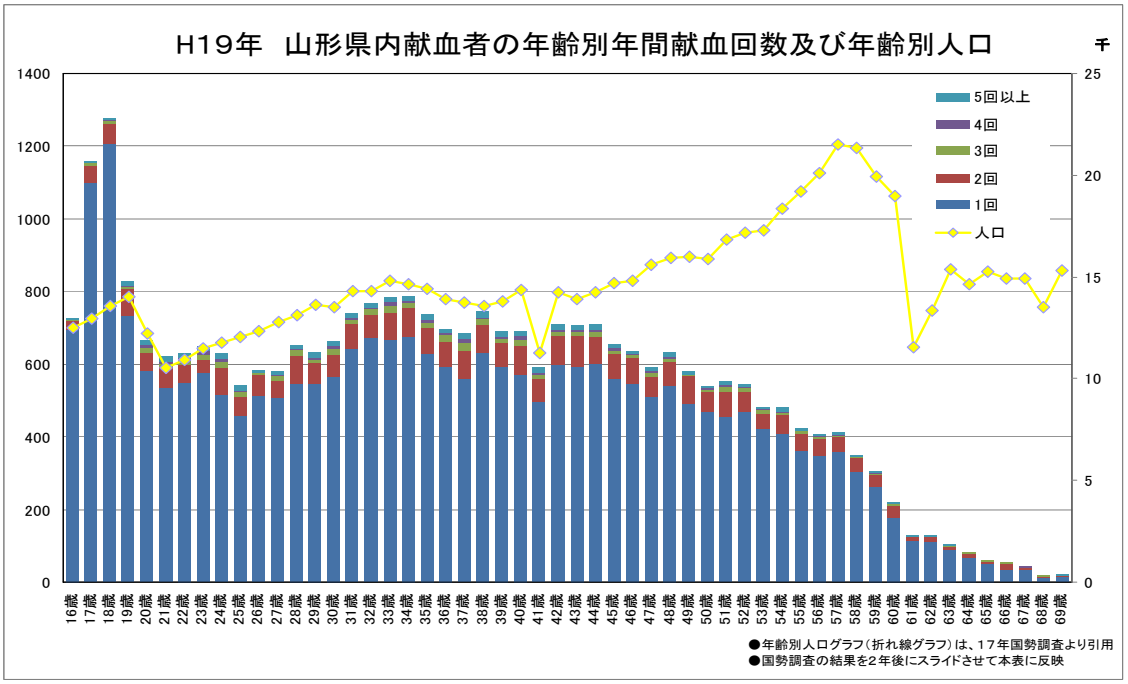
● １６～１７歳の実献血者数は概ねどの地域でも少ない。
● 大阪府以外では１８～１９歳に大きなピークがみられる。
● どの地域も２０代の実献血者数がその前後の年代に比べ少なく、１８～１９歳のピーク後の２０代の減少がみられる。
● どの地域においても３０代前半の実献血者数が多い。
● 東京都では４０歳以上の実献血者数が少ない。
● 年間複数回献血者の比率は、各年齢でばらつきはあるものの、地域間で大きな差はない。
● 東京都以外では、全般に移動採血車による献血も相当ある。

年齢別実献血者・人口分布グラフ【６都道府県抜粋】



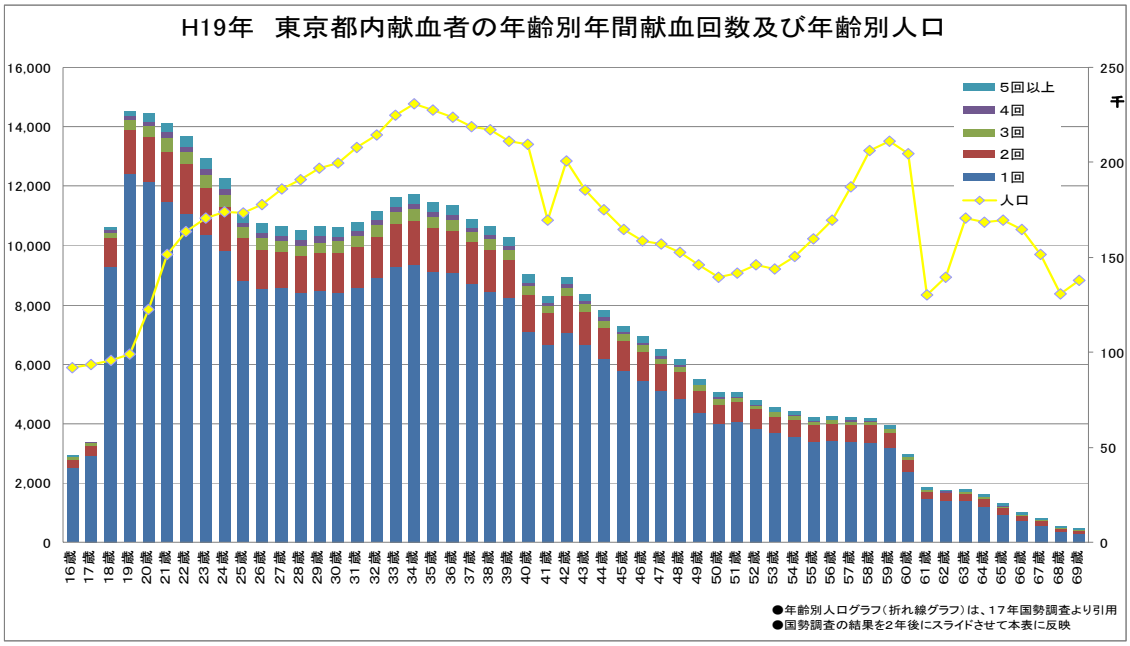
● 実献血者数分布と人口分布の比較

１８～２０歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。５０～５８歳の人口は上昇しているが、献血者の分布はほぼ平行。



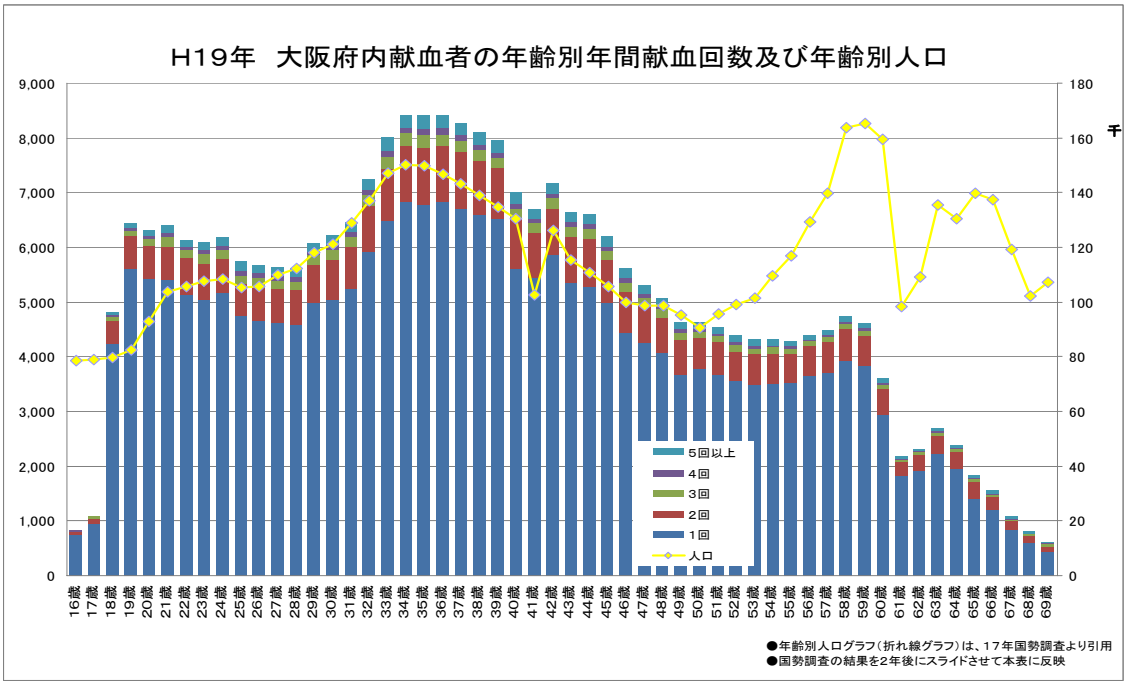
● 実献血者数分布と人口分布の比較

１７、１８歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。４３～５７歳までの人口分布は緩やかに増加しているが、献血者分布は緩やかに減少。



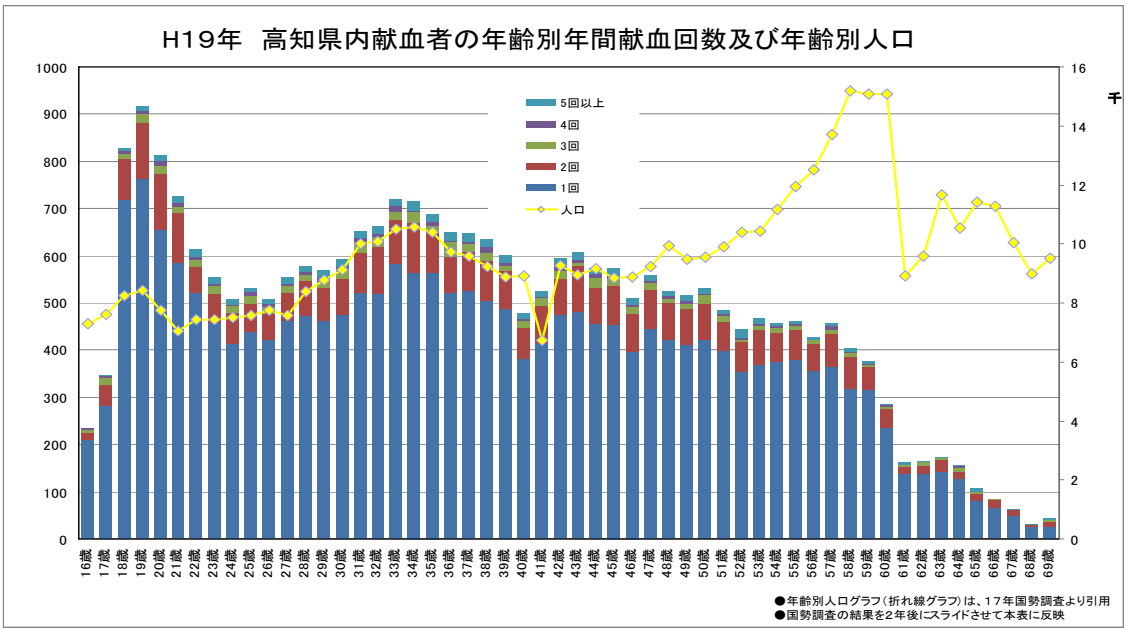
● 実献血者数分布と人口分布の比較

３０代前半と５９歳前後に人口分布のピークがある。献血者分布は１９歳をピークに減少し、３０代前半に緩やかな第二のピークが見られてからほぼ減少し続ける。



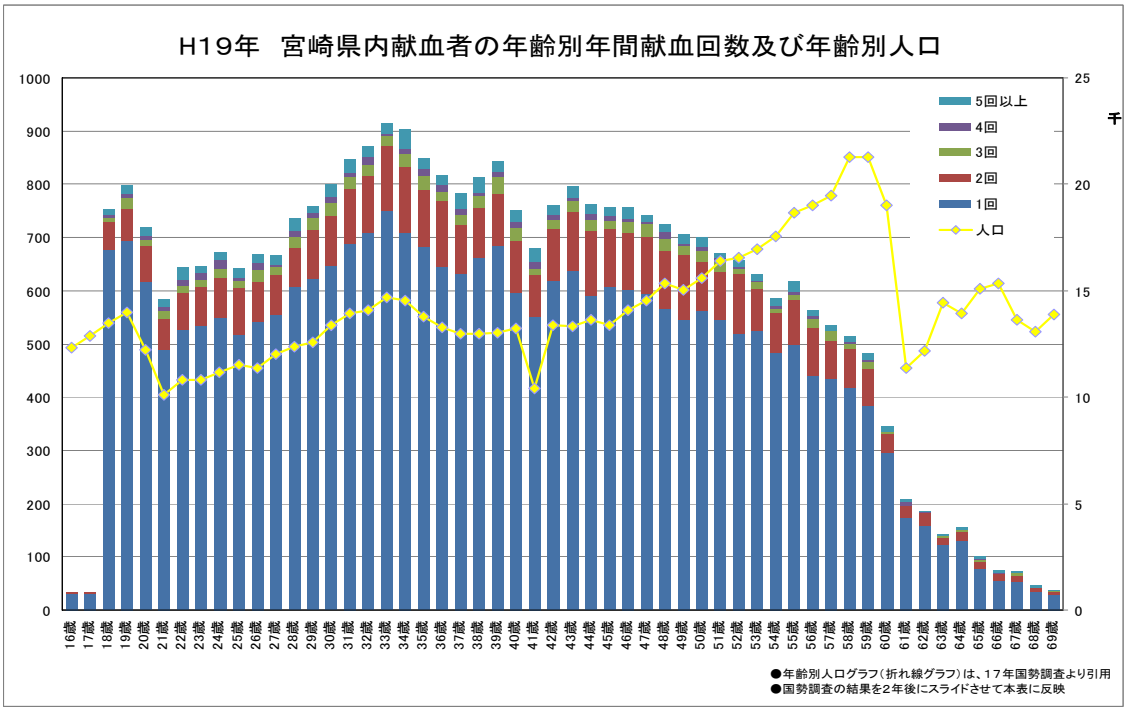
● 実献血者数分布と人口分布の比較

１８～２０歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。５０～５９歳の人口分布は上昇しているが、献血者分布は５０～５５歳まで緩やかに減少後、５６～５８歳までは緩やかに上昇している。



● 実献血者数分布と人口分布の比較

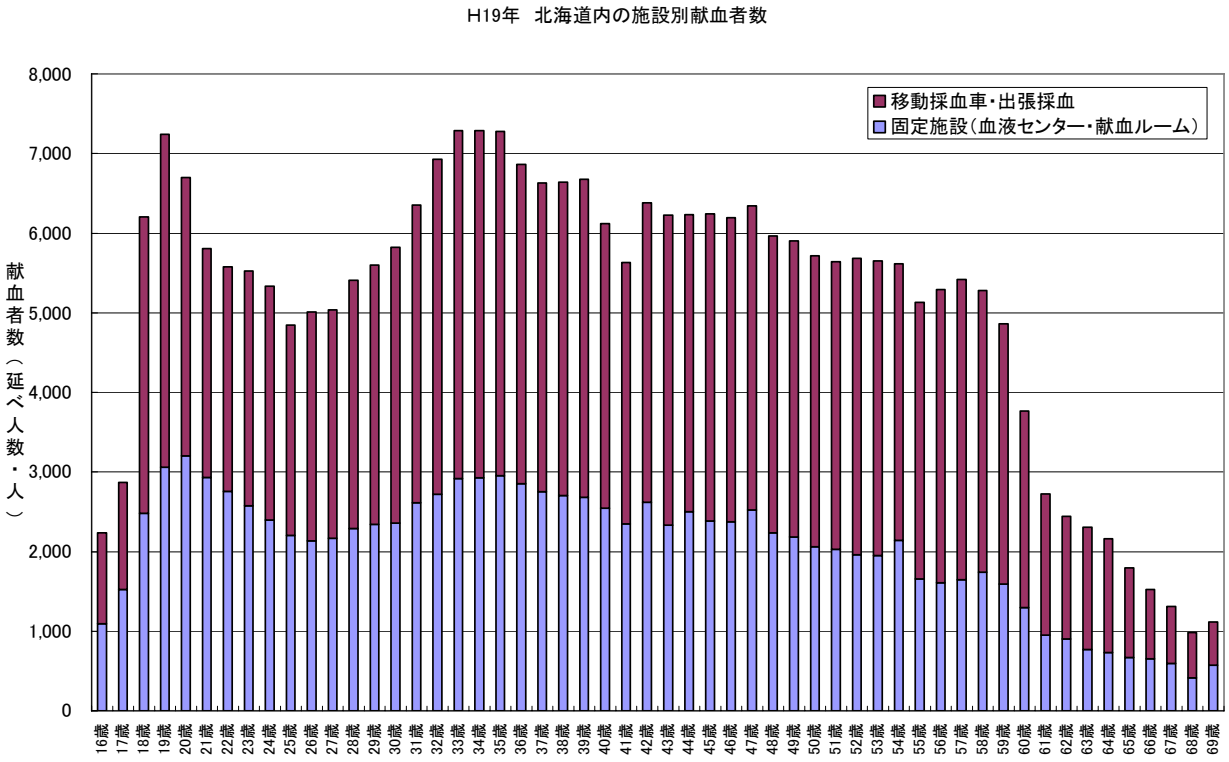
１８、１９歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。４９～５７歳の人口分布はほぼ上昇しているが献血者分布は減少している。



● 実献血者数分布と人口分布の比較

１８、１９歳の人口分布と比較すると献血者分布が多い。５０～５７歳の人口は上昇しているが、献血者の分布ほぼ減少している。

年齢・施設別延べ献血者グラフ【６都道府県抜粋】



● 延べ総献血者数　　２７６，８２３人

　移動採血車・出張採血　　１６６，１５７人（６０．０%）

　固定施設（血液センター・献血ルーム）１１０，６４４人（４０．０%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

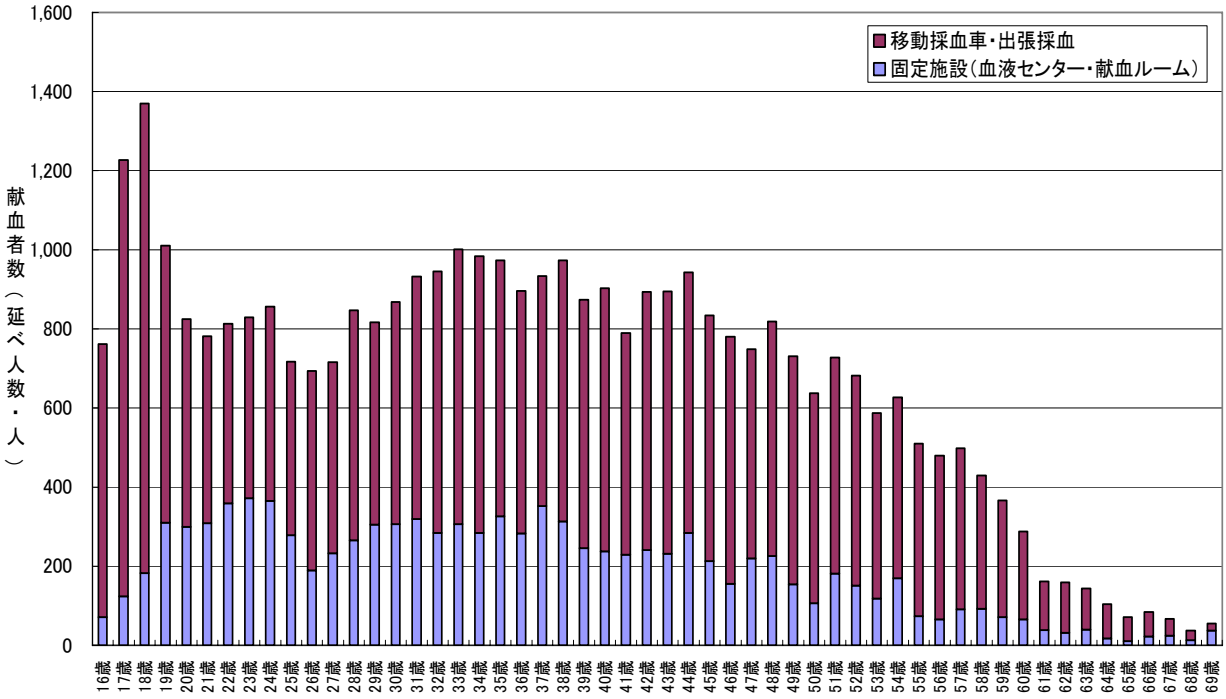
　１６～２３歳は１８、１９歳を除き固定施設の割合がおおむね５０%前後だが、１８、１９歳と２０歳代後半～６８歳は移動採血車・出張採血の割合が６０～７０%。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

　血液センター：５ヵ所

　献血ルーム　：６ヵ所

H19年　山形県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数　３６，７０５人

移動採血車・出張採血　　２６，３９５人（７１．９%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）１０，２９５人（２８．１%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

２０歳代前半を除き、移動採血車・出張採血の割合が６５～９０%。

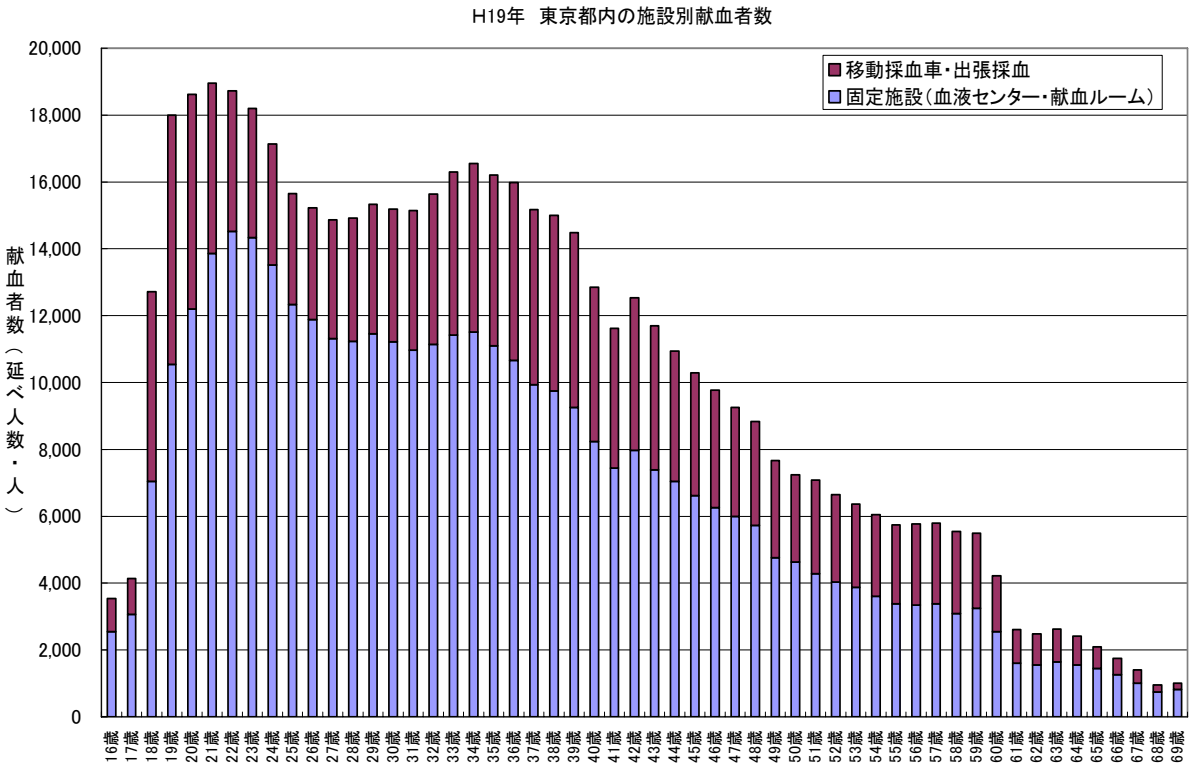
中でも１６～１８歳と５０歳代後半～６０歳代前半に移動採血車・出張採血の割合の高い年齢層（８０～９０%）が見られる。

２０～２５歳は、他の年齢に比べて移動採血車・出張採血の割合が５５～６３%とやや低くなっている。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

血液センター：１ヵ所

献血ルーム　：１ヵ所



● 延べ献血者数　５５０，５２５人

移動採血車・出張採血　　１７５，１９８人（３１．８%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）３７５，２９１人（６８．２%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

全年齢を通して固定施設の割合が５５%を超えており、特に１６、１７歳、２０歳代前半～３０歳代前半、６０歳代後半は固定施設の割合が７０%超と高い。

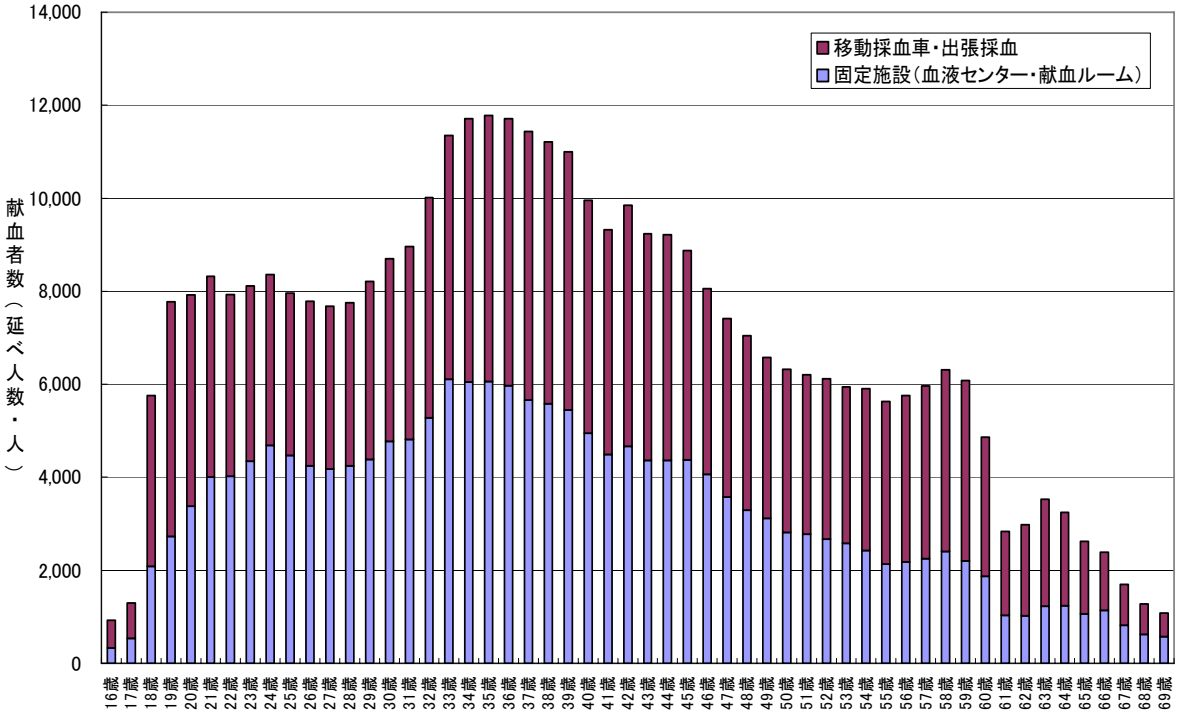
一方、１８、１９歳と５０歳代後半は固定施設の割合が５５～５９%とやや低い。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

血液センター：２ヵ所

献血ルーム　：１２ヵ所

H19年　大阪府内の施設別献血者数



● 延べ献血者数　３７５，９７２人

移動採血車・出張採血　　１９６，２５９人（５２．２%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）１７９，６８８人（４７．８%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

２０歳代～３０歳代前半と６９歳は固定施設の割合が５０～５６%。

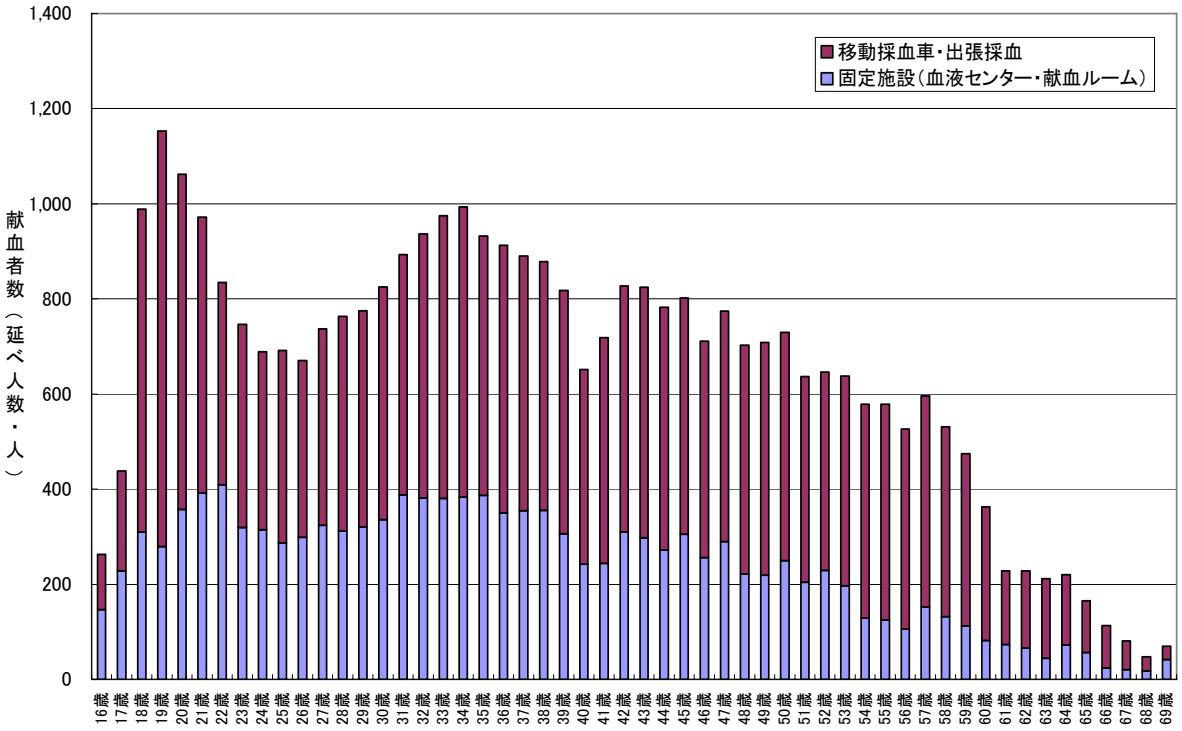
一方、１６～１９歳、５０歳代後半～６０歳代前半は、移動採血車・出張採血の割合が５９～６５%とやや高い。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

血液センター：３ヵ所

献血ルーム　：９ヵ所

H19年　高知県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数　３５，０２１人

移動採血車・出張採血　　２２，２８７人（６３．７%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）１２，７１５人（３６．３%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

１６、１７、６９歳で固定施設の割合が５２～６０%であることを除き、移動採血車・出張採血の割合が高い（おおむね６０～７０%代後半）。

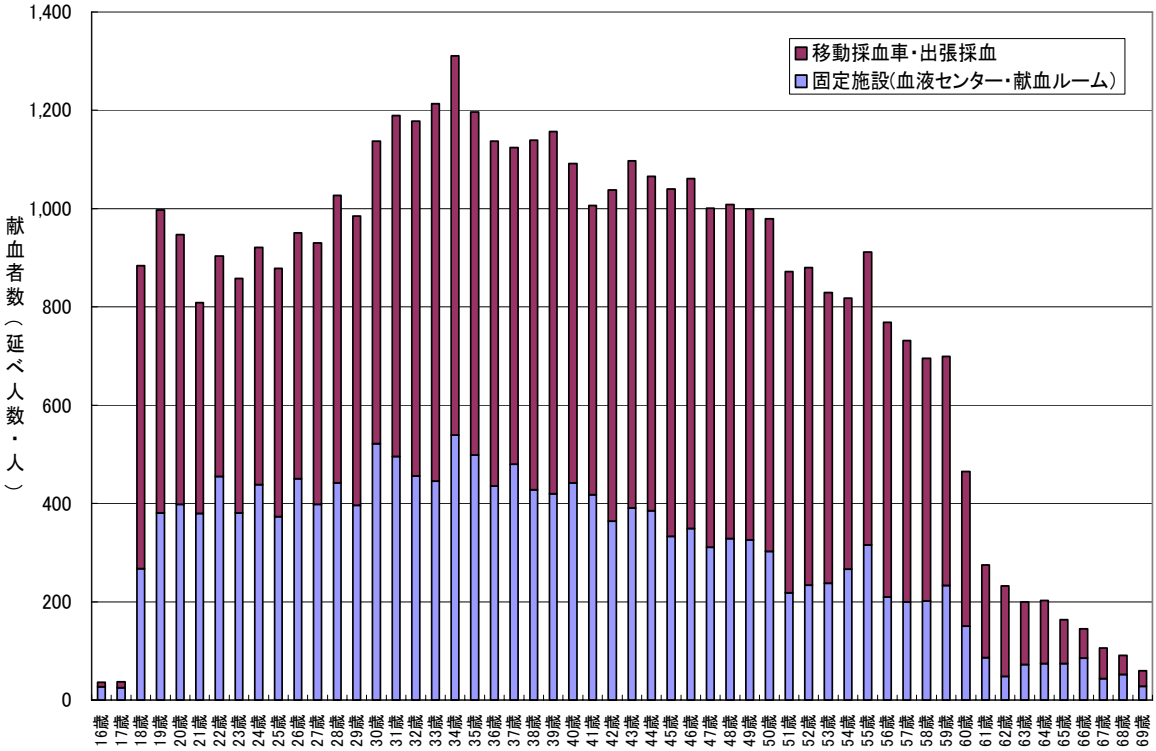
１９歳と５０歳代後半～６０歳代後半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層（７４～７９%）が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

血液センター：１ヵ所

献血ルーム　：１ヵ所

H19年　宮崎県内の施設別献血者数



● 延べ献血者数　４３，４９７人

移動採血車・出張採血　　２７，１６４人（６２．５%）

固定施設（血液センター・献血ルーム）１６，３１２人（３７．５%）

● 年齢別に見る施設別献血者数

１６歳、１７歳で固定施設の割合が７５．０%、６７．６%と高いことを除き、特に５０歳代から６０歳代前半にかけて、移動採血車・出張採血の割合が高い年齢層（おおむね６０～７０%代後半）が見られる。

● 血液センター、献血ルーム数（平成２０年４月１日現在）

血液センター：１ヵ所

献血ルーム　：１ヵ所

参考資料 1

わが国の採血基準

平成20年10月現在（平成11年最終改正）

項目＼採血の種類	全血採血		成分採血	
	200mL全血	400mL全血	血漿	血小板
1回採血量	200mL	400mL	300mL～600mL （体重別）	400mL以下
年齢	注）16歳～69歳	注）18歳～69歳	注）18歳～69歳	18歳～54歳
体重	男性45kg以上 女性40kg以上	男女とも 50kg以上	男性45kg以上 女性40kg以上	
最高血圧	90mmHg以上			
血液比重等	血液比重1．052以上 又は血色素量 12g/dL以上	血液比重1．053以上 又は血色素量 12．5g/dL以上	血液比重1．052以上 又は血色素量 12g/dL以上 （赤血球指数が標準域にある女性は11．5g/dL以上）	血液比重1．052以上 又は血色素量12g/dL以上
血小板数	―	―	―	15万／μL以上 60万／μL以上
年間採血回数	男性6回以内 女性4回以内	男性3回以内 女性2回以内	血小板成分採血1回を2回分に換算して血漿成分採血と合計で24回以内	
年間総採血量	200mL全血と400mL全血を合わせて 男性　1，200mL以内 女性　　800mL以内		―	―
共通事項	次の者からは採血しない ①妊娠してると認められる者、又は過去6ヶ月以内に妊娠していたと認められる者 ②採血により悪化する恐れのある循環器系疾患、血液疾患その他の疾患にかかっていると認められる者 ③有熱者その他健康状態が不良であると認められる者			

注）65歳から69歳までの方は、60歳から64歳までの間に献血の経験がある方に限られる。

（採血の間隔）

前回の採血＼今回の採血	全血採血		成分採血	
	200mL全血	400mL全血	血漿	注）血小板
200mL全血	男女とも4週間後の同じ曜日から			
400mL全血	男性は12週間後、女性は16週間後の同じ曜日から		男女とも8週間後の同じ曜日から	
血漿成分採血	男女とも2週間後の同じ曜日から			
血小板成分採血				

注）血漿を含まない場合には、1週間後に血小板成分採血が可能。ただし、4週間に4回実施した場合には次回までに4週間以上あける。

（平成20年度版血液事業報告より抜粋）

参考資料 2

1. 全血採血基準

	年　齢	下限	上限	1回の採血量	体重（下限）	ヘモグロビン量（下限）	採血間隔	年間採血回数	年間総採血量
EU	18歳～65歳	国の法律によっては17歳も考慮	60歳以上の初回者（施設の医師の判断に任せる） 65歳を超えても責任医師の許可により継続できる	500mL以内 *1）	50Kg	男性：13.5g/dL 女性：12.5g/dL	最短　8週間	男性6回 女性4回	3L
				450 mL±10% 血液量の13%を超えない*2）		男性：13.5g/dLまたはHt40% 女性：12.5g/dLまたはHt38%	推奨　2か月	推奨 男性4回 女性3回	
英国	17歳～65歳	17歳は未成年なので同意書が必要 *	60歳以上の初回者（施設の医師の判断に任せる） 65歳を超えても毎年医師の許可があれば延長できる）	470mL		男性：13.5g/dL（1.055） 女性：12.5g/dL（1.053）	最短　12週 推奨　男性12週 女性：16週	3回	
フランス	18歳～65歳		初回者は60歳まで	450mL		男性：13.0g/dL 女性：12.0g/dL	8週間	男性5回 女性3回	
米国	17歳（16歳）～上限なし	16歳の受け入れは各州法による。現在50州のうち27州が受け入れ（2008年9月時点）ただし供血には保護者の同意が必要	なし	500mL以内（検体等で538ml） 体重当たり10.5mL/Kgを超えない	一応50 Kg以上（それ以下でも可）	12.5g/dLまたはHt38%	8週間 （医師が認めれば更に短縮可能）		すべての採血種類を合計して、体重50～80kgの供血者では12Lまで　体重80kgを超える供血者では14,4Lまで
台湾	17歳～65歳	17歳未満は保護者の同意があれば可能	65歳以上は医師の同意があれば延長できる	500mL	60kg	男性：13.0g/dL 女性：12.0g/dL	3か月		男性：1.5L 女性：1L
				250mL	男性：50kg 女性：45kg		2か月		
日本	400mL：18歳～69歳		65歳以上は60歳～64歳の経験者	400mL	50Kg	12.5g/dL	男性：12週 女性：16週	男性：3回 女性：2回	男性：1.2L 女性：0.8L
	200mL：16歳～69歳			200mL	男性45Kg 女性40Kg	12.0g/dL	4週間	男性：6回 女性：4回	

＊採血適否判定者により供血プロセスを理解する知識があると認められ、インフォームドコンセントを提出した場合、 あるいは保護者の書面による同意がある場合：血液の安全性および品質に関する規則2005

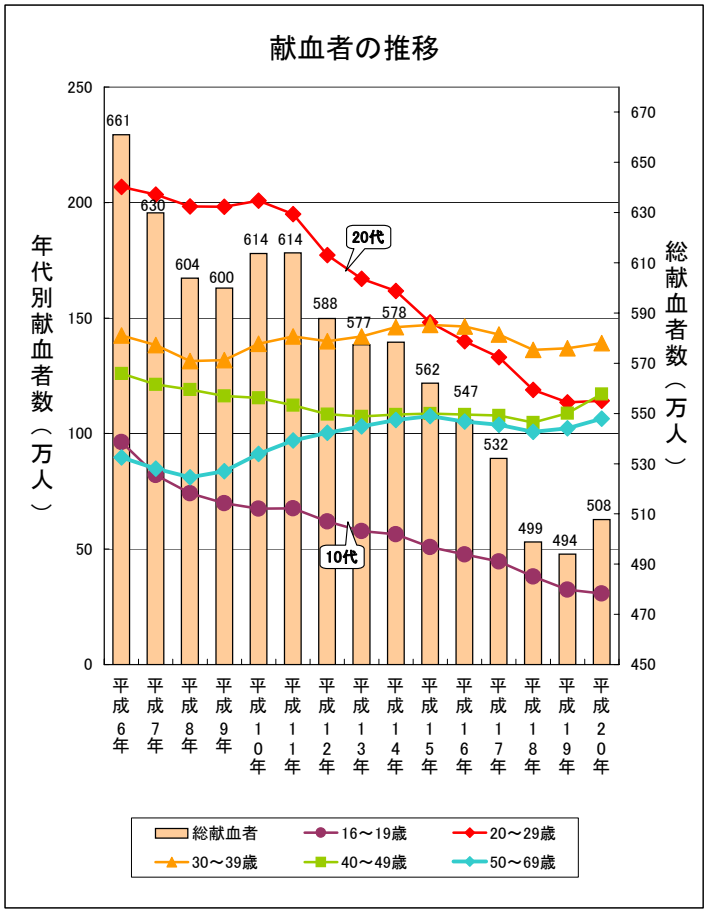
参考資料３

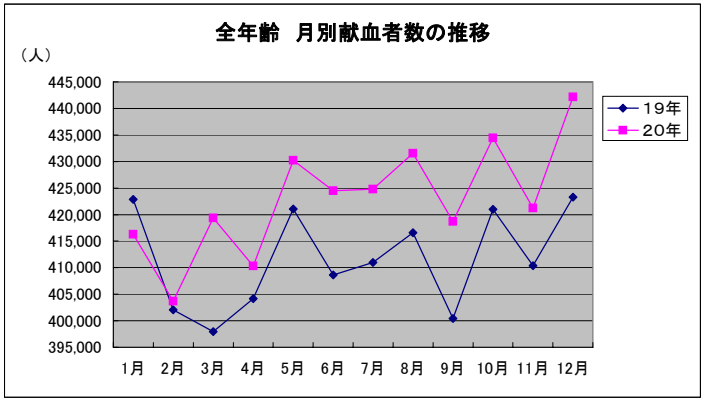
２. 成分採血基準

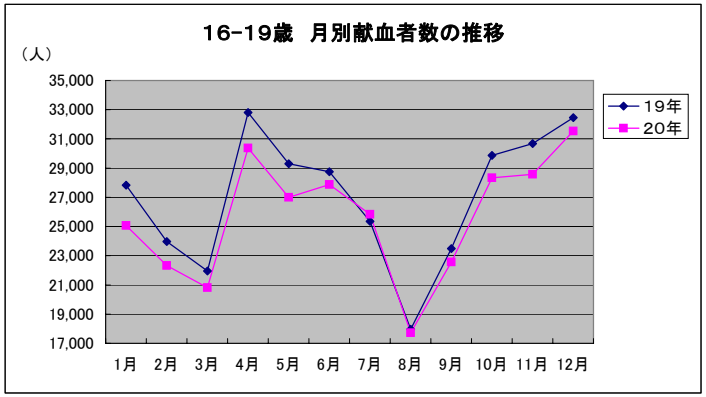
国名	種類	1回の採取血漿量	可能年齢	体重	年間採血回数	採血間隔	年間総採血量	血漿タンパクおよび血小板	
EU	血漿	最大650mL（抗凝固剤を除く） 循環血液量の13%	全血と同様	全血と同様		通常2週間 少なくとも2日間、1週間に2回を超えない	血漿収量（抗凝固剤を除く） 年間25L 1週間に1.5L を超えない	血漿蛋白6.0 g/dL（年1回以上実施）	
	血小板	最大650mL（抗凝固剤を除く）				原則2週間 但しHLA/HPA適合の場合は除く		血小板数15万／μL以上	Hb測定も
英国	血漿	循環血液量の15%以内（抗凝固剤を除く）	18～65歳（初回は60歳まで） 成分採血にはインフォームドコンセントが必要	50kg以上（但し50～60kgでは循環血液量の20%を超えない）	24回	通常2週間 少なくとも2日間、1週間に2回を超えない	血漿収量：年間15L 1カ月に2.4Lまで	血漿蛋白6.0 g/dL（年1回以上実施）	
	血小板	循環血液量の15%以内（抗凝固剤を除く）				通常2週間 少なくとも2日間、1週間に2回を超えない		血小板数15万／μL以上	Hb測定も
フランス	血漿	650mL	全血と同様	全血と同様	20回	通常2週間		血漿蛋白6.0 g/dL（年1回以上実施）	
	血小板	600mL			5回	4週間		血小板数15万／μL以上	Hb測定も
米国	血漿	50-67kgの人は625mL 78-79kgで750mL （抗凝固剤を除く）	全血と同様 成分採血にはインフォームドコンセントが必要	50kg		少なくとも2日間、1週間に2回を超えない	全採血種類を合計して、体重50～80kgでは12Lまで、体重80kgを超える場合は14,4Lまで	血漿蛋白6.0 g/dL（年1回以上実施）	
	血小板	500mL 80kg以上は600mL （抗凝固剤を除く）			年間24回			血小板数15万／μL以上	
台湾	血漿	500mL	全血と同様	50kg		2週間	12L	血漿蛋白6.0 g/dL	
	血小板							血小板数15万／μL以上	
日本	血漿	300mL～600mL （体重別）	400ml献血と同様	男性：45kg以上 女性：40kg以上	血小板採血１回を2回分に換算して血漿採血と合計で24回	２週間			
	血小板	400mL以下	18～54歳					血小板数15万／μL以上	Hb測定も

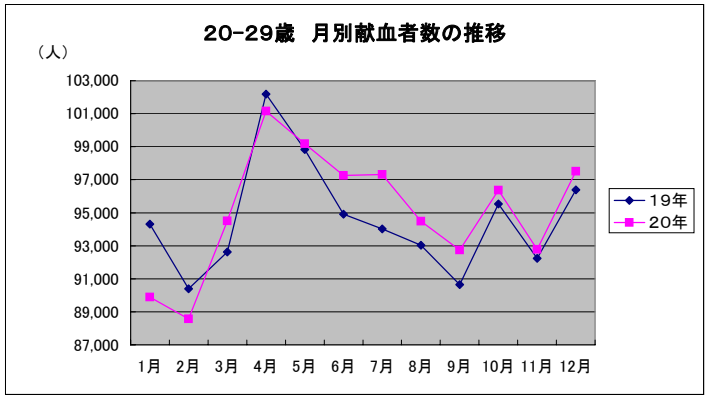
参考資料4

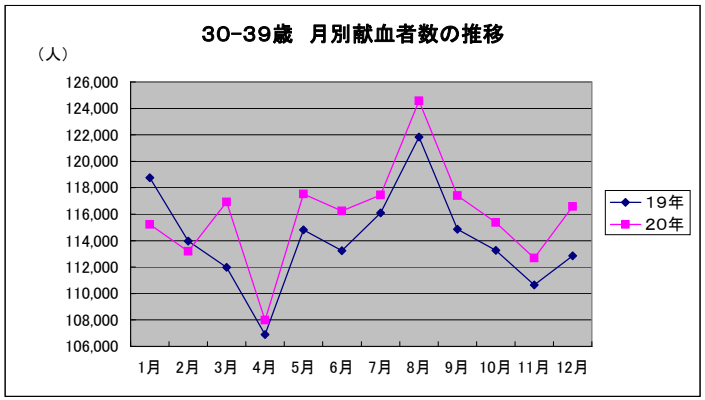
献血者数の推移

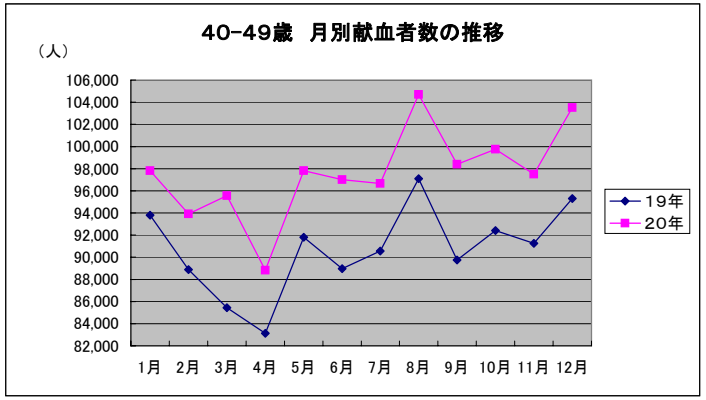


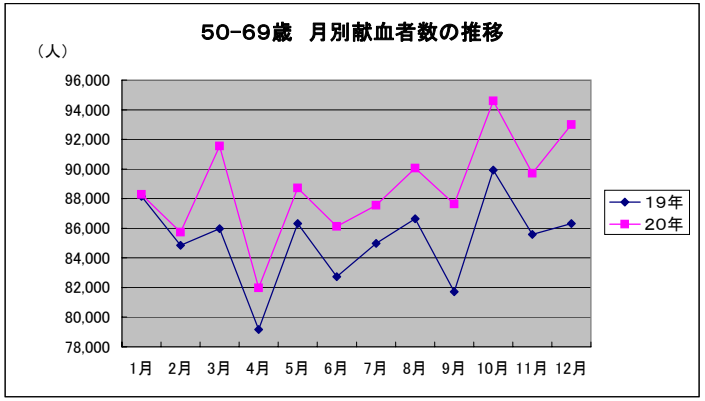












献血推進のあり方に関する検討会報告書に基づく行動計画一覧

資料２－３

・検討会報告書で提言された各事項を具体的にどのように進めていくかについて、短期的対応、中長期的対応に分類・整理したものである。

・本行動計画にある一部の事項については、平成２１年度に開催された都道府県ブロック会議及び中央連絡協議会において精査を行い、同年度開催の血液事業部会の了承を受けたうえで、平成２２年度献血推進計画に反映させたものである。

・短期：21年度までに実施し、22年度に検証
・中期：23年度までに実施し、24年度に検証
・長期：25年度までに実施し、同年度中に一旦検証

検討会報告書	具体的事項	実施主体	達成時期	実施状況	22年度推進計画
第２　社会や学校の環境変化に対応した献血推進方策					
（1）高校生献血のあり方					
（献血体験と有効な啓発手段等について）					
「献血出前講座」や体験学習等の実施	●埼玉県等、既に実施している事例を検証し、他の地域への拡大を検討	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	継続的に実施	○
（2）学校教育における啓発					
（学校の授業で「献血」を取り上げてもらうための戦略）					
高校・中学校の「教科書」などで「献血」を課題としてとりあげる	●学習指導要領解説本への掲載	厚生労働省 文部科学省	短期	平成２１年７月改訂「高等学校学習指導要領解説保健体育編」に掲載された	
	●高校・中学校においてカリキュラムを組んでもらう	厚生労働省 文部科学省 都道府県（教育委員会） 市町村（教育委員会）	中期	継続的に実施	
小学生を対象とした取組	●年代にあった啓発教材の制作と活用	厚生労働省 日赤 都道府県	短期	継続的に実施 （模擬献血、パネルクイズ等）	
（より幼少期の子供を対象とした取組）					
幼少期の子供とともにその親たちにも「けんけつ」の意義を伝える	●絵本などわかりやすい媒体の活用を検討	厚生労働省 日赤 都道府県	短期	継続的に実施 （厚労省HPにサイト掲載）	○

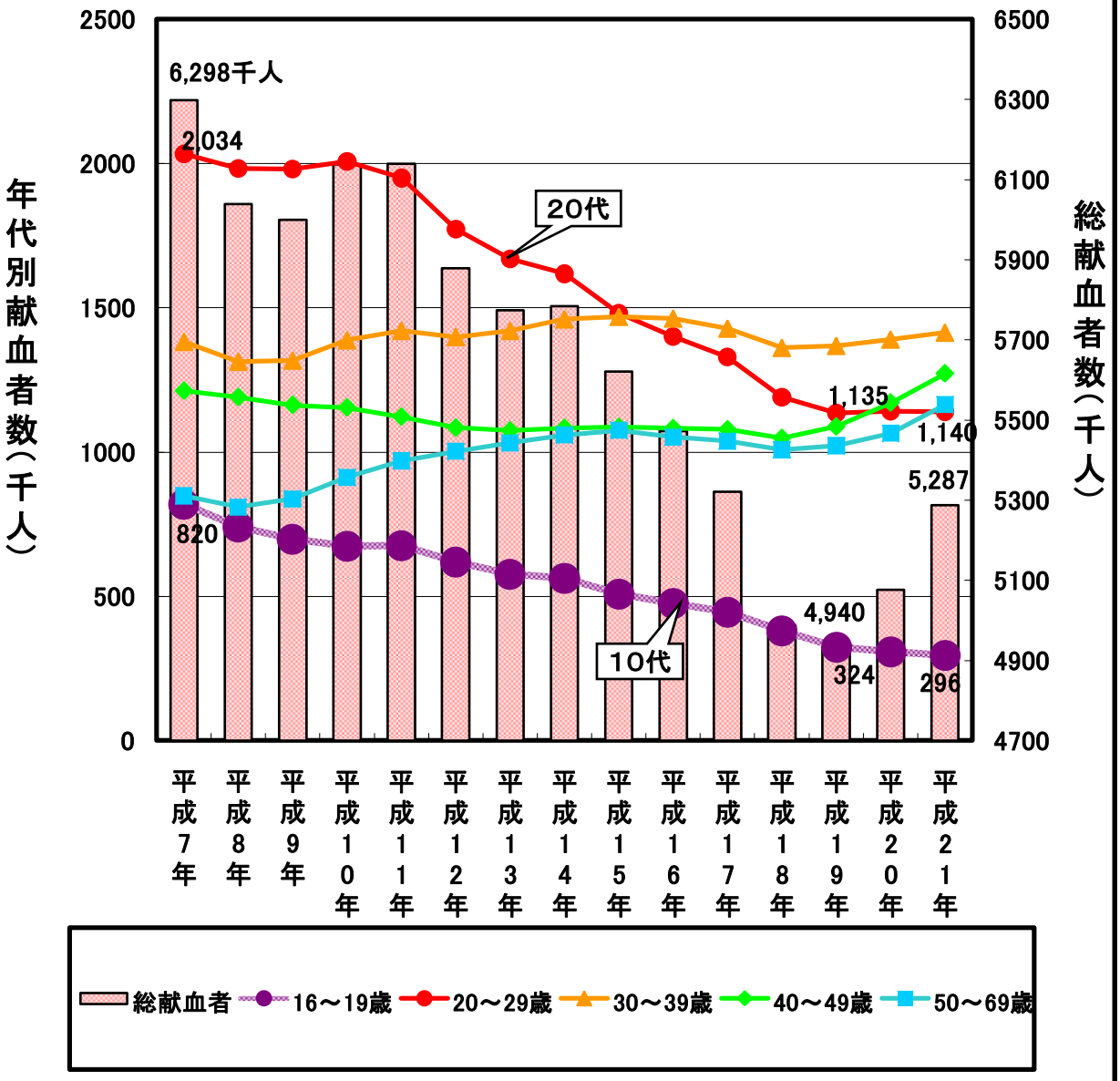
（3）献血環境のあり方					
（献血者の年齢層に応じて今後とるべき献血推進方策）					
複数回献血者となってもらうための重点的な啓発・施策	●複数回献血クラブ（パソコン、携帯電話による献血履歴や検査成績の照会）の充実	厚生労働省 日赤 都道府県	短期	継続的に実施	○
健康な40～59歳を改めて献血に取り込む方策を検討	●21年3月より開始された糖尿病関連検査を中心に広報を推進	厚生労働省 日赤	短期	・グリコアルブミン検査の導入（H21年3月） ・広報については継続的に実施	○
定年退職後も積極的に献血に協力してもらうための工夫	●情報伝達の方法などを工夫	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	長期	継続的に検討	○
相互扶助の精神といった観点からの啓発	●「団塊の世代」に対する啓発方法の検討など	厚生労働省 日赤 都道府県	長期	継続的に検討	○
（地域における献血推進体制のあり方）					
ボランティアの育成や地域組織との連携	●欧州の事例も参考として検討 ●学生献血ボランティアとの更なる連携（大学キャンパスにおける献血のさらなる活性化）	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	長期	継続的に検討	○
市町村における献血推進協議会の設置が進むよう努める	●厚生労働省、都道府県及び日赤からの働きかけ	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	中期	継続的に実施	○
より多くの企業の協力を得るための取り組み	●献血者に配慮した採血時間帯の検討 ●献血サポーターの普及（ロゴマークを日常の企業活動に活用してもらうための工夫、HPでの協賛企業紹介等） ●その他、協力企業への配慮	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	・献血構造改革（H17～21年度） ・継続的に実施	○
官公署における率先した献血実施	●実施状況の調査と未実施事業所への働きかけ	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	継続的に実施	○
地方公共団体及び日本赤十字社が密接に連携し、より効率的に献血の推進が行える体制の構築	●ブロック会議等の関係者の集まる場を有効活用して具体的に検討	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	長期	継続的に実施	○

（献血バス及び献血ルームの充実など）					
地方における一層効果的な献血バスの運用	●より効率の良い移動方法や実施場所・協力団体の開拓、ボランティアの受け入れ方法を検討	日赤 都道府県 市町村	短期	継続的に実施	○
献血ルーム及び献血バスの機能面の充実	●献血ルームの移転・改装の検討 ●献血バスにおける献血者に配慮した機能の充実を検討	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	継続的に実施 （休憩スペースの拡充等）	○
献血ルーム及び献血バスについて一層のイメージアップ	●献血バスの外観・内部及び休憩場所をより明るい雰囲気にすること等の検討	日赤	短期	けんけつちゃんのイラストを活用した親しみやすい雰囲気に移行中	○
子育て中の方も献血しやすくなる工夫	●東京都で実施している事例を検証しつつ、他の地域への拡大を検討	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	キッズコーナーの設置を全国的に拡大中	○
献血バスの駐車スペース確保について検討	●具体的な場所を日赤から都道府県へ提示し検討	厚生労働省 日赤 都道府県 市町村	短期	継続的に実施	
（献血時のインフォームド・コンセントと献血情報の提供のあり方）					
献血時におけるリスクとその対応策及び献血者健康被害救済制度ついてのさらなる周知	●現行の日本赤十字社の「お願い」をさらに充実	日赤	短期	継続的に実施	
献血時のインフォームドコンセントの具体的方法について検討	●法律学等の専門家を含めた検討班により検討	厚生労働省 日赤	短期	継続的に検討	
献血情報の提供のあり方	●献血現場におけるよりわかりやすい案内・表示。担当スタッフのコミュニケーションスキルのさらなる向上等	日赤	短期	継続的に実施	

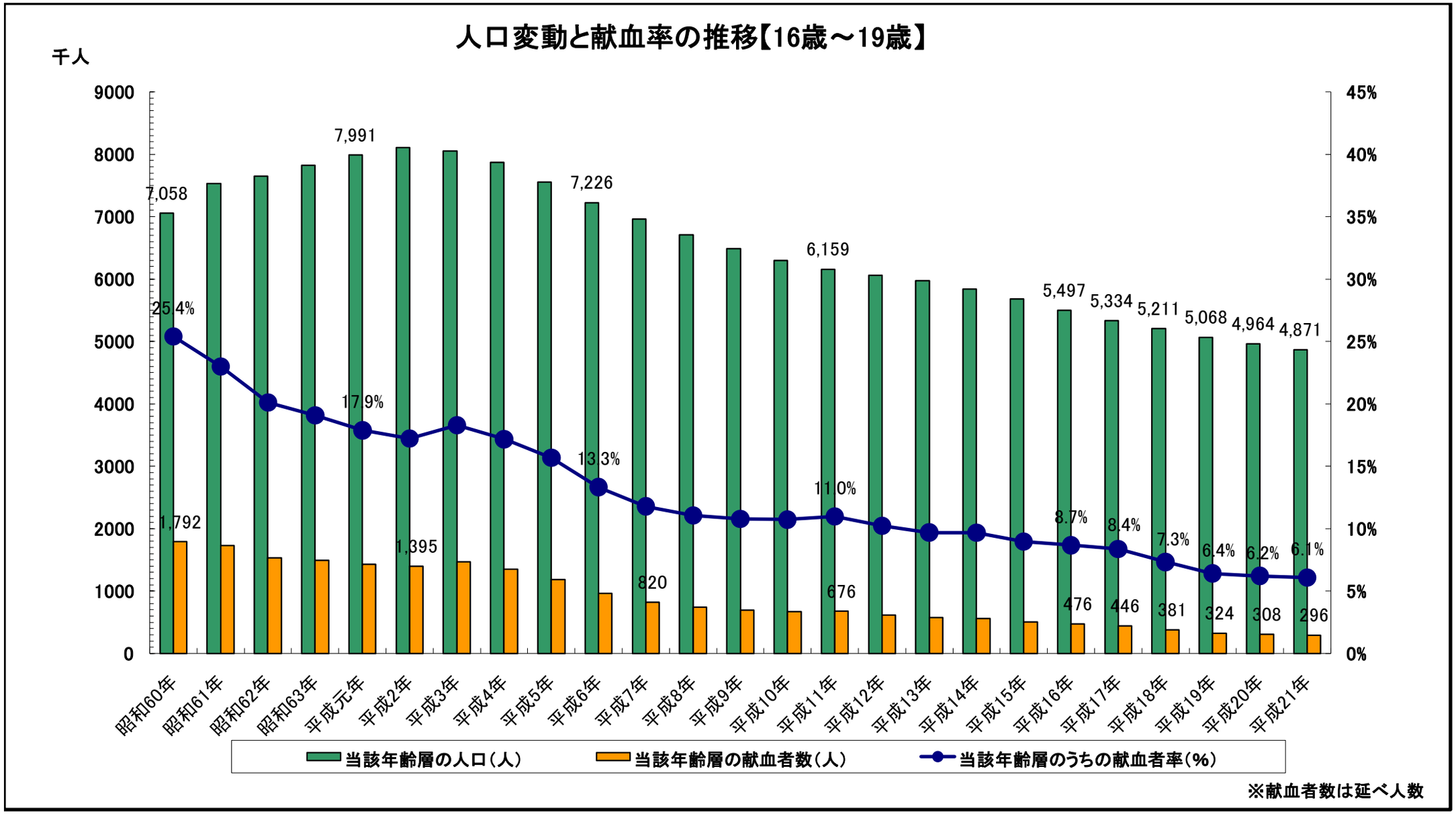
（4）メディア等を活用した広報戦略のあり方					
（若年層個人にアピールするなど年齢層・地域の特性に対応した広報戦略）					
メディアによる繰り返しの啓発	●テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などにおいて、地域別に有効なメディアを選択し、キャンペーン等を周知	厚生労働省 日赤 都道府県 メディア	短期	継続的に実施（LoveinActionなど）	○
（献血血液の使用状況の情報提供のあり方）					
患者が輸血を受けている現場の映像などを含む情報を効果的に取り入れて献血者に提示	●受血者に関するドキュメント映像DVDの製作検討	厚生労働省 日赤 医療機関 学会	短期	継続的に実施	○
今後、受血者側の意見を具体的に把握し、献血の推進に反映していくための検討	●既存の受血者側団体や学会等を通じて連携先を開拓	日赤 医療機関 学会 患者	中期	継続的に検討	
（5）低比重者などへの対応					
低比重やその他の理由により献血できなかった方への対応	●献血ルームで栄養指導・健康相談などのサービスを実施 ・兵庫県で実施済みの事例を検証しつつ、他の地域への拡大を検討（日赤） ・県栄養士会への働きかけ（都道府県）	厚生労働省 日赤 都道府県	短期	継続的に実施（リーフレット配布等）	○
（6）200mL献血の今後のあり方					
学校教育における啓発の浸透状況や献血環境の整備状況を踏まえて検討		厚生労働省 日赤	長期	継続的に検討	
第3　採血基準の見直し					
新採血基準の施行	●新しい採血基準の施行	厚生労働省	短期	平成23年4月1日施行	
新採血基準移行への準備	●採血時におけるリスクとその対応策を事前にわかりやすく情報提供（HP、印刷物、献血現場の表示等） ●採血後十分に休憩できるスペースの確保 ●採血後の献血者の安全確保にあたる者の確保	厚生労働省 日赤 都道府県	新しい採血基準施行までに	実施中（年度内に整備）	
引き続き検討すべき案件 ・16歳男女及び17歳女性の400mL全血献血採血基準の下限年齢の見直しについて ・女性の血小板成分献血採血基準の上限年齢の見直しについて ・年間総採血量、採血回数、採血間隔の見直しについて ・その他（成分献血採血基準の下限年齢の見直し等）	●エビデンスの収集及び評価	厚生労働省 日赤　他	中長期	継続的に検討	○

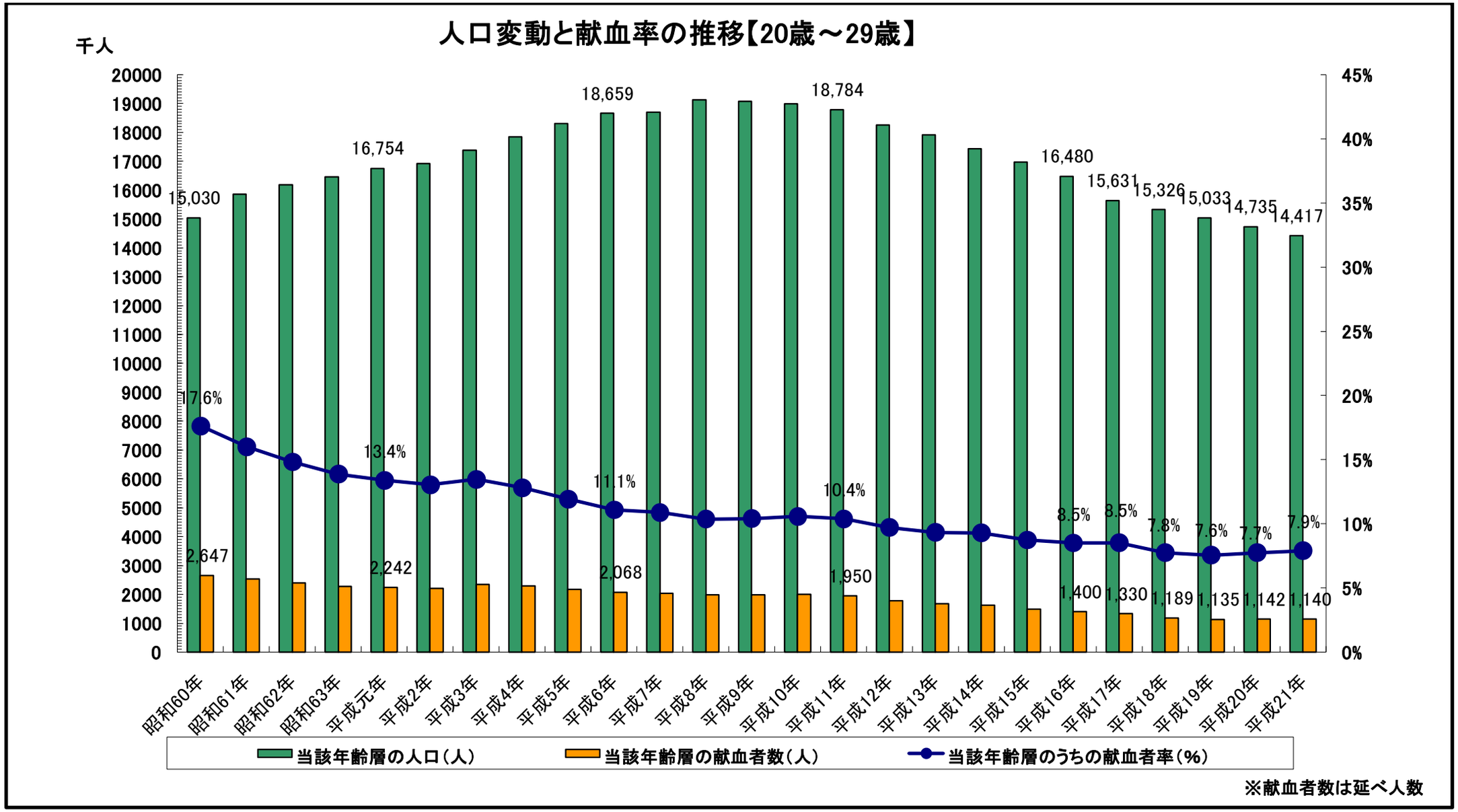
資料　２－４

献血者数の推移【年代別】

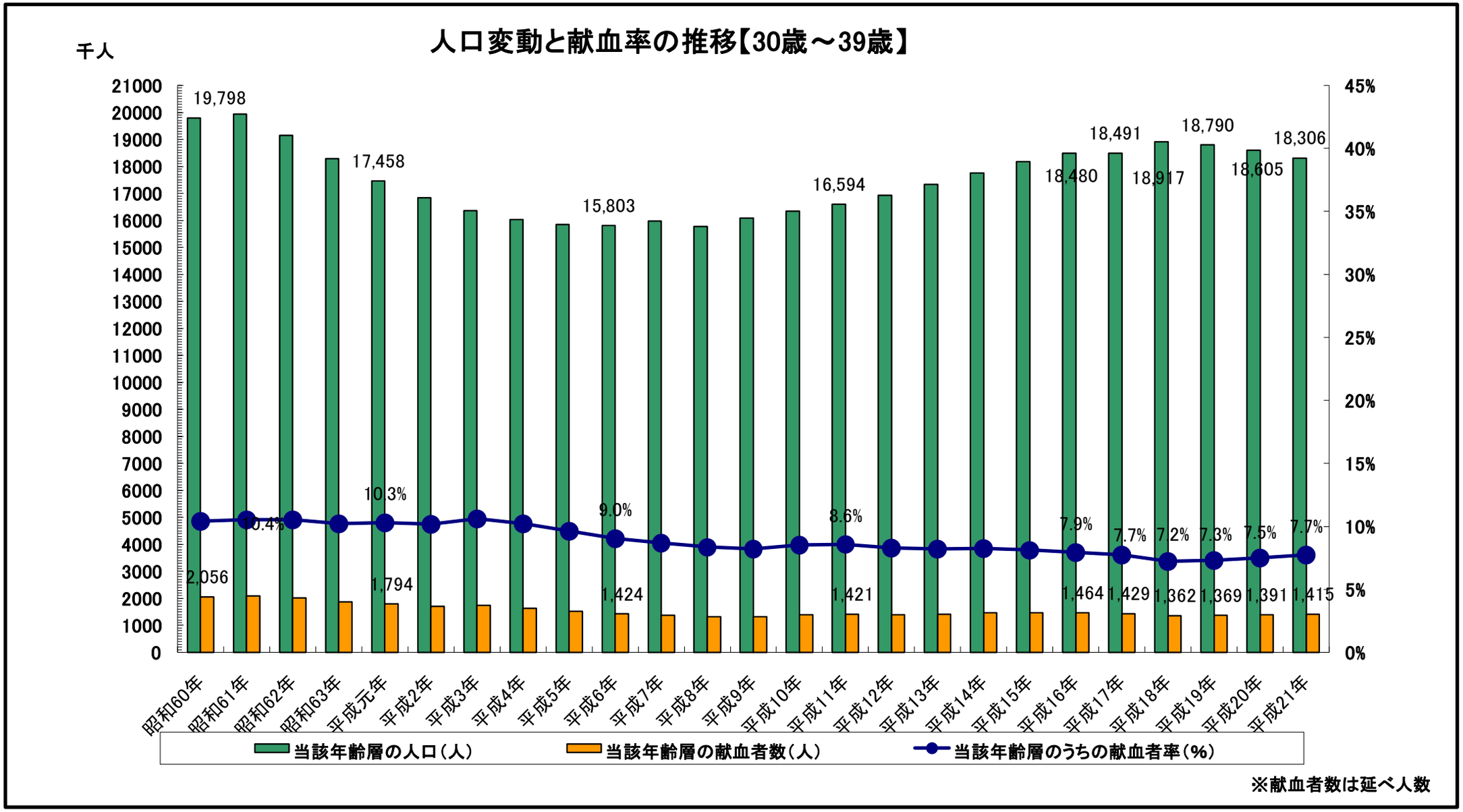


※献血者数は延べ人数

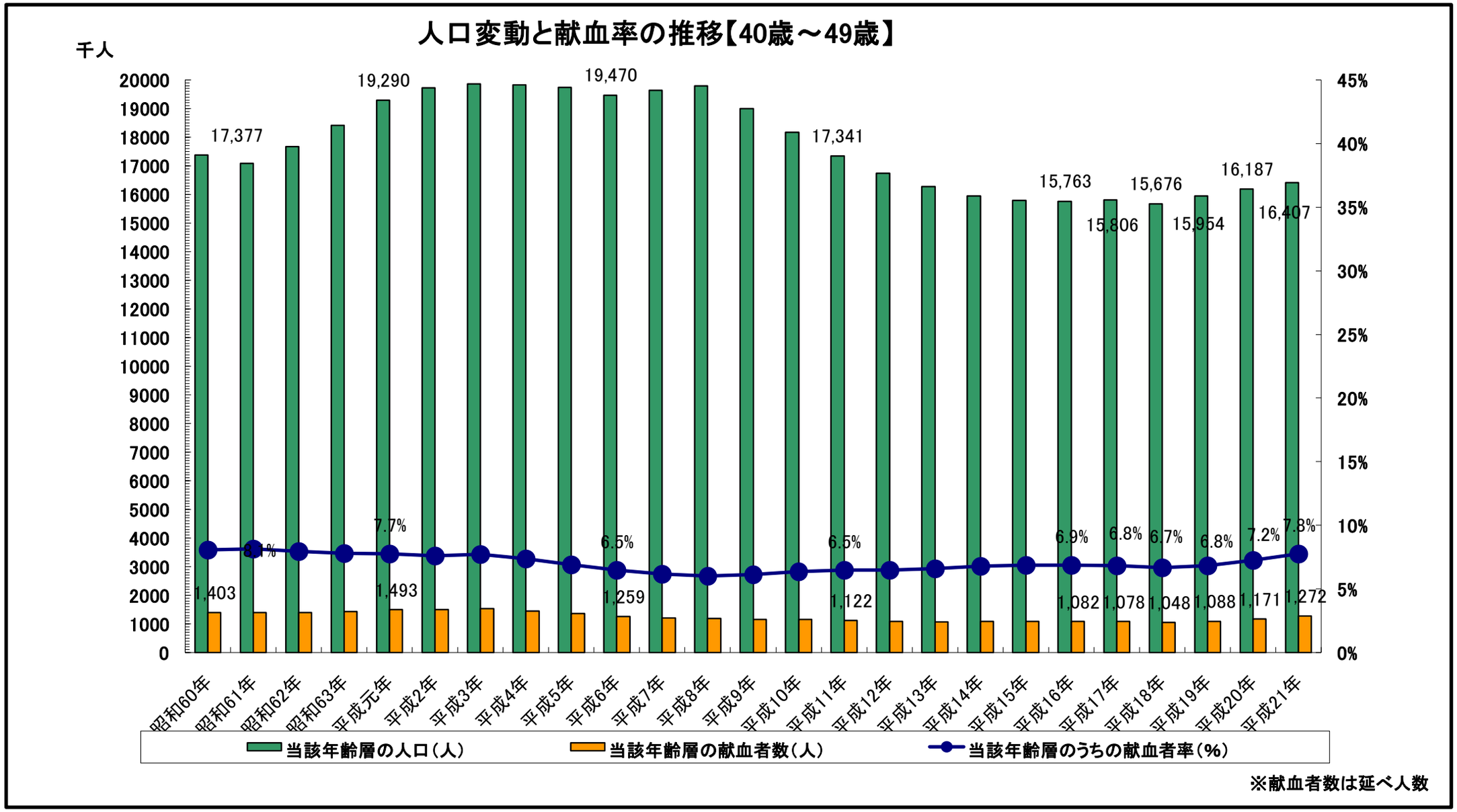

人口変動と献血率の推移【16歳～19歳】
千人
9000
8000
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
45%
40%
35%
30%
25%
20%
15%
10%
5%
0%
7,058
7,991
7,226
6,159
5,497
5,334
5,211
5,068
4,964
4,871
25.4%
17.9%
13.3%
11.0%
8.7%
8.4%
7.3%
6.4%
6.2%
6.1%
1,792
1,395
820
676
476
446
381
324
308
296
昭和60年
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）
※献血者数は延べ人数


人口変動と献血率の推移【20歳～29歳】
千人
20000
19000
18000
17000
16000
15000
14000
13000
12000
11000
10000
9000
8000
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
45%
40%
35%
30%
25%
20%
15%
10%
5%
0%
15,030
16,754
18,659
18,784
16,480
15,631
15,326
15,033
14,735
14,417
17.6%
13.4%
11.1%
10.4%
8.5%
8.5%
7.8%
7.6%
7.7%
7.9%
2,647
2,242
2,068
1,950
1,400
1,330
1,189
1,135
1,142
1,140
昭和60年
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）

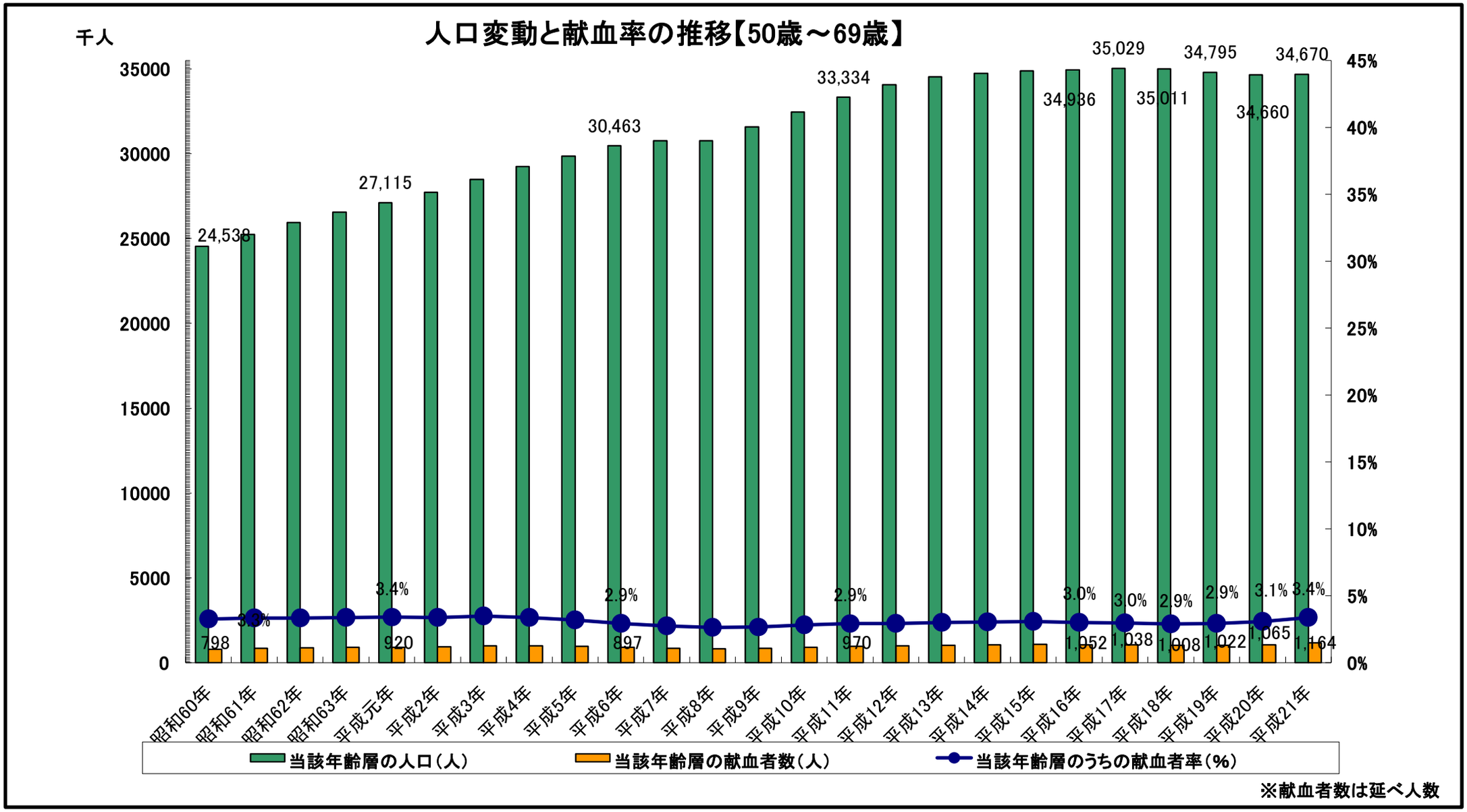
※献血者数は延べ人数


人口変動と献血率の推移【30歳～39歳】
千人
21000
20000
19000
18000
17000
16000
15000
14000
13000
12000
11000
10000
9000
8000
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
45%
40%
35%
30%
25%
20%
15%
10%
5%
0%
19,798
17,458
15,803
16,594
18,480
18,491
18,917
18,790
18,605
18,306
10.4%
10.3%
9.0%
8.6%
7.9%
7.7%
7.2%
7.3%
7.5%
7.7%
2,056
1,794
1,424
1,421
1,464
1,429
1,362
1,369
1,391
1,415
昭和60年
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）

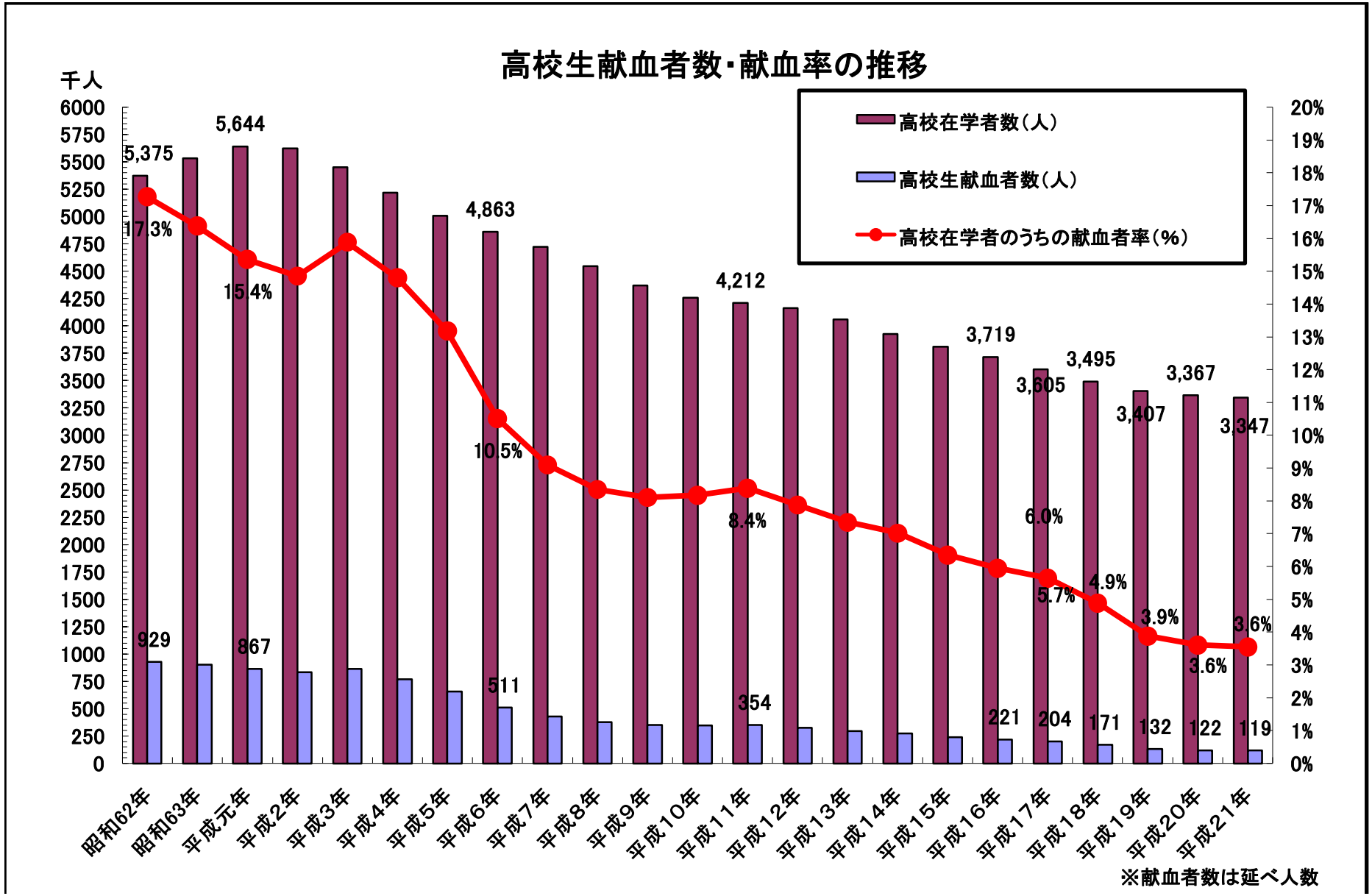
※献血者数は延べ人数


人口変動と献血率の推移【40歳～49歳】
千人
20000
19000
18000
17000
16000
15000
14000
13000
12000
11000
10000
9000
8000
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
45%
40%
35%
30%
25%
20%
15%
10%
5%
0%
17,377
19,290
19,470
17,341
15,763
15,806
15,676
15,954
16,187
16,407
7.7%
6.5%
6.5%
6.9%
6.8%
6.7%
6.8%
7.2%
7.8%
1,403
1,493
1,259
1,122
1,082
1,078
1,048
1,088
1,171
1,272
昭和60年
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）

※献血者数は延べ人数

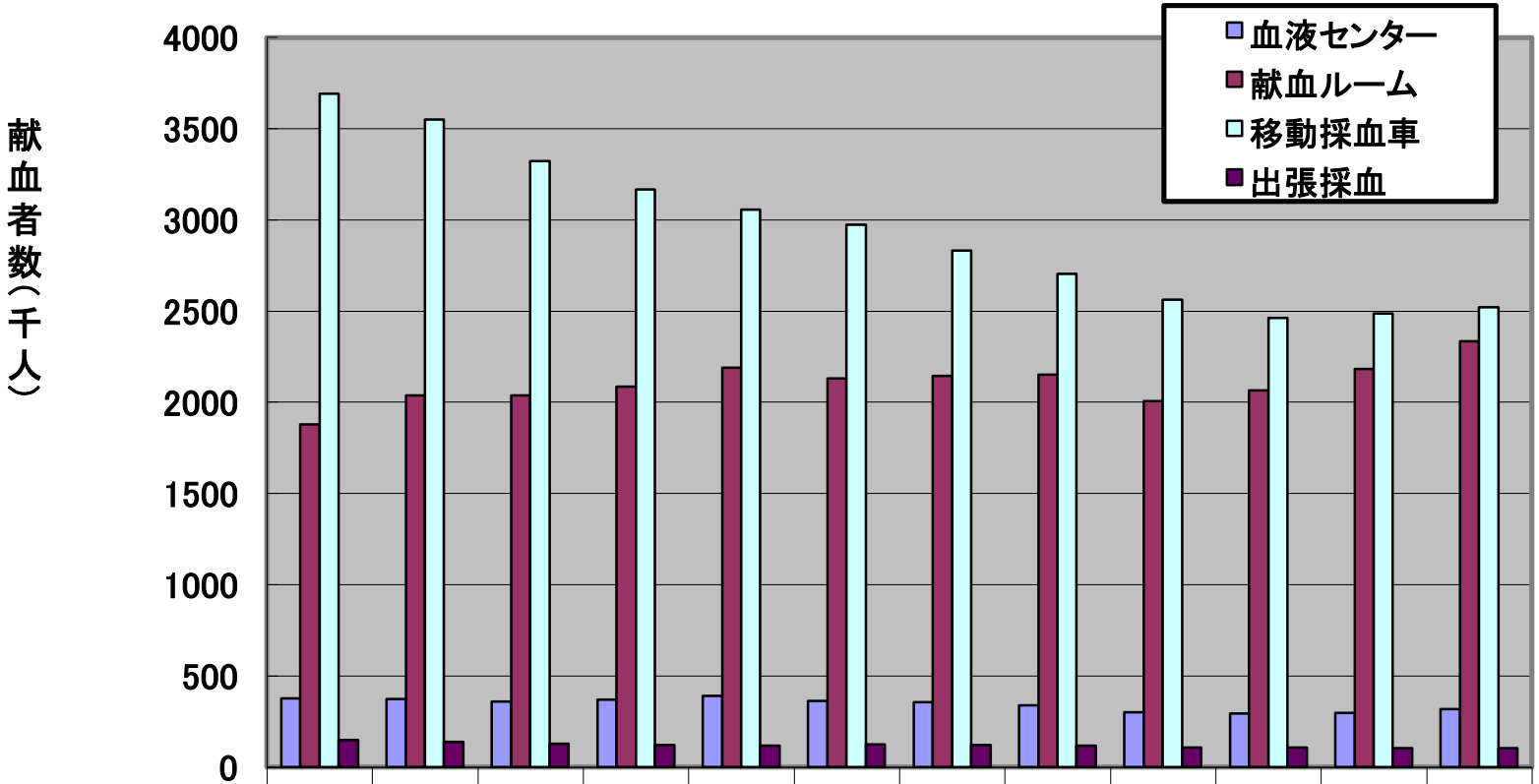

人口変動と献血率の推移【50歳～69歳】
千人
35000
30000
25000
20000
15000
10000
5000
0
45%
40%
35%
30%
25%
20%
15%
10%
5%
0%
24,538
27,115
30,463
33,334
34,936
35,029
35,011
34,795
34,660
34,670
3.3%
3.4%
2.9%
2.9%
3.0%
3.0%
2.9%
2.9%
3.1%
3.4%
798
920
897
970
1,052
1,038
1,008
1,022
1,065
1,164
昭和60年
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
当該年齢層の人口（人）
当該年齢層の献血者数（人）
当該年齢層のうちの献血者率（%）

※献血者数は延べ人数


高校生献血者数・献血率の推移
千人
高校在学者数（人）
高校生献血者数（人）
高校在学者のうちの献血者率（%）
5,375
5,644
4,863
4,212
3,719
3,605
3,495
3,407
3,367
3,347
17.3%
15.4%
10.5%
8.4%
6.0%
5.7%
4.9%
3.9%
3.6%
3.6%
929
867
511
354
221
204
171
132
122
119
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
※献血者数は延べ人数

※献血者数は延べ人数

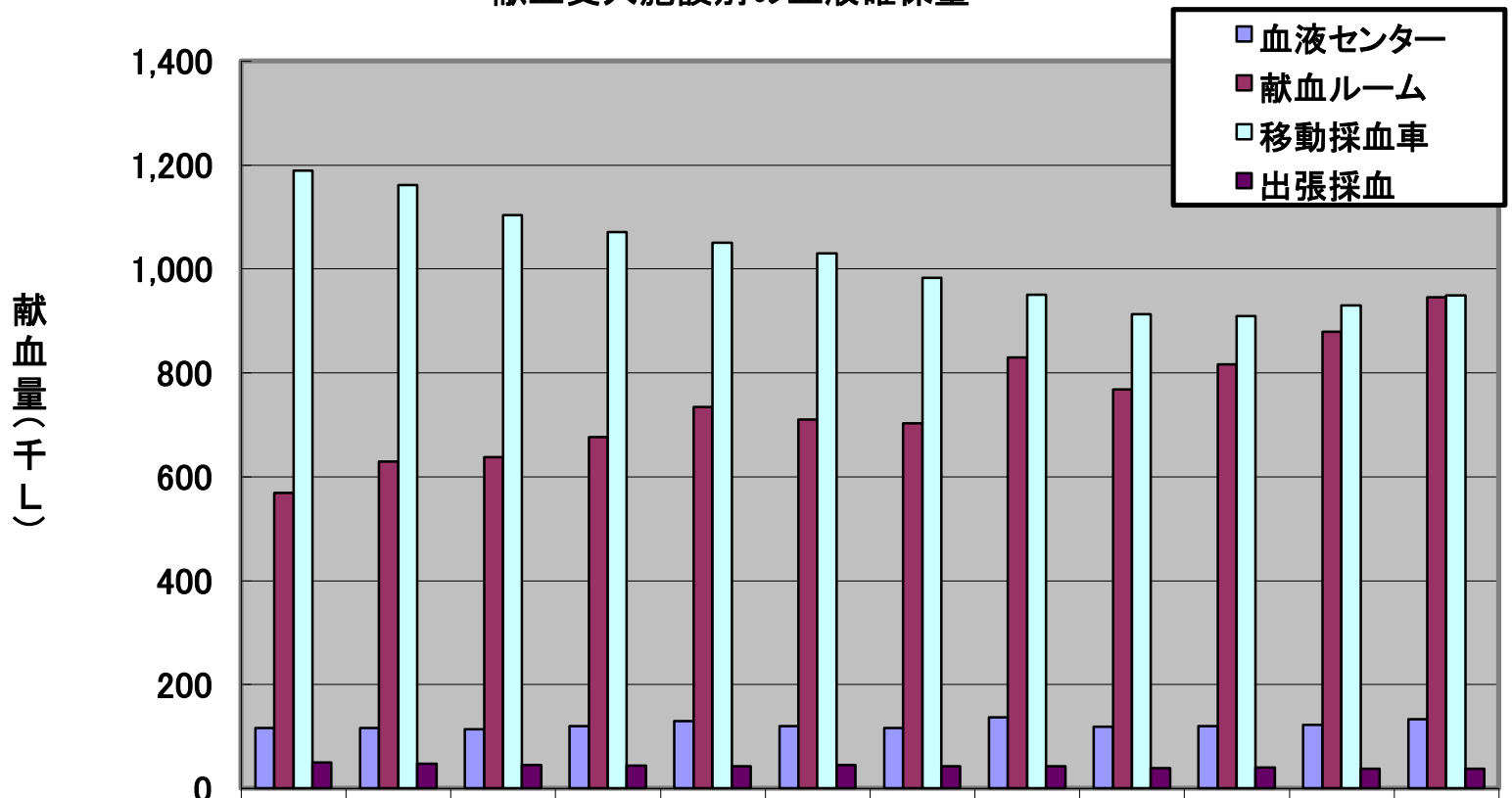
献血受入施設別の献血者数



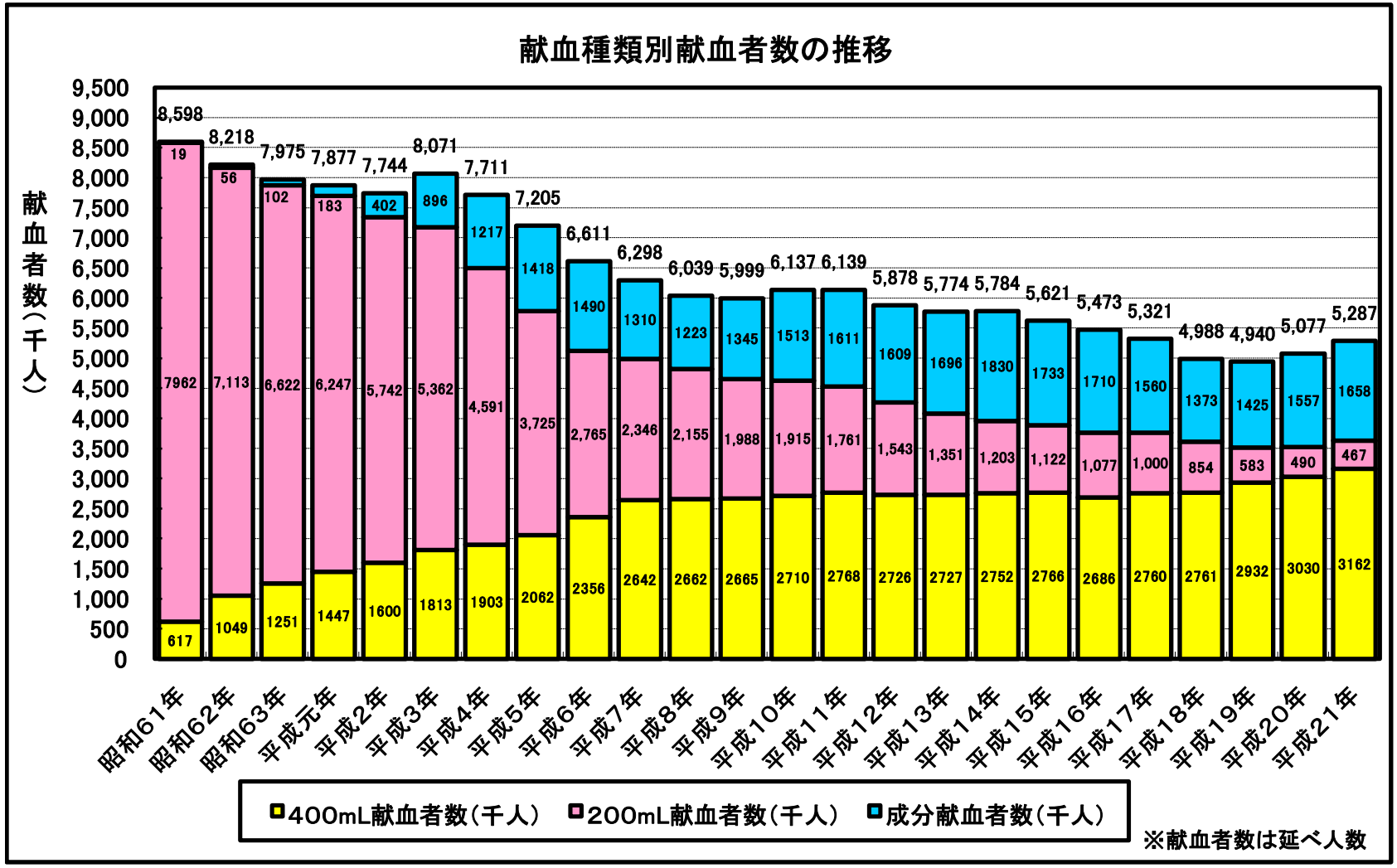
	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年
血液センター	378	373	359.2	368.9	389.9	363.7	354.8	337.6	301	295.2	297.2	319.5
献血ルーム	1878	2037	2039	2087	2189	2130	2146	2151	2008	2065	2182	2335
移動採血車	3693	3553	3323	3169	3056	2975	2834	2705	2563	2462	2485	2520
出張採血	149.1	139.4	127.8	122.3	119.1	123.4	121.2	116.9	107.4	106.6	102.6	102.2

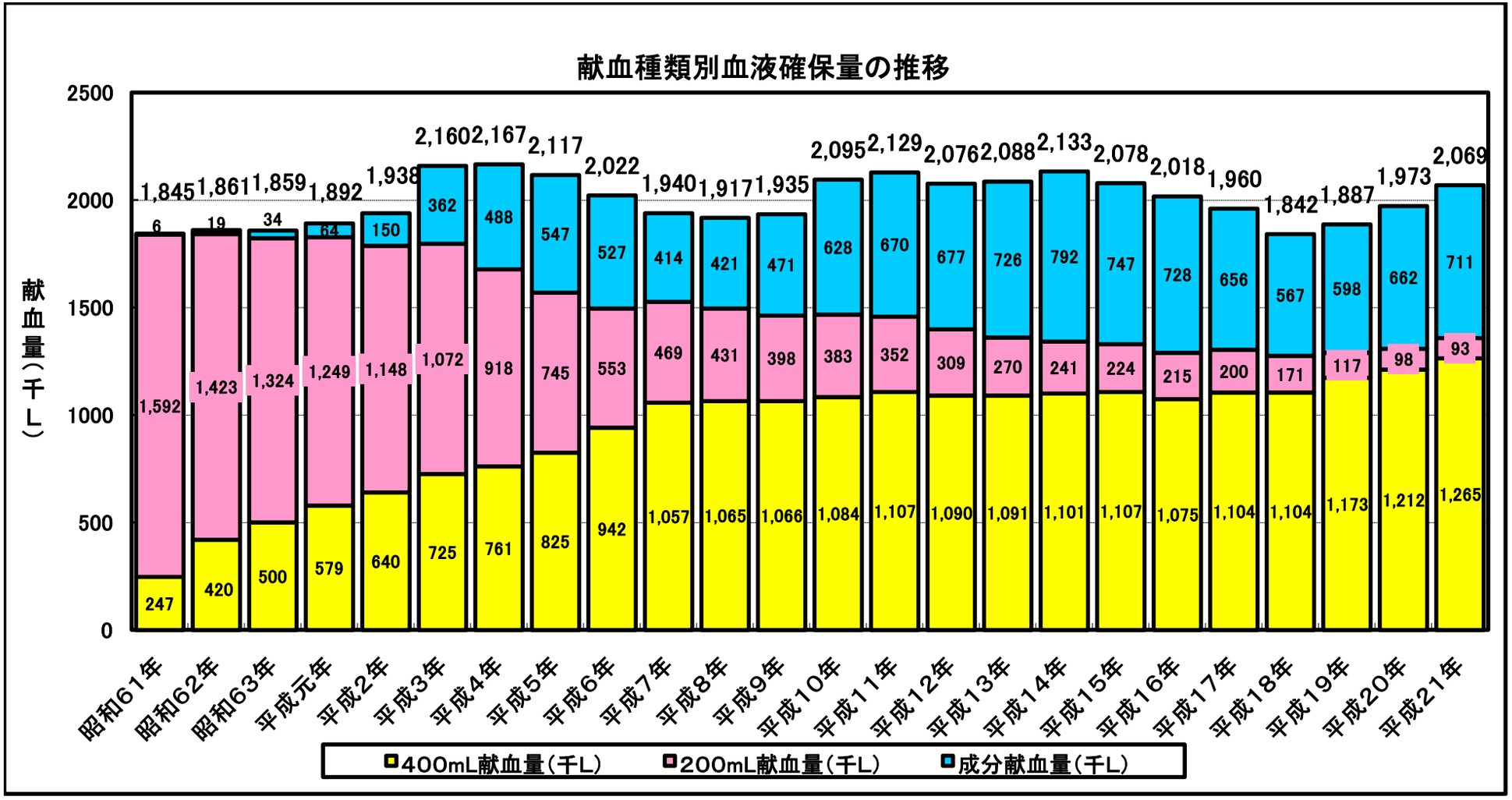
※献血者数は延べ人数

献血受入施設別の血液確保量



	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年
血液センター	115.8	115.9	113.3	119.2	128.6	119.2	115.4	135.8	118.8	119	122	132.4
献血ルーム	568.9	628.6	636.8	675.9	733.5	709.8	701.9	829.3	767.9	816.2	878.5	945.4
移動採血車	1188	1161	1103	1070	1050	1029	981.9	949.5	913	908.3	929.9	949.2
出張採血	49.9	47.2	44.3	43.5	42.6	44.1	42.8	42	38.8	39.5	38	37.9


献血種類別献血者数の推移
献血者数（千人）
9,500
9,000
8,500
8,000
7,500
7,000
6,500
6,000
5,500
5,000
4,500
4,000
3,500
3,000
2,500
2,000
1,500
1,000
500
0
8,598 8,218 7,975 7,877 7,744 8,071 7,711 7,205 6,611 6,298 6,039 5,999 6,137 6,139 5,878 5,774 5,784 5,621 5,473 5,321 4,988 4,940 5,077 5,287
19 56 102 183 402 896 1217 1418 1490 1310 1223 1345 1513 1611 1609 1696 1830 1733 1710 1560 1373 1425 1557 1658
7962 7,113 6,622 6,247 5,742 5,362 4,591 3,725 2,765 2,346 2,155 1,988 1,915 1,761 1,543 1,351 1,203 1,122 1,077 1,000 854 583 490 467
617 1049 1251 1447 1600 1813 1903 2062 2356 2642 2662 2665 2710 2768 2726 2727 2752 2766 2686 2760 2761 2932 3030 3162
昭和61年 昭和62年 昭和63年 平成元年 平成2年 平成3年 平成4年 平成5年 平成6年 平成7年 平成8年 平成9年 平成10年 平成11年 平成12年 平成13年 平成14年 平成15年 平成16年 平成17年 平成18年 平成19年 平成20年 平成21年
400mL献血者数（千人）
200mL献血者数（千人）
成分献血者数（千人）
※献血者数は延べ人数


献血種類別血液確保量の推移
献血量（千L）
2500
2000
1500
1000
500
0
1,845 1,861 1,859 1,892 1,938 2,160 2,167 2,117 2,022 1,940 1,917 1,935 2,095 2,129 2,076 2,088 2,133 2,078 2,018 1,960 1,842 1,887 1,973 2,069
6 19 34 64 150 362 488 547 527 414 421 471 628 670 677 726 792 747 728 656 567 598 662 711
1,592 1,423 1,324 1,249 1,148 1,072 918 745 553 469 431 398 383 352 309 270 241 224 215 200 171 117 98 93
247 420 500 579 640 725 761 825 942 1,057 1,065 1,066 1,084 1,107 1,090 1,091 1,101 1,107 1,075 1,104 1,104 1,173 1,212 1,265
昭和61年
昭和62年
昭和63年
平成元年
平成2年
平成3年
平成4年
平成5年
平成6年
平成7年
平成8年
平成9年
平成10年
平成11年
平成12年
平成13年
平成14年
平成15年
平成16年
平成17年
平成18年
平成19年
平成20年
平成21年
400mL献血量（千L）
200mL献血量（千L）
成分献血量（千L）

資料３－１

平成17年度資料

献血構造改革の重点事項について

１　献血構造改革の方向性

（１）血液の消費に占める高齢者の割合が今後増大することから、供給において若年者層が安定的に需要を持続的に支えていく持続可能な血液の需給体制を構築していくこと。

（２）需給の安定及び安全性の向上の観点から、複数回の献血者を確保していく需給体制を構築していくこと。

２　構造改革の目標

献血について、単に広く呼びかけるだけではなく、目標を定めて組織的な献血促進体制に切り替えていく（５年程度の達成目標）。

（１）若年層の献血者数の増加

・１０代、２０代を献血者全体の４０％まで上昇させる。（現状３５％）

（２）安定的な集団献血の確保

・集団献血等に協力する企業数を倍増する。（現状２３，８９０社）

（３）複数回献血者の増加

・複数回献血者を献血者全体の３５％まで上昇させる。（現状２７％）

３　若年層の献血者対策

従来からのライオンズクラブ等の献血ボランティアの御協力に加え、組織的に若年者の献血体験の促進及び献血インセンティブの向上を目指す。

（１）全国の若年者献血ボランティア組織、青少年のボランティア組織等との組織的な連携を構築し、献血の推進及び将来の献血者に対する普及啓発を積極的に行う。

（２）若年者に受け入れられる献血キャラクターの開発及び媒体を活用した普及を図る。

（３）若年者の献血体験の推進

４　企業献血及び企業との連携

企業献血の推進を図る。

（１）献血協賛企業の検討

（２）企業の集団献血の推進

５　複数回献血対策

複数回献血者の組織化及びサービス向上を図る。

（１）登録献血者の血液不足時の組織的呼びかけ体制の構築

（２）複数回献血者向け健康管理に係る付加価値情報の提供

６　キャンペーン等

血液の不足する秋口、年末から新年、新旧年度の変わり目等に定期的な献血推進キャンペーンを実施する。

７　献血者の健康被害に対する救済

国の適切な関与の下で、平成18年秋を目途に新たな健康被害の救済制度を整備する。

(平成18年10月より運用開始)

献血構造改革

（平成17年度からの5年程度の達成目標）

若年層の献血者数の増加

10代・20代を献血者全体の40%まで上昇させる

平成17年度　33．4%　　平成20年度　28．3%
平成18年度　31．5%　　平成21年度　26．8%
平成19年度　29．2%

安定的な集団献血の確保

集団献血等に協力する企業数を倍増する。

平成17年度　24，220社　　平成20年度　38，399社
平成18年度　30，835社　　平成21年度　43，193社
平成19年度　34，059社

複数回献血者数の増加

複数回献血者を献血者全体の35%まで上昇させる。

平成17年度　27．5%　　平成20年度　30．3%
平成18年度　28．1%　　平成21年度　31．3%
平成19年度　29．5%

資料3－2

献血者確保対策について（厚生労働省の取り組み）

① 若年層の献血者数の増加

目標：（10代、20代の献血者を献血者全体の**35%→40%まで上昇**させる。）
結果：平成20年度：28．3%　　平成21年度：26．8%

◎　中学生への普及啓発
　血液の重要性や必要性について理解を深めるため、全国の中学校にポスターの配布。
　○　平成21年度配布枚数：11，299校に3．6万枚

◎　高校生への普及啓発
　献血及び血液事業に対する理解を促進するため、全国の高校生及び教員へ献血についての副読本（けんけつHOP　STEP　JUMP）を配布。
　○　平成21年度配布部数　・生徒用：5，878校に115万部　・教員用：6万部

◎　主に10代、20代の若年層を対象とした普及啓発
　「はたちの献血」キャンペーン（毎年1～2月）啓発宣伝用ポスターを都道府県及び関係団体等に配布。
　○　平成21年度配布枚数：3．9万枚

◎　主に10代、20代の若年層を対象とした普及啓発
　例年、献血者が減少する時期（秋～年度末）に若年層を対象とした広報活動を展開し、献血者の掘り起こしと複数回献血の強化を図ることを目的とし、平成21年度は、自動車教習所、医療機関、電車内のディスプレイ（デジタルサイネージ）を利用した広報媒体を用いて、普及・啓発活動を行った。
　※　デジタルサイネージ：病院、電車内などに設置されたディスプレイに、デジタル技術を活用して映像や情報を表示する広告媒体

◎　幼少期（未就学児童とその親御さん）を対象とした普及啓発

近年、献血者は減少傾向にあり、特に若年層の献血離れは深刻なものとなっている。

こうした状況を踏まえ、特に献血対象年齢前の小学生等に血液（献血）について　正しい知識の普及を図るため、啓発資材を製作・　配布することにより、幼少期から　の献血への理解を深めることを目的とし、親子で楽しく学べるように、　厚生労働省ホームページに動画、紙芝居形式で、お子様向けの「けつえきのおはなし」を掲載した。

②　安定的な集団献血の確保（日本赤十字社に対する補助：1／2補助）

目標：（集団献血等に協力する企業を**23，890社→47，780社へ倍増**させる。）

◎　献血に積極的に協力する企業・団体が行う献血活動を社会貢献活動の一つとして広く一般社会に認知されるよう、「献血サポーター」ロゴマークを配布する等により企業・団体が行う献血活動の普及・拡大を図る。

結果：（集団献血に協力して頂いた企業・団体数（累計））

・平成20年度末時点：38，399社　　・平成21年度末時点：43，193社

献血サポーター

○　「献血サポーター」ロゴマーク配布枚数

・平成20年度：1，331社　　・平成21年度：1，450社

③ 複数回献血者の増加（日本赤十字社に対する補助：1／2補助）

目標：（複数回献血者を献血者全体の**27%→35%まで上昇**させる）

◎ 複数回献血者を確保するため、血液センター毎に複数回献血者を確保するためのクラブを設立し、複数回献血者の確保を図る。

結果：（献血者全体における複数回献血者の割合）
・平成20年度：30．3%　・平成21年度：31．3%

④ その他の普及啓発（全国民的な普及啓発）

◎「愛の血液助け合い運動」（毎年7月）を厚生労働省、都道府県、日本赤十字社の主催により実施。啓発宣伝用ポスターを都道府県及び関係団体等に配布した。
- ○ 平成21年度配布枚数：3．6万枚
- ○ 平成22年度配布枚数：3．8万枚

◎「愛の血液助け合い運動」の一環として「献血推進運動全国大会」（毎年7月）を実施。今年度は、皇太子殿下に御臨席を賜り、島根県松江市において開催。

◎ テレビ、ラジオ、新聞等の政府広報を積極的に活用した普及啓発を実施。
- ○ 平成21年度：テレビ：3番組、ラジオ：1番組、新聞2回
- ○ 平成22年度（8月末現在）：政府広報オンライン（お役立ち記事）、ラジオCM80秒、インターネットテキスト広告（Yahoo・朝日.com）、

献血者確保対策について（都道府県の取り組み）

資料3－3

【平成21年度　行事等実績】

①小学生やより幼少期の親子を対象とした取組

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	平成２１年４～９月	サタデー・テーリング	北海道赤十字血液センター	札幌市小学生4年～6年生	札幌市交通局が実施している小学生高学年を対象としている、札幌市の施設を知り、郷土の知識を高めようと企画されているスタンプラリー方式の事業に血液センターをスタンプポイント設置場所として参加し、若年層の献血啓蒙をおこなった。	期間中の来場者　２，３３４名

【宮城県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮城県赤十字血液センター	H21.7.27～H21.8.6	けんけつKID’sサマースクール	宮城県赤十字血液センター	県内小学校4年生から6年生およびその保護者	小学生のうちから献血に親しんでもらえるよう夏休みの期間に実施、スライドでの説明や施設見学を行った。	期間中7日開催、保護者もあわせ約510名の参加があった。

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	平成22年3月21日～28日	親子ふれあい献血キャンペーン	献血ステーション（イオンモール秋田店）	幼児から中学生	親が献血する姿を子供に見せて、献血の必要性、人を助ける心等を育み、将来への献血啓発とした。	“血が怖い”と恐る恐る近づいていた子供も、親が安心して献血している姿を見て、ホッとした笑顔。少なからず献血への恐怖心を緩和できたと思う。

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	H21/8/10(月)～11(火)	夏休み血液センター見学会	福島県赤十字血液センター	小学4～6年生	ビデオ鑑賞、施設見学、クイズ等	
	H22/2/13(土)～14(日)	献血感謝デー	福島県赤十字血液センター	親子	親子で救急法、レッドクロスシアター、健康講演会、災害時の食事体験、献血運搬車展示及び記念写真撮影、健康栄養相談	日ごろの献血についての感謝と赤十字事業の紹介

【茨城県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
茨城県	H21.7.2～H22.2.6	青少年ふれあい事業	茨城県赤十字血液センター	小学生及び父兄， 高校生，大学生	献血ルームの見学及び献血会場での呼び込み体験	参加人数　55名

【群馬県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
群馬県	H21.5.3～H21.5.5	親子献血体験	金山総合公園　ぐんまこどもの国	小学生以下親子	親子を対象に献血啓発リーフレットを配布し、親の献血する様子を見学。	献血受付者数:280名

【埼玉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
埼玉県	H21.11.29	親子ふれあい献血キャンペーン	深谷市上柴ショッピングセンター	親子を中心とした県民	親子で参加し、親が献血する姿を子が見ることで献血に触れる機会を設ける。これにより献血できない年齢層の子供達に献血を身近なもの、大切なものとして認識してもらうことを目的とする。また若年層への献血思想の普及・啓発を図る上で、特に児童に対する取り組みとして実施する。	献血受付者数　263人

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.7.27	小学生献血学習会	千葉県千葉赤十字血液センター 東京女子医大八千代医療センター （視察先）	県内の小学校に在学する児童生徒とその保護者	若年層に対する献血啓発活動の一環として、普段献血に接することのない子供に幼少時から献血に対する興味、関心を持ってもらうことで、将来的な献血推進に資することを目的に実施。（スライドやビデオによる血液の働きや献血の意義等について説明、血液検査・製剤工程等施設見学等を実施。）	41組89名の親子が参加

【東京都】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
東京都	H21.7.23～24、28～29 H21.8.4～5	献血おもしろゼミナール	東京都赤十字血液センター （日本赤十字社辰巳ビル）	小学1年生以上の児童及び保護者	若年層への献血啓発事業として実施。小学生を対象にスライド学習及びパネルクイズ、検査・製剤・供給部門の所内見学等を実施し、将来の献血者育成及び献血思想の普及につなげることを目的とする。	6日間計11回の開催で、合計376名が参加。

【神奈川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
神奈川県	①平成21年7月27日～8月28日 ②平成21年8月3日～7日	夏休み小中学生親子献血教室	①神奈川県赤十字血液センター ②かながわ県民センター、横浜駅西口献血ルーム、相鉄ジョイナス前献血バス	県内在住・在学の小中学生及びその保護者	小中学生及びその保護者に、命の大切さやその命を支える献血の必要性及び重要性について、理解を深めてもらう。	参加者：①計123人 ②　計93人
	平成21年9月1日～14日(募集期間)	献血の絵ポスター展　作品募集		県内在住・在学の小中学生		応募校数：計　195校 応募数　：計1,174点
	①平成21年11月7日 ②平成21年11月28日 ③平成21年12月1日～28日(土・日・祝除く) ④平成22年1月16日～17日 ⑤平成22年1月18日～2月7日	献血の絵ポスター展	①横浜みなと博物館 ②横浜市教育会館(表彰式会場) ③県庁第2分庁舎県政情報センター ④横浜新都市ビル(そごう)9階シビルプラザ ⑤県内3赤十字病院	県民	9月に募集した献血の絵ポスターの入賞作品を展示。	

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.7～9(募集期間) H21.10.24（表彰式）	献血推進用ポスター募集・表彰	県内小・中学生を対象に献血推進ポスターを募集し、優秀作品を表彰を行った 表彰式：富山電気ビル	県内小・中学生	県内小・中学生を対象に献血推進ポスターを募集し、優秀作品を表彰を行った。	応募点数：６３５点 （小学生133点、中学生502点）
	H22.2.8～2.15 H22.2.19～2.26	献血ポスター優秀作品の展示	県内ショッピングセンター	一般県民	小中学生献血推進ポスターコンクールの優秀作品展示を行い、献血思想の普及を図った。	県内2箇所で実施。

【石川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
石川県赤十字血液センター	平成21年8月5日・12日・19日	なぜ？なに？おしえて献血	血液センター	小学生及び保護者	血液の勉強、本社作成DVD鑑賞、施設・車両の見学	３日間で小学生８９名、保護者６０名の参加があった。

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	通年	血液センター見学会 出前講座	血液センター	小中学生	献血に興味をもってもらえるよう実際に血液センターを見学してもらい啓発を図っている。	参加者：８３９名

【静岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
静岡県	H21.5～H22.3	アボちゃんサポーター事業 成分献血啓発事業	高等学校、各地域	県内の高校生 県民	県保健所の所管地域にある高校の生徒98名に献血ボランティア「アボちゃんサポーター」を委嘱し、学内献血や学校祭、地域の健康まつり等において献血広報活動を行うとともに、活動記録「ABOニュース」を制作した。地域の健康まつり等では献血推進コーナーを設置し、子供連れの家族などに献血クイズを実施するなど、献血意識の啓発を行った。	地域イベントを10ヵ所で開催。

【愛知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛知県	平成21年8月4日（火）8月5日（水）、6日（木）	夏休み親子血液教室	一宮市北保健センター（8月4日） 愛知県赤十字血液センター（8月5日、6日）	小学生（4,5,6年生）とその保護者	児童期からの献血教育の推進を図ることを目的とする。	・血液センターの見学や血液型判定、献血クイズなどを実施した。 ・参加者314名（子供190名、保護者128名）

【三重県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
三重県 三重県赤十字血液センター	平成21年10月22日～平成22年2月10日（9回）	平成21年度献血啓発授業	県内小学校	小学生	若年層の献血意識低下を打開するために、小学校の授業で命の大切さから血液、献血をテーマに小学生に授業を行った。	

【京都府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
京都府	２１年８月５日	Kids献血探偵団	献血ルーム京都駅前	小学3年～６年生及び保護者	乙訓保健所管内小学生と保護者３０組を募集。血液と献血についてクイズ形式による説明、献血ルームの見学、保護者の献血	保護者３０人児童３１人

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府赤十字血液センター	H21.7.30～H21.8.11（計16回）	第14回「献血おもしろゼミナール」	大阪府赤十字血液センター	小学生の親子	献血に関する知識の普及啓発及び血液センターの見学。	計1,109名の参加があり、その内33名が献血。

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県赤十字血液センター	H21年8月5日、8月17日	夏休みこども見学会	血液センター	小学生及びその保護者	血液センター見学等を通じ、若年層に対する献血思想の普及を図る。	こども51名、保護者等29名、計80名の参加があった。

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	平成21年7月～8月（6回実施）	献血まるわかりゼミ	血液センター	青少年（小中高生）	血液センター、献血バス等の施設見学を実施し、スライド等により血液及び献血についての体験学習を実施した。	参加者に血液、献血、血液センターの事等を理解していただくことにより、将来献血に協力いただける。

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	平成21年7月25日	海の博覧会における献血バス見学会	和歌山市和歌山港	親子	県赤十字血液センター主催で、親子連れが集まるイベント会場において、親子に献血バス乗車体験を実施し、献血の知識普及。（体験者105名）	

【鳥取県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鳥取県赤十字血液センター	H21.8.3～H21.8.7	献血おもしろセミナー	血液センター研修室 新日本海新聞中部本社 ビックシップ	小学校4年生～中学校3年生及び同保護者	血液について学習、施設見学、血液型判定、車両見学	

【島根県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
島根県 島根県赤十字血液センター	H21．８．２～５（３日間7回）	夏休み小学生親子血液センター見学体験教室	島根県赤十字血液センター	県内小学校５・６年生の親子	親子で血液や献血についての知識、興味や親しみを持ってもらうことを目的に、クイズを交えた講座と施設見学を実施	7回開催し169名の参加

【岡山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岡山県	H21．７．28～7．30 H21．８．３～８．６	夏休み 小学生親子血液センター見学体験教室	岡山県赤十字血液センター	小学校５・６年生 保護者	将来の献血者として、輸血医療を支えていただける小学生に、親子で献血や血液について、知識や興味をもっていただくと共に親しんでいただくことで献血思想の普及を図った。	県内４１３校の小学校に参加を呼びかけ、１２２校・６６４名（保護者を含む）の参加があった。

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H21.7.22～24（3日）	血液センター見学会 「なるほど献血教室」	血液センター	小学生・保護者	スライド学習，血液センター見学，献血クイズ 参加者271名（こども165名，保護者106名）	若年者及び保護者啓発

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	H21.7.22～H21.7.24	小学生親子血液センター見学教室	山口県赤十字血液センター(山口市)	小・中学生	血液の大切さを学び、将来の献血の推進につなげる	6回開催、34校（175名）
	通年	小学生等を対象とした「献血出前講座」	県内の小学校・中学校・高等学校	県内の小・中・高校生	血液の大切さを学び、将来の献血の推進につなげる	12回（393名）

【徳島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
徳島県	平成21年8月1日、2日	夏休み親子献血ゼミナール	徳島県赤十字血液センター	小学校と保護者	若年層対策として小学生と保護者を対象に血液の役割、献血の仕組み、血液の使われ方、血液センター見学等を実施し、献血の理解、関心を高める。	小学生と保護者116名の参加があり、献血への理解を深めることが出来た。

【香川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
香川県	H21.10～H21.12	献血出前講座	各小学校	小学4～6年生	希望のあった小学校に血液センター職員が出向き、学校の授業の一環として、献血に関する基礎知識の啓発を実施。	スライドやビデオを使って説明をすることでより具体的に献血のことを知ってもらうことができた。
	H21.8.4～8.6	小学生親子血液センター見学教室	香川県赤十字血液センター	小学4～6年生親子	献血に関する学習会を開催し、献血の大切さを学んでもらった。また、血液センター施設内の見学も実施。	スライドやビデオを使って説明をすることでより具体的に献血のことを知ってもらうことができた。

【愛媛県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛媛県	H21.8.5～H21.8.7	小学生親子血液センター見学体験教室	愛媛県赤十字血液センター 大街道献血ルーム 松山赤十字病院	小学校4年～6年生の児童及びその保護者	若年層への献血普及の一環として、「愛の血液助け合い運動」期間中である夏季において、献血年齢に満たない小学生を対象にして、思想普及を図るため開催し、血液のはたらきや血液センターの役割を理解していただき、献血に興味をもっていただくとともに、小学生の夏休みの宿題（自由研究等）を応援することを目的とする。	県内の小学校へポスター・チラシを配布し、参加者を募集した。 3日間で児童44人、保護者34人の合計78人が参加した。 （愛媛県赤十字血液センターと共催）
	H21.9.9	平成21年度献血推進協力団体等に対する厚生労働大臣表彰及び感謝状伝達式並びに知事感謝状贈呈式	愛媛県庁	県民	献血運動の推進に関し積極的に協力し、他の模範となる実績を示した会社、事業所、地域組織、学校等（以下「団体」という。）及び個人に対し、知事の感謝状の贈呈を行い、もって一層の献血運動の推進に資する。	献血運動の推進に功績のあった、34団体を表彰した。 （愛媛県主催・愛媛県赤十字血液センター共催）

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	H214.1～H22.3.31	青少年ふれあい事業（出前授業）	久留米市・朝倉市・宗像市等	小学生	献血と輸血のお話、輸血を必要としたお子さんのドキュメント、献血バスの車内見学、緊急車両の役割等のお話等。	

【佐賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
佐賀県	H21.8.21	夏休み社会見学	佐賀県赤十字血液センター（佐賀市）	小学生とその親	・佐賀新聞社主催の社会見学の一環 ・DVD放映、血液センター、献血バスの見学	新聞社主催であり、幅広く参加を呼びかけることが可能だった。

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県赤十字血液センター	H21.8.2	夏休み親子献血教室	献血ルームOASIS21、九州血液センター	小学生親子	県内の小学生親子に参加してもらい、血液と献血についての研修と献血ルームの見学、九州血液センターにおける検査・製剤の工程の見学により、若年層への献血の啓発を目的とする。	県内の小学生親子12組29人が参加

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県赤十字血液センター	H21.8.7	夏休み親子献血教室	宮崎県赤十字血液センター	小学生とその保護者	小学生に対して献血と血液の学習を通じて、命の尊さと、家庭・学校・地域社会に貢献できる心を育てる	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成21年８月６日～８日	楽しく学ぼうキッズ献血	鹿児島県赤十字血液センター	小学生（高学年）及び保護者	将来の献血者確保のため，小学生(高学年)に対し，献血の重要性や血液センターの役割について理解を深めてもらうことを目的に，献血の模擬体験や施設見学等を行った。	
	平成21年４月1日～平成22年３月31日	PTA献血	各小学校，中学校	小・中学生の保護者等	日曜参観やバザーなどの機会をとらえて，保護者を中心に地域の方々にも広報を行い献血を実施した。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県 沖縄県赤十字血液センター	H22.3.4	献血教室	伊良波小学校	６年生	小学生を対象とした献血普及啓発用の冊子を活用し、献血教室を開催	

②複数回献血者となってもらうための重点的な啓発・施策

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	平成２１年９月～１１月	全道統一成分献血推進キャンペーン	北海道ブロック各固定施設	複数回の成分献血経験者	血小板製剤の供給増に伴い、成分献血推進キャンペーンを行う。主に複数回者を対象とした企画であり、協力いただいた方へ日ハムグッスを処遇品として提供した。期間中複数回協力いただけるように第1段～3段まで設け実施。	3ケ月間の前年同時期対比１１０．３%と計画、前年度実績共に上回る状況であった。
	通年	誕生日献血・また来て献血キャンペーン	北海道ブロック各固定施設	全血及び成分献血協力者	献血経験者へ次回の協力に繋がるようにキャンペーンを行い複数回に結びつける。（DMによる誕生日献血案内、成分献血では、ポイント特典制によるキャンペーンを実施）	

【青森県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
青森県	H21.6	献血協力依頼	県内一円	献血協力事業所	県献血推進協議会長名（知事）で、各協力事業所へ、400mL献血の協力を文書にてお願いした。	県内献血協力事業所：１，５００箇所
	H21・8・4	献血感謝の集い	青森駅前ビルアウガ5階イベントホール	県民	「愛の血液助け合い運動」の一環として開催。大臣賞伝達・知事賞贈呈・日赤有功章伝達・「ありがとう！って　いっぱい言わせて」放映・ミニコンサート。県民の献血への理解を深めてもらう。	参加者　約２００名

【宮城県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮城県	H21.6.1～H21.8.31（募集） H21.11.18（表彰式） H22.2.16～H22.3.15（ラジオCM放送）	愛の献血７０字ストーリー募集事業	・県内の高等学校、市町村、保健所及び献血ルーム・バス等に応募用紙及びポスターを配布 ・インターネット、郵便等を利用（募集） ・「献血者に感謝する集い」で表彰 ・入賞作品によるラジオCM放送実施	若年層を中心に幅広い年代	献血思想の普及と献血意識の向上を図るため、「献血」に関するショートストーリー仕立てにした作品を募集し、優秀作品を表彰するとともに、入賞作品によるラジオCM広報を行う。	県内の高等学校108校に応募を呼びかけるなどし、109通の応募があった。
宮城県赤十字血液センター	H21.6.11～H21.7.21	血液センター施設見学会	宮城県赤十字血液センター	各献血推進団体	献血推進、協力団体に対して、献血後の血液の処理工程等を見ていただくことで、献血活動の重要性等について更なる理解を深めていただくことを目的として実施	3回開催で70名参加
	H21.7.26～H21.8.20	高校生献血ボランティア体験	県内献血会場	高校生	高校生への献血啓発として献血ボランティア体験の場を設け参加を呼びかけた。主に県内移動献血会場で献血呼掛けのボランティアを行った。	期間中5会場で18名のボランティア体験者があり献血の重要性等を感じていた。
	通年	献血出前講座	県内の高等学校、専門学校、大学、事業所等	若年層を中心に幅広い年代	血液センター職員が各学校、事業所等に出向き献血の講座を行うことで献血啓発を行った。	8会場、参加者約1,260名と多くの参加者が真剣に講座を聞いてくださった。
	H21.8.26～H21.8.28	仙台市幸町中学校職場体験	献血ルームAER２０	中学2年生	若年層の献血啓発、普及を目的として実施	2名参加

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	通年	通年を通しての啓発	各献血会場	全ての献血者	血液センター情報誌「ピエノ」に複数回献血の意義とメール会員登録案内を掲載し、募集に努めた。	少しずつではあるが、登録者が増えている。

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	H21.6.24～H22.3.31	複数回献血協力事業所訪問	・県内の複数回献血に協力する事業所等	・事業所職員 ・学生ボランティア（高校生）	市町村、血液センター、県の三者が一体となって献血協力事業所を訪問。献血協力事業所宣言の楯を贈呈し、継続的な複数回献血の受入を要請。 　なお、若年層の献血離れが顕著であることから、地域企業の社会貢献を体験学習してもらうとともに献血思想の意識高揚を図るため、高校生等ボランティアを「一日ヤング献血大使」に任命し、事業所訪問に同行。	市町村、血液センター、地元の高校生ボランティアの協力を得て、複数回献血協力事業所訪問を実施。（訪問件数：４６事業所） 一日ヤング献血大使を２１名（８高校）任命。１４市町村の献血担当者も同行。
	通年	複数回献血クラブ会員の拡大、献血ポイントカード制度、成分献血キャンペーン	福島県赤十字血液センター	献血協力者	複数回献血クラブ会員の推進及び各種キャンペーン等により複数回献血の推進を図る。	

【栃木県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
栃木県	平成21年6月6日（土）～7日（日）	「県民の日」献血キャンペーン	栃木県庁舎内　県民広場（宇都宮市）県民の日記念イベント会場内	県民	栃木県医薬品配置協会や栃木県学生献血推進連盟「かけはし」の協力を得て、県民に対し、献血の普及啓発を行うとともに、移動採血車による献血を行うことにより、「献血思想」の意識の醸成を図る。	来場者：約2，000名 献血者数：97名
	平成21年7月	「愛の血液助け合い運動」キャンペーン	県内	県民	ラジオやテレビによるスポットCM放送や県政広報誌への記事掲載により、400mL献血及び成分献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	
	平成21年7月17日（木）	献血功労者表彰式	とちぎ福祉プラザ（宇都宮市）	県民	献血に功績のあった個人又は団体の表彰を行うとともに、一般県民も参加可能な記念コンサートを開催し、県民に対して、献血の普及啓発を図る。 第1部　式典　献血功労者の表彰 第2部　アトラクション　日本の歌とオペラの名曲	参加者：約150名
	平成21年8月1日（土）～31日（月）	チャレンジ！400ml献血＆成分献血　　キャンペーン	うつのみや大通り献血ルーム、栃木県赤十字血液センター、県内献血会場	県民	血液が不足する時期に献血者を確保するため、実施期間中に初めて「400mL献血」または「成分献血」に協力いただいた方にオリジナル記念品を贈呈し、県民各層の間に献血思想の普及を図る。	初回献血者 ・400mL献血　496名 ・成分献血　　222名
	平成21年10月4日（日）	「ヒューマンフェスタとちぎ」献血キャンペーン	マロニエプラザ（宇都宮市）	県民	栃木県学生献血推進連盟「かけはし」の協力を得て、啓発物資の配布、移動採血車による献血等を実施することにより、県民に対して、献血の普及啓発を図る。	来場者数：1，000名 献血者数：45名
	平成22年1～2月	「はたちの献血」キャンペーン	・成人式　各市町の会場 ・シネアド　TOHOシネマズ宇都宮及び109シネマズ佐野	新成人を中心に幅広い年代	各市町で開催する成人式でのリーフレット配布やラジオ・テレビによるスポットCM放送のほか、県内2か所の映画館でシネアドの放映を行うことにより、若年層を中心とした幅広い世代に献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	・新成人へのリーフレット配布数　　22,401枚 ・シネアド放映回数　延べ約900回

【群馬県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
群馬県	通年	献血メールクラブ登録推進	各献血会場	献血者	献血メールクラブ会員募集リーフレットを特製クリアファイルに差込み、各街頭献血会場にてメールクラブ未登録者に配布。	登録者数：約5,400名
	H21.4.1～H22.3.31	緊急献血要請	県内街頭献血会場	献血メールクラブ会員	Rhマイナスの需要に応じて献血メールクラブ新着情報（トピックス）への掲載とRhマイナスのメール会員へ献血要請を配信。	依頼対象者：160名
	H21.11.23	献血感謝Day	イオンモール高崎	献血者	県内の献血者を対象に献血功労者表彰式・健康相談・AED講習会等のイベントを実施。イベント内ブースに献血メールクラブ新規会員募集コーナーを設置し複数回献血の必要性を訴え新規会員募集を行った。	来場者数：280名 新規登録者数：58名

【埼玉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
埼玉県	H22．3．31まで	「携帯メールクラブ」新規会員募集キャンペーン	県内献血ルーム他	県民	このキャンペーン中、埼玉県内の献血ルーム等で献血しeメールで「携帯メールクラブ」に登録した献血者にオリジナル携帯クリーナーをプレゼントする。その後登録した献血者に必要に応じ献血協力を要請する。	

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.10.3	複数回献血クラブ	イオンモール成田「イオンホール」	県民	複数回献血くらぶ会員を対象に「赤十字セミナーinちば2009」を実施した。	7名参加

【東京都】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
東京都	H21.6.1～H21.12.30 （募集） H21.8.1～H22.4.30 （要請）	献血サポーターキャンペーン	東京都内献血ルーム	400ml献血者	6月から12月の期間に来場した献血者を対象として8月から4月に実施するサポーターキャンペーンに応募する方を募集する。応募者の中から抽選を行い当選者に記念品をプレゼントする。	
	H21.4.1～H22.3.31	チャレンジ成分キャンペーン	東京都内献血ルーム （全血ルームを除く）	ルーム来所献血者	献血者の中で全血献血者を対象に、献血ルームへの来場期間を短縮し、需要動向に応じて成分献血・全血献血に種別変更が可能な献血者を確保し、複数回献血につなげる。（今年度にて終了）	
	H21.4.1～H22.3.31	A・MOKUキャンペーン	東京都内献血ルーム （全血ルームを除く）	ルーム来所献血者	各献血ルームにおける受入状態で、午前中閑散状態となるため、閑散時対策の一環として午前中の献血者の誘導が必要不可欠である。また、需要動向の曜日別を考えると木曜日を強化すべきである。そのため午前中及び木曜日の献血者を増やすことにつなげる。	
	H21.4.1～H22.3.31	成分1・2・3献血キャンペーン	東京都内献血ルーム （全血ルームを除く）	ルーム来所献血者	各献血ルームにおける受入状況の中で1人の献血者が何回でも献血ルームに来ていただける複数回献血者の増強を図る。（今年度にて終了）	
	H21.4.1～H22.3.31	全血1・2献血キャンペーン	東京都内献血ルーム （全血ルームのみ）	ルーム来所献血者	各献血ルームにおける受入状況の中で1人の献血者が何回でも献血ルームに来ていただける複数回献血者の増強を図る。（今年度にて終了）	
	H21.4.1～H22.3.31	携帯メールクラブ予約キャンペーン	東京都内献血ルーム	ルーム来所献血者	携帯メールクラブ会員募集と、メールでの成分献血予約を推進するためにキャンペーンを実施。期間中、メールで成分献血予約をした会員と、400ml献血のメール依頼に協力された会員に記念品を進呈する。	通常月平均：1924 キャンペーン期間月平均：2784
	H22.3.22	医学講演・赤十字救急法（AED)短期講習会 ”サンクスドナーAED”	日本赤十字看護大学　1回	携帯メールクラブ会員	日頃の献血への協力に対するお礼として、携帯メールクラブの会員を対象とする医学講演と赤十字救急法講習会を開催し献血の重要性とAEDの使用法を含めた心肺蘇生法について理解・習得いただく。	
	H21.9.1～H22.3.31	携帯メールクラブ会員募集キャンペーン （もやっとキーパズル）	移動・出張採血現場・都内各献血ルーム	移動・出張採血現場・ルーム来所献血者	携帯メールクラブのPRと会員募集を目的としてキャンペーンを実施。期間中、献血された方に簡単なパズル「もやっとキーパズル」を配布。「もやっとキーパズル」を解答し、携帯メールクラブに会員登録された方は、次回献血時に記念品を進呈する。	新規登録者数：通常月：1062 配布月：1987
	H21.9.1～H22.4.30	携帯メールクラブ限定 ポイントキャンペーン	東京都内献血ルーム	携帯メールクラブ会員	複数回献血クラブシステムの会員検索機能、ポイント加算、減算機能を活用し、携帯メールクラブ会員の献血協力（応諾、成分予約）の度に、ポイントを付加し規定のポイントに達した会員にメールを配信し、ポイント記念品を進呈する。携帯メールクラブの登録会員を増加させ、メールによる効率的な献血要請を行い応諾者の増加とともに複数回献血の推進を図ることによって、需要に応じた輸血用血液の安定的な確保を目的とする。	通常月平均：8,000／月 キャンペーン期間月平均：9,550／月
	H21.10.1～H22.4.30	都内献血リーピートキャンペーン	移動・出張採血現場・都内各献血ルーム	移動・出張採血現場・ルーム来所献血者	移動採血現場での献血協力者に携帯クリナーを配布し、次回そのクリーナー持参の上再度献血に協力してくれた方に記念品を進呈する。年2回以上の複数回献血者の増加を目的とする。	

【神奈川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
神奈川県	平成21年11月28日	神奈川県献血推進功労者等表彰式	横浜市教育会館	献血推進功労者、献血の絵ポスター展入賞者等	献血の推進に功績のあった団体及び個人、献血の絵ポスター展の入賞者等を表彰。	参加者：約500人

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.4 H22.1	大学生への働きかけ【新規】	県内大学	県内大学生	入学オリエンテーション時に献血への理解と協力を働きかけた。また、献血啓発用のリーフレットを配布した。	県内4大学、延べ約700名の新入生へ呼びかけ。
	H21.4	ポスターの作成・配布	献血協力企業など	一般県民	若者等に人気のあるJリーグリビジョン2の選手を起用したポスター等を作成し、献血の意識啓発に努めた。	
	H21.7・8 H22.1・2	ショッピングセンターでの懸垂幕掲示	富山駅前のショッピングセンター	一般県民	富山駅前の商業施設を活用し、献血啓発用の懸垂幕を掲示し、献血思想の普及を行った。	
	H21.7	献血啓発用「ジャンボ黒板消し」の配布	県内全高校	県内高校3年生	若年層への献血意識を高めるため県内の高校、高専の3年生全クラスに配布した。	59校、282クラスへ配布。
	H21.8.2	サマー献血キャンペーン	ショッピングセンター	一般県民	夏場の血液不足解消のため、学生ボランティア主催によるキャンペーンを実施した。	
	H21.12.6	全国学生クリスマス献血キャンペーン	ショッピングセンター	一般県民	年末年始の血液確保のため、学生ボランティア主催によるキャンペーンを実施した。	
	H22.1.2～1.31	駅コンコース踏込広告設置	JR富山駅コンコース	一般県民	はたちの献血キャンペーン期間中に、駅のコンコースへ広告を設置し献血意識の高揚を図った。	
	H22.1.8	はたちの献血キャンペーン	県名各地ショッピングセンター、駅など	一般県民	冬期における血液不足の解消のため、街頭キャンペーンを実施し、広く県民に理解と協力を求めた。	
	H22.1.11	「はたちの献血キャンペーン」イベント	ショッピングセンター	一般県民	ラジオ公開生放送による献血啓発活動及びLOVEメール会員募集イベントを実施した。	

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	通年	複数回献血クラブIBUKIへの加入促進	血液センター	若年層を中心に幅広い年代	・複数回献血クラブIBUKIへの入会を積極的に促進し、入会者の携帯電話に献血情報をメール配信している。 ・会員限定の映画試写会等のイベントを開催	
	通年	ポイント制報償制度	血液センター	成分献血協力者	ポイントに応じて記念品贈呈	
	通年	サンクス献血キャンペーン	献血会場	初回献血者	初回献血者に、血液センター所長からのお礼状等を送付し、年内の再協力をお願いしている。	

【長野県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長野県	駒ヶ根：H21.10/23～25 佐久：H22.1/9～11 飯田：H22.2/27～28 中野：H22.3/13～14	献血ルーム体験運動	駒ヶ根市、佐久市、飯田市、中野市内の大型店舗	県民（来客者、通行人）	血液センターが無い地域の大型店舗内に臨時の献血ルームを設置し、献血を体験する機会を設けるとともに、会場周辺でチラシ配布などの啓発活動を行った。	献血者数：駒ヶ根　130人 佐久　334人 飯田　200人 中野　144人

【愛知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛知県	平成21年7月1日～平成22年3月31日	400mL複数回献血キャンペーン	愛知県内の献血会場	400mL献血可能な県民全般	複数回献血者の割合を増加させ、安全で良質な血液を安定的に確保するため、特に400mL複数回献血者層を拡大することを目的とする。	・啓発用ポスターを5,000枚作製し、県内各地に掲示するとともに、キャンペーンの記念品12,000個を配布した。

【三重県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
三重県 三重県赤十字血液センター	平成21年7月～8月	愛の血液助け合い運動	県内各キャンペーン会場（12箇所）	一般県民	啓発パンフレットおよび資材を配布しながら広く呼びかけを行った。	
	平成21年12月	クリスマス献血キャンペーン	県内各キャンペーン会場（4箇所）	一般県民	啓発パンフレットおよび資材を配布しながら広く呼びかけを行った。	
	平成22年1月	はたちの献血キャンペーン	県内各キャンペーン会場（2箇所）	一般県民	啓発パンフレットおよび資材を配布しながら広く呼びかけを行った。	
	平成22年1月～2月	ウインター献血キャンペーン	県内キャンペーン会場（10箇所）	一般県民	啓発パンフレットおよび資材を配布しながら広く呼びかけを行った。	
	平成22年2月～3月	スプリング献血キャンペーン	県内キャンペーン会場（5箇所）	一般県民	啓発パンフレットおよび資材を配布しながら広く呼びかけを行った。	
三重県赤十字血液センター	平成21年11月	ライオンズクラブ国際協会334－B地区　献血推進研修会	ホテルグリーンパーク津	県内ライオンズクラブの献血担当者	県内ライオンズクラブを対象に、今後の献血奉仕活動に生かすための事例発表及び講演	
	平成21年4月～3月	献血インフォメーション	FM三重による週2回の生放送	一般県民	固定施設の紹介、移動採血車の予定、不足している血液型などのリアルタイムな情報、献血に関するトピックスなど献血者を確保する。	
	平成21年7月～3月	月変りスイーツフェアー	母体のみ	成分・400mL献血者	母体にて成分・400mL献血者に月変りでスイーツを召し上がっていただく。特に成分の複数回献血者の増加を目的とする。	
	平成21年4月～3月	複数回献血キャンペーン	移動バス	400mL献血者	移動献血現場にて、21年4月から献血2回目の方に記念品をプレゼントする。年2回以上の複数回献血者の増加を目的とする。	

【滋賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
滋賀県	平成21年7月26日	湖北長浜1000人献血運動	長浜勤労者総合福祉センター臨湖周辺	周辺住民	湖北長浜1000人献血の会による献血啓発活動	169人の献血者

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府	H21.7.31	大阪府知事感謝状贈呈式 (厚生労働大臣表彰状・感謝状伝達式同時開催)	KKRホテル大阪	献血に功績のあった団体並びに個人	大阪府知事感謝状の贈呈並びに厚生労働大臣表彰状感謝状の伝達。	
	H21.7.1～H21.7.31	愛の血液助け合い運動	府内一円	府民	府内市町村及び市町村献血推進協議会を中心に街頭キャンペーン、機関紙等への広報掲載等を実施。	
	H21.12.1～ H21.12.31	大阪府献血推進月間	府内一円	府民	府内市町村及び市町村献血推進協議会を中心に街頭キャンペーン、機関紙等への広報掲載等を実施。	
大阪府 日本赤十字社 大阪府支部 大阪府赤十字血液センター	H21.12.1	大阪府献血感謝のつどい	エルおおさか	献血にご協力いただいた団体並びに個人等	献血に多大なご協力をいただいた団体等の表彰及び記念講演。	
大阪府赤十字血液センター	H21.9.27～H21.11.22(計5回)	ウォーキング教室	大阪府赤十字血液センター	けんけつE倶楽部会員	クラブ会員の健康促進を目的として、ウォーキング教室を開催。	
	H22.1.18～H21.2.2.8(計4回)	ヨーガ教室	大阪府赤十字血液センター	けんけつE倶楽部会員	クラブ会員の健康促進を目的として、ヨーガ教室を開催。	
	H22.2.27	講演会と音楽ライブ	大阪城ホール・コンベンションホール	けんけつE倶楽部会員	・講演「ストレスで起こる病気とその予防」。 ・ピアノ弾き語りライブ。 ・バイオリン演奏。	
	H21.4.1～H22.3.31	献血ルームにおける各種キャンペーン	大阪府内の献血ルーム（計10箇所）	府民	・ネイルケア、マッサージ、ハンドトリートメントサービス等。 ・抹茶とお菓子のサービス、モーニングキャンペーン等。 ・「生け花」の実演会、手相占い等。	

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県 兵庫県赤十字血液センター	年間随時	複数回献血クラブ「プラス１献血クラブ―HYOGO-」		県民	複数回献血クラブ「プラス１献血クラブ―HYOGO-」の会員募集、周知。	
	H21年11月	18歳の献血キャンペーン	県下の高等学校	県下の高校3年生	県下の高校3年生全員にキャンペーンリーフレットを配布し、献血への参加を呼び掛けた。県教育委員会、私立中学高等学校連合会の後援名義を得る。	県下の全高等学校232校の3年生約50,000人にリーフレットを配布。初回・複数回を問わず、献血協力全般について呼びかけ。
兵庫県赤十字血液センター	H21年4月～H22年2月	ネイルケア・ハンドマッサージ	ミント神戸15献血ルーム	献血者（女性限定）	ヒューマンアカデミー神戸校学生による。毎木・金曜日（3時間）※国庫補助事業	参加者数754人。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	H21年4月～H22年1月	スポーツマッサージ	ミント神戸15献血ルーム	献血者	ヒューマンアカデミー神戸校学生による。毎火曜日（午後の3時間）※国庫補助事業	参加者数608人。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	〃	盆点前（抹茶と和菓子のサービ	ミント神戸15献血ルーム	献血者	（財）エム・オー・エー美術文化財団による。毎月第一木曜日（30人限定）	参加者数300人。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	H21年4月～H22年1月	ハッピータイムキャンペーン	三宮センタープラザ献血ルーム	献血者	午前中の献血者確保を目的にミニクロワッサンを提供	午前中の受付数が全体の28．6%を占め、前年度を上回る採血数になった。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	H21年8月6日	血液センター見学会	ミント神戸15献血ルーム	献血者	献血いただいた血液が患者のもとへ届けられるまでの検査、製剤、供給（血液の保存）を血液センターにて見学	参加者数22人。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	H21年9月～H22年12月	平日献血ルームに行こうキャンペーン	全献血ルーム	献血者	冬季の献血ルームにおける安定的な献血者確保を目的に次回平日に献血いただいた方に記念品を進呈	前年に比し、11月813人、12月522人、1月440人の平日の献血者が増になった。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。
	H21年4月～H22年1月	ハッピータイムキャンペーン	三宮センタープラザ献血ルーム	献血者	午前中の献血者確保を目的にミニクロワッサンを提供	午前中の受付数が全体の28．6%を占め、前年度を上回る採血数になった。初回献血者の取り込み目的も兼ね併せている。

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	平成21年5月～9月	ホップステップジャンプキャンペーン	献血現場	全献血者	メール会員に入会した方に、次回からの献血毎に3段階で記念品を進呈する。	メール会員1,751名の増加及び献血者の増につながった。 （1,796人→3,547人） （21年5月～22年3月）

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	年中			献血協力者	県血液センターでは、「複数回献血クラブ」の募集を推進するため、献血現場にてPRのちらしを配布している。会員には、各種サービスの案内をし献血推進を図る。県においても、献血者に啓発物品を配布する等献血推進を図っている。	

【岡山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岡山県	H21．5．1	鉢花贈呈式	岡山県赤十字血液センター	寄贈者： 岡山県インドアグリーン協会	ゴールデンウィーク中の血液の安定的確保を目的として、みどりの日に合わせ、同協会より鉢花を寄贈していただき、当日、いただいた鉢花を献血者にプレゼントした。	岡山県インドアグリーン協会より鉢花２５０鉢をいただき、血液センターと献血ルームにおいてプレゼントした。

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H21.7.1～7.31	愛の血液助け合い運動	県内全域	全県民	懸垂幕掲示，ポスター配布，広報誌，ホームページ等による広報活動実施，献血ルーム前で献血呼びかけ（7/1）	計画的な年間献血者の確保
	H21.4.1～6.18（募集）	献血推進ポスター募集	県内全域	中・高校生	応募総数284名（中学生251名，高校生23名） 最優秀賞１点，優秀賞５点，佳作１０点選出	若年層への献血啓発
	H22.1.1～2.28	はたちの献血キャンペーン	県内全域	全県民	ポスター配布・掲示 チラシ作成及び成人式で配布 県広報誌による広報 街頭献血（H22.1.11）	若年層への献血啓発

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	通年	パンフレットの配布	献血会場	献血者	１年間に複数回の献血をしていただく	登録者数1,581人（H22.2）

【徳島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
徳島県	平成21年7月末～ 平成22年3月31日	けんけつ「ハートメッセンジャー」事業	保健所、市町村窓口	若年層を中心に幅広い年代	複数回献血クラブの会員数の増加を図ることを目的に、タウン誌、リーフレット等の印刷物にQRコードを掲載し、携帯電話から簡易にアクセスできるような環境整備に努める。	登録者数の増加

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	H22.2.1～H22.3.18	足つぼマッサージ	福岡県北九州血液センター	献血者依頼要請可能者	週2回　月耀と水曜の午前11時30分まで先着20名様限定	
	H214.1～H22.3.31	メールクラブ、PCクラブ		登録者	メール配信を利用した献血要請	

【佐賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
佐賀県	H21.8.3	献血ふれあいフェスタ	ゆめタウン佐賀（佐賀市）	一般、献血表彰者	・献血推進協力団体に対する感謝状等の伝達、贈呈 ・地元アーティスト等によるミニライブ ・ダンスステージ ・献血バスによる献血（献血者142人）	ラジオ局に委託することにより、ラジオでのCM放送等も行われた。 血液センターとの共催
	H21.7.11～12	サマー献血キャンペーン	ジョイフルタウン鳥栖（鳥栖市） ゆめタウン佐賀（佐賀市）	一般	・学生献血推進委員会によるイベント ・献血バスによる献血 ・献血者に風船、ジュース等を配布	
	H21.12.12～13	クリスマス献血キャンペーン	ゆめタウン佐賀（佐賀市）	一般	・学生献血推進委員会によるイベント ・献血バスによる献血 ・ゲーム大会 ・献血者にジュース、菓子等を配布	

【熊本県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
熊本県	年間（6か所×１週間）	移動献血ギャラリー	繁華街、大型ショッピングセンター等の展示スペース	一般	パネル等を展示して400mL献血や成分献血の重要性並びに血液に関する正しい知識を県民各層に広げることを目的とする	
	H21.7.1～8.31	愛の血液助け合い運動	県内一円	一般	運動月間中に市町村、学生献血推進協議会及び献血協力団体等と連携を図って、広報誌、大型ビジョン、懸垂幕、各種広報資材を活用して、広く県民各層に献血への理解と協力を求める。	
	H21.12.13	学生クリスマス街頭キャンペーン	大型ショッピングセンター	一般	学生献血推進協議会と協力して、同世代の若者を中心に献血への協力を呼びかける。	
	H22.1.1～2.28	はたちの献血キャンペーン	県内一円	一般	キャンペーン期間中に市町村、学生献血推進協議会及び献血協力団体等と連携を図って、広報誌、大型ビジョン、懸垂幕、各種広報資材を活用して、若者を中心に広く県民各層に献血への理解と協力を求める。	
	H21.1.11	成人の日街頭キャンペーン	市中心部アーケード街	若者及び一般	学生献血推進協議会と協力して、同世代の若者を中心に献血への協力を呼びかける。	
	H22.1.27	献血500万人記念セレモニー	熊本県赤十字血液センター	一般	熊本県での献血者数が500万人を突破したのに伴い、これまで御協力をいただいた献血者や企業・団体に対し感謝を伝えると友に、改めて献血の重要性を訴えることで、今後ますますの献血協力と新規献血者獲得を推進する。	
	H22.2.1～2.28	献血500万人記念キャンペーン	県内一円	一般	熊本県での献血者数が500万人を突破したのに伴い、これまで御協力をいただいた献血者や企業・団体に対し感謝を伝えると友に、改めて献血の重要性を訴えることで、今後ますますの献血協力と新規献血者獲得を推進する。	
	H22.3.18	献血500万人記念トークショー	熊本市内	一般	熊本県での献血者数が500万人を突破したのに伴い、これまで御協力をいただいた献血者や企業・団体に対し感謝を伝えると友に、改めて献血の重要性を訴えることで、今後ますますの献血協力と新規献血者獲得を推進する。	

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県 宮崎県赤十字血液センター	H22.1.4～2.26	複数回献血クラブ会員増強キャンペーン	献血ルーム「カリーノ」	複数回献血クラブ会員	複数回献血クラブ会員にフットスパサービスや記念品を提供	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成21年4月1日～	複数回献血の普及啓発	献血会場（県内全域）	献血者（一般県民）	初回の献血時，献血会場で複数回献血への協力を依頼するとともに，2回目の献血が可能となるころに，献血をハガキで呼びかける。	
	平成21年10月15日～	複数回献血の普及啓発	献血会場（離島を除く県内全域）	献血者（一般県民）	国の緊急雇用創出臨時特例基金を活用し，県赤十字血液センターに臨時職員を雇用して献血会場における複数回献血クラブの普及啓発を行った。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県赤十字血液センター	H21.12.8～H22.2.25	足つぼマッサージ	血液センター	複数回献血クラブ会員及び新規会員	複数回献血者への献血協力サービス	

③市町村における献血推進協議会の設置の推進

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	平成２１年１２月	北海道献血推進担当者会議	札幌市	道内市町村、保健所、血液センター担当者	北海道献血推進計画を策定するため、各市町村及び血液センターと協議を行うことを目的として開催する。	

【青森県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
青森県	H21.2.10	市町村献血推進事業担当課長会議	青森市	市町村の担当課長	青森県献血推進計画（案）及びバス稼働計画（案）の説明と、協議会の設置をお願いした。	40市町村

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	１月～３月	保健医療福祉協議会献血推進部会等での市町村への働きかけ	県内各保健所	市町村献血担当者	保健所管内の献血計画を策定する献血推進部会において、各市町村に対し、献血推進協議会の設置を働きかけている。	

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	H21.12.22	市町村献血担当課長会議	日本赤十字社福島県支部	市町村献血担当課長会議等	市町村献血担当課長会議等で協議会の設置状況及び設置の推進を図る。	59市町村中のうち市町村で設置。

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県					各市町村及び各種団体の理解を得ながら設置に向けて協力を求めた。	

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.4	市町村担当課長会議の開催	富山県赤十字血液センター	市町村担当課長	各市町村に協力を依頼。	

【静岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
静岡県	H21.6.11	市町献血推進主管課長等会議	日赤県支部会議室	市町献血担当課長（担当者）	県、市町村、血液センターの担当者との意思疎通を図るための会議を開催。その中で市町献血推進協議会の活動を行うよう要請している。	

【愛知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛知県	平成21年7月1日	平成21年度献血推進担当者会議	名古屋第一赤十字病院　内ヶ島講堂	市町村献血推進担当者	県内市町村の献血推進担当者を集め、血液事業の現状についての説明を行い、知識の向上や献血推進協議会設置についての理解を求める。	市町村職員45名が出席

【京都府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
京都府	２１年１０月２０日	献血推進協力団体等表彰式	京都府公館	献血推進協力者等被表彰者	献血推進協力団体・個人の表彰	団体表彰１２団体、個人表彰４人

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府	H21.6.16	市町村献血推進担当者会議	大阪赤十字会館	市町村及び献血推進協議会担当者	献血の現状及び府献血推進計画等の説明。	全市町村に献血推進協議会は設置済み。
	H22.3.25	市町村献血推進協議会会長会議	大阪赤十字会館	献血推進協議会会長等	献血の現状及び府献血推進計画等の説明。	全市町村に献血推進協議会は設置済み。

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県			市町献血担当者会議等	市町	休止中の協議会の再会若しくは設置の呼びかけ	市町合併による広域化、財政事情により、困難を極めている。

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	H21.6.16	市町村・保健所献血事務主管課長及び担当者会議	奈良県医師会館	市町村・保健所献血事務主管課長及び担当者	市町村・保健所献血事務主管課長及び担当者向けに会議を実施し、献血推進協議会の設置の必要性を訴える。またキャンペーン等の協力を呼びかける。 会議において、血液センター所長より1時間程度の講演をして頂いている。	

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	2月上旬	保健所、市町村担当者会議	県立保健所等5ヶ所	保健所、市町村担当者	平成22年度の献血推進計画(案)を示し、各保健所単位の地区協議会でその地域にあった取り組みを協議するよう依頼。各市町村の取り組みの情報交換した。	

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H21.10.19	献血推進担当者会議	広島県庁	市町担当者 県保健所担当者	移動献血計画の策定	同左

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	年1回（まちまち）	各献血推進協議会	各市町	官公庁・事業所等	前年度の実績説明、当年度のお願い	市町等の合併により協議会が開催されなくなる場合がある。
	H22.2.17	平成21年度市町・健康福祉センター献血担当者会議	県庁	市町・健康福祉センター担当者	協議会の状況と活性化のための意見交換等実施	

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	H21.7.7～H21.7.27	ライオンズクラブ並びに市区町村献血推進担当者合同研修会	久留米市 福岡市 北九州市 飯塚市	ライオンズクラブ、市区町村献血担当者及び献血推進協議会	昨年度の献血実績を報告し、今後の献血推進事業について説明を行った。	
	H21.10.15 H21.10.21	ライオンズクラブ並びに市区町村担当者合同献血推進研究会	福岡市 北九州市	ライオンズクラブ、市区町村献血担当者及び献血推進協議会	血液事業について研修を行うほか、ライオンズクラブ及び市町村担当者による献血に関する事例報告を行い、献血思想の普及啓発を図った。	
	H22.2.23	保健所並びに市区町村献血推進担当者会議	福岡県吉塚合同庁舎	保健所、市区町村献血担当者及び献血推進協議会	次年度の献血推進計画を説明し、市町村献血目標について理解と協力を求めた。	

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県	H21.6.5	保健所・市町村献血担当主管課長会議	大分県赤十字血液センター	保健所・市町村献血担当課長等	前年度の献血状況及び当該年度の献血目標を説明。献血推進先進地から講師を招き、講習を行うことによって市町村の取り組みを促した。	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成２１年６月４日～５日	市町村・保健所献血推進主管課長及び担当者会議	鹿児島市	市町村・保健所献血推進主管課長及び担当者	保健所及び市町村担当者に対して，平成21年度県献血推進計画の説明を行い，目標達成に向けて協力を求める。 献血推進協議会の再構築と活動強化を要請した。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県	H21.6.8	市町村血液事業担当課長会議	県庁	市町村血液事業担当課長	未設置市町村については、会議等で協議会の設置を促す	

④より多くの企業の協力を得るための取組

【岩手県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岩手県	H21.7.30	献血推進協力団体等に対する厚生労働大臣及び感謝状伝達式並びに知事及び日赤支部長感謝状贈呈式	サンセール盛岡	献血推進協力団体及び個人	献血の推進に積極的に協力し、他の模範となる団体及び個人に対し、知事及び日本赤十字社岩手県支部長連名の感謝状を贈呈した。併せて厚生労働大臣表彰・感謝状の贈呈を行った。	・大臣表彰　1団体 ・大臣感謝状　4団体 ・知事・日赤支部長感謝状　11団体
	H21.7	愛の血液助け合い運動	県内一円	県民	啓発ポスターを各保健所、市町村等に配布した他、県政番組を活用し啓発を図った。	・ポスター　計1,600枚配布 ・7/4　TV県政番組放送　1件
	H22.1～2	はたちの献血キャンペーン	県内一円	県民	啓発ポスターを各保健所、市町村等に配布した他、ラジオ、広報誌等により啓発を図った。	・ポスター　計2,200枚配布 ・1/8 ラジオ放送　1件 ・雑誌広告　2件

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	通年	通年を通して登録を推進	各献血協力事業所	各献血協力企業	血液センター情報誌「ピエノ」に献血サポーター企業の意義と参加頂いている企業の代表者からのコメントをいただき募集に努めた。	勤務時間中に献血の依頼があっても、抜け出すことができない状況であった。企業の代表者の決裁のもと加入したことで、勤務中であったも総務の許可を得ることができた、との声があり献血依頼を行う上で大きな意義があると思う。

【山形県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山形県	通年	献血サポート団体の育成		県内事業所等	献血に協力的な事業所等を市町村ロビー等に掲示することにより顕彰を行い、本県における事業所等が行う献血活動のより一層の推進を図った。	登録事業所等81団体 （H22.3.31現在）
	H21.7.21	献血功労団体等知事感謝状贈呈式	山形県庁	献血功労団体	献血の推進に積極的に協力し、その実績が顕著で他の模範となる団体及び個人に対し、知事感謝状の贈呈を行った。併せて厚生労働大臣表彰・感謝状贈呈の伝達を行った。	知事感謝状贈呈　23団体

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	H21.6.24～H22.3.31	複数回献血協力事業所訪問	・県内の複数回献血に協力する事業所等	・事業所職員 ・学生ボランティア（高校生）	市町村、血液センター、県の三者が一体となって献血協力事業所を訪問。献血協力事業所宣言の楯を贈呈し、継続的な複数回献血の受入を要請。 　なお、若年層の献血離れが顕著であることから、地域企業の社会貢献を体験学習してもらうとともに献血思想の意識高揚を図るため、高校生等ボランティアを「一日ヤング献血大使」に任命し、事業所訪問に同行。	市町村、血液センター、地元の高校生ボランティアの協力を得て、複数回献血協力事業所訪問を実施。（訪問件数：46事業所） 一日ヤング献血大使を21名（8高校）任命。14市町村の献血担当者も同行。

【栃木県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
栃木県	平成21年6月6日（土）～7日（日）	「県民の日」献血キャンペーン	栃木県庁舎内　県民広場（宇都宮市） 県民の日記念イベント会場内	県民	栃木県医薬品配置協会や栃木県学生献血推進連盟「かけはし」の協力を得て、県民に対し、献血の普及啓発を行うとともに、移動採血車による献血を行うことにより、「献血思想」の意識の醸成を図る。	来場者：約2，000名 献血者数：97名
	平成21年7月	「愛の血液助け合い運動」キャンペーン	県内	県民	ラジオやテレビによるスポットCM放送や県政広報誌への記事掲載により、400mL献血及び成分献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	
	平成21年7月17日（木）	献血功労者表彰式	とちぎ福祉プラザ（宇都宮市）	県民	献血に功績のあった個人又は団体の表彰を行うとともに、一般県民も参加可能な記念コンサートを開催し、県民に対して、献血の普及啓発を図る。 第1部　式典　献血功労者の表彰 第2部　アトラクション　日本の歌とオペラの名曲	参加者：約150名
	平成21年8月1日（土）～31日（月）	チャレンジ！400ml献血＆成分献血　　キャンペーン	うつのみや大通り献血ルーム、栃木県赤十字血液センター、県内献血会場	県民	血液が不足する時期に献血者を確保するため、実施期間中に初めて「400mL献血」または「成分献血」に協力いただいた方にオリジナル記念品を贈呈し、県民各層の間に献血思想の普及を図る。	初回献血者 ・400mL献血　496名 ・成分献血　　222名
	平成21年10月4日（日）	「ヒューマンフェスタとちぎ」献血キャンペーン	マロニエプラザ（宇都宮市）	県民	栃木県学生献血推進連盟「かけはし」の協力を得て、啓発物資の配布、移動採血車による献血等を実施することにより、県民に対して、献血の普及啓発を図る。	来場者数：1，000名 献血者数：45名
	平成22年1～2月	「はたちの献血」キャンペーン	・成人式　各市町の会場 ・シネアド　TOHOシネマズ宇都宮及び109シネマズ佐野	新成人を中心に幅広い年代	各市町で開催する成人式でのリーフレット配布やラジオ・テレビによるスポットCM放送のほか、県内2か所の映画館でシネアドの放映を行うことにより、若年層を中心とした幅広い世代に献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	・新成人へのリーフレット配布数　　22,401枚 ・シネアド放映回数　延べ約900回

【群馬県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
群馬県	通年	新規事業所の開拓			献血未実施団体の発掘。	
	通年	既存協力団体の推進強化			既存協力団体の実施回数・時期を精査し可能な限り増回を計る。	
	通年	ライオンズクラブ等推進団体との連携強化			特に合併等で衰退している市町村献血への協力依頼。	

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.4～H22.3	献血協賛企業活動推進活動	県内	県内献血協力企業	献血活動への理解と協力並びに社会貢献活動の象徴としてのロゴマークを付与することにより、企業・団体が行う献血活動の普及を図った。	献血サポーターの推進

【神奈川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
神奈川県	平成21年4月1日～5月31日	春のかながわ献血キャンペーン	県内各地	県民	新社会人及び新大学生等を中心に、広く県民に献血への一層の理解と協力を求めることを目的に実施。	期間中献血実績 ・成分献血　22,619人 ・400ml献血　31,928人 ・200ml献血　　574人
	平成21年10月15日～11月30日	秋のかながわ献血キャンペーン	県内各地	県民	県民に400ml献血・成分献血を中心とした献血思想の一層の普及を図ることを目的に実施。	期間中献血実績 ・成分献血　15,500人 ・400ml献血　23,521人 ・200ml献血　　718人

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.4	市町村担当課長会議の開催	富山県赤十字血液センター	市町村担当課長	各市町村に協力を依頼。	

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	平成21年6月29日	ライオンズクラブ研修会	サンドーム福井　研修室	ライオンズクラブの献血担当	県下各ライオンズクラブに血液事業への理解を深めてもらい、企業献血や献血ボランティアの協力を要請。	
	通年	献血サポーター事業		企業･団体	献血サポーター事業に協力いただける企業･団体の加入促進	

【静岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
静岡県	H21.8.12	平成21年度静岡県献血推進大会	静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」	県民	「愛の血液助け合い運動」の一環として開催する。 大会では、献血功労者に対して知事褒賞等の贈呈を行うとともに、「血液の有効利用と輸血部門の役割－輸血細胞治療部の過去・現在・未来－」と題して浜松医科大学医学部附属病院輸血細胞治療部長　竹下明裕氏の特別講演を行った。	知事報償受賞　12団体 参加者　約340人
	H21.4～H22.3	「アボちゃん協力会」との連携		協力団体等	平成5年に設置した献血協力団体「アボちゃん協力会」の会員企業等に対し、定期的に献血啓発リーフレット等啓発資材を送付し、意識普及を図った。	協力団体数:606

【愛知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛知県	平成22年7月23日（金）	愛知県献血運動推進大会	名古屋市中区役所ホール	県民全般	献血協力団体の善意に報いるため、献血の推進に寄与した団体や長年献血に御協力いただいている団体に知事感謝状を贈呈する。	愛知県知事感謝状贈呈団体 （献血協力団体:11団体、献血功労団体:1団体）

【三重県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
三重県 三重県赤十字血液センター 日本赤十字社三重県支部	平成２１年８月１０日	平成21年度三重県献血功労者表彰式	三重県津市	被表彰者、団体	献血に功労のあった団体・個人に対して、厚生労働大臣表彰・感謝状の伝達および知事・日本赤十字社長・血液センター所長から感謝状等の贈呈を行った。	

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県	平成21年8月	夏季献血推進強化月間	県下全域	県内企業、団体	血液の不足しがちな時期に合わせ、文書による協力要請を呼びかけ。	
	平成21年12月、平成22年1月	冬季献血推進強化月間	県下全域	県内企業、団体	血液の不足しがちな時期に合わせ、文書による協力要請を呼びかけ。	
兵庫県 兵庫県赤十字血液センター	H21年10月21日	兵庫県献血功労感謝のつどい	兵庫県公館	県民、受賞者等	永年にわたり献血運動等に功績のあった団体等を顕彰し、関係者の意識の高揚を図るとともに、血液事業についての県民の理解を深めるため、体験発表等を行う。	②の記載に同じ

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	年中				県血液センターでは、ホームページに献血協力企業名を掲示し、紹介している。	

【鳥取県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鳥取県	H21..7	月間キャンペーン企業訪問	企業	企業役員等	献血の現状等説明及び献血の依頼等	
鳥取県赤十字血液センター	H22.3	研修会の開催	青年会議所	青年会議所会員等	講演等	

【岡山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岡山県	H22．２．５～２．６	献血推進団体との意見交換会	メルパルク岡山	中国・四国地区商工会青年部連合会 中国・四国地区献血推進担当職員	献血推進団体の育成強化を目的として、商工会青年部連合会の各リーダーの方々を招き、献血への理解と協力をお願いし、今後の献血推進に協力がいただけるよう意見交換を行った。	献血事業の現状の説明及び3グループに分かれて献血の推進についての意見交換を行い、より一層の献血への理解と協力をお願いした。

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H21.7.28	広島県献血推進大会	鯉城会館	献血功労者 行政・医療関係者	献血功労団体等表彰 献血推進ポスター募集優秀作品表彰 出席者150名	計画的な年間献血者の確保

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	2～3月	事業所訪問	下関地区	事業所	血液センター・県・市で事業所を訪問し、「血液不足時の献血への積極的な協力」等を活動内容とする「献血サポーター」への登録を推進する。また「献血サポーター」登録事業所に於いて、緊急時に献血に協力して頂ける「献血サポーター」職員登録をお願いしている。」	6事業所訪問（2事業所、65名が登録）

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県	H21.7.29	厚生労働大臣表彰状・感謝状伝達式	県庁	受賞団体	献血功労団体の大臣表彰状・感謝状受賞団体へ、福祉保健部長から伝達した。	表彰状：2団体、感謝状：6団体
	H21.11.3	献血功労団体知事表彰	県庁	受賞団体	文化の日に、献血功労団体を知事表彰した。	1団体
	H22.2.17	献血功労団体知事感謝状贈呈式	大分センチュリーホテル	受賞団体	献血功労団体に知事感謝状を贈呈した。	10団体
大分県赤十字血液センター	H21.9.26	ライオンズクラブ献血推進セミナー	337－B地区ガバナーが召集し、血液センターの運営により、別府市内のイベント会場で開催	337－B地区役員・各ライオンズクラブの会長・幹事・三献委員長	献血優良クラブの血液センター所長感謝状贈呈、献血の現状説明（大分県、血液センター）、献血に関するDVD鑑賞、優秀クラブによる事例発表などにより、献血へのより一層の推進を図ることを目的とする。	地区役員14人、各クラブ役員98人、県主管課担当1人、血液センター所長以下9人が出席。
	H21.11.29	ライオンズクラブ九州血液センター見学会	大分県赤十字血液センター、九州血液センター	県内各ライオンズクラブ役員	献血の現状及びライオンズクラブ年度上半期（7月～10月）実績の説明、九州血液センターの検査・製剤工程の見学により、献血に関する一層の推進を図ることを目的とする。	ライオンズクラブ地区ガバナー、キャビネット幹事19人、血液センター3人が参加

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県	奇数月第2水曜日	成分献血推進強化事業		県民	成分献血に協力した企業・団体の名前を新聞紙上に掲載	
宮崎県 宮崎県赤十字血液センター	通年			献血サポーター	献血サポーターに対し、サポーターマークのシールを配布し、社会貢献のアピールに使用してもらう	
	H22．1．27	みやざき愛の献血運動県民推進大会	宮崎市	献血協力団体等	献血協力団体への表彰及び講演会の実施	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成21年10月15日～平成22年3月31日	献血協力企業の増加対策	県内全域（離島を除く）	企業・事業所	国の緊急雇用創出臨時特例基金を活用し，県赤十字血液センターに臨時職員を雇用して，訪問活動による献血協力企業の増加を図った。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県赤十字血液センター				県内企業	工事現場や未実施の団体等に献血実施を依頼	

⑤官公署における率先した献血実施

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	５月・９月・１月	道庁献血	北海道庁	職員	平成21年5/7～8日　9/8～9日　1/5～6日　計12稼働で献血を実施	

【青森県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
青森県	H21.5　H21.8 H21.12　H22.1	県庁献血	県庁	県庁職員	県庁職員に献血の協力をお願いした。	延べ約２８０人

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	通年	献血バスの配車計画の中に官公庁を積極的に組み入れ、献血を実施している。	県内各官公署	県内各官公署職員	血液が不足する時期や、事業所での献血予定がキャンセルになった場合等に官公署に献血バスを配車し、職員への呼びかけを行っている。	

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	４月・９月・１月	県庁献血	県庁敷地内	県庁職員、来庁者等	県庁において定期で年３回(緊急臨時献血で4回)移動採血車による献血を実施。実施にあたっては、庁舎へのポスター掲示、庁内放送、各課へ出向いての協力依頼を行っている。	

【栃木県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
栃木県	平成21年5月～平成22年１月のうち８日間実施	庁内献血	県庁内	庁内県職員及び県民	県庁内において献血を実施し、庁内県職員及び来庁している県民に協力を呼びかける。	受付者：３５９名 献血者：３２９名
	年間を通じて実施	出張採血	県内各市役所・町役場・協力企業等	市町職員及び県民	県内各市役所、町役場、企業等において献血を実施し、市町職員及び県民に協力を呼びかける。	

【埼玉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
埼玉県	H21　5/1、8/17、12/28、H22　1/4、1/6、3/29	職員献血	埼玉県庁舎	埼玉県職員	職員献血を実施。	

【神奈川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.8.1～8.31	千葉県公務員職場献血推進月	県内各地	県民	献血協力者が減少する8月に、県内の公務員を対象に職場での献血の実施を呼びかけ、この時期に必要な血液の確保を図ることを目的とする。	県内38会場：採血618名実施

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
神奈川県	平成21年4月8日	県職員献血	神奈川県庁本庁舎前	県職員	血液量が落ち込む時期に、県職員による献血を実施。	
	平成21年8月13～14日	県職員献血	神奈川県庁本庁舎前	県職員	血液量が落ち込む時期に、県職員による献血を実施。	
	平成22年1月6～8日	県職員献血	神奈川県庁本庁舎前	県職員	血液量が落ち込む時期に、県職員による献血を実施。	

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.4、9、H22.1	県庁職員献血の実施	県庁	県庁職員	県庁職員に対して献血の協力を依頼。	延べ２９４名

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	通年	県・市町庁舎献血	官公署	職員および来庁者	県庁や全市町での庁舎献血実施	

【長野県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長野県	年間		県下各地	官公庁	公務員職場へは積極的に献血協力依頼を行ってきた経過があり、現在では、国、県、市町村を問わず定例的に移動採血車を受け入れている。また、血液センター在庫不足時の緊急呼びかけにも対応している。	＜参考＞ 県庁　年4回実施　延べ414人 (4/6、8/31、12/28、1/5)

【静岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
静岡県	H21.4～H22.3		県庁、県総合庁舎等	職員、来庁者	県庁及び県総合庁舎において、血液センターからの依頼に基づき、移動採血車による献血を実施した。	・県庁：11回実施 献血者303名 ・総合庁舎：7ヶ所　計14回実施 献血者計257名

【愛知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛知県	・平成21年8月11日（火）、12日（水）、13日（木） ・平成22年1月5日（火）、6日（水）、7日（木）	官庁街献血	愛知県西庁舎北駐車場	愛知県職員、名古屋市職員、近隣官公署職員、一般県民	夏場や年末年始の血液不足を解消するため官公署で献血を実施し、血液の安定供給を図る。	・平成21年8月11日～13日 献血者数631名（受付者数722名） ・平成22年1月5日～7日 献血者数573名（受付者数645名）

【滋賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
滋賀県	全血3回、成分4回	県庁献血	県庁内	県庁職員	県庁職員全体に呼びかけて献血を実施	全血144人、成分87人の献血者

【京都府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
京都府	21年5月7日　8月11、12日　22年1月6、7日	職員献血	府庁	府職員	府庁職員を対象にした職員献血の実施	
	1～2月、7月の月間時	愛の血液助け合い運動等	各振興局等	府職員、府民	各振興局職員等を対象にした献血実施	

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府	毎月第一水曜日	定例府庁前献血	府庁別館前	府職員及び来庁者	・庁内ウェブページ及び庁内放送で協力呼びかけ。 ・平成21年度実績：計17回実施、735人献血（臨時含）	各市町村庁舎、自衛隊等においても随時実施。

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県	平成21年4月、8月、1月	県庁職員献血	県庁	職員及び来庁者	年3回、職員及び来庁者を対象に献血会を開催し協力を呼びかけている。	出先機関でも定期的に実施している機関有
					④の中で官公署にも呼びかけを実施している。	

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	H21.7.1～H21.8.31	愛の血液助け合い運動 （街頭献血キャンペーン）	県内市町村	県　民	各市町村の街頭において献血啓発運動を実施し、献血思想の普及啓発並びに血液が不足する夏期において安全な血液製剤を安定的に供給するため、献血者の確保を図る。	県内市町村　28　ヶ所で実施 （ 参加者数：1874人・献血者数 ： 1520人 ）
	H22.1.1～H22.2.28	はたちの献血キャンペーン （街頭献血キャンペーン）	県内市町村	県　民	各市町村の街頭において献血啓発運動を実施し、新たに成人式を迎える「はたち」の若者を中心として広く県民各層に献血に関する理解と協力を求め、献血者が減少しがちな冬期における安全な血液製剤の安定的供給のため、献血者の確保を図る。	県内市町村　19　ヶ所で実施 （ 参加者数：975人・献血者数 ： 809人）
	①H21.4.24・27 ②H21.8.18・19 ③H21.10.19（緊急） ④H21.12.28・H22.1.8	県庁献血	県庁東棟「県民ホール」	県庁職員・県警職員等	年間3回（4・8・12月）と緊急時に県庁職員を中心に献血協力を呼び掛け、献血者の確保を図る。	①採血総数166名（受付総数177名） ②採血総数218名（受付総数240名） ③採血総数51名（受付総数54名） ④採血総数218名（受付総数240名）

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	年中	職場での献血	県内官公署	官公署職員	年度始めに、職員の献血に係る職務に専念する義務の免除の承認を得て、事前に各所属長に協力を依頼し、職員に献血協力を呼びかけた。また、各市町村担当課長に協力要請をおこなった。	

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H21.5.12～13 H21.8.19～20 H22.1.7～8	県庁献血	広島県庁	県職員及び県庁構内団体職員	献血バスによる献血の実施	献血バスの稼動が少ない時期の血液確保（501名）

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	通年	献血	各官公署			通常どおり
	4～6月	緊急時献血協力者名簿の作成	薬務課	県職員・市町職員	県薬務課において、県職員（出先機関も含む）及び市町職員に緊急時協力者名簿への登録を呼びかけ、名簿化して血液センターにDATAを提供している。	2,343名 （県1，256名、市町1,087名）

【徳島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
徳島県		県庁職員成分献血登録制度		県職員	徳島県における安全な医療用血液の安定的な確保を図るため、県職員の成分献血者登録制度を確立し、県職員が組織的、定期的に成分献血に協力することにより、県民医療の万全を期することを目的とする「徳島県職員成分献血登録制度」要綱を策定。	登録者数の増加

【高知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
高知県	平成21年7月5日	愛の血液助け合い運動」月間キャンペーン	高知県高知市中央公園北口	幅広い年齢層	成分献血・400mL献血への協力を呼びかけるため、中央公園においてキャンペーンを実施し、夏場の血液の確保と啓発に努めた。	受付者数：91名 献血者数：70名 （200mL23名、400mL47名） 不適格者数：21名
	平成22年1月11日	第34回「はたちの献血」キャンペーン	高知県高知市秦南町 イオンモール高知南コート	幅広い年齢層	1月12日（成人の日）に、赤十字奉仕団や学生ボランティアの協力をいただいき、イオンモール高知でキャンペーンを実施し、若年層を中心とする県民の皆様に献血への協力を呼びかけた。	受付者数：111名 献血者数：92名 （200mL26名、400mL66名） 不適格者数：19名

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	H21.5.11～13 H21.5.18～20 H22.1.13～15	県庁職域献血	福岡県庁	県庁職員、来庁者	県庁本庁舎において、県庁職員を対象とする職域献血を年3回（計9日間）実施し、職員の献血に対する意識向上に努めた。	

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県赤十字血液センター	H22.1.4	新型デザイン献血バス披露目式	大分県庁	報道各社、県庁職員	献血バスの更新に合わせ、新しくほどこされたバスのデザインを披露し、若年層にも親しまれ、動く広告塔としての役割も併せ持つバスのPRによる献血の啓発を目的とする。	庁内広報も行ったことにより、通常に比べ50人献血者が増加した

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県 宮崎県赤十字血液センター	通年	町、総ぐるみ献血参加運動	県内各市町村	県民	県や市町村の有するあらゆるネットワークを駆使し、市町村の隅々まで献血の呼びかけを行う	
宮崎県	平成21年度（5回）	県庁献血	宮崎県庁	献血者	庁内広報、ビラ配りによる呼びかけを行う	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成21年6月2日，3日 平成21年9月1日，2日 平成21年12月24日，25日	県庁献血	鹿児島市（県庁）	県庁職員（一般県民）	一般企業の協力が得にくい時期を中心に，県庁において，年3回（6日間）献血を実施した。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県 沖縄県赤十字血液センター		官公署各所献血	官公署各所	官公署各職員	陸・海・空自衛隊・国・県庁・県出先機関等で献血を実施	血液の安定供給を確保する

⑥地方における一層効果的な献血バスの運用

【長野県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長野県	長野：H21.8月～H22.3月 上田：H21.5月～H22.3月 岡谷：H21.5月～H22.1月 山形村：H21.5月～H22.3月	定例献血スポットキャンペーン	長野市、上田市、岡谷市、山形村内の大型店舗	県民（来客者、通行人）	大規模駐車場を備え集客力のある大型店舗へ移動採血車を配車し、定例的な献血会場として定着させることで献血者の確保を図った。	献血者数：長野　443人／8回 上田　340人／4回 岡谷　236人／3回 山形村　241人／4回
	サマー：H21.7/18、7/20 クリスマス：H21.12/6、12/12	学生ボランティアキャンペーン	長野駅前及び飯田市内の大型店舗	若年層を中心幅広い年代	献血者が減少する夏期と冬期に人が集まる場所へ移動採血車を配車し、学生ボランティアの協力を得て、サマーキャンペーン及びクリスマスキャンペーンを実施した。	献血者数：サマー　148人 クリスマス　136人

【長崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長崎県	H22.1.8 H22.1.17 H22.1.22	はたちの献血キャンペーン	長崎短期大学（1/8） 献血ルーム「はまのまち」（1/17） 長崎大学（1/22）	学生を中心とした県民	大学等に献血バスを配車し、はたちを迎える若者を中心に献血協力の呼びかけ等を行う。	

⑦献血バスの駐車スペース確保についての検討

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	1回／月（12/21・1/21・2/27）	低比重者等に対する健康相談	新さっぽろ献血ルーム	低比重者	献血の事前検査で低比重となった献血者を対象とした健康相談を行った。相談については、外部から栄養士を依頼する。	期間中の相談者数は9名(期間中の低比重者は17名)

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県					歩道乗り上げ、公園内等の施設許可を各市町村及び警察に依頼し、歩行者及び献血者の安全（パイロン等による区域、職員の誘導）を確保し実施した。	

【三重県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
三重県赤十字血液センター	平成21年11月3日	松阪市氏郷祭	三重県松阪市		道路使用許可を取り、献血バスの駐車スペースを確保した。	

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	通年	駐車スペースの確保	街頭献血場所（大型スーパー等）	事業所等	なるべく人通りの多い場所に受付場所を設けて、なるべく受付場所の近くに献血バスを停めれるように依頼する。	献血者増につながる。また副作用等の軽減にもなる。

⑧メディアによる繰り返しの啓発

【岩手県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岩手県	H21.7	愛の血液助け合い運動	県内一円	県民	啓発ポスターを各保健所、市町村等に配布した他、県政番組を活用し啓発を図った。	・ポスター　計1,600枚配布 ・7/4　TV県政番組放送　1件
	H22.1～2	はたちの献血キャンペーン	県内一円	県民	啓発ポスターを各保健所、市町村等に配布した他、ラジオ、広報誌等により啓発を図った。	・ポスター　計2,200枚配布 ・1/8 ラジオ放送　1件 ・雑誌広告　2件

【栃木県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
栃木県	平成21年7月	「愛の血液助け合い運動」キャンペーン	県内	県民	ラジオやテレビによるスポットCM放送や県政広報誌への記事掲載により、400mL献血及び成分献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	
	平成22年1～2月	「はたちの献血」キャンペーン	・成人式　各市町の会場 ・シネアド　TOHOシネマズ宇都宮及び109シネマズ佐野	新成人を中心に幅広い年代	各市町で開催する成人式でのリーフレット配布やラジオ・テレビによるスポットCM放送のほか、県内2か所の映画館でシネアドの放映を行うことにより、若年層を中心とした幅広い世代に献血への理解と協力を呼びかけ、献血者の確保を図る。	・新成人へのリーフレット配布数　22,401枚 ・シネアド放映回数　延べ約900回

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.7～9、12 H22.1・2	献血啓発CMの上映	TV、シネマコンプレックスで映画の本編前にCMを上映するもの	一般県民	献血推進CMを作成し、TVや映画館で上映することにより献血の普及啓発を行った。	県内2箇所で実施。
	H22.1.11	「はたちの献血キャンペーン」イベント	ショッピングセンター	一般県民	ラジオ公開生放送による献血啓発活動及びLOVEメール会員募集イベントを実施した。	

【山梨県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山梨県	H21.7.1～H21.7.31	愛の血液助け合い運動	甲府献血ルーム前（1箇所）、甲府駅ビル等	県民	街頭キャンペーンの実施。献血啓発CM放映。テレビ等によるPR。甲府駅ビルへの懸垂幕掲出。	
	H22.1.1～H22.2.28	「はたちの献血」キャンペーン	甲府駅ビル等	新成人を中心とした若年層	新成人への啓発物品の配布。甲府駅ビルへの懸垂幕掲出。テレビ等によるPR。	

【長野県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長野県	12月～2月	”けんけつ”啓発ラジオマンスリー放送	全県	県民（聴取者）	献血者が減少する冬期に聴取率の高い時間帯の番組内で、平日毎日、同じ時間に献血への協力を呼びかけた。	放送回数：延べ64回
	H21.7月、H22.1月	ラジオスポット放送	全県	県民（聴取者）	全国的な献血キャンペーンの期間中に民放ラジオ2局でそれぞれ7日間ずつ献血への協力を呼びかけた。	放送回数：延べ28回

【静岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
静岡県	H22.1～H22.3	「献血情報コーナー」の放送	静岡放送（AMラジオ局） 静岡エフエム放送（FMラジオ局）	県民	県内全域に放送しているAMラジオ局及びFMラジオ局において、毎週木曜日の午前中に「献血情報コーナー」（3分番組）の枠を設け、献血一口メモや週末の献血バスの情報を放送した。その中で複数回献血クラブの紹介をした。	AMラジオ7回、FMラジオ8回放送

【高知県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
高知県	平成21年8月9日～ 平成22年3月21日 （広告掲載期間）	献血啓発新聞広告制作・掲載業	高知新聞朝刊（週に1回で33回）	幅広い年齢層への広報	週に一度、前週の高知県の献血率とその状況に沿った献血の協力を求める内容の広告、また、イベント情報等を掲載した。	平成22年度に効果の検証をする
	平成22年1月11日 ～ 平成22年2月28日 （CM放送期間）	献血啓発テレビスポット広告制作・放送委託業務	高知県の民報3局（146回）	若年層を中心とした広報	「はたちの献血」キャンペーン期間中に、「はたち」の若者を中心として、広く県民各層に献血の協力を呼びかけるテレビスポット広告の制作と放送を行った。	平成22年度に効果の検証をする

【佐賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
佐賀県	H21.8.3	献血ふれあいフェスタ	ゆめタウン佐賀（佐賀市）	一般、献血表彰者	・献血推進協力団体に対する感謝状等の伝達、贈呈 ・地元アーティスト等によるミニライブ ・ダンスステージ ・献血バスによる献血（献血者142人）	ラジオ局に委託することにより、ラジオでのCM放送等も行われた。 血液センターとの共催
	H22.1.10	はたちの献血’10	ゆめタウン佐賀（佐賀市）	一般	・地元出身歌手による献血トークやライブ ・学生献血推進委員の活動発表 ・着ぐるみ「けんけつちゃん」による献血PR ・献血クイズ ・献血バスによる献血（献血者140人）	ラジオ局に委託することにより、ラジオでのCM放送等も行われた。また後日、当日の様子も放送された。 血液センターとの共催
	H22.1～2	はたちの献血キャンペーン	イオンシネマ佐賀（佐賀市）	一般	映画館でけんけつちゃんを起用した献血啓発CM（静止画）を放映	
	H22.1	はたちの献血キャンペーン	109シネマズ佐賀（佐賀市）	一般	映画館で若者向けの献血啓発CM（動画）を放映	

⑨低体重やその他の理由により献血できなかった方への対応

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	平成21年11月14日～30日	秋の献血感謝祭「健康づくりと献血」	献血ステーション（イオンモール秋田店） アトリオン献血ルーム	低比重者、栄養相談希望者	献血申込者の中で低比重により献血できなかった方へ、栄養士による健康相談をサービスとして実施し、少しでも改善につなげて献血が可能となることを期待。	後に、献血できた方もおり献血者にとっても、献血確保においても有効であった。また、献血者からこの様なサービスを行ったことに対しお礼のお言葉も頂いている。

【福島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福島県	通年	栄養士による栄養指導、健康相談	福島県赤十字血液センター	献血者等	献血ルームにおいて、栄養士による栄養指導・健康相談のサービスを実施。	

【群馬県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
群馬県	H21.11.23	献血感謝Day	イオンモール高崎	献血者	県内の献血者を対象に献血功労者表彰式・健康相談・AED講習会等のイベントを実施。イベント内に健康指導ブースを設け、主に当日献血できなかった方を対象に栄養士による健康相談を実施。	来場者数：280名 健康相談者数：7名
	H21.12.8～H22.2.23の間で延べ6回	献血者健康相談	献血ルーム（3ヵ所）	献血希望者	献血実施不可となった方を対象に、県内3ヵ所の献血ルームにて、述べ6回栄養士による健康相談を実施。	献血受付者数：368名 健康相談者数：36名

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.10～12月	健康相談	県内献血ルーム	献血不適格者	献血不適格者に栄養士による健康相談を行う。	5会場17回実施

【富山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
富山県	H21.4～H22.3	献血できなかった者に対する保健師による健康相談	献血協力企業など	献血の申込者のうち、低比重などで献血できなかった方	低比重不足などにより献血できなかった者に対し、保健師による健康相談を実施し、再チャレンジできるよう健康な献血者の確保に努める。	延べ54回、203名に実施。

【石川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
石川県赤十字血液センター	日曜・祭日及びキャンペーン期間中	献血栄養相談	献血ルーム	来場者で相談希望者	管理栄養士による相談会	21年度前期103名、後期97名の相談者があった。

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	毎週月曜日	栄養士等による健康相談	血液センター	献血できなかった方等	栄養士による健康相談等	

【三重県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
三重県赤十字血液センター	献血キャンペーン時	健康相談	県内キャンペーン会場	低比重者等	三重県栄養士会の協力を得て、栄養指導、健康相談などのサービスを行った。	

【京都府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
京都府	21年9月～12月	健康づくりアドバイス事業	各大学内	府内献血実施大学生等	献血会場で低比重等で採血出来なっかた者等を対象に栄養相談を実施	大学献血実施時23回、相談人数125人

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府	H21.9.15～H22.3.31	緊急雇用創出基金事業「献血推進事業」	・府内3箇所の献血ルーム	府民	・大阪府赤十字血液センターに事業委託し、低比重により不採血となった者に対する栄養指導及び献血者からの栄養相談応需。	

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県赤十字血液センター	H21年11月～H22年2月	健康相談	献血ルーム及び移動採血バス献血会場	献血不適格者を中心に	（社）兵庫県栄養士会のケアステーション事業とタイアップし実施。※国庫補助事業	実施回数25回、参加者数135人

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	平成21年10月～平成22年2月	献血者健康相談事業	血液センター・献血ルーム	低比重者等	献血できなかった献血者を対象に、栄養士が食事、生活面について指導し、再度献血にご協力いただけるように促す。	健康相談実施後に献血できた方がおられた。

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	年中	リーフレットの配布	献血実施場所	献血できなかった方	献血できなかった方に対して、献血現場で献血増進に役立つ健康アドバイス用リーフレットを県で作成し、血液センター看護師が不採血者に配布している。	

【鳥取県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鳥取県赤十字血液センター	H21.4～H22.3（11回）	栄養相談	移動採血会場	低比重の方	栄養士による指導	

【広島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
広島県	H22.1～3の毎週火・木	健康相談	献血ルーム「もみじ」「ばら」	ヘモグロビン量，血圧等が採血基準に満たなかった者など	管理栄養士による健康相談	健康に対する意識の向上，次回献血

【山口県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山口県	主にイベント	栄養相談	献血会場	Hbの低い方	キャンペーン時に栄養士等による栄養相談を実施	8会場で実施

【愛媛県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛媛県	H22.2.14	移動採血車による採血現場	ﾊﾟｰﾌｪｸﾄﾘﾊﾞﾃｨ教団今治教会	献血不適格者	愛媛県栄養士会員２名の管理栄養士による栄養指導。（20分～30分/1名）	初の試み。１３名実施。
	H21.6.14～H21.6.15	世界献血者デー	大街道出張所（ルーム）	献血不適格者	松山市保健所保健師１名による健康指導。（20～30分/1名）	初の試み。１８名実施。

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	随時	地域献血における食生活改善指導	一部の市区町村	各地域献血協力者	一部の市区町村において各地域の食生活改善推進協議会等と連携し、貧血予防食の紹介を行うなど食生活改善指導を行った。	

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県	H22.1.13～2.1	保健所ブロック別献血推進検討会及び高校教諭との意見交換会	県下7ヶ所	保健所・市町村献血担当者及び高校教諭	各地域での献血推進の方策を検討。また、各市町村の栄養指導担当者にも出席いただき、献血不適格者の指導についても検討を行った。 あわせて、高校教諭と高校生に対する献血推進についての意見交換会を実施。	

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県赤十字血液センター	通年			献血できなかった方	低比重者については，検診医師から「なるほど 献血」パンフレットに基づき，生活指導を実施	
	9/30～2/25の各水曜日20日間	管理栄養士による栄養相談	献血ルーム「カリーノ」	献血者及び献血できなかった方	管理栄養士による栄養相談、生活指導を実施	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成21年６月２日，３日 平成21年９月１日，２日 平成21年12月24日，25日	県庁献血	鹿児島市（県庁）	県庁職員	献血時に低比重者へ「健康相談カード」を配布し，相談者に健康管理室において食生活指導を行う。	
	平成21年１月20日（水）～毎水曜日（６回）	ホリスティック　ヘルスアカデミー	鹿児島市（血液センター）	一般県民（20～59歳）	食養生，ヨーガ，アンチエイジングなどの新しい健康増進手法による，健康レベルの向上と疾病予防を推進し，採血基準に満たない方の減少を図る。	

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県赤十字血液センター	H21.10.24～H22.2.27	低比重者に対する健康相談会	献血ルーム	低比重で献血ができなかった方	低比重で献血ができなかった方へ健康相談を実施し次回ご協力できるようにサポートする	

⑩新採血基準移行への準備

【秋田県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
秋田県	通年	高校献血の実施	県内各高校	県内各高校生	本県では、高校献血を年1回以上実施するよう努めており、今後も継続的に献血を実施していく中で、17歳の400mL献血を実施についても理解を求める。また、献血キャンペーンに参加する高校生ボランティアに対し、血液センター職員、保健所職員が献血の意義、重要性を伝えている。	

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県					教育委員会、高等学校及び市町村献血推進協議会に主旨説明を行った。	

【福井県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福井県	平成21年4月	高等学校普及啓発	県庁	高等学校校長	高等学校校長会に出向いて献血普及啓発の協力要請	

【大阪府】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大阪府	H21.9.1～H21.9.30 （募集） H21.12.1（発表）	熱血献血キャンペーン 「ちょっといい献血・輸血の話大募集」	・大阪府内の高等学校、専門学校、市町村等に募集告知用チラシを配布 ・大阪府HP、雑誌等における募集告知	若年層を中心に幅広い年代	・若者が「献血しよう」と思うような「献血」又は「輸血」を題材とした50文字以内のエピソードを募集。 ・優秀作品（大阪府知事賞2作品、入賞4作品）は、カレンダーをはじめ、様々な広報啓発に活用。	全国から113作品の応募。
大阪府赤十字血液センター	H21.7.4～H21.7.5 H21.8.8 H21.9.19 H21.12.19～ H21.12.23 H22.1.9	・「七夕献血」キャンペーン ・「サマー献血」キャンペーン ・「オータム献血」キャンペーン ・「クリスマス献血」キャンペーン ・「はたちの献血」キャンペーン	・HEP FIVE前他1箇所（延4箇所） ・ヨドバシカメラ梅田東側歩道上他2箇所 ・HEP FIVE前他1箇所 ・HEP FIVE前他5箇所 ・HEP FIVE前他2箇所	府民	大阪府学生献血推進協議会が主催し、街頭での献血の呼びかけ。	

【兵庫県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
兵庫県				市町	市町献血担当者会議等で、以降に向けての法整備の進行状況等を情報提供。	

【徳島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
徳島県		保健所管内献血担当者会議	保健所	市町村、事業者	担当者に新採血精度についての概要の説明を行った。	登録者数の増加

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県	H21.4.15	高等学校長への高校献血推進強化事業への協力依頼について	大分市トキハ会館	高等学校長	高等学校校長会総会において、献血の現状を説明し、高校での献血推進について協力を依頼。	
	H21.8～9	大分県薬剤師会員への献血推進の協力依頼	県下10ヶ所	大分県薬剤師会員	薬剤師会員に対し、献血の現状の講話を行い、推進への協力を依頼。	大分県薬剤師会員267名に依頼
	H21.9.27	献血推進リーダー養成研修会	大分県薬剤師会館	学校薬剤師	学校薬剤師に対し、献血推進リーダーとして各高等学校での献血啓発活動を行うための養成研修会を実施。	
	H21.7～H22.3	高等学校に対する献血の推進	大分県内高等学校	教諭及び生徒	各学校での献血推進リーダーによる啓発と、校内献血への協力を依頼。	高校8校で生徒に対して啓発を実施。また、6校で校内献血を実施。

【宮崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
宮崎県赤十字血液センター	通年		献血ルーム「カリーノ」	献血者	献血ルームに、映像配信システムを導入し、新採血基準移行について広報を行う。	

【鹿児島県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
鹿児島県	平成22年2月16日，17日	献血出前講座	鹿児島市（各高校）	高校生・教師	献血の現状，必要性の講義の中で，特に校長や教職員に対して，献血基準変更等について説明を行い，献血への協力を求めていく。	

⑪その他

【北海道】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
北海道	平成21年11月～12月	ティーンズドナー献血推進キャンペーン	道内一円	10歳代から20歳代の道民	近年、10歳代から20歳代の献血者が減少傾向にあることから、これらの年齢層に対する普及啓発を強化するため、血液センターと共催で若者を対象とした事業を実施した。	ラジオコマーシャルの制作・放送： スポットCM　50本 人気ラジオ番組とのタイアップ ポスターの作成：1,000枚
	平成21年7月9日～10日	愛の血液助け合い運動パネル展	道庁1階　特設展示場　B	地域住民	愛の血液助け合い運動月間の一環として「献血パネル展」を開催した。	来場者　161名
	平成22年1月4日～6日	はたちの献血ポスター展	道庁1階道政広報コーナー	地域住民	はたちの献血キャンペーンの一環としてポスター展を開催した。	来場者　349名
	平成22年2月	献血推進タウン啓発	北見市、倶知安町	地域住民	安全な血液製剤の安定供給の確保に向け、道内各地で行われるイベントと連携し、地域の実情に応じた普及啓発を行い、道民に対し広く献血思想の普及を図る。	
	平成21年9月	北海道社会貢献賞の表彰	帯広市（北海道公衆衛生大会	献血推進功労者	献血の推進に組織を挙げて多大な功績があった団体や学校等を表彰した。	表彰者数：10団体
	平成21年8月、平成22年1月	北海道学生献血推進協議会	北海道赤十字センター	道内学生献血推進ボランティアグループ	全道の学生ボランティアグループが北海道センターに集まり、キャンペーンの実施内容検討及び今後の若年層への献血推進についての討議を行った。	参加者　29名
	平成22年3月	北海道献血推進協議会	札幌市	関係団体の代表者	本道において必要とされる血液製剤の確保を図るために、来年度の血液事業の推進方策について協議するために開催する。	

【山形県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山形県	H21.7.1～H21.9.30（募集）	山形県献血推進ポスターコンクール		山形県内の中学校、高等学校及び特別支援学校（中学部・高等部）の生徒	次世代の献血を担う中学生及び高校生に対して献血ポスターを募集し、県庁及び総合支庁ロビー等において展示会を開催することにより献血の普及啓発を図った。	応募数 中学生　169点 高校生　　2点
	通年	献血街頭キャンペーン	定点献血会場、イベント会場等	県民	定点献血会場及びモンテディオ山形ホームゲーム等の人が多く集まる場所において、献血啓発資材を配布し、献血の普及啓発を図った。	県内17ヶ所で実施
	通年	学生献血協力サークルの育成	山形市内の大学等	大学生等	大学における既存サークルの協力を得て、献血者不足等の情報提供及び献血希望者の募集等を行う体制を構築し、学生献血者の増加を図った。	協力サークル数 2大学　16サークル
	通年	さくらんぼ献血予備隊の育成	県内中学校	中学生（主として3年生）	まもなく献血が可能になろうとする中学生（主として3年生）に対し、献血のしくみや必要性について啓発を行い、将来に向けた安定的な献血協力体制の基盤整備を図った。	中学校47校に対し啓発資材配布 うち14校で献血に関する講演を実施

【千葉県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
千葉県	H21.7.4	愛の血液助け合い運動	(株)そごう千葉店前広場並びにクリスタル広場	県民	広く県民に献血への理解と協力を求めることを目的に、主催者出席による運動月間オープニングセレモニーの実施と「ポートクィーン千葉」によるうちわの配布並びに献血へ呼び掛けを実施した。	アトラクションとして、県警音楽隊によるミニコンサート実施。採血78名実施
	H.21.8.9	学生サマーキャンペーン	ららぽーとTOKYO―BAY	県民	夏場の血液不足を補う手段の一つとし、若年層への献血の理解と協力を促す事を目的とする。献血会場にて献血への呼び掛け等を実施。	約26名の学生が呼び掛けをする。（採血69名実施）
	H.21.9.11	ライオンズクラブ国際協会333-C地区献血推進研究会	ホテルスプリングス幕張	県内ライオンズクラブ	県内ライオンズクラブを対象に、今後の献血奉仕活動に生かすために、日頃の献血奉仕活動に対する意見交換や、事例発表などを実施した。	111クラブの115名参加、全クラブへ献血サポーターの参及び新型インフルエンザ対応の緊急献血をお願いした。
	H21.10.28	千葉県献血感謝のつどい	千葉県文化会館	献血功労者及び献血協力推進団体	県内において献血功労者及び献血協力推進団体に対して、表彰する。また、中・高校生から献血推進啓発ポスターを募集し、それぞれ知事賞2名・千葉県健康福祉部長賞4名・千葉県赤十字血液センター所長賞4名を選び、表彰した。	表彰団体：314団体 献血推進啓発作品：10名
	H.21.12.13 H.21.12.20	学生クリスマスキャンペーン	ららぽーとTOKYO―BAY	県民	全国統一キャンペーンを12月に行うことにより、冬場の血液不足を補う手段の一つとし、若年層への献血の理解と協力を促す事を目的とする。献血会場にて献血への呼び掛け等を実施。	学生クリスマス献血キャンペーン12月13日ららぽーとTOKYO―BAY（採血60名実施）・12月20日ららぽーとTOKYO―BAY（採血69名実施）
	H22.1.10	はたちの献血キャンペーン	イオンモール千葉ニュータウン店	県民	特に献血協力者数が減少傾向となる冬期に、広く県民に対し献血への理解と協力を求めることを目的として、主催者出席によるオープニングセレモニーを実施。併せて、「千葉ロッテマリーンズ」選手とマスコットによるトークショー、サイン会、献血クイズ等のイベント並びに献血呼び掛け等を実施した。	採血76名実施 千葉ロッテマリーンズ　　唐川侑己選手
	H22.3.1～3.31	千葉県献血推進強調月間	県内各地	県民	献血者が減少する3月を本県独自の運動期間と定め県内各地の献血会場において啓発資材の配布を実施した。	

【茨城県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
茨城県	H21.11.1～H22.3.31	高校献血キャンペーン	献血ルーム，高等学校	高校生	・ポスターコンクールによる啓発ポスター，チラシの作成・配布 ・献血ルーム等でのアンケートの実施，記念品配布	ポスター応募２３９点 アンケート協力者　７００人
	H21.11.16～ H22.1.31	献血出前セミナー	高等学校，事業所	高校生，一般	出張献血セミナーの開催（3回）	参加人数　１２０名
	H21.8.4～H21.8.5	AED等講習会	献血ルーム	一般	AEDの取り扱い及び赤十字救急法短期講習会の開催	参加者　６名

【新潟県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
新潟県 新潟県赤十字血液センター	H21.7.31（録音） 8.6（放送）	09サマーキャンペーン「献血に行こう」（ラジオ公開録音）	献血ルームばんだいゆとりろ	若年層を中心に幅広い年代	１年の中で最も暑く、献血に対する協力が得にくい時期ということを鑑み、主に若年層を対象とした献血PRイベントを行うことで協力姿勢・動機を促進。献血の思想の普及、新規献血者及び8月の献血者確保を目的とする。	募集50人のところ、98人から応募があった。来場者参加型の構成が好評であった。
	H22.1.23（録音） 1.28（放送）	はたちの献血キャンペーン2010（ラジオ公開録音）	リバーサイド千秋		献血PRイベントを行うことにより、特に若年層への献血思想の普及を図るとともに、献血者が減少しがちな冬期における献血者確保を目的とする。	約200人と多くの観衆があった。ステッカーキャンペーンを行い658人に配布するなど献血の周知に大きな効果があった。
	随時	献血普及講演会	高等学校	高校生	将来の献血を支える若年層へ献血知識の普及啓発を図る。	9校が実施
		献血ルーム見学会	献血ルーム	中学生～高校生		4校が実施
	H21.7.23	新潟県献血功労者表彰式	新潟県自治会館	献血推進団体	献血推進に功績のある団体及び個人に対して表彰を行う。	大臣表彰　2件 大臣感謝状　6件 知事感謝状　16件 日赤新潟県支部長感謝状　7件
	H22.3.13	新潟県輸血フォーラム	新潟大学医歯学総合病院	輸血医療関係者等	輸血療法を適切に行う上での諸問題についての理解を深め、もって血液製剤使用のより一層の適正化を図る。 （内容）合同輸血療法委員会、研究発表、講演会	
	H21.9.26	トキめき新潟国体でのPR	東北電力ビックスワンスタジアム	若年層を中心に幅広い年代	資材を配布し、献血への協力を呼びかけ、普及啓発を図る。	
新潟県赤十字血液センター	H21.5.9～5.10　／ 10.10～10.11	古町どんどんでのPR	古町		学生献血PRボランティアが街頭キャンペーンを実施し、献血への協力を呼びかけ、普及啓発を図る。	
	H21.12.23	クリスマス献血キャンペーン	万代シティバスセンター			

【石川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
石川県	H21.7.1～H21.10.31 （募集） H21.12.24 （表彰式） H21.12.9～H22.1.12 （展示会）	献血ポスターコンクール入賞者表彰式	県庁特別会議室	県内中学校	県内中学校を対象に、献血に関するポスターの公募を行い、献血できる可能年齢に達した際にも、献血に対する抵抗が少なくなることを期待する。	32校331点の応募があった。
	H21.7.1～H21.8.31	バス車内広告	県内全域路線バス	県民	全国的に実施している7月の愛の献血助け合い運動に併せて、県民への普及啓発を目的とする。	
	H21.10.24 H21.10.31	大学学園祭会場での献血キャンペーンの実施	金城大学 金沢大学医学部	大学祭参加者	若年層に対する普及啓発と移動採血車を設置し、献血の体験を実施する。	
	各市町成人式	新成人対象啓発	成人式会場	県内全新成人	各市町における成人式出席者に啓発資材等を配布	

【山梨県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
山梨県	H21.12.5	献血功績者表彰式	県民文化ホール	献血功績者	献血功績者表彰（厚生労働大臣表彰・感謝状、知事表彰、日赤表彰）	
	H21.6.12～H22.3.31	献血地域キャンペーン	各保健所管内（5箇所）	県民	各保健所管内において献血モデル市町村を選定し献血啓発活動を実施。	

【岐阜県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岐阜県	H21.10.28	献血感謝の集い	未来会館　長良川ホール	一般、関係者	・献血推進功労者表彰 ・献血推進ポスター入賞者表彰	400名が参加
	H21.6.22～H21.9.4	献血推進ポスター募集	表彰は、「献血感謝の集い」で実施	中学生	県民により一層献血への関心を持っていただき、献血協力の機運を盛り上げることを目的に募集した。 大賞1、入選2、佳作5を選定	15点の応募

【滋賀県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
滋賀県	平成21年8月2日	「サマー献血」	JR近江八幡駅南口	若年層・周辺住民	学生献血ボランティアによる献血啓発活動	67人の献血者
	平成21年12月23日	「クリスマス献血キャンペーン」	JR近江八幡駅北口南口	若年層・周辺住民	学生献血ボランティアによる献血啓発活動	207人の献血者
	平成22年1月6日	「はたちの献血」キャンペーン	ビバシティ彦根	成人式を迎える者・地域住民	地域献血推進団体による献血啓発活動	52人の献血者
	平成22年1月10日	「はたちの献血」キャンペーン	ららぽーと守山	成人式を迎えた者・地域住民	青年赤十字奉仕団による献血啓発活動	143人の献血者
	平成21年8月6日	平成21年度滋賀県愛の献血感謝のつどい	栗東芸術文化会館さきら	受賞者・日赤奉仕団等献血啓発協力者	献血功労者に対する表彰状等伝達・贈呈式および桂こけ枝氏による記念講演	287名の参加

【奈良県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
奈良県	①H21.4. 1～ H21.6.12（募集） ②H21.7.30(表彰)	献血運動啓発ポスター募集	①県内へ広報し、募集 ②県庁にて献血功績者と併せて表彰	①県内在住・在学・在勤の方 （年齢制限なし） ②特選・入選者	広く県民に献血についての理解を深め、献血運動推進のPRに役立てるために実施。	①応募数　107　作品 ②対象：特選1点・入選4点
	①H21.8.4～ H21.8.11（展示） ②H21.8.17～ H21.8.31（展示）	献血運動啓発ポスター入賞作品の表彰及び展示	県内大型スーパー2店舗内 ①イオンモール橿原アルル ②奈良ファミリー	「献血運動啓発ポスター」入賞（特選・入選・佳作）作品　（20点）	幅広い年齢層の優秀作品を展示することにより、広く県民各層に献血運動をPRし献血に対する理解と協力を求めること目的とする。	対象：特選1点・入選4点・佳作15点
	H21.7.30	献血功績者表彰式	県庁	献血に功績のあった者を表彰	献血に対する県民の理解を深め、献血運動を推進するため、献血に功績のあった者を表彰する。	①厚生労働大臣表彰の伝達：8団体 ②献血推進協議会会長（知事）表彰：12団体 ③「献血運動啓発ポスター」入賞者表彰：5名
	H22.2.20	献血啓発協力者研修会	やわらぎ会館	奈良県学生献血推進協議会 奈良県献血奉仕団 奈良県内大学・短大・高専ボランティア団体　等 献血協力機関及び献血協力団体に所属し、献血啓発に携わっている方	積極的に普及啓発を行っていただいている機関及び団体が一堂に会して意見交換を行ったり、献血活動に従事し活躍されている外部講師による講演会等の内容を盛り込んだ研修会を実施することで、より効果的な啓発を行っていただくことを目的とする。	参加者：35名
	H22.2.1	献血協力活動覚書調印式	県庁	①社団法人奈良県建設業協会青年部会 ②奈良県製薬協同組合	新型ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ集団時や災害発生時等の血液が大幅に不足する緊急時に備え、積極的に献血協力活動を実施する内容の覚書を締結する。	申出があった2団体が「奈良県献血推進協議会」並びに「奈良県赤十字血液センター」と各々の各代表により三者締結を交わし、4月1日より適用。

【和歌山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
和歌山県	平成21年7月1日～31日	愛の献血助け合い運動キャンペーン	県内各地	県民	献血に対する理解を深めてもらうこと目的にボランティア団体の協力を得て、街頭啓発とあわせて献血を実施した。	
	平成21年7月28日	献血運動功労者に対する表彰及び感謝状の贈呈	県庁知事室	献血運動功労者	献血運動功労者に対する厚生労働大臣表彰状・感謝状及び県知事感謝状を贈呈し表彰することにより、献血運動の継続的な発展を目的とする。	大臣表彰2団体 大臣感謝状4団体、1個人 知事感謝状14団体、1個人
	平成21年5月～10月（応募期間）	献血推進ポスターコンクール	和歌山県自治会館（表彰式）	県内全中・高校生	県内の中・高校生を対象にポスターコンクールを実施し、参加型啓発として献血に対する理解を深めてもらうことを目的として実施した。	応募総数125作品 高校生　88作品 中学生　37作品
	平成21年12月～平成22年2月	年末年始・はたちの献血キャンペーン期間に献血のPR	県内全般	若年層を中心とした一般県民	献血不足時期、メディアでの毛初やイベント（フットサル大会）でPRと献血を実施した。	地元ラジオ・テレビでスポット放送実施
	平成21年12月10日	献血及び性感染症に関するシンポジウム	県立古座高等学校	生徒・教員	保健所職員・教員・生徒をパネリストにパネルディスカッション形式のシンポジウムを行い献血の理解を深めた。	約240人
	平成21年12月～1月	県学生献血推進キャラバン隊による和歌山県縦断献血推進活動	県下7ヶ所	若者をはじめとする県民	県学生献血推進協議会主催で県内縦断して各地で献血を実施し県民に献血の重要さと献血を呼びかけた。	献血者585名（受付831名） 延べ205名の学生が参加
	平成21年9月12日、9月22日、10月24日、11月 3日	高校出前教室	県立日高高等学校 県立紀央館高等学校 県立古座高等学校 県立串本高等学校	高校生	高校文化祭等において、思春期出前講座を開催し献血思想及び献血協力の普及啓発をおこなった	
	平成21年10月7日、11月27日 平成22年2月23日	高校生献血学習	県立慶風高等学校 県立大成高等学校 和歌山市立和歌山高等学校	高校生、教員	県内高校生を対象に外部講師を招き、体験談を交えて献血の重要性を語ってもらう「高校生献血学習」を実施している。その後日程を改め献血体験してもらった。	

【岡山県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
岡山県	H21．4．26 H21．5．10 H21．6．13	ももたろう献血キャンペーン	イトーヨーカドー岡山店 新見公立短期大学 イトーヨーカドー岡山店	学生及び社会人を中心とした一般県民	県学生献血推進連盟主催により4月から新たに学生または社会人となる方を中心として県民に献血に対する理解を深めていただき、血液の安定的確保のため献血を呼びかけた。	献血者数 イトーヨーカドー岡山店（84名） 新見公立短期大学（37名） イトーヨーカドー岡山店（54名）
	H21．6．14	赤十字思想誕生150周年記念世界献血者デー・イベント「サンクスドナーAED＆愛の献血」	岡山駅前ターミナルスクエアビル12階ホール及び周辺	ももたろうEメールクラブ会員及び一般、献血協力者	赤十字思想誕生150周年を記念して、6月14日の世界献血者デーにあわせ参加者に対し、血液事業の講演及び救急法（蘇生法AED）講習会を実施し、普及を図った。また、当日、ターミナルスクエアビル前での街頭献血を実施するとともに、ビル付近の通行人に対し、世界献血者デーPR「うちわ」を配付し、献血への協力を呼びかけた。	救急法（蘇生法AED）講習会は大変好評であった。 献血者数（38名）
	H21．7．1	「岡山県愛の血液助け合い運動」月間オープニング行事	岡山駅前ターミナルスクエアビル12階ホール及び周辺	県民各層	初日事業としてオープニングセレモニーを開催し、その後、岡山県学生献血推進連盟の学生が隊長となり、県、日本赤十字社岡山県支部、岡山県赤十字血液センター各職員で構成したキャラバン隊が3県民局等を訪問し、岡山県献血推進協議会長のメッセージ及び啓発資材を届け、献血への理解と協力を呼びかけた。また、当日実施のターミナルスクエアビル前での街頭献血への協力を求めた。	構成したキャラバン隊が3県民局等を訪問することで、広く県民に対し、献血に関する理解と協力を求めた。 献血者数（47名）
	H21．7．5	七夕献血キャンペーン	イトーヨーカドー岡山店	県民各層	県学生献血推進連盟主催により学生及び新社会人を中心として県民に夏場の血液不足を補うため献血を呼びかけた。	献血者数（70名）
	H21．7．31	献血感謝のつどい	ピュアリティまきび	厚生労働大臣表彰等各受賞者他	献血に功労のあった団体・個人に対して、厚生労働大臣表彰・感謝状の伝達並びに知事・日本赤十字社県支部長及び血液センター所長感謝状の贈呈を行った。また、大相撲・琴禮関によるトークショーを行った。	46団体・個人14人に対して表彰を行った。
	H21．9．13	中国四国学生統一献血キャンペーン	イトーヨーカドー岡山店	若年層を中心とした一般県民	中国四国学生献血推進協議会が中心となり、広く一般の方々に献血に協力してもらうとともに若年層への献血思想の普及を図った。	献血者数（61名）
	H21．10．5～10．16	海外血液事業研修生受入事業	岡山県赤十字血液センター	中国紅十字会（1名） ベトナム赤十字社（1名）	アジア諸国の血液事業向上に資するため、中国紅十字会とベトナム赤十字社の研修生を受入れた。	来岡された研修生は2名とも事務職員で、主に「献血者募集」をテーマに研修を行った。
	H21．10．25 H21．11．7	わくわく献血キャンペーン	岡山商科大学 岡山県立大学	大学生を中心とした若年層及び一般県民	県学生献血推進連盟主催により県内大学祭会場において若年層を中心として来場の方へ献血を呼びかけた。	献血者数 岡山商科大学（69名） 岡山県立大学（122名）
	H21．10．27～10．28	献血推進団体との意見交換会	メルパルク岡山	中国・四国地区ライオンズクラブ 中国・四国地区献血推進担当職員	献血推進団体の中心的存在であるライオンズクラブの各リーダーの方々を招き、献血へのより一層の理解と協力を要請し、相互の連携強化を図るため、血液センター職員と意見交換を行った。	各県の献血状況説明及び3グループに分かれて献血の推進についての意見交換を行い、より一層の献血への理解と協力をお願いした。
	H21．12．19 H21．12．23	クリスマス献血キャンペーン	イオン津山ショッピングセンター イトーヨーカドー岡山店	若年層を中心とした一般県民	県学生献血推進連盟主催により若年層を中心とした県民に冬季に不足する血液確保のため、献血を呼びかけた。	献血者数 イオン津山ショッピングセンター （128名） イトーヨーカドー岡山店（115名）
	H22．1．7	はたちの献血キャンペーンオープニングイベント「1日所長」委嘱式	岡山県赤十字血液センター	県民各層	献血者が減少しがちな冬季において安全な血液製剤を安定的に確保するため、新たに成人式を迎える「はたち」の若者を中心として、広く県民各層に対し献血思想の普及を図ることを目的として実施した。	県学生献血推進連盟の学生代表者に1日所長を任命するための「1日所長」委嘱式を行い、施設内視察後、報道機関及び献血会場を訪問して、献血への理解と協力を訴えた。
	H22．1．31	第4回いのちと献血俳句コンテスト 岡山センター所長賞（授賞式）	岡山県赤十字血液センター	若年層を中心に幅広い年代	若年層を中心に幅広い年代から献血に関する俳句の公募を行い、人命の尊さ、助け合いの大切さや献血の理解につながることを目的として実施した。	全国約30万句の応募のなかより、岡山県においては、岡山センター所長賞1名、入選5名、団体賞3団体が受賞した。

【香川県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
香川県	H21.7.4	1日血液センター所長	イオン高松ショッピングセンター	県民	地元プロバスケットボールチームの選手に1日所長を委嘱し、献血キャンペーン及び街頭献血を実施。警察音楽隊の演奏や啓発品の配布、献血に関するクイズ等を行い、献血への協力呼びかけをした。	
	H21.7.18 H22.1.24	高校生街頭献血キャンペーン	ゆめタウン高松 ゆめタウン丸亀	高校生	高校生献血ボランティアに献血に関する学習をしてもらった後、店内で献血への協力呼びかけを実施。あわせて街頭献血も行った。	高校生を対象に献血ボランティアを募集したところ、延べ15校57名の参加があった。
	H21.7.24	献血運動推進全国大会厚生労働大臣表彰状等伝達式	県庁	献血優良団体	厚生労働大臣表彰状・感謝状等の伝達を行った。	
	H21.8.15	学生献血推進協議会主催キャンペーン	ゆめタウン高松	学生献血推進協議会	夏場の血液不足に対応するため、大学生献血ボランティアが街頭キャンペーンを実施。	広く県民のみならず、主催者側である学生への献血意識の啓発もできた。
	H21.8.17 H21.9.5 H21.11.7 H21.11.15	高校生献血サポーター事業	献血ルーム 琴平高校文化祭 住民献血実施場所	高校生	高校単位で献血サポーターを募り、献血ボランティアを体験してもらった。琴平高校では、学校の文化祭で献血ブースを出し、サポーター自らが企画運営を行った。	学校と協議しながらボランティア内容を決定した。
	H21.12.20	クリスマス献血キャンペーン	イオン高松ショッピングセンター	学生献血推進協議会	冬場の血液不足に対応するため、大学生献血ボランティアが街頭キャンペーンを実施。献血協力者へはクリスマスケーキをプレゼントした。	広く県民のみならず、主催者側である学生への献血意識の啓発もできた。
	H22.2.23	献血車新車披露式	県庁	県民	日本宝くじ協会から新たに寄贈された献血車を披露。マスコミに取材を依頼し、新車をPRした。	

【愛媛県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
愛媛県	H22.1.26			英国渡航歴のある方	封書により、英国渡航歴緩和についての説明書等を送付	551名へ送付。

【福岡県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
福岡県	H21.7.23	第43回福岡県献血運動推進大会	朝倉市総合市民センター「ピーポート甘木」	献血功労者及び県民	「愛の血液助け合い運動」の一環として開催。 献血功労者に対する表彰、献血に関する体験発表等を行い、県内における献血思想の普及啓発を図った。	
	H21.11.17	福岡県市町村献血推進協議会連合会理事会	福岡県庁	理事	県内の市区町村献血推進協議会の事業に関する連絡調整及び円滑な運営を図ることを目的とする。 理事会においては、市区町村献血推進協議会の事業に対する、補助金配分案等について協議を行った。	
	H21.11.26	第13回福岡県輸血療法委員会合同会議	福岡県吉塚合同庁舎	血液製剤を使用する医療機関の医師、薬剤師、臨床検査技師等	血液製剤の使用適正化に密接な関係にある医療現場における輸血について、適正な輸血療法の推進を目的として開催。 輸血療法に関する研修や、輸血業務に関するアンケートの集計結果を基に今後の課題検討等を行った。	
	H22.2.17	福岡県献血推進協議会	福岡県吉塚合同庁舎	委員	次年度の献血推進計画を策定するとともに、その他献血組織の育成強化、献血思想の普及を図るための広報活動等を行った。	
	H22.3.29～	初回献血者の採血副作用防止対策	福岡県内移動献血会場及び固定施設（献血ルーム等）	初回献血者	初回者に採血後副作用のリスクとその対応策等の情報を提供し、初回献血者とわかるネックストラップ式カードケースを身につけていただき、全職員が初回献血者に注意を払い採血副作用の防止に努める。	

【長崎県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
長崎県	H21.7.16	第45回献血運動推進全国大会	アルカスSASEBO（佐世保市）	献血功労者、献血推進協力団体、一般県民	国内の医療に関するすべての血液製剤を献血により確保することを目指し、国民一人ひとりが献血の重要性を再認識し、特に今後一層の推進が望まれる成分献血及び400ﾐﾘﾘｯﾄﾙ献血への理解を深め、献血運動が全国で盛り上がり、我が国の血液事業を一層発展させるため、本大会を開催した。	参加者 約2,100名
	H21.7.12	献血サマーイベント2009	献血ﾙｰﾑ「はまのまち」（長崎7/12）	県民	学生ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱが主体となり、献血協力の呼びかけ等を行う。	
	H20.7.4	血液センター「一日所長」行事	佐世保四ｹ町アーケード 献血ルーム「はまのまち」	県民	2名の方に血液ｾﾝﾀｰ「一日所長」を委嘱し、献血協力の呼びかけ等を行う。	
	H21.12.12 H21.12.13	全国学生クリスマスキャンペーン2009	献血ルーム「はまのまち」（12/12～13） 献血ルーム「西海」（12/13）	県民	全国的なキャンペーンとして、学生ボランティアが主体となり、献血協力の呼びかけ等を行う。	
	H22.1.10	成人の日献血	献血ルーム「西海」	新成人を中心とした県民	成人式会場や献血ルームにて献血協力の呼びかけ等を行う。	
	2010/1/9 2010/1/31	長崎学生献血推進協議会	日本赤十字社九州血液センター	学生ボランティア	学生ボランティアが集まり、活動状況報告やグループ討論を実施し、献血に対する理解を深める。今年度は、血液製剤の製造等に関する知識を修得した。	
	H21.11.4～H22.1.15（募集）	献血推進ポスター募集		県内中学生、高校生	若年層へ献血についての一層の普及啓発と広報活動を行うため、献血をテーマにしたポスターデザインを募集。	応募数　61点（中学生44点、高校生17点）
	H22.2.18～2.20	冬場の献血者確保キャンペーン	県内一円	県民	献血者が減少する冬場の献血者を確保するとともに、新たな献血協力者の開拓を図るため県内市町及び献血ルームでイベントを行いながら献血への協力を呼びかける。	献血者数894人

【大分県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
大分県	H21.7.18～H21.7.19	大分県学生献血サポーター	九石ドーム、大分市、竹田市	県民	学生献血推進協議会のメンバーと、市街地でのパレードや、各献血会場での献血の呼びかけを行った。また、J1リーグの地元チームの試合前に、ピッチで観客に献血のPRを行った。	5校　16名参加 献血者数　161名
	H21.8.20	九州ブロック学生献血推進協議会代表による大分県知事表敬訪問	県庁	県民	九州ブロック学生献血推進協議会の代表が大分県知事を表敬訪問し、献血啓発に対する決意メッセージを伝達。 献血の重要性を県民に対し発信した。	
	H21.12.20	学生クリスマス献血キャンペーン「ふれあい広場」	大分県赤十字血液センター	県民	若年層を中心に献血クイズなど献血の啓発活動を行った。会場には、屋台等多くの模擬店を出店した。	来場者630名 献血者122名
	H22.1.10	はたちの献血キャンペーン街頭広報	大分市成人式会場	新成人	成人式会場で、新成人に献血のPRを行った。	
	H21.7.1	「愛の血液助け合い運動」街頭広報	大分市トキハデパート前	県民	献血協力の街頭広報を行い、献血のPRのうちわやポケットティッシュを配布した。	37名参加
	H22.2.17	大分県献血推進協議会	大分センチュリーホテル	委員	今年度血液事業実績の報告と来年度の献血目標等について協議した。	
	H22.3.3 H22.3.12,16 H22.3.15	血液製剤使用適正化説明会	日田市、玖珠町、九重町 大分市、由布市 国東市	医療機関	血液製剤の適正使用について医療機関に説明会を開催した。	
大分県赤十字血液センター	H21.7.1	愛の血液助け合い運動月間広報	大分合同新聞に広告掲載	幅広い年代の個人、企業・団体	１年間の献血協力団体一覧を掲載し、協力団体への感謝と未協力団体への意識付けを図り、幅広い年代への献血の啓発と献血ルームのPRを目的とする。	
九州ブロック赤十字血液センター連盟 九州ブロック学生献血推進協議会	H21.8.20	愛の献血ふれあいフェスタin大分	九州ブロック赤十字血液センターが持ち回りで担当し、各県学生献血推進協議会の運営で大分市内のイベント会場で開催	１０代・２０代の若者を中心とした幅広い年代	九州各県の学生献血推進協議会の活動発表や輸血、献血に関する講演会やイベントをとおして、献血への理解と協力を呼びかけることを目的とする。	九州８県１０ブロックの学推協学生９５人と各県血液センター関係者２５名、一般約５０人が参加。

【沖縄県】

都道府県名	行事年月日	行事の名称	開催場所等	対象	概要	備考
沖縄県	H22.1.11	成人式での知事メッセージ伝達	県内成人式会場	二十歳の成人	「はたちの献血」の一環として、新たに成人式を迎える若者へ成人式会場において、知事メッセージを送る	新たに成人を迎えるにあたり、献血への理解と協力を求める
沖縄県 沖縄県赤十字血液センター	H21.7.6	愛の血液助け合い運動　街頭キャンペーン	県内	県民	広く県民に献血への理解と協力を求める	全国一斉に行われるキャンペーンの盛り上がりと周知を図る
	H21.7.30	厚生労働大臣、県知事表彰、日赤支部長及び県血液センター所長表彰の伝達式	県内（県庁内）	受賞団体及び個人	愛の血液助け合い運動の一環として、厚労大臣表彰及び県知事表彰等の伝達式を行う	全国一斉に行われるキャンペーンの盛り上がりと周知を図る
	H21.7.21～22	市町村献血キャラバンの実施	沖縄県離島 （宮古・八重山地区3市町村）	県民	愛の血液助け合い運動の一環として、献血キャラバン隊を編成し、市町村へ知事メッセージの伝達を行い、県民への献血思想の普及を図る	全国一斉に行われるキャンペーンの盛り上がりと周知を図る
	H21.1.8	はたちの献血　街頭キャンペーン	県内	県民（若年層を中心）	新たに成人式を迎える「はたち」の若者を中心として広く県民各層に献血に関する理解と協力を求めるとともに、特に成分献血、400mL献血の継続的な推進を図るため	全国一斉に行われるキャンペーンの盛り上がりと周知を図る
	H22.2.12	血液センター１日所長	県内（献血ルーム前）	県民（若年層を中心）	二十歳の学生が１日献血所長に就任し、献血のPR活動を行う	全国一斉に行われるキャンペーンの盛り上がりと周知を図る
	H21.10～H22.2	献血教室	県内の高等学校	高校生	将来の献血制度を支えていく高校生の献血に対する知識を深めていくとともに、ボランティア精神を養うことを目的とする（協力校：25校）	将来の血液製剤の安定供給を確保していくため

2010.09.30

日本赤十字社 血液事業本部

資料３－４

献血者確保対策について

（日本赤十字社の取り組み）

Ⅰ．これまでの献血者確保対策

（献血構造改革の達成状況）

項目	目標	取組み内容	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
若年層の献血者数の増加	10 代、20 代を献血者全体の40%まで上昇させる	・青少年等献血ふれあい事業の実施 　小学生、中学生及び高校生を対象に血液センターや献血バスの見学およびスライド等による血液及び献血についての学習を行う。 ・若年者献血セミナー事業の実施 　10 代後半から 30 代前半の若年層を対象に各地域で若年層向けセミナーを実施し、献血への理解を深めてもらい、献血意識の向上を図る。	33.4%	31.5%	29.2%	28.3%	26.8%
安定的な集団献血の確保	集団献血等に協力する企業を倍増させる	献血に積極的に協力する企業等が行う献血活動を社会貢献活動の一つとして広く一般社会に認知されるよう、実績が優良な企業等に対してロゴマーク等を発行することにより、企業等が行う献血活動の普及・拡大を図る。	24,220 社	30,835 社	34,059 社	38,399 社	43,193 社
複数回献血の増加	複数回献血者を献血者全体の 35%まで上昇させる	複数回献血者を確保するため、各血液センター毎に複数回献血者を確保するためのクラブを設立し、クラブ会員に対して以下の情報等を提供することにより、複数回献血者の確保を図る。	27.5%	28.1%	29.5%	30.3%	31.3%

（単位：人）

		平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
献血者数	総献血者数	5,238,170	4,983,009	4,955,954	5,137,612	5,303,431
	実献血者数	3,337,126	3,145,822	3,065,473	3,108,990	3,143,972
	献血回数１回	2,419,644	2,262,210	2,160,700	2,166,402	2,159,206
	献血回数２回以上	917,482	883,612	904,773	942,588	984,766
	10 代の献血者数	431,183	366,602	318,859	305,019	293,696
	20 代の献血者数	1,298,840	1,176,832	1,130,741	1,146,710	1,126,931

①青少年等献血ふれあい事業

	平成18年度							平成19年度							平成20年度							平成21年度						
	実施回数	参加人数					計	実施回数	参加人数					計	実施回数	参加人数					計	実施回数	参加人数					計
		幼児	小学	中学	保護	その他			幼児	小学	中学	保護	その他			幼児	小学	中学	保護	その他			幼児	小学	中学	保護	その他	
北海道	58	0	3,102	158	0	165	3,425	58	0	3,102	137	169	0	3,408	34	0	2,541	58	103	0	2,702	35	0	2,380	114	89	0	2,583
青　森	54	0	20	0	315	0	335	23	12	116	0	44	42	214	33	0	75	7	12	234	328	23	0	55	0	120	196	371
岩　手	6	4	57	0	462	38	561	35	7	187	8	105	524	831	20	12	205	14	134	451	816	24	11	238	3	157	396	805
宮　城	12	4	599	58	72	39	772	56	0	89	66	49	357	561	39	0	201	10	160	272	643	42	0	299	18	254	178	749
秋　田	6	10	121	37	172	10	350	11	10	107	30	13	185	345	14	0	100	33	4	495	632	3	20	140	11	130	22	323
山　形	4	0	22	88	30	0	140	3	0	18	35	0	55	108	14	0	8	100	40	179	327	23	7	47	761	0	375	1,190
福　島	8	0	53	18	264	48	383	8	0	169	19	108	46	342	3	0	190	0	134	0	324	7	0	176	13	44	123	356
茨　城	2	0	150	30	120	150	450	3	2	146	40	120	126	434	5	3	128	52	115	144	442	5	0	159	0	96	75	330
栃　木	5	0	3	0	112	0	115	17	110	243	0	196	206	755	8	120	0	4	0	356	480	14	120	64	0	393	106	683
群　馬	5	290	510	0	0	0	800	4	160	190	0	0	0	350	6	180	370	0	490	0	1,040	7	220	450	0	0	0	670
埼　玉	19	200	0	0	365	334	899	17	189	0	0	0	624	813	68	200	63	0	323	421	1,007	6	80	90	0	260	148	578
千　葉	7	2	75	30	1,425	24	1,556	3	0	32	260	32	0	324	3	0	308	0	36	0	344	3	0	330	0	42	0	372
東　京	33	0	0	48	512	0	560	5	0	0	212	0	189	401	64	0	374	0	0	607	981	62	0	243	0	163	716	1,122
神奈川	2	0	366	3	63	1	433	3	0	480	0	0	52	532	4		750	39		70	859	33	10	403	16	87	0	516
新　潟	5	0	0	0	404	3	407	16	0	0	4	50	366	420	13	0	47	20	0	400	467	5	0	0	42	0	292	334
山　梨	1	190	0	0	20	190	400	2	190	0	0	190	120	500	1	180	0	0	180	40	400	2	180	0	0	100	120	400
富　山	2	184	267	61	30	96	638	4	50	68	196	0	13	327	3	48	134	39	71	28	320	2	80	104	46	80	20	330
石　川	1	0	90	0	0	0	90	5	0	158	0	76	96	330	4	0	92	0	97	249	438	4	0	89	0	60	355	504
福　井	6	20	320	6	0	0	346	10	0	213	7	183	79	482	15	0	302	107	70	131	610	6	0	214	104	55	78	451
長　野	5	0	210	105	0	170	485	4	15	220	42	45	0	322	7	0	97	126	50	50	323	7	0	143	63	50	180	436
岐　阜	7	0	50	314	127	0	491	7	0	64	406	20	62	552	5	0	0	281	0	52	333	5	0	0	0	0	336	336
静　岡	6	0	208	89	71	2	370	6	12	308	55	15	38	428	5	15	216	109	47	60	447	9	15	130	5	22	177	349
愛　知	1	0	239	0	91	208	538	9	0	900	34	321	6	1,261	9	0	522	24	330	7	883	12	0	560	14	189	100	863
三　重	25	0	0	0	330	10	340	32	0	0	0	10	324	334	20	0	0	0	20	310	330	4	0	0	0	20	320	340
滋　賀	1	0	315	0	0	287	602	4	5	544	2	353	2	906	3	13	444	5	324	0	786	5	105	4003	0	370	0	4,478
京　都	5	0	118	12	197	23	350	4	0	146	13	85	113	357	12	0	242	2	121	21	386	10	0	759	20	274	10	1,063
大　阪	10	0	1191	0	20	741	1,952	10	0	1156	0	702	26	1,884	9	0	989	0	599	25	1,613	9	0	677	0	432	20	1,129
兵　庫	16	4	50	97	206	30	387	59	2	292	83	43	1,100	1,520	16	2	493	15	236	362	1,108	22	253	112	48	306	235	954
奈　良	2	7	70	0	0	40	117	9	21	234	20	155	1	431	6	17	193	2	117	1	330	6	10	184	1	126	1	322
和歌山	1	0	9	11	0	10	30	2	90	143	8	170	0	411	2	64	199	5	156	0	424	3	116	196	4	125	0	441
鳥　取	5	0	53	21	12	38	124	12	10	63	40	75	93	281	9	0	138	8	78	125	349	10	0	119	0	81	210	410
島　根	23	0	0	3	676	0	679	4	0	183	3	124	46	356	8	0	100	0	64	0	164	9	0	155	0	135	35	325
岡　山	20	0	426	0	0	293	719	7	0	435	0	246	0	681	14	0	374	0	216	0	590	14	0	410	0	254	0	664
広　島	6	19	198	0	0	103	320	6	5	131	9	92	135	372	6	0	239	23	100	90	452	4	2	160	12	106	130	410
山　口	4	0	274	0	0	144	418	19	2	361	0	97	130	590	26	20	1300	18	100	112	1,550	19	20	435	90	90	181	816
徳　島	5	0	60	60	240	30	390	5	4	180	0	150	0	334	3	0	60	0	59	0	119	7	0	221	0	76	35	332
香　川	13	0	40	18	414	36	508	10	0	525	0	60	0	585	13	0	540	0	83	0	623	9	0	351	0	61	0	412
愛　媛	5	5	101	70	0	59	235	7	2	116	627	72	30	847	3	0	103	0	70	24	197	5	0	44	200	34	1,000	1,278
高　知	4	0	0	0	320	0	320	3	0	0	0	0	333	333	5	0	30	0	70	380	480	6	0	0	0	0	320	320
福　岡	2	0	5,440	0	5	0	5,445	7	0	75	133	0	115	323	26	0	383	77	3	294	757	35	0	1,334	47	24	132	1,537
佐　賀	5	0	16	0	576	8	600	8	0	14	1	6	625	646	7	0	48	1	0	745	794	8	0	82	0	25	340	447
長　崎	20	0	10	11	318	20	359	8	0	0	0	19	355	374	20	0	0	0	13	340	353	8	0	0	1	4	488	493
熊　本	7	0	92	0	234	58	384	8	0	140	0	140	140	420	9	0	139	0	87	98	324	8	5	191	2	124	0	322
大　分	6	50	210	25	100	170	555	5	30	140	110	90	0	370	9	20	110	75	90	248	543	7	31	186	104	216	327	864
宮　崎	6	0	88	0	179	67	334	6	0	91	0	61	171	323	16	0	86	0	62	176	324	12	0	58	0	48	216	322
鹿児島	2	0	65	0	1,260	40	1,365	9	6	65	26	42	0	139	15	19	254	33	120	0	426	20	18	273	134	132	20	577
沖　縄	26	0	273	206	0	0	479	18	0	218	88	29	0	335	2	0	0	4	26	2	32	10	0	765	868	50	52	1,735
	474	989	15,561	1,579	9,742	3,685	31,556	571	934	12,062	2,714	4,557	6,925	27,192	636	913	13,187	1,291	5,210	7,599	28,200	589	1,303	17,029	2,741	5,504	8,065	34,642

②若年者献血セミナー事業

	平成18年度							平成19年度							平成20年度							平成21年度						
	実施回数	参加人数						実施回数	参加人数						実施回数	参加人数						実施回数	参加人数					
		高校	大学	他学生	社会人	その他	計		高校	大学	他学生	社会人	その他	計		高校	大学	他学生	社会人	その他	計		高校	大学	他学生	社会人	その他	計
北海道	2	0	75	92	0	0	167	7	0	180	116	0	0	296	3	0	36	50	0	0	86	7	200	59	50	0	0	309
青　森	2	0	44	0	0	0	44	21	335	60	0	40	0	435	15	22	80	0	313	0	415	3	15	16	45	14	511	601
岩　手	2	15	18	17	57	0	107	5	6	3	8	74	40	131	4	4	7	8	0	448	467	3	15	16	45	14	511	601
宮　城	2	0	90	0	0	21	111	5	0	47	0	220	44	311	7	155	160	460	100	0	875	8	650	0	390	200	0	1,240
秋　田	7	740	6	15	257	0	1,018	11	0	0	0	445	0	445	5	587	92	0	0	19	698	4	0	210	0	110	0	320
山　形	8	88	20	87	121	8	324	2	5	8	4	18	223	258	4	0	0	0	270	3	273	6	0	90	0	338	0	428
福　島	2	180	35	15	10	15	255	5	197	15	0	0	0	212	6	110	66	0	0	0	176	2	0	22	0	0	3	25
茨　城	3	120	330	70	150	150	820	4	270	250	30	150	150	850	10	220	950	30	150	150	1,500	22	96	1,159	0	23	0	1,278
栃　木	5	0	1,300	0	100	1,550	2,950	9	60	3,070	2,201	0	10	5,341	7	0	3,400	3,142	0	0	6,542	8	0	3,529	2,669	0	86	6,284
群　馬	4	30	150	150	0	0	330	4	40	30	320	30	0	420	4	50	150	310	50	0	560	2	0	0	10	300	0	310
埼　玉	23	905	2	1,094	182	474	2,657	16	2,133	24	484	200	43	2,884	29	4,432	19	1,310	364	0	6,125	16	1,778	0	358	389	0	2,525
千　葉	6	300	1,335	34	0	12	1,681	3	830	0	0	0	90	920	4	2,113	0	0	0	0	2,113	3	1,860	0	0	0	0	1,860
東　京	3	40	1,000	0	120	0	1,160	2	0	100	0	80	0	180	3	0	1,000	0	100	0	1,100	3	0	1,050	0	0	70	1,120
神奈川	2	560	0	0	0	0	560	3	330	200	0	0	0	530	4	75	7	12		2	96	5	815	27	33	9	0	884
新　潟	5	1,784	0	0	0	0	1,784	7	550	0	0	0	0	550	6	737	0	0	0	0	737	9	987	0	45	0	0	1,032
山　梨	2	90	20	0	0	10	120	6	0	298	631	345	94	1,368	6	0	80	450	80	50	660	10	0	530	720	500	130	1,880
富　山	2	0	0	27	0	0	27	6	16	0	258	2	4	280	6	14	40	287	0	6	347	5	16	0	281	0	5	302
石　川	2	0	96	0	0	0	96	2	0	72	0	0	0	72	2	0	95	0	0	0	95	2	0	78	0	0	0	78
福　井	7	65	40	8	0	280	393	2	0	0	12	100	2	114	2	60	30	65	10	50	215	5	50	50	140	50	51	341
長　野	4	0	60	40	70	0	170	7	423	50	40	14	0	527	9	388	0	170	100	0	658	4	40	0	378	0	0	418
岐　阜	2	55	45	20	180	130	430	12	23	155	75	13	45	311	16	4	226	16	52	12	310	2	50	13	0	3	0	66
静　岡	4	76	64	0	0	10	150	5	450	30	0	6	2	488	27	69	392	0	20	13	494	26	260	301	0	22	10	593
愛　知	3	0	207	0	6	15	228	6	80	48	1,493	60	0	1,681	20	39	684	165	86	19	993	20	953	482	177	38	42	1,692
三　重	2	110	50	40	30	20	250	2	110	50	40	30	20	250	2	90	80	20	20	10	220	2	40	90	20	50	50	250
滋　賀	2	191	50	0	0	0	241	4	320	223	0	0	22	565	9	0	584	0	45	0	629	11	0	484	65	85	2	636
京　都	3	91	13	0	3	13	120	7	114	0	152	2	3	271	8	372	0	198	24	0	594	6	170	0	120	20	0	310
大　阪	22	7	0	358	200	0	565	56	76	0	137	0	0	213	41	20	0	160	0	0	180	50	0	0	175	0	0	175
兵　庫	7	2	446	6	49	0	503	8	110	180	32	73	0	395	7	350	212	50	0	0	612	9	350	685	0	0	0	1,035
奈　良	1	0	20	120	0	0	140	3	0	35	1	10	5	51	2	0	31	0	0	0	31	2	0	30	0	2	5	37
和歌山	2	0	200	0	0	0	200	6	0	483	0	0	0	483	7	0	614	0	0	0	614	7	0	553	0	0	0	553
鳥　取	5	0	31	0	0	16	47	8	52	67	36	139	31	325	8	0	41	0	250		291	6	0	15	0	261	0	276
島　根	2	20	160	0	30	0	210	2	30	80	0	290	0	400	2	0	150	200	350	0	700	5	0	160	180	500	0	840
岡　山	5	0	65	31	0	0	96	11	0	119	83	0	0	202	8	0	98	54	0	0	152	8	0	94	29	0	0	123
広　島	2	0	116	0	0	0	116	4	99	138	0	0	0	237	6	55	126	0	10	0	191	4	60	130	0	0	0	190
山　口	2	0	50	16	0	0	66	2	0	39	10	0	0	49	2	0	40	10	0	0	50	2	0	60	20	0	0	80
徳　島	2	100	200	50	100	0	450	4	0	700	100	0	0	800	5	0	777	0	8	0	785	5	0	575	0	0	0	575
香　川	3	0	173	0	0	2,345	2,518	5	434	35	92	0	45	606	3	140	0	92	0	0	232	6	385	0	61	0	0	446
愛　媛	3	0	90	10	140	0	240	2	0	80	0	130	0	210	2	0	48	0	158	0	206	2	0	50	0	150	0	200
高　知	2	0	0	0	90	0	90	2	40	50	60	70	0	220	2	0	20	50	30	140	240	2	60	60	60	60	60	300
福　岡	3	798	35	0	0	0	833	3	821	30	0	0	0	851	3	846	0	0	0	43	889	3	1,364	0	0	0	20	1,384
佐　賀	2	0	450	0	0	0	450	2	0	450	0	0	0	450	8	280	800	0	0	0	1,080	8	900	1,168	77	0	4	2,149
長　崎	2	0	21	0	0	0	21	2	0	15	0	0	0	15	2	10	25	0	0	0	35	9	0	48	0	0	0	48
熊　本	2	0	60	0	0	0	60	2	40	56	0	0	0	96	3	13	74	0	0	0	87	3	16	83	0	0	0	99
大　分	7	70	211	10	110	0	401	7	140	90	20	10	0	260	8	1,136	30	72	2	10	1,250	7	40	187	227	0	19	473
宮　崎	3	0	51	0	0	0	51	3	0	52	0	0	0	52	3	0	60	0	0	0	60	4	21	40	0	0	0	61
鹿児島	2	0	27	6	0	1	34	2	0	21	10	0	0	31	2	0	42	4	0	0	46	10	790	83	304	146	0	1,323
沖　縄	21	1,765	20	150	0	0	1,935	25	2,792	18	0	0	0	2,810	21	2,517	0	212	0	0	2,729	34	5,131	0	210	0	0	5,341
	209	8,202	7,476	2,466	2,005	5,070	25,219	322	10,926	7,651	6,445	2,551	873	28,446	363	14,908	11,366	7,597	2,592	975	37,438	380	17,112	12,227	6,889	3,284	1,579	41,091

③献血協賛企業活動推進事業

	企業･団体数				ロゴマーク配付数			
	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
	2007年 3月末現在	2008年 3月末現在	2009年 3月末現在	2010年 3月末現在	目標2,400	目標2,400	目標2,400	目標2,400
北海道	1,507	1,850	2,050	2,217	81	117	117	117
青 森	608	650	681	815	51	25	6	6
岩 手	820	897	953	1,136	22	64	64	64
宮 城	665	715	852	1,100	63	24	32	47
秋 田	934	1,042	1,145	1,423	89	10	14	75
山 形	459	512	565	692	44	25	0	22
福 島	1,187	1,308	1,475	1,635	170	92	6	5
茨 城	694	783	890	1,020	47	54	54	54
栃 木	704	787	887	979	4	55	30	35
群 馬	673	734	810	896	14	52	52	52
埼 玉	1,014	1,131	1,269	1,421	86	2	7	2
千 葉	1,012	1,080	1,202	1,343	13	24	79	79
東 京	867	969	1,102	1,242	1	11	45	7
神奈川	685	757	810	864	18	53	53	36
新 潟	562	632	729	826	0	44	44	4
山 梨	197	204	227	258	14	16	10	15
富 山	543	582	599	619	0	2	0	2
石 川	262	279	317	346	0	19	13	53
福 井	224	242	278	302	22	17	17	17
長 野	706	759	863	961	55	203	0	0
岐 阜	634	701	800	894	10	49	45	49
静 岡	1,252	1,359	1,540	1,737	1	6	1	18
愛 知	1,476	1,633	1,871	1,995	0	76	44	56
三 重	589	655	736	819	54	29	12	12
滋 賀	298	319	362	398	29	14	3	5
京 都	525	573	634	688	0	4	24	19
大 阪	1,555	1,712	1,957	2,198	50	121	121	121
兵 庫	1,590	1,717	1,916	2,117	126	124	5	2
奈 良	365	408	474	530	0	9	0	2
和歌山	555	604	710	788	44	43	43	43
鳥 取	548	616	717	806	2	15	6	44
島 根	666	733	823	936	5	52	7	52
岡 山	500	545	644	746	35	22	29	10
広 島	120	130	145	165	11	9	9	9
山 口	531	563	622	682	0	8	41	40
徳 島	446	483	540	590	44	35	19	10
香 川	491	574	670	735	42	38	13	38
愛 媛	800	824	882	1,013	42	62	62	62
高 知	354	381	446	508	3	20	18	15
福 岡	341	403	457	510	0	59	27	27
佐 賀	216	246	282	320	3	18	10	2
長 崎	544	611	697	824	20	42	42	33
熊 本	373	403	455	506	24	30	5	3
大 分	265	286	347	386	25	21	21	21
宮 崎	449	516	589	648	70	12	1	10
鹿児島	671	741	836	927	0	45	52	27
沖 縄	358	415	543	634	20	23	28	28
	30,835	34,059	38,399	43,193	1,454	1,895	1,331	1,450

④複数回献血者クラブに関する事業

	平成18年度				平成19年度				平成20年度				平成21年度			
	クラブ会員数（H19.3末現在）	クラブ情報誌等発行部数	各種講演会等開催数	健康相談実施回数	クラブ会員数（H20.3末現在）	クラブ情報誌等発行部数	各種講演会等開催数	健康相談実施回数	クラブ会員数（H21.3末現在）	クラブ情報誌等発行部数	各種講演会等開催数	健康相談実施回数	クラブ会員数（H22.3末現在）	クラブ情報誌等発行部数	各種講演会等開催数	健康相談実施回数
北海道	3,600	60,100	1	10	1,600	4,000	1	8	3,200	72,050	1	3	5,309	25,000	1	3
青森	1,500	20,000	2	31	2,500	40,000	1	45	3,200	130,000	1	100	3,713	140,000	1	100
岩手	700	19,100	2	26	1,000	9,500	2	32	1,400	7,500	2	42	1,678	11,000	2	48
宮城	1,600	42,000	2	13	3,900	150,000	2	14	5,700	60,000	1	8	7,803	90,000	5	8
秋田	1,200	35,000	4	18	1,900	72,000	2	19	2,000	20,000	9	19	2,134	13,220	1	14
山形	500	31,000	2	9	700	46,600	1	32	1,200	70,000	1	50	2,187	60,000	1	41
福島	1,100	11,000	2	16	1,800	70,000	1	16	2,300	5,500	1	16	2,769	5,700	1	18
茨城	1,300	38,100	1	21	2,000	72,020	1	21	2,800	90,000	1	21	3,529	130,000	1	10
栃木	800	71,100	2	24	1,200	100,000	5	93	2,100	28,000	7	161	2,531	12,500	6	96
群馬	1,700	82,000	1	71	2,000	43,000	1	46	3,500	22,700	1	94	5,744	60,000	1	89
埼玉	4,200	60,000	1	1	7,800	12,000	1	1	12,100	20,000	1	12	19,283	131,380	1	36
千葉	1,700	10,000	1	24	3,400	110,000	1	16	5,200	120,000	1	10	7,982	140,000	1	12
東京	18,900	198,900	1	24	21,900	40,000	3	45	30,500	90,000	3	21	42,613	270,000	1	11
神奈川	2,400	16,000	3	30	4,400	45,000	3	30	9,300	36,400	3	28	19,175	94,083	2	20
新潟	600	10,000	1	36	1,100	10,000	1	36	2,100	10,000	1	33	3,099	10,000	1	33
山梨	600	34,831	2	28	900	6,805	2	30	1,000	5,519	2	30	1,625	9,430	1	30
富山	400	20,000	1	17	500	131,500	1	14	800	115,500	1	25	990	31,800	1	32
石川	500	102,400	1	41	700	27,200	1	41	1,700	40,000	1	39	2,440	65,000	1	39
福井	700	70,070	2	43	1,000	63,024	2	73	2,000	115,000	1	51	2,710	80,500	1	50
長野	1,200	22,500	2	26	1,600	37,500	1	17	1,900	21,000	1	17	2,925	51,000	1	17
岐阜	900	51,000	1	39	1,500	40,000	1	41	2,100	23,000	1	40	2,504	18,000	1	44
静岡	1,100	100,000	2	22	2,600	60,000	3	42	3,900	60,000	2	29	6,425	120,000	2	55
愛知	1,700	30,500	3	2	5,000	45,000	1	3	9,900	9,000	1	5	13,751	13,000	1	7
三重	500	41,000	2	14	500	131,000	3	15	1,100	111,200	1	16	1,515	110,350	2	15
滋賀	600	20,000	1	25	700	10,000	1	32	900	15,000	2	43	1,053	10,000	3	97
京都	2,500	55,000	1	8	2,900	16,000	2	8	4,100	21,000	1	8	5,578	22,500	1	8
大阪	4,000	220,000	1	10	7,400	25,000	1	10	15,000	155,000	1	10	13,757	200,000	1	10
兵庫	1,500	48,460	1	22	2,500	37,500	1	21	4,700	19,000	2	39	8,016	58,000	1	3
奈良	2,000	173,000	2	8	1,300	120,000	4	21	1,700	100,000	4	29	3,553	80,000	2	30
和歌山	900	45,000	2	6	500	53,257	3	10	1,400	14,489	4	15	2,360	50,000	1	10
鳥取	300	66,760	3	31	400	38,780	3	31	500	41,000	3	28	685	26,500	2	32
島根	500	49,100	3	22	1,100	21,100	3	18	1,300	166,100	2	19	1,824	32,600	1	17
岡山	700	65,000	1	30	1,000	60,000	1	32	2,200	90,000	1	26	2,675	3,000	2	18
広島	700	82,000	2	40	900	170,000	2	42	1,600	40,000	2	40	2,264	15,000	2	32
山口	600	65,000	1	32	900	170,000	2	32	1,300	117,020	3	48	1,764	25,000	1	19
徳島	200	20,000	1	26	400	30,300	1	25	800	2,000	1	49	1,067	32,000	1	50
香川	200	5,000	2	31	500	30,000	3	39	800	10,000	3	37	1,634	50,000	4	24
愛媛	500	2,500	1	25	800	82,000	1	25	1,600	57,098	1	30	3,724	50,000	1	76
高知	300	184,000	3	48	500	86,000	1	46	900	7,000	1	46	1,135	2,200	1	50
福岡	1,900	22,828	1	16	7,200	39,070	1	15	8,100	39,951	1	15	10,180	59,415	1	17
佐賀	700	40,600	2	36	800	10,700	1	16	1,000	204,000	1	16	1,104	304,000	1	36
長崎	300	10,000	1	30	600	10,000	1	30	1,000	10,000	1	32	1,326	10,000	3	29
熊本	1,100	45,000	2	8	4,100	89,000	1	9	4,600	150,000	1	20	2,988	100,000	1	19
大分	600	16,000	2	22	1,500	8,000	1	30	2,000	4,000	1	4	2,088	4,000	1	6
宮崎	400	19,444	2	14	500	15,000	2	21	900	13,281	1	30	1,152	12,446	2	2
鹿児島	400	30,000	2	14	700	9,875	2	22	900	10,000	2	13	1,623	10,000	10	24
沖縄	500	40,000	2	31	700	30,000	1	15	800	21,500	2	20	918	28,000	2	20
全国計	70,800	2,501,293	81	1,121	109,400	2,527,731	80	1,280	169,100	2,589,808	86	1,487	236,902	2,876,624	82	1,457

Ⅱ．今後の献血者確保対策

（献血推進のあり方に関する検討会報告を踏まえて）

平成22年度以降の継続的な取組みとして、幼少期も含めた若年層、企業や団体、複数回献血者を普及啓発の対象として効果的な活動や重点的な献血者募集を実施する。

特に若年層を対象とした取組みとして体験学習の継続的な実施等献血への動機付けとしての活動を促進する。

１　若年層を対象とした対策

（１）　高校生への対策

「高等学校学習指導要領解説　保健体育編」に献血に関する内容が盛り込まれたことから、これまで実施してきた若年者献血はもとより、献血のみならず、赤十字活動全体を含めた命の大切さ等について学校へ出向いての勉強会を積極的に実施する。

《実施計画及び目標》

平成22年度　現状の把握。統一資材の作成。勉強会の実施
平成23年度　勉強会実施（実施回数→対前年度比10％増を目標）
平成24年度　勉強会実施（実施回数→対前年度比10％増を目標）
平成25年度　勉強会実施（実施回数→対前年度比10％増を目標）
平成26年度　統一資材の改訂。勉強会の実施

（２）　大学生への対策

献血推進活動を行っている献血ボランティア組織等の協力を得るとともに、連携を図り大学生における献血推進の促進をする。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　大学献血時の啓発施策の実施
平成23年度　　大学献血時の啓発施策の実施
平成24年度以降　新たな献血推進の施策検討及び実施

（３）　若年層全体への取組み

若年者向けの雑誌、放送媒体、インターネットを含む様々な広報手段を用いた効果的な広報施策を講ずる。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　LOVE in Action PROJECT（第２期）

平成23年度　　LOVE in Action PROJECT（第３期）

平成24年度以降　新たな若年層対策プロジェクトの検討及び実施

（４）　初回献血者への取組み

初めて献血をする方の献血に対する不安等を払拭するため、平成22年度中に学校献血会場において、採血後の献血者をケアする者の配置や献血の手順や献血後の過ごし方等のビデオ映像を視聴していただき、採血副作用の防止の施策を実施する。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　映像製作

平成23年度以降　初回献血者用映像による採血副作用防止施策の実施

２　献血者の年齢層に応じた献血推進対策

（１）　20代後半～30代前半の女性を対象とした対策

この年代の女性については、出産、あるいは子育てに忙しいという理由により献血者が減少しているものと考えられることから、これらの方々に献血に戻ってきてもらうための取組みとして、献血ルームの環境整備等の受入体制を整える。

《実施計画及び目標》

平成22年度以降　献血ルーム施設整備ガイドラインに基づき、能動的に献血ルームの環境整備を行う。

（２）　40歳～50歳代を対象とした対策

企業や団体の中心的な存在であるこの年代に対して、「血液の使われ方」、「献血可能年齢」等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、社会貢献活動の一つとして、地域の実情に即した方法で企業・団体等における献血の推進を実施する。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　パンフレット改訂。小冊子・チラシの作成。映像制作。

平成23年度以降　地域の実情を分析しつつ広報資材を活用し献血推進を実施。

（パンフレット、小冊子等も常に新しい情報伝達ができるよう状況をみて改訂及び制作を行う。

（３）　60歳以上を対象とした対策

この年代は、60歳を超えたところでの献血者数の割合が急激に減少しており、その理由として定年退職することにより献血に関する情報に触れる機会が減ってしまうことや健康上の問題等が要因として考えられることから、定年退職後も引き続き積極的に献血に協力していただけるよう、情報伝達の方法（行政が発行している情報誌等を活用する等）を工夫するなど献血者の増加を促進する。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　パンフレット改訂。小冊子・チラシの作成。映像制作。

平成23年度以降　地域の実情を分析しつつ広報資材を活用し献血推進を実施。

（パンフレット、小冊子等も常に新しい情報伝達ができるよう状況をみて改訂及び制作を行う。

（４）　70歳以上の献血定年者を対象とした対策

献血経験者に限らず、献血に協力できなくなった方も対象に、個人ボランティアとして協力頂き、献血推進を支援していただけるよう、平成22年度中に具体的な協力内容等を説明する全国統一リーフレットの作成及びその運用について実施に向けた検討をする。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　施策の検討。統一資材の作成。

平成23年度　　施策の実施。

平成24年度以降　地域事情を勘案しながら全国実施。

３　企業等における献血の推進対策

献血に協賛する企業や団体を募り、社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促し、また、各血液センター等における献血推進活動の展開にあたり、地域の実情に即した方法で企業等との連携を図り、企業における献血の推進を実施する。

《実施計画及び目標》

平成22年度　　協賛企業数を目標の48,000社とする。

平成23年度　　地域事情に即した企業・団体との連携方法について検討。

平成24年度以降　地域事情に即した企業・団体との連携による献血推進を行い、協賛企業を活性化する。

4　複数回献血協力者の確保

複数回献血協力者となってもらうため、複数回献血クラブの充実等、重点的な啓発、施策を実施する。また、複数回献血クラブ会員の中でも、特にメールを利用した会員の増加に取組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう促進する。

《実施計画及び目標》

平成22年度以降　複数回献血者の増加（全国平均目標35%）。

（30～34%の17血液センターを35%以上にする。
29%以下の29血液センターを30%以上にする。）

平成25年度以降　複数回献血者の増加（全国の血液センターにおいて目標35%）。

5　積極的な広報戦略【参考「積極的な広報戦略の実施内容」参照】

（1）　血液事業をより理解していただくためのターゲットごとの広報

ア　献血者向け広報：各メディア、IT などを利用し献血血液の使用状況、輸血医療の現状等患者の存在が見える広報の実施

イ　医療機関向け広報：MR などの協力を得て医師や看護師など医療スタッフ向けの広報資材の作成、配布。輸血療法委員会、臨床研修医研修会等での講演または、各都道府県において使用できる素材の作成。

ウ　献血推進団体向け広報：ライオンズクラブ、天理教、PTA 等各献血実施団体、推進団体の献血支援活動をマスコミ、ホームページで紹介する。

エ　患者向け広報：インフォフームドコンセント時に利用いただけるリーフレット等の企画・作成。病院内掲示用ポスターの企画・作成。

《実施計画及び目標》

平成 22 年度以降　各ターゲットに即した広報資材の活用した広報展開の実施。

（2）　広報素材の収集

輸血経験者、その家族などからの出稿を依頼（募集）

《実施計画及び目標》

平成 22 年度以降　各血液センターとも連携しつつ、継続的に情報を収集する。

（３）　各メディア等を活用した広報活動

ア　若年層（高校生・大学生）をターゲットとした雑誌やマンガ等への献血に関する特集を依頼。

イ　献血推進に関するプレスリリースの発出

《実施計画及び目標》

平成 22 年度以降　各キャンペーン等とも連携しつつ、メディアを活用し広報展開を実施。

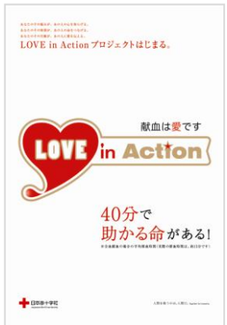
（４）ホームページの活用

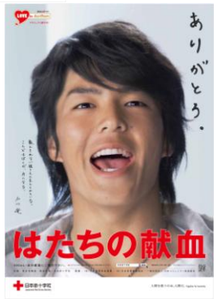
《実施計画及び目標》

平成 22 年度以降　常に新しい情報を発信する。

参考：積極的な広報戦略の実施内容

	キャンペーン等名称	目的	実施時期	実施（予定）内容	主催・後援・共催
1	世界献血者デー 	毎年６月 14 日に、WHO（世界保健機関）、IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）、ISBT（国際輸血学会）、FIBDO（世界献血団体連盟）によって共同で企画され、これらの各団体がひとつの国際的なイベントを通じて集まり、安全な血液や定期的な無償献血の重要性への認識を高める世界的なメディア・キャンペーンを提供。	平成 22 年６月 14 日	・　キャンペーンポスターの製作及び配布。 ・　オリジナルステッカーの製作及び配布。 ・　ラジオ番組での周知。 ・　各血液センターでのイベント開催。	―
2	日本赤十字社第５回 「いのちと献血俳句コンテスト」 	若年層を中心に幅広い年齢層へ俳句の募集を行い、「献血」を通じて支えられる「生命」に意識を向けさせるとともに、献血活動の意義の理解・普及の機会を創出することを目的として実施し、併せて献血者減少期における献血者確保を図ることを目的とする。	平成22年６月15日から平成 22 年９月 30 日まで	・　献血、いのちの尊さ、愛、友情、助け合い、感動などについて思うこと、感じたことを俳句で表現し、応募する。 ・　国内在住の方ならどなたでも応募可。 ・　応募方法は応募専用ハガキ、官製ハガキ、学校専用応募用紙、FAX 又は WEB。 ・　主な賞は厚生労働大臣賞、文部科学大臣賞、審査員特別賞、日本赤十字社社長賞等。 ・　教育現場へのアプローチとして学校用応募キットを小・中・高等学校へ直接送付するほか、教職員グループ「TOSS（Teachre’s Organization of Skill Sharing）」との連携により、授業で献血について取り上げてもらう協力を依頼。 ・　各血液センターで実施する親子献血教室や街頭献血会場と連動してイベントを展開。	（主催） 日本赤十字社 （後援） 厚生労働省、文部科学省及び各都道府県教育委員会 （協力） 株式会社ポケモン、東京モノレール株式会社、株式会社

	キャンペーン等名称	目的	実施時期	実施（予定）内容	主催・後援・共催
3	愛の血液助け合い運動 	すべての血液製剤を国民の献血によって安定的に確保する体制を早期に確立するため、広く国民の間に献血に関する理解と協力を求めるとともに、特に、継続的な推進が必要な成分献血・400ｍＬ献血への協力と血液製剤の適正使用への協力を求め、献血運動の一層の推進を図ることを目的とする。	平成 22 年７月１日から平成 22 年７月 31 日まで	・　キャンペーンポスターの製作及び配布。 ・　各血液センターでのイベント開催。	（主催） 日本赤十字社、厚生労働省、都道府県 （後援） 文部科学省、日本医師会、日本歯科医師会、日本薬剤師会、日本病院会、全日本病院協会、全国自治体病院協議会、日本病院薬剤師会、日本新聞協会、日本雑誌協会、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本民営鉄道協会、全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本看護協会、日本血液製剤協会、日本労働組合総連合会、日本経済団体連合会、日本製薬団体連合会、全日本薬種商協会、全国配置家庭薬協会、血液製剤調査機構 （協賛） 健康保険組合連合会、国民健康保険中央会、全国社会福祉協議会
4	LOVE in Action PROJECT  	少子高齢化と 400mL 献血の普及啓発に伴い、若年層献血が減少する中、若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すこととを目的とする。	《第１期》 平成21年10月１日から平成 22 年６月 30 日まで 《第２期》 平成 22 年７月１日から平成 23 年６月 30 日まで	・　全国の献血会場で全来場者にステッカーを配布。 ・　シティースケープ（バス停メディア）等でポスター掲出。 ・　各血液センターの講演会やイベント等で放映できる映像コンテツの制作。 ・　JFN 全国 37 局ネットで毎週月から金曜日の朝６時 30 分から 10 分間番組「LOVE in Action」を放送。期間中に１時間程度の特別番組を２回放送予定。 ・　JFN 各局による単独イベントの実施や複数局に山本シュウ氏が出演し、各局 DJ とのトークショーを放送するラジオキャラバンの実施。 ・　アーティストやスポーツ選手により献血啓発イベントを開催。 ・　LOVE in Action Meeting（LIVE）の開催。 等	（後援依頼予定） 厚生労働省

	キャンペーン等名称	目的	実施時期	実施（予定）内容	主催・後援・共催
5	はたちの献血キャンペーン  	冬季における血液不足解消と若年層をはじめとする献血協力の訴求及び献血思想の普及啓発を目的とする。	平成 23 年１月１日から平成 23 年２月 28 日まで	・　記者発表会の実施。 ・　キャンペーンポスターの製作及び配布。 ・　テレビ及びラジオ CM 放映。 ・　新聞紙への広告出稿。 ・　LOVE in Action　PROJECT との効果的な連動を実施。　等	（主催予定） 日本赤十字社、厚生労働省・都道府県 （後援予定） 社団法人日本民間放送連盟、社団法人日本民営鉄道協会、一般社団法人日本コミュニティ放送協会
6	自動車教習所設置の広告映像配信システム（JACLA VISION）による広報展開 	特に減少が著しい若年者層が多く集まる自動車教習所の教習生を対象に献血の必要性について訴求し、成分献血者確保の促進を図ることを目的とする。	平成 22 年７月 16 日から平成 22 年９月 15 日まで	・　英国渡航歴制限緩和関連 CM の放映。 ・　アーティスト等による献血に対するメッセージ放映。 ・　献血 Walker の配布	―
7	輸血患者とその家族の再現映像の製作 	輸血を受けた患者サイドの声を取りあげた患者さんの感謝の気持ちや、献血された血液がどのように患者さんに使用されているのかを表現することにより、より多くの献血者に献血の使われ方を理解していただくことを目的とする。	平成 22 年６月から平成 22 年８末頃まで	・　製作した映像（ドラマ）を各血液センターが行う広報展開で放映。 ・　映画館での試写会の開催及び映画祭への出展。 ・　テレビ（CS 放送）での放映。 ・　全国の主要レンタルビデオ店での無料貸出し。	―

	キャンペーン等名称	目的	実施時期	実施（予定）内容	主催・後援・共催
8	個人向け小冊子（献血 Walker）の配布 	献血者及び献血未経験者を対象とした輸血患者の感謝の声、献血の案内、説明、広告等を記載した小冊子を制作し活用することで、新規献血者の確保、次回献血の促進を図る。	平成22年10月末及び平成23年３月末	・　個人向け小冊子（献血 Walker）を献血者向けに 2,500,000 部、一般者向け 500,000 部を製作し配布。	―
9	献血者減少期における献血者確保のための広報 	10 月から４月における献血者確保が困難な時期に、赤血球製剤の適正在庫数を維持することを目的とする。	平成22年10月１日から平成 23 年３月 31 日まで	・　けんけつちゃんバスラッピングトミカ（ミニカー）の製作及び配布。	―
10	移動採血車のけんけつちゃんラッピング 	献血バスの一層のイメージアップを図ることを目的とする。	平成 22 年８月１日から平成 22 年 12 月 31 日まで	・　全国 179 台（原則として、ラッピング未施工車両全て。）の献血バスの外装をけんけつちゃんラッピング加工の実施。	―

資料４－１

わが国における将来推計人口に基づく輸血用血液製剤の供給本数と献血者数のシミュレーション

2010年9月30日

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

わが国における将来推計人口に基づく
輸血用血液製剤の供給本数と献血者数のシミュレーション

１．はじめに

わが国における輸血用血液製剤の供給については、国民の善意による献血によって賄われている。

献血者数は、1985年（昭和60年）に最大延べ約870万人を数え、その後2007年（平成19年）には延べ約494万人まで減少したが、2009年（平成21年）には延べ約528万人となっている。

一方、輸血用血液製剤の供給本数については、1979年（昭和54年）の701万本から年々増加して1996年（平成8年）には最大 1,878万本に達し、その後、1,700万本から1,800万本で推移してきた。

献血者数が減少する中で、必要な血液量が確保出来ている主な理由としては、輸血副作用軽減を目的に200mL献血から400mL献血及び成分献血へ転換してきたため、献血者数が減少しながらも献血量としてはほぼ横ばいで推移してきたことが挙げられる。

このような背景のもと、過去10年間で10代の献血者数が著しく減少してきており、高齢化が進む中で、今後の輸血用血液製剤の安定供給を危ぶむ声が聞かれている。加えて、2009年（平成21年）の400mL献血率は90%近くに達しているため、400mL献血への移行は限界にきていると考えられる。一方、供給本数は近年増加傾向にあることから、今後は献血者数を増加させていく必要がある。

そこで、当資料では、2007年に東京都福祉保健局がまとめた輸血状況調査結果と国立社会保障・人口問題研究所等から発表されている将来推計人口を用いて、将来における輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、これに必要な献血者数をシミュレーションしている。

なお、当シミュレーションにおいては、分画製剤用原料血漿の確保目標量を毎年100万リットルに固定して算出していることを申し添える。

※供給本数：換算本数

※換算本数：200mL献血由来の血液製剤を1本とし、400mL献血由来の血液製剤を2本とする。

２．輸血用血液製剤の使用状況

東京都福祉保健局がまとめた2007年輸血状況調査結果によると、輸血用血液製剤の84.7%（輸血用血液製剤の使用率：以下、「輸血率」という。）は50歳以上の患者に使用されていると報告されている。

3．供給予測数の算出

（1）最近5ヵ年間における輸血用血液製剤の供給本数を、東京都の輸血率を使用し、50歳以上と50歳未満の年齢別に供給本数を算出した。また、その年齢別供給本数に対して、50歳以上と50歳未満の年齢別の人口で除し、人口千人当りの供給本数を算出した。

（2）全血、赤血球製剤、血漿製剤、及び血小板製剤は、〈表-1〉～〈表-3〉のとおり、増加傾向を示していることから、血漿製剤を除き最も供給数の多い2009年における千人当りの供給数を指数として適用し、国立社会保障・人口問題研究所より発表*されている将来推計人口(グラフ1)に乗じて、血液製剤別供給推計〈表-4〉を算出した。

〈表-1〉全血及び赤血球製剤　(単位:換算本数)

西暦	和暦	供給本数	50歳以上 (輸血率85%)	50歳未満 (輸血率15%)	50歳以上 千人当り供給本数	50歳未満 千人当り供給本数
2005年	17	5,819,850	4,946,873	872,978	92.5	11.7
2006年	18	5,813,300	4,941,305	871,995	91.5	11.8
2007年	19	5,871,407	4,990,696	880,711	91.7	12.0
2008年	20	6,029,375	5,124,969	904,406	93.4	12.4
2009年	21	6,264,486	5,324,813	939,673	96.3	13.0
				平均	93.1	12.2

換算本数：200mL献血由来の血液製剤を1本とし、400mL献血由来の血液製剤を2本とする。

〈表-2〉血漿製剤(成分献血由来製剤のみ)　(単位:換算本数)

西暦	和暦	供給本数	50歳以上 (輸血率85%)	50歳未満 (輸血率15%)	50歳以上 千人当り供給本数	50歳未満 千人当り供給本数
2005年	17	873,410	742,399	131,012	13.9	1.8
2006年	18	848,600	721,310	127,290	13.4	1.7
2007年	19	804,220	683,587	120,633	12.6	1.6
2008年	20	786,935	668,895	118,040	12.2	1.6
2009年	21	843,445	716,928	126,517	13.0	1.8
				平均	13.0	1.7

〈表-3〉血小板製剤(成分献血由来製剤のみ)　(単位:換算本数)

西暦	和暦	供給本数	50歳以上 (輸血率85%)	50歳未満 (輸血率15%)	50歳以上 千人当り供給本数	50歳未満 千人当り供給本数
2005年	17	7,735,620	6,575,277	1,160,343	123.0	15.7
2006年	18	7,627,870	6,483,690	1,144,181	120.1	15.5
2007年	19	7,877,655	6,696,007	1,181,648	123.1	16.1
2008年	20	8,094,160	6,880,036	1,214,124	125.4	16.7
2009年	21	8,391,180	7,132,503	1,258,677	129.0	17.5
				平均	124.1	16.3

グラフ1・2について

グラフ１の背景の黄色の塗りつぶしは、50歳未満の人口を、緑色の塗りつぶしは、50歳以上の人口を示す。また、緑色の太線は、献血可能人口を示している。

グラフのとおり、少子高齢化に伴い、献血可能人口が減少傾向にあるが、輸血する率の高い高齢者人口は、2030年頃まで徐々に増加していく。

なお、グラフ２については、献血可能人口を年代別に示している。

日本の将来推計人口（平成18年12月推計）より、<表１：出生中位(死亡中位)推計>表1-9 男女年齢各歳別人口：出生中位（死亡中位）推計）推計を適用した。

〈表-4〉血液製剤別供給推計（グラフ３）

(単位:換算本数)

西暦	和暦	50歳以上 人口	50歳未満 人口	全血製剤 赤血球製剤	血漿製剤 (成分献血由来製剤のみ)	血小板製剤 (成分献血由来製剤のみ)
		万人	万人	万本	万本	万本
2010年	22	5,569	7,148	629	85	844
2020年	32	5,952	6,322	655	89	878
2027年	39	6,222	5,550	671	91	900
2030年	42	6,226	5,297	668	90	896
2040年	52	5,996	4,573	637	86	854
2050年	62	5,606	3,909	591	80	792

分画製剤用原料血漿の確保目標量については、毎年100万Ｌと設定している。

グラフ３について

緑の線については、輸血用血液製剤における赤血球・血漿・血小板製剤の供給予測数を単位換算で示したものである。

桃色の棒グラフは、分画製剤用原料血漿の確保目標量を示している。なお、この確保目標量は、毎年100万リットルと設定している。

４．必要献血者数の算出

（１）最近5ヵ年間において、血液製剤別供給本数に対する検査不合格などを見込んだ献血者数の割合を算出した。

（２）各献血種類とも検査通知の浸透などにより、〈表-5〉のとおり、供給数に対する献血者数の割合は、年々減少傾向にあることから、最小値である最新の2008年～2009年における割合を指数として、血液製剤別供給推計に乗じて必要献血者数(換算人数)を算出した。

〈表-5〉供給数に対する献血者数の割合　(単位:%)

西暦	和暦	全血献血 (200mL、400mL)	血漿成分献血	血小板成分献血
2005年	17	112.0	111.8	106.8
2006年	18	109.7	107.9	105.7
2007年	19	109.8	102.9	104.4
2008年	20	108.6	102.4	102.7
2009年	21	108.4	108.0	101.9
		109.7	106.4	104.9

〈表-6〉必要献血者数(単位:換算人数)

西暦	和暦	全血献血 (200mL、400mL)	血漿成分献血	血小板成分献血	合計
		万人	万人	万人	万人
2010年	22	682	87	860	1,944
2020年	32	710	91	895	2,011
2027年	39	728	93	917	2,053
2030年	42	725	93	913	2,045
2040年	52	690	88	870	1,963
2050年	62	640	82	807	1,844

（３）次に、必要献血者数(単位：換算人数)に対して、製剤別単位数から血漿成分献血は5単位、血小板成分献血は直近の2009年の実績に合わせて5～20単位で除し、献血種類別の必要献血者数(延べ)を算出した。なお、全血献血については、400mL献血の比率の伸びに頭打ちが見られることから、以下の設定値とした。

〈表-7〉400mL献血率の設定値

2007年実績値	2008年実績値	2009年実績値	2010年	2011年	2012年以降
83.4%	86.1%	87.1%	88.0%	89.0%	90.0%

〈表-8〉必要献血者数(延べ)　(単位:万人)

西暦	和暦	必要献血者数(延べ)			
		全血献血	血漿成分献血	血小板成分献血	合　計
2010年	22	362.8	80.5	78.9	522
2020年	32	373.9	81.2	82.2	537
2027年	39	383.0	81.6	84.1	549
2030年	42	381.3	81.5	83.8	547
2040年	52	363.4	80.7	79.8	524
2050年	62	337.0	79.4	74.0	490

5．献血不足者数の算出(Ⅰ)

前記〈表-8〉により、今後の供給予測に見合う必要献血者数(延べ)が算出されたので、現状の献血率(2009年の献血率5.9%)で今後も推移した場合の「推計献血者数Ⅰ」と「必要献血者数」との差異を献血不足者数として以下に算出した。

〈表-9〉献血不足者数　（グラフ４）　(単位:万人)

西暦	和暦	献血可能人口 (16～69歳)	① 推計献血者数Ⅰ (延べ) (献血率5.9%で推移)	② 必要献血者数 (延べ)	献血不足者数 (①－②)
2010年	22	8,830	521	522	-1
2020年	32	8,067	476	537	-61
2027年	39	7,588	448	549	-101
2030年	42	7,391	436	547	-111
2040年	52	6,544	386	524	-138
2050年	62	5,539	327	490	-164

グラフ４について

赤色の棒グラフは、その年の必要献血者（延べ）で、橙色の棒グラフは、その年の献血可能人口のうち、5.9%の人が献血した場合の推計献血者数である。

必要献血者数（延べ）は、2027年に最大となるが、その年の必要献血者数（延べ）に対する推計献血者数は、約101万人不足すると推測される。

6．献血不足者数の算出(Ⅱ)

さらに、2009年の各年代別の献血率が表10のとおりであった。この年代別献血率で今後も推移することとし、将来推計人口の各年代に乗じて「推計献血者数Ⅱ」を算出する。表9と同様に不足となる献血者数（延べ）を算出する（表11）。

〈表-10〉2009年における各年代別献血率・構成率

年代	2009年 人口（ア） 万人	2009年 献血者数（イ） （延べ） 万人	献血率 （イ/ア）		献血者の構成比
16-19歳	487	30	6.0%		5.6%
20歳代	1,442	114	7.9%		21.7%
30歳代	1,831	141	7.7%		26.9%
40歳代	1,641	127	7.7%		24.1%
50歳代	1,687	84	4.9%		15.7%
60歳代	1,780	32	1.8%		6.0%
合計	8,867	529	5.9%		100.0%

人口については、総務省統計局、平成21年10月1日現在の人口より参照

グラフ５について

参考として、2000年から2009年までの年代別献血率を示した。16-19歳の献血率については、2000年の時点で10.2%であったのに対し、2009年では、6.0%となり、16-19歳の献血率が著しく減少している。

〈表-11〉献血不足者数　（グラフ６）　(単位:万人)

西暦	和暦	① 推計献血者数Ⅱ (年代別献血率が表10で推移した場合)	② 必要献血者数 (人数)	献血不足者数 (①－②)
2010年	22	519	522	-4
2020年	32	477	537	-61
2027年	39	440	549	-109
2028年	40	434	548	-114
2029年	41	428	548	-119
2030年	42	423	547	-124

グラフ６について

表11をグラフ化した。

赤色及び橙色の棒グラフは、グラフ４の同色の棒グラフと同様である。青色の棒グラフについては、表10で示した各年代別の献血率を使用して算出した献血者数（延べ）の予測である。

必要献血者数は、2027年に最大となるが、その年の必要献血者数（延べ）に対する献血予測数は、約109万人不足すると推測される。

7．将来の献血不足者数（延べ）と将来の必要献血率（ア）

各年代別献血率が表10の構成比で推移した場合

表10の各年代別の献血者の構成比を用いて、表11で算出した献血不足者数（延べ）を各年代に割り振り、献血者を確保する場合の献血者数（延べ）と必要献血率を以下のとおり算出した。

〈表-13〉将来の献血不足者数　(単位:万人)

西暦	和暦	献血不足者数（延べ）（表11より）	表10の構成比を用いて献血不足者数を割り振った場合の献血者数			
			10代	20代	30-60代	合計
2010年	22	4	29	112	381	522
2020年	32	61	31	111	396	537
2027年	39	109	29	115	405	549
2028年	40	114	28	115	405	549
2029年	41	119	28	114	405	548
2030年	42	124	28	113	406	547

〈表-13-2〉将来の必要献血率（ア）

西暦	和暦	献血不足者数（延べ）（表11より）	必要献血率			
			10代	20代	30-60代	合計
2010年	22	4	5.9%	7.9%	5.5%	5.9%
2020年	32	61	6.7%	8.9%	6.2%	6.6%
2027年	39	109	7.5%	9.8%	6.7%	7.2%
2028年	40	114	7.7%	10.0%	6.7%	7.2%
2029年	41	119	7.7%	10.1%	6.8%	7.3%
2030年	42	124	7.9%	10.3%	6.8%	7.3%

グラフ７について

表13-2を各年代別にグラフ化した。

緑色の棒グラフは、献血可能人口中の目標献血率を表している。

2027年には、全体の献血率を7.2%まで引き上げることが必要であると推測される。

８．将来の献血不足者数（延べ）と将来必要献血率（イ）

各年代別献血率が表10の構成比で推移した場合

表11の献血不足者数を、若年層（10代-20代）だけで献血者を確保すると仮定した場合における10代・20代の必要献血者数と必要献血率を表14のとおり算出した。

なお、10代・20代への献血者数の振り分けについては、表14-2で示した将来推計人口より、10代・20代の比率で按分している。

〈表-14〉将来の献血不足者数と将来の必要献血率（イ）　（単位：万人）

西暦	和暦	献血不足者数（延べ）（表11より）	献血不足者数を若年層に割り振った場合の必要献血者数と献血率			
			16-19歳		20代	
			必要献血者数（延べ）	必要献血率	必要献血者数（延べ）	必要献血率
2010年	22	4	29.8	6.1%	113.8	8.1%
2020年	32	61	43.5	9.5%	141.7	11.4%
2027年	39	109	49.3	13.0%	174.2	14.9%
2028年	40	114	49.9	13.5%	176.5	15.4%
2029年	41	119	50.4	14.0%	178.6	15.9%
2030年	42	124	51.0	14.5%	180.2	16.4%

〈表-14-2〉若年層の将来推計人口とその比率

西暦	和暦	将来推計人口		比率	
		16-19歳	20代	16-19歳	20代
		万人	万人		
2010年	22	485.2	1412.5	25.6%	74.4%
2020年	32	455.7	1239.7	26.9%	73.1%
2027年	39	379.2	1167.8	24.5%	75.5%
2028年	40	369.5	1146.3	24.4%	75.6%
2029年	41	360.6	1123.5	24.3%	75.7%
2030年	42	352.3	1097.9	24.3%	75.7%

グラフ8について

表14の16-19歳・20代の必要献血率をグラフ化した。

若年層のみで献血者確保を推進した場合、2027年には、16～19歳が13.0%、20代が14.9%まで引き上げる必要がある。

補足説明

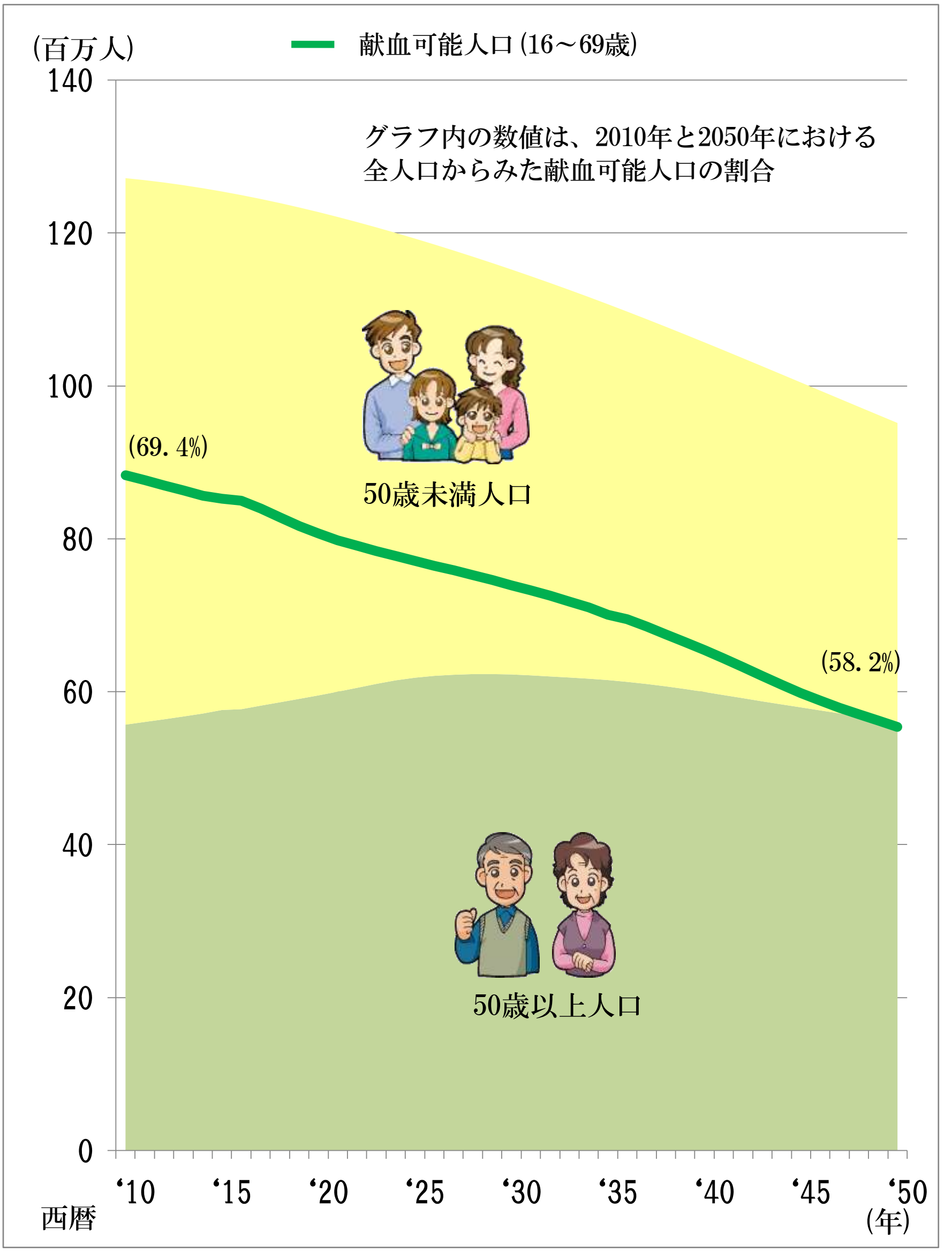
分画製剤用原料血漿については、2008年度の確保目標量100万L確保達成に照準をあて、2008年の血漿成分献血数から5単位FFP製剤の製造数を差し引きした63万人が原料血漿への転用に相当したことと算定されることから、2010年以降は一律に5単位FFP製剤の供給に必要な血漿成分献血数に63万人を加算していること。

一方、2010年以降は赤血球製剤、血小板製剤とも供給本数が増加していくことから、これに併せてその採血から派生する原料血漿量も増加することとなるが、今回の推計には考慮していないこと。

グラフ 1

わが国の将来人口と献血可能人口の推移

出生率中位(死亡率中位)の場合

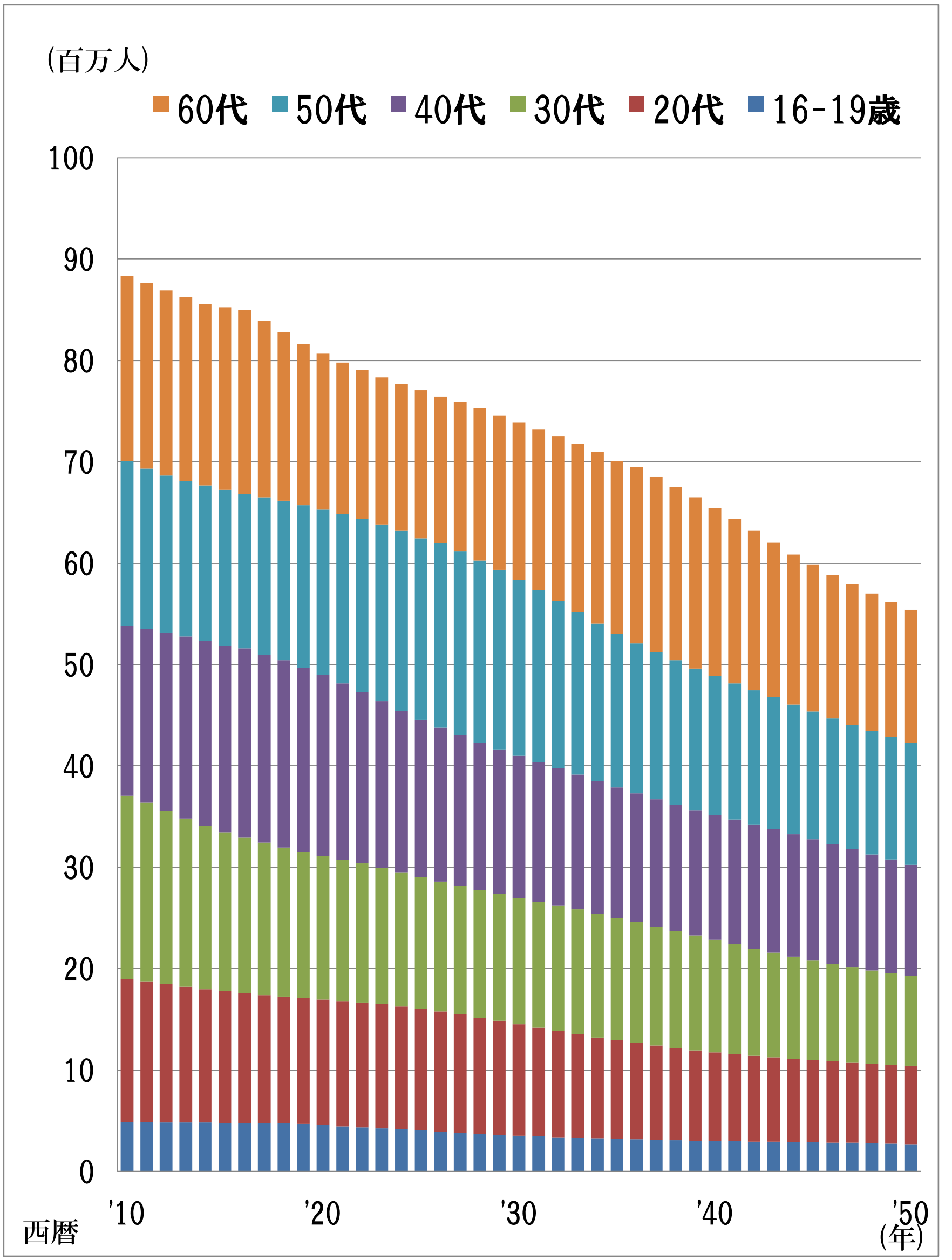


注）・将来人口推移は厚生労働省人口問題研究所の「平成18年日本の将来推計人口」に基づく。

グラフ 2

わが国の年代別献血可能人口の推移

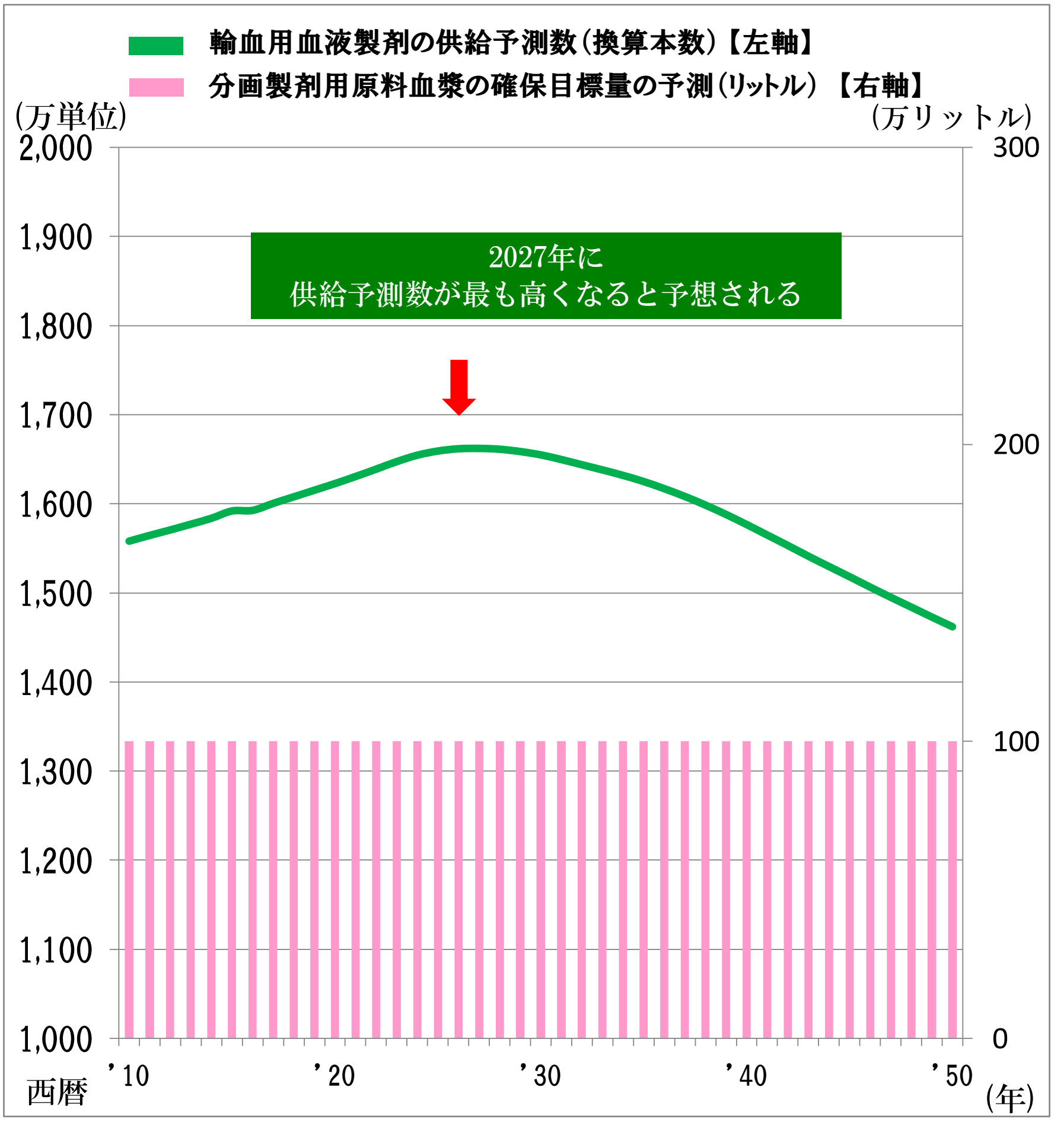
出生率中位(死亡率中位)の場合



注）・将来人口推移は厚生労働省人口問題研究所の「平成18年日本の将来推計人口」に基づく。

グラフ 3

供給予測数と原料血漿確保目標量のシミュレーション



東京都福祉保健局がまとめた2007年輸血状況調査結果によると、輸血用血液製剤の約85％が50歳以上の患者に使用されている。これに将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出すると、2027年に輸血用血液製剤の供給量のピークを迎えるというシミュレーションになる。

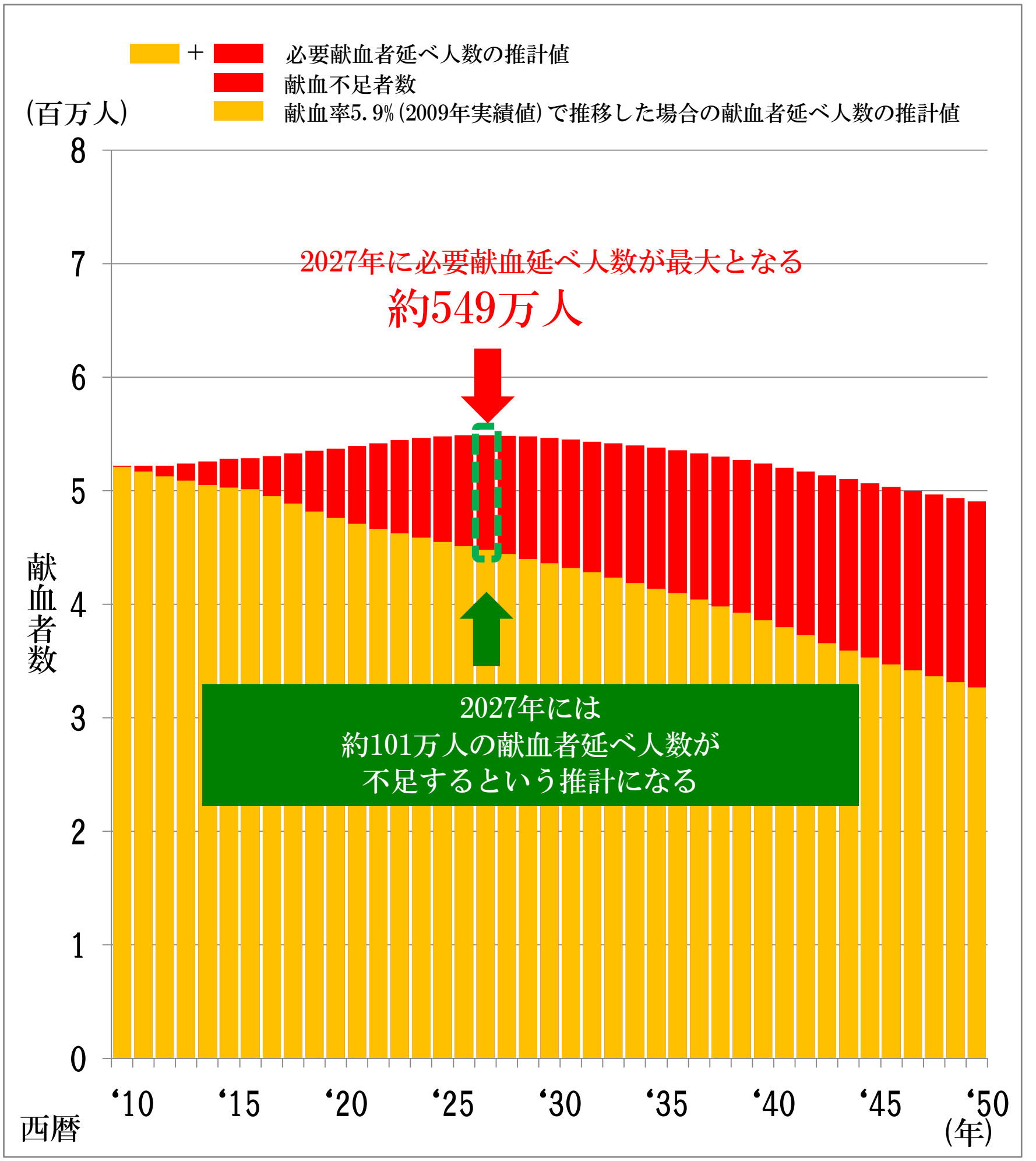
血漿分画製剤用原料血漿については、毎年100万リットルの確保量に設定し計算している。但し、血漿分画製剤の国内自給100％を達成するためには、その確保目標量は、約150万リットル必要になると推計される。この増加する50万リットル分を確保するためには、約111万人（血漿成分献血者1人当り450mLとして計算する場合）の献血者を上乗せする必要がある。

※　当シミュレーションにおいては、全血採血由来の血漿製剤の単位数を含めていない。

グラフ 4

必要献血者延べ人数のシミュレーション(Ⅰ)

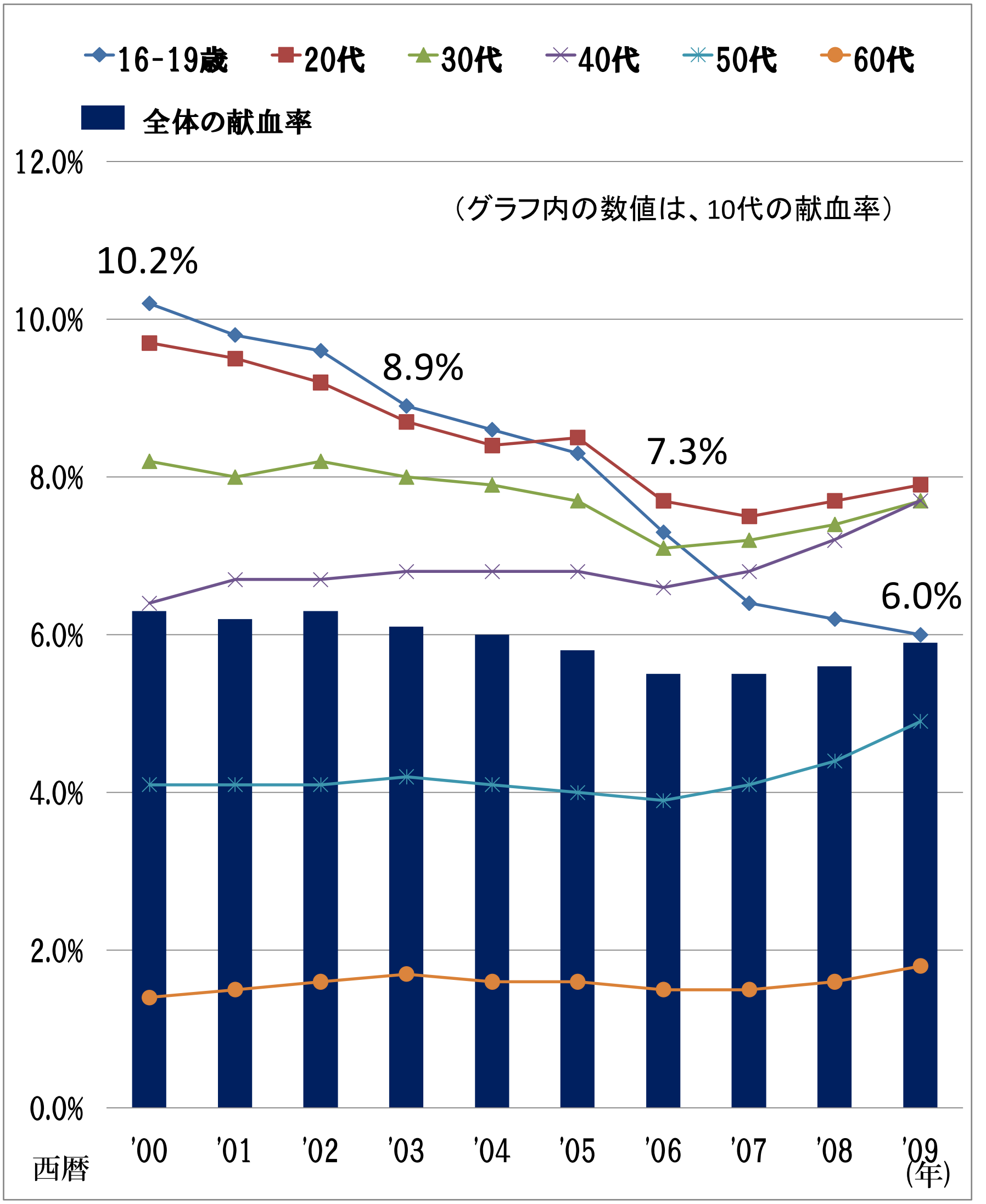
出生率中位(死亡率中位)の場合



東京都福祉保健局がまとめた2007年輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。
また、2009年の献血率(＝献血者延べ人数／献血可能人口)5.9%を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年には、約101万人不足するというシミュレーションになる。

グラフ 5

過去10年間における年代別献血率の推移

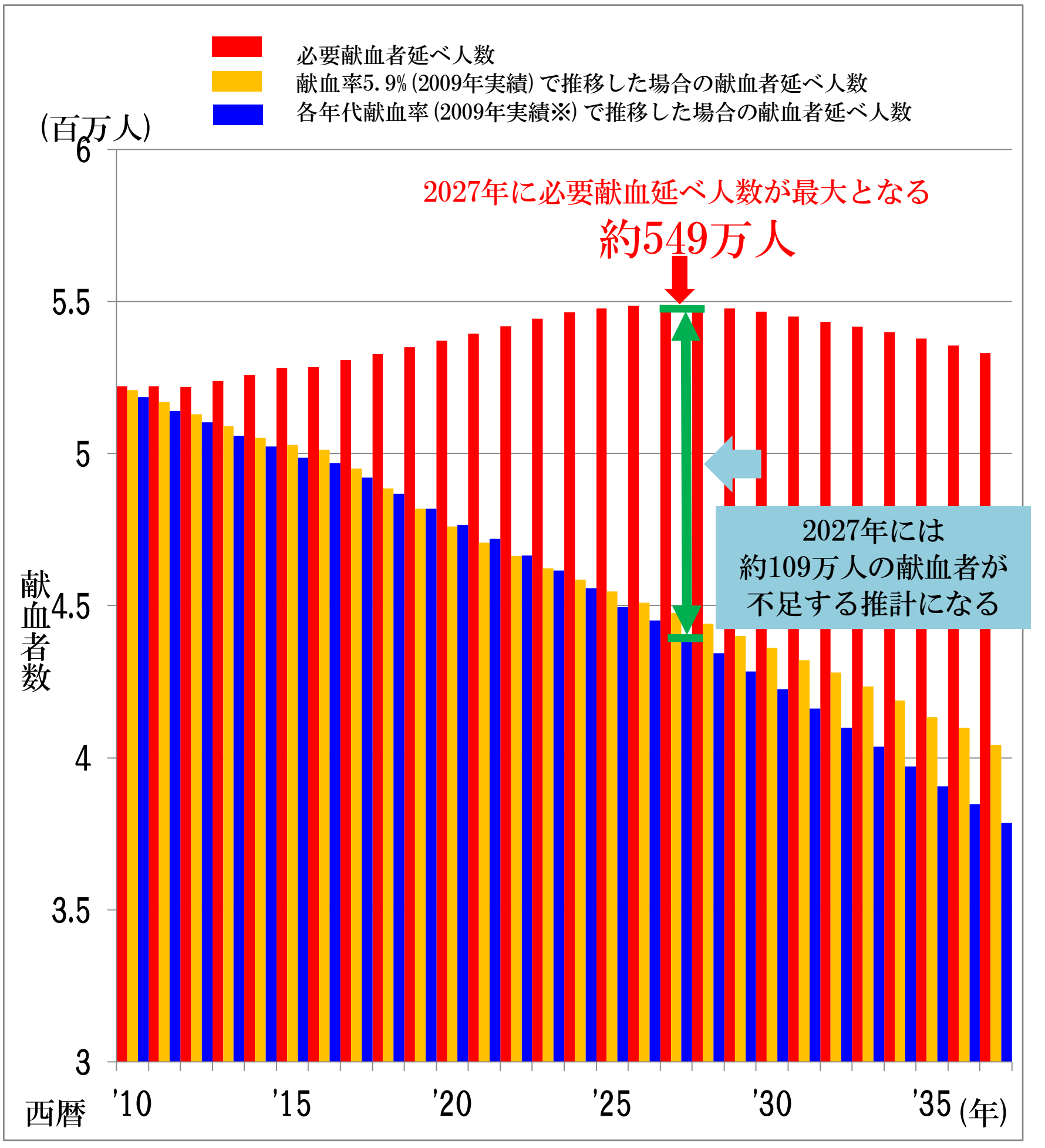


このグラフにおける献血率は、各年代の献血者延べ人数から献血可能人口を除した数値である。

グラフ 6

必要献血者延べ人数のシミュレーション(Ⅱ)

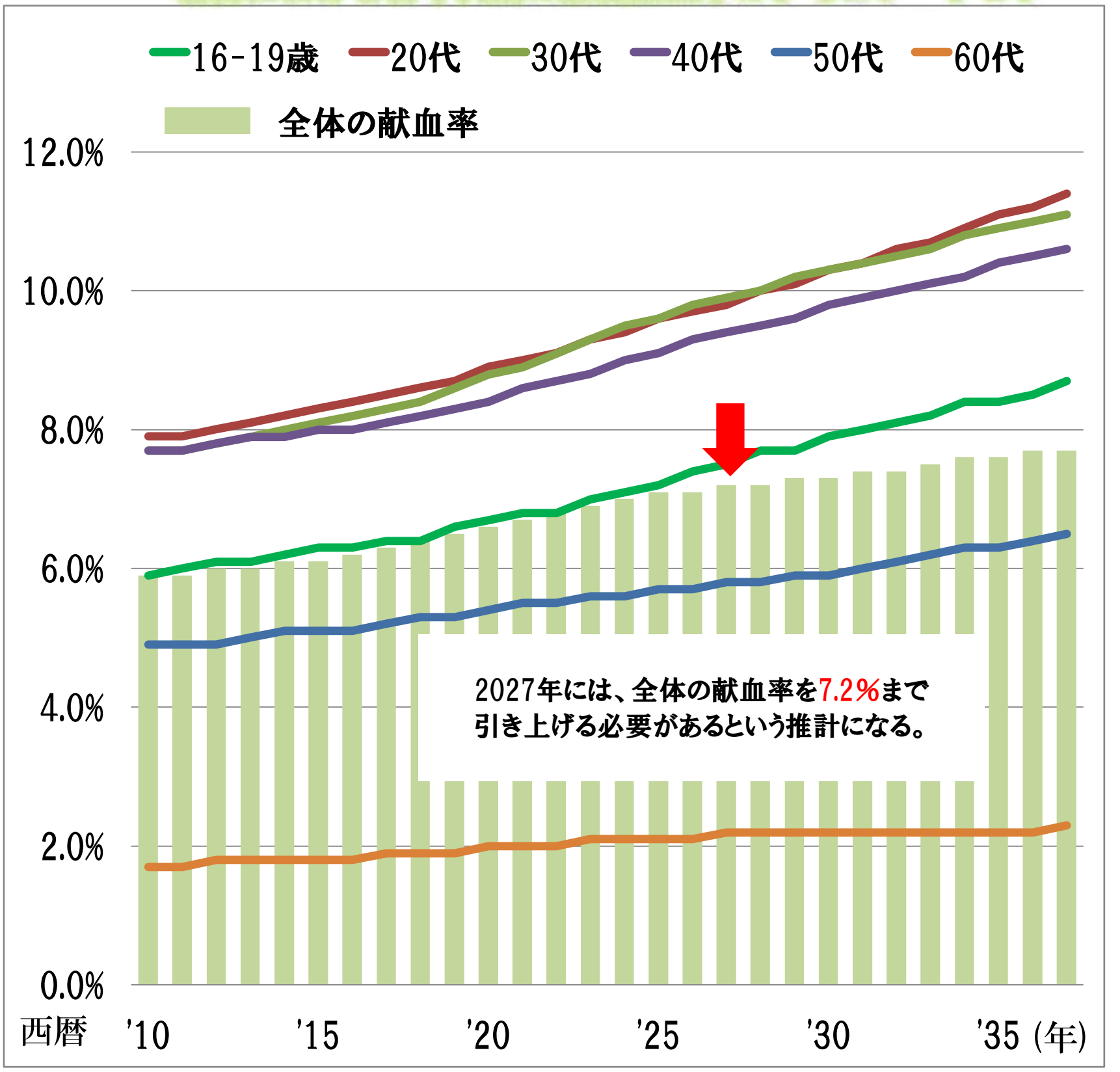
※ 2009年の年代別献血率（＝献血者延べ人数／年代別人口）　　出生率中位(死亡率中位)の場合
16歳～19歳:6.0%　20代:7.9%　30代:7.7%　40代:7.7%　50代:4.9%　60代:1.8%



東京都福祉保健局がまとめた2007年輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者延べ人数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。(グラフ4参照)
また、2009年の年代別献血率（＝年代別献血者延べ人数／年代別人口）を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年は、約440万人になると推計され、約109万人の献血者延べ人数が不足するというシミュレーションになる。

グラフ 7

2009年の年代別献血率を今後も維持すると仮定した場合において、不足する献血者延べ人数を全体（献血可能年齢層）で確保する場合における各年代別の必要献血率のシミュレーション



	2009年	2015年	2020年	2025年	2027年	2030年
16～19歳	6.0%	6.4%	6.7%	7.2%	7.5%	7.9%
20歳代	7.9%	8.4%	8.9%	9.6%	9.8%	10.3%
30歳代	7.7%	8.3%	8.8%	9.6%	9.9%	10.3%
40歳代	7.7%	8.1%	8.4%	9.1%	9.4%	9.8%
50歳代	4.9%	5.2%	5.4%	5.7%	5.8%	5.9%
60歳代	1.8%	1.8%	2.0%	2.1%	2.2%	2.2%
全体	5.9%	6.3%	6.6%	7.1%	7.2%	7.3%

※2009年は実績値

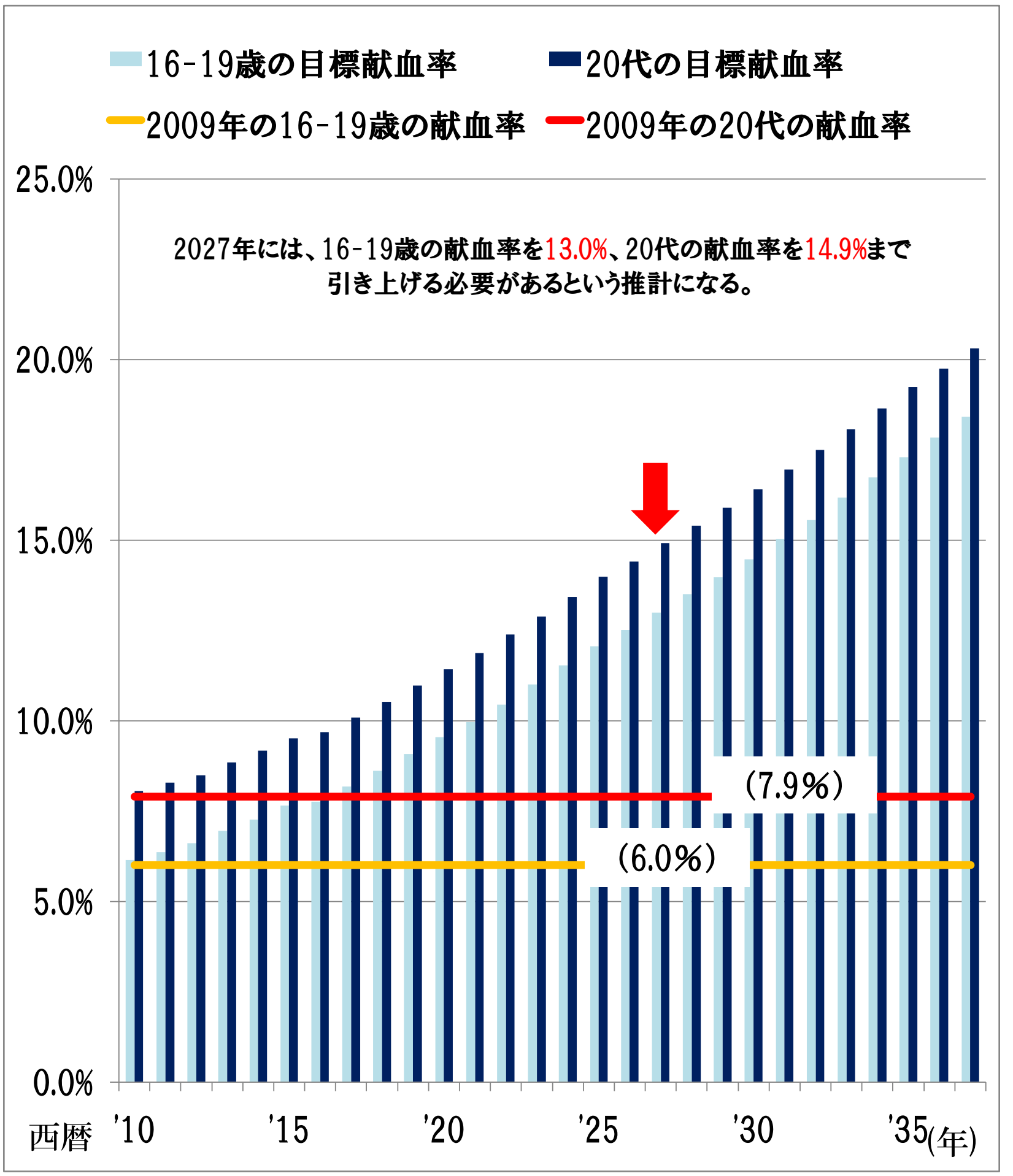
東京都福祉保健局がまとめた輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者延べ人数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。（グラフ4参照）

また、2009年の年代別献血率（＝年代別献血者延べ人数／年代別人口）を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年は、約440万人になると推計され、約109万人の献血者延べ人数が不足するというシミュレーションになる。（グラフ6参照）

この不足した献血者延べ人数を、2009年の献血者数年代別構成比を用いて、各年代に不足する献血者延べ人数を按分し上乗せすると、2027年には、全体の献血率を7.2%まで引き上げる必要があるというシミュレーションになる。

グラフ 8

2009年の年代別献血率を今後も維持すると仮定した場合において、不足する献血者延べ人数を若年層（10代-20代）のみで確保する場合における必要な若年層献血率のシミュレーション



東京都福祉保健局がまとめた輸血状況調査結果と、将来推計人口を用いて将来の輸血用血液製剤の供給予測数を算出し、供給に必要な献血者延べ人数を算出すると、2027年には約549万人必要となるシミュレーションになる。（グラフ4参照）
また、2009年の年代別献血率（＝年代別献血者延べ人数／年代別人口）を今後も維持すると仮定し、将来推計人口より、仮想の献血者延べ人数を算出すると、2027年は、約440万人になると推計され、約109万人の献血者延べ人数が不足するというシミュレーションになる。（グラフ6参照）
この不足した献血者延べ人数を、16歳から19歳と20代の将来推計人口の比率で按分し不足する献血者数を上乗せすると、2027年には、16歳から19歳の献血率を13.0％、20代の献血率を14.9％まで引き上げる必要があるというシミュレーションになる。

資料５

献血推進に係る新たな中期目標の設定について

厚　生　労　働　省
医薬食品局血液対策課

１．背景

平成 17 年度から実施した「献血構造改革」の終了を踏まえ、献血推進に係る新たな中期目標を設定する必要がある。

２．「献血構造改革」の結果

項目	目標	H17 年度	H21 年度
若年層の献血者数の増加	10 代、20 代を献血者全体の **40%**まで上昇させる	35%	26.8%
安定的な集団献血の確保	集団献血等に協力する**企業を倍増**させる	23,890 社	43,193 社
複数回献血の増加	複数回献血者を献血者全体の **35%**まで上昇させる	27%	31.3%

３．新たな中期目標設定に係る検討事項

① 項目について
- 「献血構造改革」の 3 項目を継続するか否か。
- 新たな項目を含めるか否か。

② 目標値について
- 「献血構造改革」の 3 項目を継続する場合、目標値を踏襲するか否か。
- 人口減少を目標値に反映させるか否か。
- 10 代、20 代の目標値を別に設定するか否か。

③ 期間について
- 5 カ年程度の目標でよいか否か。

④ その他
- 名称について

（以上）

資料６

平成２２年度の献血の推進に関する計画

平成２２年３月２６日

厚生労働省告示第１１０号

目次

前文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１節　平成２２年度に献血により確保すべき血液の目標量・・・・・・・・ 1

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項・・・・・・ 1
　　１　献血に関する普及啓発活動の実施・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　　　（１）　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進
　　　（２）　献血運動推進全国大会の開催等
　　　（３）　献血推進運動中央連絡協議会の開催
　　　（４）　献血推進協議会の活用
　　　（５）　その他関係者による取組
　　２　献血者が安心して献血できる環境の整備・・・・・・・・・・・ 4

第３節　その他献血の推進に関する重要事項・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　　１　献血の推進に際し、考慮すべき事項・・・・・・・・・・・・・ 5
　　　（１）　血液検査による健康管理サービスの充実
　　　（２）　献血者の利便性の向上
　　　（３）　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進
　　　（４）　採血基準の在り方の検討
　　　（５）　まれな血液型の血液の確保
　　２　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応・・・・ 5
　　３　災害時等における献血の確保等・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　　４　献血推進施策の進捗（ちょく）状況等に関する確認と評価・・・・・・ 6

平成２２年度の献血の推進に関する計画

前文

・　本計画は、安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和３１年法律第１６０号）第１０条第１項の規定に基づき定める平成２２年度の献血の推進に関する計画であり、血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針（平成２０年厚生労働省告示第３２６号）に基づくものである。

第１節　平成２２年度に献血により確保すべき血液の目標量

・　平成２２年度に必要と見込まれる輸血用血液製剤の量は、全血製剤０．０２万リットル、赤血球製剤５１万リットル、血漿（しょう）製剤２６万リットル、血小板製剤１６万リットルであり、それぞれ０．０２万リットル、５２万リットル、２６万リットル、１６万リットルが製造される見込みである。

・　さらに、確保されるべき原料血漿（しょう）の量の目標を勘案すると、平成２２年度には、全血採血による１３９万リットル及び成分採血による６３万リットル（血漿（しょう）採血３０万リットル及び血小板採血３３万リットル）の計２０２万リットルの血液を献血により確保する必要がある。

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項

前年度までの献血の実施状況とその評価を踏まえ、平成２２年度の献血推進計画における具体的な措置を以下のように定める。

１　献血に関する普及啓発活動の実施

・　国は、都道府県、市町村（特別区を含む。以下同じ。）、採血事業者等の関係者の協力を得て、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の安定供給を確保し、その国内自給を推進するとともに、広く国民に対し、治療に必要な血液製剤の確保が相互扶助と博愛精神による自発的な献血によって支えられていることや、血液製剤の適正使用が求められていること等を含め、献血や血液製剤について国民に正確な情報を伝え、その理解と献血への協力を求めるため、教育及び啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、国、採血事業者等の関係者の協力を得て、より多くの住民の献血への参加を促進するため、対象となる年齢層や地域の実情に応じた啓発及び献血推進組織の育成等を行うことにより、献血への関心を高めることが必要である。

・　採血事業者は、国、都道府県、市町村等の関係者の協力を得て、献血者の安全性に配慮するとともに、継続して献血に協力できる環境の整備を行うことが重要である。

このため、国、都道府県、市町村等の関係者と協力して効果的なキャンペーンを実施すること等により、献血や血液製剤に関する一層の理解と献血への協力を呼びかけることが求められる。

・　国、都道府県、市町村、採血事業者及び医療関係者は、国民に対し、血液製剤がこれを必要とする患者への医療に欠くことのできない有限で貴重なものであることを含め、献血や血液製剤についての普及啓発を実施し、又はこれに協力するとともに、少子高齢化の進行による血液製剤を必要とする患者の増加や献血可能人口の減少、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病の発生に伴う献血制限等の献血をめぐる環境の変化、血液製剤の利用実態等について正確な情報を伝え、献血者等の意見を踏まえつつ、これらの情報提供や普及啓発の手法等の改善に努めることが必要である。また、血液製剤の安全性の確保のための取組の一環として、感染症の検査を目的とした献血を行わないよう、献血における本人確認や問診の徹底はもとより、平素から様々な広報手段を用いて、国民に周知徹底する必要がある。

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、平成２２年１月２７日に実施された英国滞在歴による献血制限の見直し及び平成２３年４月１日に施行される採血基準の改正について、国民に対して広報を十分行い、献血への協力を求める必要がある。

・　これらを踏まえ、以下に掲げる献血推進のための施策を実施する。

①　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進

血液製剤について、国内自給が確保されることを基本としつつ、将来にわたって安定的に供給される体制を維持するため、幼少期も含めた若年層、企業・団体、複数回献血者に対して、普及啓発の対象を明確にした効果的な活動や重点的な献血者募集を実施し、以下の取組を行う。

＜若年層を対象とした対策＞

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得るとともに、機能的な連携を図ることにより、若年層の献血や血液製剤に関する理解の促進及び献血体験の促進に組織的に取り組む。

・　若年層への啓発には、若年層向けの雑誌、放送媒体、インターネット等を含む様々な広報手段を用いて、献血についての広告に国が作成した献血推進キャラクターを活用する等、効果的な取組が必要である。

・　子が幼少期にある親子に対し、血液の大切さや助け合いの心について、親子向けの雑誌等の広報手段や血液センター等を活用して啓発を行うとともに、親から子へ献血や血液製剤の意義を伝えることが重要であることから、地域の特性に応じて採血所に託児体制を確保する等、親子が献血に触れ合う機会を設ける。

・　国は、高校生を対象とした献血や血液製剤について解説した教材や中学生を対象とした血液への理解を促すポスターを作成し、都道府県、市町村及び採血事業者と協力して、これらの教材等を活用しながら、献血や血液製剤に関する理解を深めるための普及啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、地域の実情に応じて、若年層の献血への関心を高める

ため、学校等において、ボランティア活動推進の観点を踏まえつつ献血や血液製剤についての情報提供を行うとともに、献血推進活動を行うボランティア組織との有機的な連携を確保する。

・　採血事業者は、その人材や施設を活用し、若年層へ献血の意義や血液製剤について分かりやすく説明する「献血出前講座」や血液センター等での体験学習を積極的に行い、正しい知識の普及啓発と協力の確保を図る。その推進に当たっては、国と連携するとともに、都道府県、市町村及び献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得る。

・　採血事業者は、国及び都道府県の協力を得て、学生献血ボランティアとの更なる連携を図り、大学等における献血の推進を促すとともに、将来、医療従事者になろうとする者に対して、多くの国民の献血によって医療が支えられている事実や血液製剤の適正使用の重要性への理解を深めてもらうための取組を行う。

＜５０～６０歳代を対象とした対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、年齢別人口に占める献血者の率が低い傾向にある５０～６０歳代の層に対し、血液製剤の利用実態や献血可能年齢等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、献血者の増加を図る。

＜企業等における献血の推進対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、献血に協賛する企業や団体を募り、その社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促す。また、血液センター等における献血推進活動の展開に際し、地域の実情に即した方法で企業等との連携強化を図り、企業等における献血の推進を図るための呼びかけを行う。

＜複数回献血者対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、複数回献血者の協力が十分に得られるよう、平素から血液センターに登録された献血者に対し、機動的かつ効率的に呼びかけを行う体制を構築する。また、献血に継続的に協力が得られている複数回献血者の組織化及びサービスの向上を図り、その増加に取り組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう取り組む。

＜献血推進キャンペーン等の実施＞

・　国は、献血量を確保しやすくするとともに、感染症等のリスクを低減させる等の利点がある４００ミリリットル全血採血及び成分採血の推進及び普及のため、都道府県及び採血事業者とともに、７月に「愛の血液助け合い運動」を、１月及び２月に「はたちの献血」キャンペーンを実施するほか、血液の供給状況に応じ

て献血推進キャンペーン活動を緊急的に実施する。また、様々な広報手段を用いて献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を呼びかけるとともに、献血場所を確保するため、関係者に必要な協力を求める。

・　都道府県、市町村及び採血事業者は、これらの献血推進活動を実施することが重要である。

②　献血運動推進全国大会の開催等

・　国は、都道府県及び採血事業者とともに、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の国内自給を推進し、広く国民に献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を求めるため、7月に献血運動推進全国大会を開催するとともに、その広報に努める。また、国及び都道府県は、献血運動の推進に関し積極的に協力し、模範となる実績を示した団体又は個人に対し表彰を行う。

③　献血推進運動中央連絡協議会の開催

・　国は、都道府県、市町村、採血事業者、献血推進活動を行うボランティア組織、患者団体等の代表者の参加を得て、効果的な献血推進のための方策や献血を推進する上での課題等について協議を行うため、献血推進運動中央連絡協議会を開催する。

④　献血推進協議会の活用

・　都道府県は、献血や血液製剤に関する住民の理解と献血への協力を求め、血液事業の適正な運営を確保するため、採血事業者、医療関係者、商工会議所、教育機関、報道機関等から幅広く参加者を募って、献血推進協議会を設置し、定期的に開催することが求められる。市町村においても、同様の協議会を設置することが望ましい。

・　都道府県及び市町村は、献血推進協議会を活用し、採血事業者及び血液事業に関わる民間組織等と連携して、都道府県献血推進計画の策定のほか、献血や血液製剤に関する教育及び啓発を検討するとともに、民間の献血推進組織の育成等を行うことが望ましい。

⑤　その他関係者による取組

・　官公庁、企業、医療関係団体等は、その構成員に対し、ボランティア活動である献血に対し積極的に協力を呼びかけるとともに、献血のための休暇取得を容易にするよう配慮する等、進んで献血しやすい環境作りを推進することが望ましい。

２　献血者が安心して献血できる環境の整備

・　採血事業者は、献血の受入れに当たっては献血者に不快の念を与えないよう、丁寧な処遇をすることに特に留意し、献血者の要望を把握するとともに、採血後の休憩スペースを十分に確保する等、献血受入体制の改善に努める。また、献血者の個人情報を保護するとともに、国の適切な関与の下で献血による健康被害に対する補償のための措置を実施する等、献血者が安心して献血できる環境整備を行う。

・　採血事業者は、採血所における地域の特性に合わせたイメージ作りや移動採血車の外観の見直し等、なお一層のイメージアップを図り、献血者の増加を図る。
・　国及び都道府県は、採血事業者によるこれらの取組を支援することが重要である。

第３節　その他献血の推進に関する重要事項

１　献血の推進に際し、考慮すべき事項

①　血液検査による健康管理サービスの充実

・　採血事業者は、献血制度の健全な発展を図るため、採血に際して献血者の健康管理に資する検査を行い、献血者の希望を確認してその結果を通知する。また、低比重により献血ができなかった献血申込者に対して栄養士による健康相談を実施し、献血者の増加を図る。
・　国は、採血事業者によるこれらの取組を支援する。また、献血者の健康管理に資する検査の充実は献血の推進に有効であることから、本人の同意の上、検査結果を健康診査、人間ドック、職域検査等で活用するとともに、地域における保健指導にも用いることができるよう、周知又は必要な指導を行う。
・　都道府県及び市町村は、これらの取組に協力する。

②　献血者の利便性の向上

・　採血事業者は、安全性に配慮しつつ、効率的に採血を行うため、立地条件等を考慮した採血所の設置、地域の実情に応じた移動採血車による計画的採血等、献血者の利便性及び安全で安心な献血に配慮した献血受入体制の整備及び充実を図る。
・　都道府県及び市町村は、採血事業者と十分協議して移動採血車による採血等の日程を設定し、そのための公共施設の提供等、採血事業者の献血の受入れに協力することが重要である。

③　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

・　国は、「輸血医療の安全性確保のための総合対策」に基づき、採血事業者と連携し、献血者に対する健康管理サービスの充実等による健康な献血者の確保、献血者の本人確認の徹底等の検査目的の献血の防止のための措置を講ずる等、善意の献血者の協力を得て、血液製剤の安全性を向上するための対策を推進する。

④　採血基準の在り方の検討

・　国は、献血者の健康保護を第一に考慮しつつ、献血の推進及び血液の有効利用の観点から、採血基準の見直しを行う。

⑤　まれな血液型の血液の確保

・　採血事業者は、まれな血液型を持つ患者に対する血液製剤の供給を確保するため、まれな血液型を持つ者に対し、その意向を踏まえ、登録を依頼する。
・　国は、まれな血液型の血液の供給状況について調査する。

２　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応

・　国、都道府県及び採血事業者は、赤血球製剤等の在庫水準を常時把握し、在庫が不足する場合又は不足が予測される場合には、その供給に支障を及ぼす危険性を勘案し、国及び採血事業者が策定した対応マニュアルに基づき、早急に所要の対策を講ずることが重要である。

３　災害時等における献血の確保等

・　国、都道府県及び市町村は、災害時等において献血が確保されるよう、採血事業者と連携して必要とされる献血量を把握した上で、様々な広報手段を用いて、需要に見合った広域的な献血の確保を行うとともに、製造販売業者等の関係者と連携し、献血により得られた血液が円滑に現場に供給されるよう措置を講ずることが必要である。また、採血事業者は、災害時における献血受入体制を構築し、広域的な需給調整等の手順を定め、国、都道府県及び市町村と連携して対応できるよう備えることにより、災害時における献血の受入れに協力する。

４　献血推進施策の進捗（ちょく）状況等に関する確認と評価

・　国、都道府県及び市町村は、献血推進のための施策の短期的又は長期的な効果及び進捗（ちょく）状況並びに採血事業者による献血の受入れの実績を確認し、その評価を次年度の献血推進計画等の作成に当たり参考とする。また、必要に応じ、献血推進のための施策を見直すことが必要である。

・　国は、献血推進運動中央連絡協議会等の機会を活用し、献血の推進及び受入れに関し関係者の協力を求める必要性について献血推進活動を行うボランティア組織と認識を共有し、必要な措置を講ずる。

・　採血事業者は、献血の受入れに関する実績、体制等の評価を行い、献血の推進に活用する。